野良狗の乱世放浪記

赤猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
野良狗の乱世放浪記

【Ｎコード】
Ｎ３２９７Ｔ

【作者名】
赤猫

【あらすじ】
世界に蔓延する程度の、ちょっと特殊な悲劇に生き、答えを得て幕を引いた一人の少年。
そんな彼が廻る外史へと降り立つ。失われた記憶に振り回されながら、終わりへ向かう世界で彼は『自分』を見つけることができるのか――？

※真・恋姫†無双の二次創作で、転生モノです。

原作設定は投げすてるモノ、地理や時系列は私の頭の中。とどのつまりが自己解釈。

※２０１１／０９／１２　あらすじ修正。

序章　女神様に健康祈願（前書き）

原作設定をいろいろと弄っちゃってますが、それでもいいＺＥ☆という方はどうぞお進みください。

２０１１／０６／１６
加筆修正しました。

序章　女神様に健康祈願

地面に倒れ伏し、赤く燃える空を見つめる。

「ここまで、かな……」

止められなかったことに、後悔はある。

私の信念という力は、私を見下ろす彼には遠く及ばなかった。

「悪いな……俺は行く」

徐々にぼやける視界の中、言い放つ彼の表情は隠しきれないほどの悲しげな色に染まっているのが見て取れた。

少し笑みがこぼれた。なんて顔をしているんだ、と。

私は確かに止められなかった。

でも、こちらを見つめる、彼の頬に浮かぶ涙はそれ以上のことを伝えてくれた。

それにきっと彼女が彼を救ってくれる。そんな妙な確信と安堵が白く曇る意識の中、心に広がっていく。

ただ、叶うなら、その苦しみを少しでも背負いたかった。

「ｉｆの話、とは。……いよいよ潮時らしい」

くだらない感傷だと嗤う。朦朧とする意識は考えることを放棄し、その身を夢へと落としていった。

＊

見渡す限り真っ黒な空間。その中に数条の赤いラインが走り、灯りの代わりとなっている。その他には何もない、明らかな異常世界。

現実味のないその場所で中空に浮かぶ自分ともう一人、白い肌と対照的に黒く豪奢な服を身に纏う同年代であろう女性がその衣服に見合う絢爛豪華な椅子に座っている。

「えーと、こんにちは？」

とりあえず接触を図るが、

「……下種が」

斬られました。ええ、それはもうスッパリと。とりつく島どころか人格否定から入るとは新しいコミュニケーション手法ですね。

「人間に説明するのも果てしなく億劫だけど……仕方ない。貴様、なぜここにいるかわかるか？」

「ん～わからないですね。というか凄い違和感があるんですが、私って死にましたよね？」

記憶が曖昧ですが、それだけはなぜか確信できます。

「結構。既に貴様は一度死んでいるということを理解しているなら

話は早い」

あ、やっぱり死んでるんですか。

……あの、仮にも死んだことを理解した人を前に笑顔はないと思いますよ？　長く綺麗な銀髪を弄ぶ様子は言葉通り楽が出来るということの喜びを如実に表していますし。

「ということはここはあの世、で間違いないですか？」

「違うわよ、馬鹿。ちなみに貴様からの質問は全て却下。ま、心配せずとも単細胞にもわかるように疑問は解くから」

彼女がそう言った瞬間、頭にまるで生来持っていたかのように知識が刷り込まれた。

「うっ、く……！？」

まるで機械の部品を交換するかのように脳が作り替えられていくような感覚。

今まで感じたことがあるはずもないその感覚は、一瞬の違和感と視界が揺れるような気色悪さを身体に植え付けた。

「む……」

しかしそれもすぐに収まると、違和感を感じない違和感、という破綻した感覚を残してすんなりと自分の頭に受け入れられた。

「貴女が女神……？　しかも私を並行世界の一つに転生させる……？」

どこまでも暴力的な伝達術。既存の私を簡単に上書きしてしまうソレに少なからず恐怖を覚えた。無茶苦茶過ぎる、さすがは女神様。

「うん、やっぱりこのやり方が一番楽ね。知能の根幹に刷り込んだし、これなら言葉通り単細胞生物でも理解させられるでしょう？それに、根っこに刻むことでそれに疑問を抱くこともない。どう？」

……確かに私がその並行世界へ行くことは決まっていることらしい、そこに疑問を挟む余地はありません。

世界は……真？恋姫無双の並行世界。原本となる世界に関する知識は特になし。

肉体は死の直前時のまま、年齢もその時のまま１８歳。ただし、怪我等の問題点は全て処理済み。

転生の目的は並行世界で自由に生きること。記憶は現在の状態から女神様やこの空間についてのことを消去。尚、記憶に関しては現在、一種の喪失状態にあり、特に前の世界の人物の記憶は粗方抜け落ちている、と。

……気持ちが悪いけど、確かに有効な伝達方法なのは認めるべきですね。

「ああ、そういえば」

思いついたように目の前の女神様がパチンと指を鳴らす。……なにかが頭から抜け落ちた感覚。これは――

「貴様の脳から三国志に関する正史、演義の知識を弾いた。全て知っていては詰まらないし。と、言っても大した変化が起こるとも思えないけど」

辟易したように女神様が手を振り、目の前に扉が現れる。

「その扉の向こうが目的地、面倒だし、さっさと――あ、そういえばまだやることがあったか」

頬杖をつきながら胡乱げにこちらを見る女神様。

「前の世界での生涯を覗かせてもらう」

目を瞑り、瞑想する女神様。途中怪訝な顔をして唸っていたが、それも終わったようで目を開くと、興味深そうにこちらを見やった。

今に至って、初めて私という個人を見てくれたような気がします。

「面白い人生を送ったようね。十八年で剣術等の武術を修め、魔術に手を出した後、無二の親友と死闘。なかなか出来る体験じゃないわ」

「はぁ、そうなんですか……？」

楽しそうに話しているところ悪いのですが、全然ピンときませんね。一応、自身の一部ともいえる剣術とか魔術に関しては知識として持っているんですけど。

でも、アレは魔術と呼べるものなのでしょうか？　どちらかと言うと精霊の使役術、とかの方が内容的に合っていると思うのですが。

「世界に存在する精霊という名の自然の象徴を認識、使役して不可思議な力を扱う、ね。……頭大丈夫？」

「問題ない、はずです……」

記憶自体はありませんが、前の世界でも相当心配された気がしますから。どんなメルヘン野郎だよ、と。

「ん？　最後の願い……へぇ、使い古されたような二番煎じの悲劇の中で、これまた使い古されたような青臭い夢ね……でも、まぁ悪くはないわ。嫌いじゃないわよ、その生き方」

いえ、そう言われても何がなにやら、という感じなのですが。

「――よし、気が変わった。アンタを転生させる前にちょっとだけサービスしてあげる。何でも願いを言ってみなさい、金、地位、力、その他なんでも一つ与えてあげようじゃない」

……なんか、いきなり太っ腹ですねぇ。目の前にいるのは女神様、多分どんな願いでも叶えてくれるのでしょう。あ、仮にも女性に太っ腹というのは失礼でしたか。

「では……前の世界でお世話になった人達の健康を」

「……は？」

あれ？　女神様がポカンと口を開けて固まっちゃいましたよ？

……あ、震え始めた。

「くっ、ふふふ、あはははははは！　アンタ馬鹿ぁ！？　分かり易く例を挙げたのに、あっはははは！　さすがの私もそれは予想外だわ！」

そんなに腹抱えて笑うことですかね？　ちなみにその言葉の発音が某セカンドチルドレンなのにはツッコミませんよ？

「いや、だって神様に願うことなんてそんなものじゃないですか？」

生前こそお守りなんて気の持ちようだろう、と思っていたけど実際に叶えてくれるのだから試してみない手はないです。大体、身の丈に合わない願いは身を滅ぼしますから。

それに、記憶はありませんが、それでも大切な人達が病なんかに苦しんでほしくありませんしね。

「――くくっ、いいわよ。その祈り、叶えてあげましょう」

ひとしきり笑った後、女神様が目を瞑って祈るように手を合わせる。

多分、あの行動に意味はないのでしょうが、わざわざ神様自身が祈る、っていう矛盾した仕草をするあたり、女神様も相当皮肉屋ですねぇ。

「あ～、面白、アンタ中々見所あるわよ？」

何の？　とは怖くて聞けません。あれが素なのか凄く獰猛な笑みを顔に貼り付けてますからね。

「む？」

いつの間にか開いていた目の前の扉、その中に意識が吸い込まれるような感覚。

「おっと、そろそろ時間か。じゃ、転生するけど準備いいわね？」

コクリと頷くと女神様は最初とは打って変わって愉しげな笑顔で軽く手を振ってくれた。

「アンタの分も祈っておいたから、くれぐれも自由に生きること、じゃあね」

それは、祈った甲斐があるというものですね。私自身でその効果を感じられるのですから。

「あ――」

――薄れゆく意識の中で、聞こえたのは懐かしさを感じる暖かな声。

「……馬鹿」

それは、誰の声だったか、もうわからない。

でも、彼女が笑顔であればいい。

世界から消えていく中でただ、そう思った。

呟く私の顔は笑っていただろうか。

そうだったらいいなぁ、という思いを最後に私の意識は白く、塗

り潰された。

序章　女神様に健康祈願（後書き）

初めてで至らない点しかないと思いますが、誤字脱字含めた指摘、感想などいただければ幸いです。

第1章　波乱の幕開け（前書き）

最初の導入部ということで連続投稿。
文章が無駄に長くなってしまう、文才の問題なのか……？

２０１１／０６／１６
修正しました。

第1章　波乱の幕開け

「――てくれ」

んー？　五月蝿いですねー。死んだ後くらいもう少し寝かせてくれても……あれ？　考えてみれば寝てる場合でもない気が。

「お、起きたのか？」

むくっ、と起き上がりさっきから私に呼びかけていた声の主を見る。そこにいたのは白を基調とした学校の制服らしきものを纏った同年代の男、起きた私に驚いて尻餅をついていますが見た感じ悪い人間には見えません。

「えーと、おはようございます。貴方は？」

「あ、俺は北郷、北郷一刀（ほんごう かずと）。聖フランチェスカ学院の生徒だよ」

おお、初対面でも成立する会話のキャッチボール。素晴らしいですね。って、なぜ私は感動しているんでしょう？

にしても、北郷一刀、ですか。明らかに日本人、しかも服装が現代人であることを物語っています。どうやってかは思い出せませんが、時系列的に相当昔の中国大陸へ降り立った私が出会うはずもない人物。もしかして同じ境遇の人でしょうか？

「あの、よければ君のことも……」

「ああ、私の名前は上代刃（かみしろじん）ですよ」

その言葉にぱぁ、と顔が綻ぶ北郷さん。

「良かった……君も俺と同じ日本人なんだね」

この場合の同じ、は私の思考と同じ結論に辿り着いたということでしょうね。ちなみに私の今の格好は黒いズボンに白いシャツ、そして赤いネクタイ、とどのつまりが制服姿。そりゃあ北郷さんも安心するわけです。

とはいえ、安心しているということは、

「北郷さん」

「あ、一刀でいいよ」

むう、出鼻を挫かれた。なんというフランク系好青年、またの名をすけこまし。

と、いうのは冗談で、

「なら、私のことも刃でいいですよ。それで、今の状況わかります？」

「……ゴメン、よくわからないな。起きたらここに俺と刃が倒れてて、とりあえず起こそうと」

「そうですか……じゃここに来る前の記憶は？」

これで私の予測どおりなら――

「ああ、普通に家で寝たはずなんだけど、起きたらここにいたんだ」

やっぱり。一刀は以前の記憶はあるけれどここのことを全く知らない、私と正反対の人間ですね。

さて、どうしましょうか……と、その前に……ごっくん。

「話したい事は色々ありますけど、どうやらそういう場合じゃないみたいですね」

「え？」

「周り、遠巻きにだけど囲まれてますよ」

周りに見えるのは全体的に黄色い服装の男達。数は数十人。見た目は賊の見本みたいな柄の悪さですし、実際どこぞのゴロツキでしょう。

「い、いつの間に？」

私が起きた時には既に居ましたよ？　まぁ二人で話を始めた辺りで痺れを切らして近寄ってきましたけど。

お、リーダーらしき人が部下数人を連れて前に出てきましたね。

「おう、兄ちゃん達。珍しいなりしてんじゃねぇか」

「いえいえ、私達からすればあなた方の方が珍しいですよ？」

なかなか堂に入ったコスプレっぷりです。

「あ？　どういう意味だ、てめぇら異国の人間か？」

おお、話がわかりますね～、おじさん。

「いや～実はそうなんですよ。ですよね、一刀？」

話を振りながらさっき手のひらに書いておいた文字を後ろ手に見せる。

《ここ、昔の中国のどこか。話合わせて》

「え？　――あ、うん。実はそうなんだ！」

挙動不審な一刀に訝しげな視線を向ける盗賊リーダー（仮）。

「まぁいい。とりあえず俺らについてきてもらおうか」

数人の男達に縄で縛られ、担ぎ上げられる。一刀も最初は抵抗しようとしましたけど私が「今は黙ってなすがままに」と言うと大人しく縛られてくれました。

物分りがいいのは有難いですけどちょっと簡単に信じすぎじゃないですか？　それじゃ大変ですよ、これから。

「よし、行くぞ」

馬に乗っけられたままおそらく彼らの拠点に連れて行かれる私達。

「……来て早々、波乱万丈ですねぇ」

思いのほか感情の無い呟きはあっさり虚空に吸い込まれていった。

＊

さて、ただいま絶賛拘束中の上代刃です。

辺りは古臭い木材の匂いが充満する小さな一室。周りには資材が木箱やら袋に詰められて無造作に置かれています。仮設の倉庫かなにかですかね？

で、隣には。

「どうかした？」

なぜか泰然自若とした北郷一刀君。

……軽い混乱状態なんでしょうけどもう少し慌てましょうよ。一応ピンチなんですよ？

まぁここがどこだとか、時代が数百年は昔であろうこととかを私から聞いて、なにやら考え事に勤しんでいるみたいですしそれのせいかもしれませんが。

「とりあえず逃げる算段でも立てますか」

「え、どうするんだ？」

「コレを使うんですよ――ふッ！」

そう言ってさっき口の中に忍ばせた小さなナイフを吐き出す。

「……刃って何者？」

「ん、その妙なものを見る目はやめて下さいよ。ただ昔、戯れに修得させられた気がしただけです」

前の世界の記憶はありませんが、武術を皮切りに用兵術、経済学までを広くそれなりに修めていますし、一体教えた人物は何を考えていたのでしょうか。まぁ当然、私が無駄に探究心旺盛だった可能性もあるのですが。

でも、さすがに魔術はマズイでしょう。生憎とこの世界には精霊という存在がいないのか、それとも力を失ったのか、使えないようですが。カルトに嵌まるのはマズイですよ。

ナイフを足で挟み、体を拘束している縄を切る。ついでに一刀のも。

「ありがとう。でもここからどうやって逃げるんだ？」

「んー、そうですねぇ。そんなに難しいことじゃないと思いますよ？　どうやらこの黄巾党とやらは烏合の衆のようですから」

運ばれるまでの会話から推測するに一枚岩でないどころか指揮系統もバラバラ、まさにただのチンピラという感じですし。

ま、私達も衣服以外は全て没収されましたし、数が多いという唯一にして最も面倒な性質を持った連中ではありますけど。

どちらにせよ、このままじゃ身ぐるみ全部剥がされて奴隷として売られるのがオチ。やるしかないですね。

「私に少し考えがあります。協力してくれますか？」

＊

Ｓｉｄｅ一刀

わけがわからなかった。

いきなり変な所で目が覚めたかと思ったら賊に捕まった。しかも刃が言うにはここは昔の中国、信じろっていうほうが無茶な話。でも俺は実際にこうして体験しているし、黄巾党という言葉や彼らの服装にも心当たりがある。

にわかには信じられない。でも、もしかして俺は、

三国志の時代にタイムスリップしてしまったんじゃないか？

馬鹿馬鹿しい話ではあるけどこの感覚、夢なんかじゃない、れっきとしたリアルだ。

そして今、俺と刃は賊に奴隷として売られそうになっている。

ははは、まるで漫画の世界だ。でも、これは漫画なんかじゃない。

「どう、すれば……」

焦る心、でもそれを少しでも和らげてくれているのは隣にいる刃

の存在だろう。

彼は全く動じる様子がない。ましていきなり口の中からナイフを取り出して逃げる算段を立てようと言い出した。

「私に少し考えがあります。協力してくれますか？」

どうしてだろう、彼が言うと本当になんとかしてしまいそうな気がする。

俺は、無意識のうちに首を縦に振っていた。

そして数十分後、作戦決行の時が来る。

「へへへ、大人しくしてたか、てめぇら？」

そう言って部屋に入ってきたのは小柄と大柄、対照的な二人の男。あの後再び互いの縄を結びなおした俺達は憮然とした態度で二人を見やった。

ナイフを持っているのは小柄な方、おそらく大柄な男が俺達を運ぶんだろう、大きな袋を持っている。刃の言ったとおりだ。

「おい、とっととそいつら袋に詰めちまえ」

「わ、わかったんだな」

小柄な男の言葉で大柄な男が俺達に詰め寄る。

「なぁ」

そこで俺が口を挟んだ。

「その前に用を足したいんだけど……」

「あぁ？　我慢しろ、んなもん」

「ごめん、無理。ていうかもう決壊寸前なんだけど……！」

顔を歪めて、体を揺すり、いかにもギリギリであることをアピール、二人の目を引く。

「あー、ったく。わあったよ。おい、仕方ねぇから――」

小柄な男が頭をかいて気を逸らした――今だ！

「ふっ！」

注意が向いていなかった刃が駆け出し、小柄な男の腹に思い切り前蹴りを食らわせる。それと同時に互いに結んだように見せかけていた縄を放した。

「ぐっ、てめぇ！」

「遅いです、よっ！」

続けてナイフを持った手を掴んで背負い投げの要領で地面に叩きつける刃。その時に手首を極めていたのかナイフが手から離れ、男はそのまま刃に組み伏せられた。

「動くな」

対して俺は刃から渡されていたナイフを大柄な男に突きつけて動きを封じた。

……作戦の第一段階終了、だな。

＊

賊二人の動きを封じた私達はまず小柄な男、まぁ便宜的に賊Ａの意識を締め落として身包みを剥ぎ、袋に詰めると――

「さて、とりあえず移動を開始しますか」

そこにいたのは二つの荷袋を担いだ大柄の男、賊Ｂと先程剥いだ服を着た私。ちなみに一刀は袋の中です。これで賊Ｂの後ろから見えないようにナイフを突きつければ安全に移動できる、というわけです。

本当にただのチンピラ集団のようで私の変装に気付くような奴らもいませんし。敵ながらこの識別能力は致命的だと思うんですが……まぁそれを見越してのことでしたけど。

そして賊Ｂから聞き出した情報によればここは黄巾党の中でも比較的小さい拠点で、いるのもせいぜい数百人。言うなれば隠れ家のようなものらしいですね。

にしても賊Ｂは体格の割りに気が小さいのは有難い誤算でした。
ペラペラと壊れたラジカセばりに質問に答えてくれましたから、まぁ特段要らない情報も教えてくれましたが。
と、最初の目的地が見えてきましたね。

「よお、お疲れさん」

私達の荷物を保管してある倉庫。情報どおり見張りは一人。

「お、その荷物が新しい奴隷か？」

「企業秘密です♪」

「はぁ？　なに言って――がっ……！」

近寄ってきた見張りの片腕を掴み、引き寄せて脇腹に膝蹴り。そのままの勢いで地面へ倒れさせて上から首筋を踏み抜いた。

ゴキュ、と少々精神衛生上よろしくない音もしましたが……ま、死んじゃいないでしょう。気にしない、気にしない。

あれ、どうしたんですか賊Ｂさん、顔が真っ青ですよ？

ともあれ、まず一刀を下ろし袋から出させて、気絶（？）した見張りの服を着させる。そして見張りを袋に入れさせると再び賊Ｂに二つを担がせてついでに自分の荷物から取り出した外付けハードディスクを賊Ｂの服に忍ばせた。

「こ、これは……？」

「私達の国で作られた焼却用の器具ですよ。中に油やらが仕込んであって、職人曰く、これ一つで家も丸々一軒火だるまだとか」

「な、なんか活き活きしてるなぁ……」

「火っ！！？？」

途端に青ざめてあたふたする賊Ｂ。

「そんなに暴れると火、噴きますよ？」

「っ！！」

次はピタリと直立不動。……面白いですね、コレ。

まぁただのハードディスクなんですけど。一刀には前もって話してありますから一刀からすればちょっと複雑でしょうね。

「それは取り出そうとしたり、私のコレで合図を送ると同時に燃え上がります」

そう言って携帯電話を取り出す。無論いろいろと嘘ですが。

「あなたはこれからその二つの荷袋を私達が入っているように見せかけて、ばれないように行動して下さい。もし、ここの誰かに話したりしたら……わかりますよね♪」

必死にコクコクと頷く賊Ｂ。彼、図らずも最良の相手だったかもしれません。

「では、さっさと脱出しますか」

「ああ……ご愁傷様」

一度気の毒そうに賊Ｂを見やる一刀。優しいですねぇ。

ま、確かに気の毒ではありますけど。

「じゃ、無事を祈ってますよ？」

その後。

「そういえば一刀は何か役に立ちそうな物あります？」

「う～ん……特にないかな。携帯はこの世界じゃ使えないし、財布も意味ないだろうし。刃は？」

「そうですねぇ……携帯と財布は勿論持っているんですが。あまり見せたくないですねぇ」

「どうして？」

「ドン引きすると思いますよ？」

「……気になる」

まぁ、そうですよねぇ～。隠しても仕方ありませんか。

「これです」

取り出したのは最新式の音楽プレーヤーに茶色のカラーコンタクト、黒いカツラ、化粧品。後半完全に変装用ですね、ええ。私は茶髪に蒼眼ですし。

これだけならただのファッションを重視する若者、なんですが。

「……」

続けて出てきた弾の入っていない拳銃と若気の香り漂う魔法陣とかがメモされた黒歴史的手帳を見て一刀が言葉を失った。

「……ホントに刃って何者？」

聞かないでください。私が知りたいです。

最後の二つは封印しようと固く心に誓った元オカルト犯罪者予備軍（仮）でした。

第2章　天敵との出会い

「どうしてこうなるんですかねぇ……？」

こんにちは、現在絶賛逃亡中の上代刃です。

あのまま無事脱出できると二人で馬に跨った私達（一刀は乗馬経験がないらしく私の後ろでしたが）の前に粋な神のイタズラが首をのぞかせてしまいました。

神様空気読め♪

そこで見たのは奴隷として連れてこられた若い男女数人と幼い子供が合わせて十人ほど。特に泣く子供は目によく留まりますしね。

「あの人達を放っておくなんて俺にはできない！」

……そうです、高潔に過ぎる信念を持つ一刀君は誰にも止められません。結果、奇襲でなんとか全員助け出し馬を奪って逃げ出したのですが。

「流石にきつかったですね……」

七頭しか奪えませんでした。まぁ馬を走らせられない一刀君は無理矢理農夫のお兄さんに任せて街まで逃げさせましたけど。

拠点内を逃げ回る私と三人の村人達。バタバタしていて仕方なかったとはいえ一人子供がいるのが悔やまれます。今は私が背負って

いますが。

「にしても――」

「アンタ、考え込んでどうしたんだい？」

「ああ、いえなんでもありません」

さっきから感じる妙な違和感。まるで拠点中に騒ぎが伝播しているような……普通ここまで騒然となるものか？　脱走とはいえたかだか十数人の村人達。こんな騒ぎには――

「っ、やばっ！　こっちです！」

遠目に見える賊、咄嗟に近くの部屋へ全員で駆け込み、急いで部屋の物陰に隠れる。外からは変わらず過剰なほどの喧騒。

「……すまねぇな。俺達のためにアンタまで」

一人の若者が小声で呟く。その隣の男も申し訳ない、と頭を下げた。

「気にしないで下さい。勝手なお節介ですよ」

自分でなく、今はここにいない純粋に過ぎる男に向けて言う。

「もう少し、頑張ってくださいね」

背中から下ろした小さな女の子を撫でながら少しでも優しく聞こえるよう声をかけた。綺麗な翡翠色の瞳に涙を浮かべながらも迷惑

をかけないように耐えている立派なこの子だけでも逃がそう、そう心に決めながら。

「――っ！？」

その瞬間、体を震わせる気配、脳内に鳴り響く警鐘。

先程まで目にしていた黄巾党の雑魚とは一線を画す覇気とも言うべき大きな圧迫感。それでいて一流の捕食者さながらの掴みどころのない気配の消し方。

「はぁ、まったく運の悪い……」

こんな化物が烏合の衆の中にいるというのは、正直想定外ですね。

「皆さんはここから動かないでください。ただし、私が駄目になるようならすぐに逃げるように」

「そんなっ！」

「……！」

私の服を掴んで首を振る女の子を安心させるようにもう一度、出来るだけ優しく頭を撫でた。

銀の髪に隠れた表情は見えないが、その体は震えている。それをやんわりと振り切り、もう一度だけ大丈夫、と声をかけた。

そして、息を潜めて近くに立て掛けてあった曲刀を手繰り寄せる。気付かなければ重畳、そうでなければ……

フッ、と感じていた気配が更に希薄になる。

「気付かれました、か」

あちらの感覚が自分を捉えているのがわかる。

徐々に近づく気配に、ゆっくりと曲刀を構えた。それは記憶のない自分の中でも確かな絆を感じさせてくれる剣術の構え。生憎名前が思い出せませんが。

……しかし、この世界では以前のような魔術併用の戦いはできない。純粋な剣術でどこまでやれますかねぇ。

「――――フ、ッ！！」

ガキン、と、

振り切った刃が別の刃と噛み合う感触。

甲高い音は置き去りに、加えて繰り出される縦横無尽の剣戟、ひたすらに攻め立てる太刀筋は猛虎の爪牙そのもの。それを受け止めるのでなく受け流しながら、それでも迫る牙は体を捻りギリギリでかわしていく。

「へぇ、貴方面白いわね、っ！」

不意に聞こえた涼やかで猛々しい声はすぐ剣戟の音でかき消される。

引き、払い、捻り、時には廻りながらかわし斬り返す。そして、それを相手も体全体を使ってかわし、類稀な体術によって全方位ど

の角度からもその牙が伸びる。

数条の光と化した爪牙は揺れる髪を、肌をかすり、散らす。朱と茶、私の残滓は舞う風に撥ね上げられ、美しい舞踏を彩るかのよう。

しかして、それは互いに一時も気が抜けない、極限の死の舞踏だった。

「ちっ――！」

だが、それも長くは続かない。粗く雑多な造りの曲刀は毎秒鎬を削る剣戟に早すぎる悲鳴を上げていた。

対して相手の剣は成る程なかなかの業物だ。まだまだその牙に劣化の兆しは見られない。

このままじゃ、いずれは……やるしかありませんね。

「っ、ぁぁあああッ！」

「ぐ、っ！？」

かわし続けていた動きから一転、ボロボロの曲刀で荒々しい一撃を受け止め、紙一重でかわしながら猛進。腕と脇に数条の紅が走ったが敵の身体は目前、それに渾身の力を込めて刀を一閃する――！

「「……」」

時間が止まったかのように見つめあう二人。目と鼻が触れそうなほどの至近距離で私の刃は中ほどで折れながらも相手の首筋に、対する剣は私の心の臓を突き抜かんと胸元に。

「――私の負けね」

相手は一言呟いてあっさりと剣を下げる。

初めてまじまじと見た猛虎の素顔は真紅の絢爛な衣服を身に纏った妙齢の美女。やけににこやかなその表情は虎とは程遠い無邪気な少女のそれで、思わずつられて曲刀を下げてしまう。

「いや……引き分けでしょう。あのままならお互い死んでましたし」

「そんな問題じゃないわ。貴方、なぜ剣を止めたの？」

完全に戦う気を失っているのか剣を鞘に収めた美女は近くの木箱に座って窺うように此方を見る。揺れる桃色の髪と覗く碧眼の輝きに一時見惚れたものの、息を吐き、再び思考を巡らせる。

なぜ、ですか。

「さて、よくわかりませんね～。なんとなく、ですかね」

「もし私が剣を止めてなかったら死んでたわよ？」

とぼけた回答で煙に巻こうと思ったんですが、ニヤニヤと意地の悪い笑顔でこちらを見透かしてくる彼女は退くつもりがないようです……苦手なタイプの人間ですね、ええ。

黙秘をしようにも見つめる瞳はこちらを射殺すかのようで、居たたまれなさが限界突破。

あっさりと口が真実をもらす。

「……貴女を私は殺せない、と思いましたから」

理由はわからない。でも、なぜかそう感じてしまった。

「ふふっ、変なことを言うのね。初対面のはずだけど？」

「でしょうね。貴女みたいな人と会えば死ぬまで忘れられませんよ」

記憶のない私でも決して敵わないと思わせる、いわば天敵ですし。

「まぁ、強いて言うなら……知り合いに似ていたから、ですかね」

曖昧な記憶の中、信用できるものではないですが。

「そう、にしてもこんな馬鹿馬鹿しくなるような規模の賊退治で貴方みたいな人に会えるとは思えなかったわ」

賊退治？

――成る程。そういうことですか。

「貴方、名前は？」

「……北郷一刀です」

ゴメン、一刀。この人、なんか苦手なんです。

今もじーっと見つめられ続けて冷や汗が止まりませんし。

「で、本当の名前は？」

「……なんのことでしょうか？」

「本、当、の名前は……？」

「――上代、刃です」

剣に手をおくって明確な脅しですよね？

「ふーん、変わった名前ね。私は孫策よ」

ふむ、孫策さん、ですか。私のブラックリストに登録しておきます。

ああ、そうだ。彼らのことは当然頼むとして、それと。

「孫策さんって、実は偉かったりします？」

「へ？　ああ、うん、まぁね。一応孫家の当主だし」

孫家……？

領主の家系みたいなものですかね？　ともあれ、それなら話は早い。

「なら、さっきの勝負で勝った私にご褒美とか、いただければ……」

「ご褒美？」

「はい」

……またしてもじっくり見られてる。怖いですヨ？　孫策さん。

「まぁいいけど、なに？」

「えっと、この場を見逃していただく事と馬を一頭、頂けないかと」

「馬、ねぇ……」

「ええ、駄馬で構いませんので」

穴が空きそうなくらい見つめた後、孫策さんはまた意地の悪い笑みを浮かべ始めた。

「ならウチに仕官しなさいよ。私直々に推挙してあげるから♪」

「断固拒否します♪」

即答でした。

身元について根掘り葉掘り聞かれるのが怖いというのもあるけど孫策さんの体の良い玩具にされるのは目に見えています。

「むぅ～……じゃあ見逃さないし馬もあげない」

「子供ですか！？」

口を尖らせて言う孫策さんを見て改めて思う。この人と居てはダメだ。

「ふん、どーせ子供ですよーだ」

くっ、なんて　（いろんな意味で）手強い人だ。

「じゃ、じゃあこうしましょう！」

「？」

「いつかまた会った時に私が孫策さんに負けたら絶対に仕官するって約束します」

「……ふ～む」

しばし、顎に手を当て考え込む孫策さん。……あ、嫌な笑顔。

「それにもう一つ条件をつけるならいいわよ」

「条件？」

「そ、もし刃が負けたら一生私の言う事をなんでも聞くこと♪」

……私に人としての尊厳を捨てて狗になれと？

「ふふん、これ以外じゃ受けてあげないわよ」

うわ、むしろ諦めさせる気満々ですね。

「……仕方ないですね。それで契約成立です」

「ふ～ん。ま、いいわ、了解」

これでよかった……んですよね？

「――あ」

「ん、なに？」

しまった、もう一つお願いがあった……。でも今更――

「心配しなくてもそこに隠れてる人達はしっかり保護するわよ。当たり前じゃない」

――杞憂だったみたいです。つくづく底知れない人ですねぇ。

こうして、私は後の三国のうちの一国、呉王・孫策と出会ってしまいましたとさ。

「ふふっ、刃、か。私と約束したこと後悔させてあげるんだから♪」

……なんだろう、急に寒気が。

第3章　数え役萬☆姉妹

「ふぁ～あ。眠い……」

どうも、自由気ままな一人旅中の上代刃です。

あの後、中々良い馬と路銀まで与えてくれた孫策さんのお陰で旅は順調なのですが……。

街や村が、見つからない。

考えてみれば地図なんて持っていないし、見逃してもらう手前案内を頼むわけにもいかない。それ以前に普通に方向音痴の私が地図を見ても意味がない。

馬の風鈴（命名、私）も最近、野宿の度に潤んだ瞳でこちらを見てくるし……暴れたりするならまだしも、そんな表情されたら良心の呵責に耐えかねますよ、ホントに。

そして旅の道中、野宿の時に限って襲ってくる賊共。安眠妨害反対～。寝かせろ～。

もう最近は面倒なので制服でなく、あの時奪った衣服を身につける羽目に。

「なんて、愚痴っても仕方な――あれは！？」

私の目が遂に夢想へ走ったのでなければ、あれは、村！？

「風鈴！！」

私の声に心なしか風鈴の鳴き声も明るい。私は、急ぎ村へと風鈴を走らせた。

＊

「――ゑ？　なにコレ？」

急ぎ向かった村で見たのは逃げ惑う人々と殺し合う男達。村には火の手がまわり、赤々と燃える火により地獄絵図ともいえる光景が広がっていた。

「――お、おい！　お前！」

村の入り口で呆然とする私にかけられる声。見れば服はボロボロに破け、血を流している一人の男がこちらへ駆け寄ってきていた。

「よ、良かった、大変なんだ！　張角様達が……あの人達が危ないんだ！！」

張角……？　一体どちら様でしょう？　いえ、それよりもこの人の手当てを――！

「俺のことはいい！　わかってるだろ！？　あの人達が居なくなったら俺達は……！」

差し伸べた手は払われ、必死の形相で訴えるその目には自分を犠牲にしても守りぬくという決意が見受けられる。

「あの人達は、俺達と違って可憐でか弱いんだ、もし奴らに見つかったら殺されちまう。いや、もしかしたら辱められるかも――――くっ！　頼む、お前にしか頼めねぇんだ！！」

訥々と話す間にも傷口から血は流れる。もう、助かるとは思えない……それでも私に――

「……わかりました。全力を尽くしましょう」

言って村の中へ駆け出す。

この時、私は気付くべきだった。男が傷口を縛る為に使っていた黄色い頭巾の意味を。そして、私の今の服装を。

＊

Ｓｉｄｅ張角

「姉さん、急いで！！」

前を走る人和ちゃんが叫ぶ。後ろから聞こえるのは大勢の、怒号のような足音。

突き刺さる敵意に満ちた視線は官軍の兵士たちによるもの。それが、私の足をもつれながらも無理矢理つき動かしている。

歌で世界の人たちを元気づけよう、そんな思いで私達は歌を歌ってきた。それなのに、その夢は私達の知らないところで、いとも簡

単に打ち砕かれてしまうことになる。

今の世の中に不満を持つ人達、私たちを応援してくれた人達が私達を頭首に一斉蜂起してしまったのだ。いつの間にか祀り上げられていた私達に選択の余地はなかった。その数は大きく膨れ上がり、その規模は私達でどうにかできるものじゃなくなってしまった。

そんな折、私達は数百人のいわゆる近衛部隊だけを連れて、ある村に立ち寄った。こんな中でも歌って民の人達を元気づけようと。でも、それすら叶わない。

偶然近くを偵察していた官軍に見つかってしまったのだ。正規の兵相手に同数程度の数で太刀打ちできるわけがない。

「みんな……」

私達は一方的に負け、黄巾党の人達は必死に私達だけでも助けようと守ってくれる。私を守ろうとして倒れていく仲間達……涙が止まらなかった。

「くっ、こっちはダメ。あっちに――！」

前には官軍の兵、後ろからも追ってきている。地和ちゃんが横の道を見て、固まった。

追いついてわかる、既に四方を固められて逃げるところなんてどこにもない。

「くっ、ここまで、なの……？」

険しい表情の人和ちゃんからついに弱音が漏れる。その間にもにじり寄ってくる兵士達。

「……助けて」

そして、その剣が振り上げられた時、頬を何かが伝った。助からないことはもう、わかっている。それでも、祈った。叶うことのない神への祈り。それに――

「祈るのはいいですが、その前に三人とも伏せなさい」

怜悧な声が答えた。寒気のするような声音、身体が無意識に地へ伏せる。次の瞬間、頭上を一陣の風が吹き抜けた。

恐る恐る開けた目に映ったのは――

「張角さん、ですね？」

黄巾党の衣服を身に纏った優しげな男の人だった。

＊

目の前には呆然とこちらを見る三人組。三人ともこの場に似つかわしくない少女で、中でも桃色の綺麗な髪の娘などはうっすら涙すら浮かべている。

多分、張角さん達で間違いないですよね？　あの男の話と目の前の女の子達はしっかり合致しますし。

「さて、風鈴。頼みます」

風鈴から降りた私の代わりに風鈴が三人を次々と咥え、背に乗せていく。まぁ、少々荒っぽく放り投げるような形になるのはご愛嬌。

「なんだ貴様は！？」

おっと、呆然としていた兵達が正気に戻ってしまったようですね。

「通りすがりのしがない旅人ですよ。さて、そこを通してもらいましょうか！」

これまでの道中、襲ってきた賊から奪った剣を構えると、最も壁に近い方向へ突貫。襲いくる兵達を全て一刀の下に斬り伏せつつ、走る足は緩めない。そして、その後ろを追従するのは三人を乗せた風鈴。

「す、すごい……」

呆けたような声を漏らすのはポニーテールの小さな女の子。喋るのは構いませんが、舌を噛んでも知りませんよ？

その後も突き進み、村の一角、木造の壁に辿り着いた。

「ど、どうするの！？　行き止まりだよ！？」

いや、そんな顔しないでくださいよ。一応考えがあってこっちへ来たんですから。とりあえず軽く壁に手を添えて強度を確認。

「これなら、いけますね――ふっ！！」

一旦改めて構えた後、渾身の連撃を放つ。

一閃、二閃、三閃目で壁には大きく切り取られた穴が現れた。

『!?』

後続の兵達が驚愕の光景に固まっている間に風鈴と並走して私は村からの脱出に成功した。

＊

「ふぅ、なんとか撒きましたか」

現在、村から少し離れた荒野の岩場。

いや、しかし馬と並走なんてそうそうするもんじゃありませんね。さすがに疲れました。

「あ、あの……」

「んむ?」

いつの間にか馬から降りていた三人組がこちらを伺う。その目には困惑こそあるものの、安堵に満ちている。

「ありがとうございました!」

桃色の髪の娘が頭を下げるのを皮切りに残る二人もそれぞれ礼を。

「あ……そういえば、貴女達って、張角さん達なんですよね?」

そうだ、結局確かめずじまいでしたが、これでハズレなんてことになれば。

「はい！　私が張角です」

どうやら桃色の髪の娘が張角さんらしい。で残る二人はというと、

「ちぃは張宝よ」

「私は張梁です。というか、あなたは黄巾党に入りたてなのですか？　私達を知らないようだし、私達も見たことがありません」

「そうよね～。あれだけ強ければ目立つはずだし」

……今、なんと？

「ど、どうかしたんですか？」

どうやら相当変な顔をしていたようで張角さんが心配そうに声をかけてきますが、それどころではありません。

待て、あの男の口振り、そして彼女達を囲んでいた兵士たちの装備、加えて私の今の服装……いや、考えすぎ！　考えすぎです！　そんな小説みたいなことが――

「あの、もしかして、万が一！　普通に有り得ない！　超天文学的確率での話なんですが！　貴女達って……黄巾党の指導者だったりします？」

そして、無情にも、その問いにコクリと頷く三人。

「……う、嘘だッ！！」

思わず某鉈女の台詞が出た私はガクリ、とその場に突っ伏し、運命を呪った。

「――と、いう訳なんです。私は黄巾党ではありませんし、加えて言うなら敵対者と言っても過言ではないでしょう」

しばらく、私の復活に時間を必要としましたが、なんとかお互いに事情を話し終えた。

「……それで、刃は私達をどうするつもりなの？」

少なからず敵意のこもった声で言うのは張宝さん。まぁ、こうなりますよねぇ。

「そうですね、私達を捕らえて、つきだせば相当な恩賞を与えられるでしょうし。それに、私達じゃ貴方には手も足も出ない」

続けて張梁さん。少しの敵意こそ感じるものの、力の差を認め、ほぼ諦めているというところでしょうか。

「……はぁ、勘違いしないでくださいよ。大体、貴女達を官軍に引渡しでもしたら救出を頼んだあの人に呪い殺されかねません」

ホラーでスプラッタとか勘弁です。それに……約束、しましたからね。

「……本気で言っているんですか？」

「嘘をついているように見えますか？」

正直ここで彼女達を引き渡すのが楽だし、大義名分が立つのは確かだ。なにせ、今世間を賑わせる黄巾党を一気に混乱させ、弱体化することができるのだから。……それが、彼女達の命と引き換えであっても。

聞かなきゃ良かった、とは思えませんね。どちらにしろ聞いた以上そこから最善を尽くす。その方がよほど建設的です。

「それに……貴女達みたいな優しくて、可愛い女の子を見捨てられるほど、私も堕ちちゃいませんよ」

反吐が出るほど甘い考えですが、それでも、私はどうやら随分甘党のようです。彼女達を引き渡すくらいなら金や名誉なんて捨て去ってしまえ、と柄にもなく熱い考えが頭を占めていますしね。

「刃さん……ありがとう」

目に涙を浮かべて喜ぶ張角さん、それにつられて表情が崩れる張宝さんと張梁さん。

それを見て、改めて思う。見捨てることは論外だと。

しかし、どうする？　正直、今回の一斉蜂起は腐敗した漢王朝に大きな打撃こそ与えるだろうが、いずれ鎮圧されるのは目に見えている。兵の練度、装備、優秀な将の存在、万に一つも勝ち目がないのは明白だ。

では、彼女らと黄巾党へ降伏を勧めるか？　いや、ダメだ。ここまで肥大化した民を止めることは不可能。たとえそれが大将である

張角さん達であっても、だ。それを成すには困窮する民達の現状を打開する方法を提示しなくては納得することはない。

それに、彼女達がいなくなることで黄巾党が暴徒と化してしまう最悪の可能性もある。現在ですら、黄巾党の名を借り、群れて暴れるだけの阿呆共が多くいるのだから。

いや、そもそもこの大乱は明らかに歴史的な規模のものだ、私がいくら知恵を絞ろうが、人一人の力で止まることはない。賊に襲われる無辜の民、生きる為に賊になるしかない民、両方救うなんて、それこそ神の所業。

「どうすれば――ん？　風鈴、どうしました？」

考え事に埋没した私を小突く風鈴に促され、周りを見回す。そこには――

「あれは、黄巾党と官軍？」

『えっ！？』

真逆の方向からこちらへ来るのは黄巾党の集団と官軍の軍勢。数は官軍の方が多い、しかも性質の悪いことに周りの岩場が黄巾党の視界を遮り、官軍は徐々にそれを包囲せんと動いている。このままでは、黄巾党の軍が敗北するのは明らか。

「――なるほど、呆れるほど阿呆な結論ですが……仕方ないですね。三人とも、黄巾党の方へ行き、自身の保護を、そして官軍の動きについて知らせてください。加えてすぐに逃げるように、と」

「三人、って刃さんはどうするんですか！？」

「官軍に奇襲をしかけて、足止めします」

「む、無理よ！　刃も逃げればいいじゃない！」

「ダメです。進軍速度は官軍の方が速い、ある程度混乱させて、動きを封じないと」

幸いここは隠れるには最適な場所、足止めくらいならなんとか…

…いや、普通に無茶ですが。

「でも――！」

「私を、信じてください」

尚も食い下がる張角さんの頭を撫でて少しでも安心させる。堪えきれず抱きついてきた張角さんをあやしながら、張梁さんに目で後を頼む、と伝え、今にも泣き出しそうな張宝さんには可能な限り優しい笑みを。

内心で、あまりに都合のいい、卑怯な言葉だ、と自身を嗤いながら。

＊

三人と別れ、眼前には数百を超える軍勢。奥に見えるものも合わせれば千は優に越える数。まぁ、それでも少ない方ですが。本隊となればあんなものではない。

「しっかし、一人で相手する数じゃありませんよね～」

兵の動きを見たところ、練度も賊などとは比べ物にならない。

「賊に捕らえられた後は正規軍のただなか、死地へ入る。ホントに退屈しませんよ、この世界は――」

それでも、答えは決まった。

「さて、行きましょうか。風鈴」

＊

Ｓｉｄｅ官軍指揮官

「くっ、まだ討ち取れないのか！？」

苛立たしげに叫ぶその声に返るのは自軍の兵の断末魔のみ。

周辺の偵察を任され、目標の賊を見つけたまでは良かった。賊共の唯一の強みである数もこちらが上回っている。さらにあちらは我らに気付いていないという好条件。速やかに、そして静かに賊へ迫った俺は勝利を確信した。

そんな時、にわかに兵達がざわめいた。続けて聞こえたのは兵の叫び声、混乱が広がる。

そして、俺は兵の報告内容に絶句した。たった一人、単騎で現れた黄巾党の賊に我らの軍が押し止められているというのだ。戦場を縦横無尽に駆けるその姿は正しく鬼神。

突如現れた一人の男の規格外の強さは兵達を混乱させるには十分だった。結果、黄巾党の部隊はいつの間にか見失う始末。

慢心していた。自身の功を焦るあまり、伝令を放つことを怠らなければまだ余裕があっただろう。見失ってから伝令を放つ自分の愚鈍さに言い様のない苛立ちを感じた。

そして男にやられた兵の数は五百を越え、いまだ勢いは衰えない。

「一体、何者だというのだ……！」

「将軍、このままでは我が軍は壊滅的被害を受けます！」

ぐっ、目標もいない、奴一人のために被害を広げるのは……！

いや、しかし……！

「くっ！　全軍へ通達！　一時後退、援軍到着を待て！」

さきほど戦場を避ける進路で偵察隊を出したが発見は困難だろう。奴らの反転が想定よりも遥かに早かった、いくら賊と言えど、もう追いつけるような所へは居まい。

それは、まったく予期せぬ、しかし完全な敗北だった。

＊

「はぁ、慣れないことはするものじゃありませんねぇ」

風鈴と共に荒野の真ん中で一休み。そんな私の今の姿は制服に変装セットを駆使した異世界人スタイルです。あの無茶な防衛戦の途

中、退却する部隊を追わずに即時反転、風鈴に全力疾走してもらって戦場を離脱。その道中で、しないよりはマシか、ということで服を脱ぎ捨て、簡単に変装したわけです。

しかし、まぁ無理を押し通しましたね。斬っているうちに剣を拝借したり、不要な剣を投げて牽制したり、飛んでくる矢を叩き落したり、兵を盾にしたりして防いだり、果ては鈍らな剣で纏う鎧ごとぶっ血ＫＩＬＬ。人間、殺って殺れないことはないんですよ～ってね。

なので、正直返り血がひどく、変装もホントに申し訳程度です。

「にしても、これからどうしましょうね？」

彼女達を逃がすっていう目的は果たしたけれど、この広い大陸内、探し出すのは至難の業、つか無理。

「……今まで通り旅を続けるしかありませんか。というか腹減りましたねぇ」

結局、村を見つけてから何も食べてないことに気付き、急ぎ村なり街を探すことにした私と風鈴はどことなく荒廃的な雰囲気を感じずにはいられなかった。

第４章　王の華は死の香り（前書き）

今回は更に文章が長いです。文才が足りない…。

それでも呆れずに読んでいただければありがたいです。

第４章　王の華は死の香り

ども、ただいま放浪中の上代刃です。

あの無茶な戦いから数日、仕事で稼いだ路銀と風鈴という良馬のお陰で今はあまり苦もなく村を転々としています。どうしたわけか劣悪な環境でも体調は健康そのものですしね。

「にしても、やっぱり無理がありますかね～」

探し人である北郷さんとこの一刀君は行方知れず、さらにはあの三姉妹とも会えたら……いえ、会ってどうする、という感じですが。まだ、考えがまとまりませんし。

「お、次の村が見えてきましたね」

ちなみに現在の服装は適当な皮でできた所謂此方の世界のものを着用しています。一応制服とかも荷物に入ってますけど。あんまり浮くのは避けたいので。

そうしてただの旅人に擬態して簡単な仕事を行く先々で請け負って路銀を稼ぐ、というなかなか行き当たりばったりな生活にもそれなりに慣れ始めましたね。

「慣れ、か……」

これからこの世界でどうするか、それはまぁもっとこの世界を見て回って、できれば一刀や張角さん達の安否も確認して決めていこうかなと思っている次第です。ま、どうせ成るようにしか成らないですし、ゆったりと少しずつ前進していきましょう。

＊

「そして誰もいなかった……」

嘘です。先程見えていた村、少数の人はいるみたいですけどどうも穏やかな感じじゃありません。多分賊に襲われて大半の村人は避難、あと残っているのは義勇兵へ名乗りを挙げた人達、といったところでしょうか。

困りましたね。まだ余裕があるとはいえ食料の補給とかしたかったんですけど。特に風鈴の食料がピンチです。旅の途中で相棒を看取りたくはありません。

「失礼、こちらの村人……ではないようだな。旅人か？」

と、そんな私に声をかけてきたのは無骨な鎧に身を包んだ銀髪の少女。その身体に刻まれた無数の傷や身のこなし、ただの少女ではないことはありありと感じられます。

「ええ、ちょっと食料の補給に立ち寄らせていただいたのですが。これは？」

「ああ、実は――」

話によると、近くこの村に最近力をつけてきた賊が攻めてくるのだとか。官軍の到着を待ってはいるがそれも間に合うかわからないとのこと。

「ここはそのうち戦場になる。足早に立ち去ることを勧めるが」

「そうですねぇ……」

「おーい凪～。こんなとこにおったんか。ん？　この兄ちゃんは？」

そこへ登場したのは奇抜な服装でなぜか関西弁の少女。というか後ろにあるそのドリルっぽい槍はなんなんだろう。格好も露出が高く、柄もアグレッシブ。

いろいろと奇想天外な子だ……。

「ああ、ただの――」

「二人とも～沙和を置いてかないでなの～」

と、そこに更に追加されたのは間延びした口調が印象的な眼鏡少女。雰囲気からして三人は友人なのでしょう。不可思議な子がまた一人増えましたね……。

「ん～その人は～？」

「あ、ああ、旅人らしい。今事情を話していたところだ」

「へーそうやったんか。でも兄ちゃん間ぁ悪いなぁ。これから防備の用意するとこやから早う別の村行った方がええよ？」

ふむ、確かに邪魔するのも気が引けるし。ここは忠告通り――

「そういえば～今度攻めて来る賊って妙な噂があるの～」

「なんや、突然？」

「そういえば私も聞いたことがあるな。なんでも最近変わった男を捕虜にしたとか」

変わった男……？　いや、まさか、でも――

「その噂本当なんですか？」

「う～ん、確証はないけどかなり信憑性は高いと思うの～」

「……ちなみにここの防備って義勇兵を募って行うんですよね？」

「ん？　まぁ官軍はまだ来ーへんし。ウチらも私兵なんてもっとらへんしなぁ」

ゆっくりするつもりだったのになぁ……。とはいえこういったチャンスは一期一会、って言いますしね。

「私も、義勇軍に志願します」

＊

「んじゃ改めて自己紹介やな。ウチは李典や」

「沙和は于禁なの～」

「私は楽進です。……本当にいいのですか？　上代さん」

「ええ、自分で決めたことですから。そちらこそ、いいんですか？　私に一部隊の指揮を任せて」

我ながらかなり怪しい旅人だと思うんですけど。

「でも兵法修めとるんやろ？」

「簡易的なものだけですよ？」

「十分です。今はともかく人手が足りませんから」

理屈はわかるんですけどね……。こんな胡散臭い旅人の指揮でついてきてくれるかなぁ？

「じゃあ、簡単に説明を始めるね～。賊の数は約二千程、対してこっちの義勇軍はせいぜい三、四百がいいところ～。今のまま当たったら確実にお陀仏なの～」

「二千ですか……多いですね」

というか戦術云々以前の問題でしょう。兵法の基本は敵よりも多くの兵を用意すること。それから考えると馬鹿馬鹿しいほど無謀な防衛戦だと言えます。

「極力戦うのは避けたいところやな」

「防衛に徹して援軍を待つ、ですか」

「現状それしか手はない。我々で手分けして柵なり塀なりを作らせるべきだろう」

「じゃあ、兵隊さん達で分担して作業～？」

「そうやな、幸い現場指揮者は足りとることやし、分かれて取り掛かるか」

で、作業中。

「兄ちゃん、次この木材あっちな～」

「了解です」

「上代さん、これもお願いします」

「り、了解」

「上代さ～ん、沙和にお茶持ってきてほしいの～」

「あ、ウチもお茶～」

「……」

みんなこき使いすぎですよ？　というか于禁は仕事してください。

なんてぶつぶつ言いながらも完成してきました。槍を使った馬防柵、といっても槍の高さを低めに設定し、農具の刃を足元に設置した、どちらかと言うと人防柵ですが。そして浅い堀に農具を仕込ん

で隠した、簡単な落とし穴トラップ、あとは突撃用のアサルトシールド。いやはや、それなりに大変でした。

「にしても考えましたね。柵のことといい仕掛けた罠といい、普通思いつきませんよ」

一段落したところで楽進が感心したように話しかけてくる。

ただの思いつきですし、そんな大したものじゃないんですが。

「いえいえ、貴女達も大したものですよ。特に楽進の武勇には期待してますから」

「い、いえ！　その……」

褒められ慣れていないのか恥ずかしそうにあたふたしだす楽進。

こうしていればただの女の子なんですがねぇ。

「みんな～大変なの～」

そこへ全く大変そうに聞こえない間延びした声で于禁が駆けてきた。

「な、敵か！？」

「ううん、むしろ逆なの～」

逆？　官軍の到着はもう少し後のはずでは…？

「先遣隊みたいなもんらしいで。数百の軍を連れて夏侯淵将軍が来てくれはったらしいわ」

夏候淵、というと有能と名高い曹操の右腕ともいうべき人物。
へ～来る予定だった官軍って曹操軍のことだったんですねぇ。曹操といえば、曰く覇者たる者の器に文武まで修める時代の寵児。行く先々で聞く風評からいずれ天下を我が物にせんとする野心が見え隠れする、個人的にもいろいろと注目していた人物です。
……勝機が見えてきたかもしれません。

近くの木箱に座ってぼーっとしていると、その目線の先、兵達を引き連れた美人さんがこちらへ向かってきていました。煌びやかな衣服に甲冑、もしかして。

「貴殿らがここの指揮を執っている者か？」

怜悧な視線に隙のない振る舞い。……驚きましたね、まさか女性だとは。

「は、はい！　私は楽進と申します！　そして、私を含む以下三名が現場の指揮を執り行っております！」

「う、ウチは李典いいます」

「沙和は于禁なの～」

緊張してますね、三人とも。于禁は分りづらいですが。

「私は上代です」

「ふむ？」

じーっと私を見る夏候淵将軍。馬上からだからか鋭さを増したその視線の冷たさは悪寒でもしそうなほどです。やがて、ニヤリと嫌〜な感じに口元を歪められました。……やばいですね。

「そういえば来る道中で妙な仕掛けや変わった柵があったが？」

「あ、それなら上代さんが考えてくれたの〜」

……さらに笑みが凶悪になっていますよ？　夏候淵将軍。

「成る程、貴殿がいるならなんとかなるやも知れんな。噂に名高き“蒼狗”殿？」

「「「！？」」」

うわぁ……その恥ずかしい呼び名知っておられましたか。ただ道すがらかかる火の粉を払っていただけなのですが。

「“蒼狗”って、各地の賊の集団をたった一人で敗走させているっていう、あの“蒼狗”ですか！？」

「まるで獣のような体捌きと牙のような鋭い剣捌きで敵に死んだことすら気付かせないっちゅうあの“蒼狗”なんか！？」

「つーかマジでアイツの動き人間じゃねー、って噂になってるのを聞いたことあるの〜」

いや、誇張しすぎですよ、その噂。斬った、っていっても一番多くて数百ほどしか相手にしたことありませんし。

「いやいや、人違いですよ～。大体ホントに実在するんですか、あんな噂？」

「今後ろに隠した物的証拠を見せてもらおうか？」

め、目敏い。隠した刀に気がつくとは。

「……はい」

差し出したのは大きな街に立ち寄った時、特注で鍛えてもらった少々肉厚の直刀。

前の反省を生かして、自身に最も合う武具……とはいえ流石に反りと極限の鋭さは時間をかけて窮めた職人にしか出来なかったようで日本刀とはいえませんが、中々良作と言っていい物を打ってもらいました。銘は“黒鬼”。これならあの虎娘とも数刻は確実に打ち合えます。まぁ、それでもあの南海覇王には打ち勝てませんが。

「その独特な意匠が施された剣。言い逃れはできんぞ？」

実はそうなんです。この刀を鍛えた鍛冶師はとんだ酔狂者で、随所に鬼をデザインしてくれやがったのです。お陰で“蒼狗”の他に“狂鬼”なんていう渾名までつく始末。恥ずかしいなんてものじゃありません。

「びっくりやな～。兄ちゃんがあの“蒼狗”やったなんて」

「とても“狂鬼”には見えないの～」

「なぜ“蒼狗”であることを隠していたのですか？」

ああ……そんなに連呼しないで下さい。隠していた理由はそんな名で呼ばれたくなかったからなのに……。

「さて、それでは作戦会議を始めよう」

くっ、そのスッキリした顔。いずれ後悔させてやりますからね！

＊

「敵はおよそ二千、我らが正規軍が五百、義勇軍と合わせても半分がいいところか」

「どうするんですか？」

夏候淵将軍を迎えて五人での作戦会議。

「うむ、その前にもう一度確認するが、今回の賊は黄巾党ではないんだな？」

む、どういう意味でしょう？

「はい、間違いありません。あの……どうかされたのですか？」

楽進も不審に思ったようで控えめに質問する。

「実は先日――」

それに夏候淵将軍は苦々しい顔で語りだす。曰く、しばらく前に

黄巾党を討伐しようとして放たれた曹操軍の先遣部隊がたった一人の黄巾党兵士によって翻弄されたのだとか。

……あれ？　それって――

「ほ、本当なのですか！？」

「ああ、単騎で五百を越える兵を打ち倒し、姿を消したらしい。指揮官によれば、それこそ鬼神のような戦いだったと」

なにぃいいいっ！？　あの時の官軍って曹操軍！？　なにこの巫山戯た運命！？

「それ以降、曹操軍では黄巾党と戦う時はその者も居る可能性を考慮するよう言われているのだが、違うならいい――ん？　どうした上代、顔色が悪いぞ？」

「い、いえ！　そんな人間がいるなんて、怖いなぁ～と思いまして……」

「貴殿も鬼の異名をとる者だろう？」

く、冷や汗が止まらないっ！

「そ、そんなことより！　今は攻めてくる賊をどうするかですよ！ね！？」

「あ、ああ。そうだな……まぁ倒す必要があるわけではない。華琳様率いる本隊が来るまで時間を稼げばいいだけのことだ。上代、例の柵や罠の配置状況は？」

よ、よし！　なんとか逸らした！　……忘れよう、この事は。

「えっと、村の人達から聞いた話を元に配置したので、毎回攻めてくる北側入り口、あとそれに近い東側に7割ほど。残る二つにはそれぞれ残り半分を配置していますね」

「見たところ中々有用のようだったが、どのくらいもつ？」

「初動でかかれば一割ほどは行動不能、その後もしばらくは敵の突入路を狭められます」

結構しっかりした造りにしましたし、農具ってなかなか鋭利ですから。奴らがただ猛進するだけの馬鹿なら二次的被害でもう一割は削れますね。ちなみに行動不能というのは足が使えなくなる、ということで殺すに至るわけではありませんが。

「楽進、義勇軍の練度は？　凡(おおよ)そでいい」

「百人程は指令に合わせ瞬時に連携し行動できる程度、他も比較的高いかと。無論賊どもと比較してですが」

「よし、北東は我ら正規軍が。南側に李典、于禁。西側に楽進、上代がそれぞれ義勇軍を率いて布陣」

妥当な采配ですね。後は状況次第。

「期待しているぞ？」

夏候淵さん、期待するのはいいんですが、笑顔が歪んでますヨ？

というか、今後はあまり曹操軍に近づかないようにしよう、そうしよう。

＊

「敵影が見えてきましたね……」

私の隣で緊張したように呟く楽進。その視線の先には数百ほどの軍勢。

「さて、では始めましょうか。防衛戦」

こちらへ向けて猛進してきた賊共が所々で罠にかかり、その足が止まる。突然の出来事に周りまで混乱が伝播してますね、予想以上の効果です。

「今だ！！　総員、矢のゆるす限り賊どもを射殺せ！！！」

『うおおおおぉぉぉーーー！！！』

号令に合わせて降り注ぐ矢の雨。こちらの軍は百数十人。その半分を弓兵として配置しただけあってその数も大したもの。

とはいえそんな雨の中も潜り抜けて向かってくる敵もいる。罠も広く配置したから間隔も空いていますしね。でも、罠が想像以上に巧く働いてくれた。……ま、裏をかえせばそれだけ敵が烏合の衆だったということですが。

あとは、残りの兵たちに持たせたアサルトシールドの出番ですか

ね。

「楽進」

「はい。――皆、敵軍はもはや恐れるに足らん！　今こそ突撃、敵を殲滅せよ！！」

『おおおおおおぉぉぉぉーーー！！！』

うむ、いい号令。さて、私もいきますかね。

＊

Ｓｉｄｅ夏候淵

「く、他の軍の戦況はどうなっている！」

賊を射殺しながら伝令の情報を待つ。

結果的に上代の罠は想定を大きく超える効力を発揮してくれた。

足元を脅かされるのは人にとって想像以上に恐ろしいものだが、それでも相手が正規の軍であればこうした結果は生まれなかっただろう。統制のとれていない賊であるからこそ最大の効力を発揮する。

足を刺し貫かれ、うろたえる者を皮切りに次々と混乱が広がる、さらには混乱した味方に押し倒され堀に落ち、絶命する者も。奴は一割と言っていたが、その被害は二割にも届かんとするほどだ。

とはいえ、それでも敵は多い。まだ第二防衛線で持ちこたえているが、押されている事実は変わらない。

「戦況をお伝えします！　西、南両軍とも奮戦、互角に戦況を進めている模様！　今しばらく押し切られる心配はないようです！」

「ほう、大したもの、だっ！」

伝令の報告に安堵しつつも手を止めることはない。にしても、賊が相手とはいえ彼らや義勇兵の勇猛さを感じる報告だ。

「まぁ、あのあさるとしーるど、とやらもあることだしな」

奴が考案した突撃槍、あさるとしーるど、とやらは中々に優秀だ。木材を組み合わせた大盾に槍を組み込んだ攻防一体の装備。数人をすっぽりと覆い隠す盾は一人では使えないが数人で持ち、小さく設けられた穴から敵を捕捉、突撃すればそれはまさに動く壁となる。しかも槍付きだ。

少々突撃速度に問題があるものの、義勇兵には最適の武装だろう。なにせ、自身の安全が多少なりとも確保されている。それにただ敵に向けて突撃すればいいのだ、素人でも使用が可能なのは大きい。心理的、技量的にも義勇兵のための武装。まったく、本当に面白い奴だ。あの“蒼狗”は。

そういえば、作戦会議で少し様子がおかしかったが……いや、今考えることではないな。今は劣勢と言わざるを得ないこの戦況の方が問題だ。

「くっ、ここが破られては意味がない！」

敵本隊の数はおよそ千三百ほどだろう。倍以上の数が相手では……！

「か、夏候淵将軍！」

「っ！？　なんだ！？」

新たな伝令の様子に嫌な予感が頭をよぎる。

「報告します！　西側の敵全滅、百の兵を率いて指揮官がこちらへ急行中！」

「なっ――！？」

が、それは私の予想を大きく裏切る報告だった。

＊

「死屍累々ですねぇ……」

戦闘が終わり、私の眼下には矢に、槍に、罠に、柵に刺し殺された多数の死体。

あの後、西側の敵を殲滅、押されているという北側へ馬を走らせ、賊を斬っていると、銅鑼の音と共に曹の旗をたなびかせた援軍が到着。さすがに分の悪さを理解したか、それともただ単に恐ろしくなったか。おそらく後者ですが、賊は散り散りになって撤退していきました。

さて、一般に戦は全体の四割も兵が損なわれれば大敗だといいます。なぜならそれだけの兵がいなくなってしまえば執ろうとしてい

た策をほとんど実行できなくなってしまうからなのだとか。……ま、この世界の武人なら数の不利くらいなんとかしそうですが。

ともあれ、これが真っ当な戦ならここまでの死者はでなかったでしょう。これは偏に彼らが戦になれていない。戦うべきでない者であったということ。……それでも戦わざるを得ない彼らに私たちはどう見えたのでしょうね。

私の考えることでもありませんが、天下泰平を願うくらいはしても赦されますかね。

あ、そういえば妙な男のことですが、見事に人違いでした。キモいオッサンが上裸で抱きついてこようとしたので若干本気で峰打ちして、兵隊さんに引き渡しました。にしても硬いオッサンでしたねぇ、賊の討伐より数倍疲れましたよ。

「“蒼狗”殿、ここにいらっしゃいましたか」

「いや、だから上代でいい、というかむしろそう呼んで下さいって言いましたよね、楽進？」

「あ、はい。すみません」

ホントどうにかなりませんか、その渾名。

「それにしても噂に違わぬ実力でした。上代殿」

「いえいえ、楽進の気弾も大概凄まじかったですよ」

驚きました。拳と蹴りで戦う武術家かと思いきや手足から練り上げられた気を打ち出すじゃありませんか。人ってあんなことできる

んですねぇ……。

「では、参りましょう」

「参る、とは？」

「曹操様もじきに到着されるとか。上代殿なら仕官も夢ではありませんよ」

「はぁ、そうですか……」

正直会いたくないのですが……。つか、アレがばれたら私、殺されますよね？

「うむ、ここは戦略的撤退――」

「行きましょう」

「え、ちょ、楽進？」

引き摺られていく私に決定権はない。う～ん、確かにこのまま居なくなったら変に疑われるかもしれない、かな？　まぁ、仕方ない。

「あ、兵隊さん。実は――」

うん。備えあれば憂いなし、ですね。

＊

「お、やっと来たな。兄ちゃん大活躍やったんやて？」

「さすがは“狂鬼”なの～」

またその名ですか……。

「そちらこそ、守りきったんですから大活躍でしょう？」

「そうだな。お前達の力がなければ、ここまでしっかり守り抜くことはできなかっただろう」

突如現れたのは（主に、というか私にのみ）危険人物の夏候淵将軍。その真っ直ぐな賛辞に三人娘の顔も綻ぶ。三人は口振りからして仕官を目指しているようですし、これは内定したようなものですね。

と、援軍が駐留する方向から馬に乗った数人の人影が近づいてくる。おそらく、あれは、

「秋蘭！　無事だったか！」

夏候淵さんの服をそのまま赤くしたような服を着た女性が夏候淵さんのほうへ駆け寄ってくる。

「ああ、姉者。私は大丈夫だ」

姉……？　ということは彼女が曹操の側近であるという夏候惇将軍ですか。……見事に女性ばっかりですねぇ。そして、その後ろから悠然と馬を歩かせてきたのは。

「秋蘭。よく少ない兵で持ちこたえたわね。流石というところかしら？」

「はっ、ありがとうございます」

もしかしなくても曹操様ですよねー。纏っている空気が違いますし。孫策さんとは違う、それでいてそれと並ぶような覇者の風格。噂以上の人物のようです。

というか、ホントに大丈夫ですよね？　あの時と服装も違うし…やっぱ一応、気配消して隠れとこう。

「ですが私たちだけでは守りきることは難しかったでしょう。今回はこちらの四人、特に――」

あ、嫌な笑顔。

「この男の力によるものが大きいかと。罠や武装の考案、さらには自身の戦果も随一です」

うっわぁ……やっぱ、適当に誤魔化して逃げればよかった。この人絶対性格黒いですよ。

「……その男が、例の？」

「はい」

いやいや、例ってなんですか？　まさか戦闘開始前に放った伝令に余計な事吹き込んでませんよね？　夏候淵さん？

「へぇ、あなたが噂の“蒼狗”？」

「いえ違いま――」

「秋蘭」

「ハイ、ソウデススミマセン」

なぜこちらの人々は話を聞く時に武器を突きつけるのでしょうか？

というか夏候淵さん、鏃当たってますよ、鏃。

「よし、あなた私の下に来なさい。勿論他の三人もね」

後ろから喜びの声が上がるのが聞こえる。え、なんで振り向けないかって？　夏候淵さんが構えを解いてくれないんですよ！

「わ、私は反対です！　こんな呆けた男を軍に加えるなど！」

お、地獄で仏。頑張れ夏候惇さん。私は動けないので援護射撃できませんが。

「あら、私に意見するのかしら、春蘭？」

「い、いえ、そういうわけでは……」

「姉者、この者の才、十分華琳様のお役に立てると思うが？」

「な、なら私と決闘をして決めるというのは！」

ストップ、それアウトです。

「だそうだけど、どうかしら？」

「後生ですから勘弁してください」

「冗談よ、春蘭？」

「……わかりました」

結局撃沈。まぁわかってましたが。自分でなんとかしますかね。

だからそんなに睨まないで下さい、夏候惇さん。

「あ、あの～」

出来るだけ控えめに声をあげる。

「なにかしら？」

「今回は日が悪いので、また後日に――っ！？」

瞬間、斜め前方に全力で前転。頭上を掠めた矢に冷や汗が止まりません。

「何か言ったかしら？」

「いえいえ、ですから――っと！！」

続けて後方へ飛び退く。ドゴン、という音と共に眼前には地面を砕く大剣。

「ちっ！　貴様！　華淋様の誘いを断るその無礼、己の命で贖え！」

うわ～この人どさくさに紛れて殺す気満々ですよ？

「いやいや、あなたにとってはむしろ喜ばしいのでは、っ！！」

だからそんなに大剣を振り回さないで！！

「それはそれ、これはこれだ！！」

「超ご都合主義ですか！？」

ここは……やはり戦略的撤退！！

「捕らえなさい、春蘭、秋蘭」

「「御意」」

村で唯一門がある北入り口まで矢をかわしながら走り、通り抜け際に脇にあった縄を切る。そして、吊るしてあった木材や板が門を塞いでいる間に外に待機させてあった風鈴に乗ると一目散に駆け出した。

ふぅ、もしかしたら命が懸かっていたとはいえ、少々強引でしたかね？

「私の誘いを断るとはいい度胸だわ。次に会ったら……」

いや、逃げましょう。どちらにしろ、あそこに居たら身が持ちません。

第5章　日がな一日昇龍尽くし（前書き）

なん、だと……！

刃「どうしました？いつにも増して変な顔がディスプレイに映ってますよ？」

い、今見たことをありのままに話すぜ！いつの間にかアクセス数が増えていた。そしてお気に入り登録や評価までいただけるなんて……

カップ麺の存在を忘れてお湯入れてから数十分放置した、だとか何を思ったか、その麺に残った少量のスープを湯切りしてしまったなんてチャチなものじゃ――

刃「貴方の日常（比較対象）がチャチ過ぎますよっ！？」

第5章　日がな一日昇龍尽くし

どうもこんにちは、現在賊掃討中の上代刃です。

曹操さんとこから逃げて数日。またしても柄の悪い、チンピラ紛いの賊数人ほどに絡まれたので穏便にことを済ませようとしたのですが……。

・回想

「金出せや、ゴラァ！」

「ああ、どーも、大変ですねぇ皆さん」

「へ？　ああ、こりゃご丁寧に。って、てめぇ今の状況わかってんのか！？」

「はい、どうぞ」

地面に適当な量のお金をばら撒く。

「な、なんのまねだ、こりゃあ？」

「ですから、恵まれない乞食の皆さんにお裾分けですよ～。ささ、遠慮しないで、虫のように這い蹲って金啜れ♪」

「ああ！？　喧嘩売ってんのか！？」

……と言いつつ金は拾うんですね。

「まぁまぁ、そのお金を元手にマトモに働けばいいじゃないですか。今ならまだやり直せますよ？」

一応数日は生活できる額を撒きましたし、幸いまだ働き盛りの年代の人ばかりです。

「ふざけんな！　それができりゃ苦労しねぇよ！」

そして一斉に襲い掛かってくるチンピラ達。

「はぁ～、苦労して頑張ろうとしてない奴の台詞だと思うんですよね、それ」

・終

そして、現状に至る。最初は十数人だったのが仲間を呼んで今は百人に届こうかというところ。

「待てい、薄汚い賊共よ！」

と、そんな喧騒の中に凛とした声が響き渡る。誰もが足を止め、そちらを見ると。

「そこな罪無き旅人から金銭を巻き上げんとする悪行。この私に見つかったことを後悔するがいい！」

赤い槍を構え、白き衣服を身に纏った青髪の美女が悠然と私たち

を見下ろしていた。

……なぜか木の上から。わざわざ太陽を背にしていることといい、どこかの戦隊モノですか、とツッコミたくなります。

「な、なんだ、あの女!?」

「ふっ、私の名か？　我が名は趙子龍！　貴様らに正義の鉄槌を下す者だ!!」

バーン、と無駄に芝居がかった動きで名乗りをあげた趙子龍さん。あれは……ちょっと関わりあいになりたくないなぁ。

「くっ、おい！　あの女もやっちまえ！」

「来い！　我が神槍、受けてみよ!!」

勢いよく飛び降りた彼女はその勢いのまま数人の賊をあっさり薙ぎ倒す。あの登場はともかくなかなかに腕の立つ人のようだ。

その間にも私に向かってくる賊は無論斬り伏せ、二人で賊を掃討しているうちに彼女と背中合わせになってしまった。不本意ながら。

「ふむ、貴殿もなかなかどうして只者ではないようだ」

「貴女ほどではありませんよ」

いろんな意味で。

まぁそれでも腕前は確かであることに疑う余地はなく、その後半

時もしないうちに賊は追い払われてしまいました。

＊

「えっと、ありがとうございます。助かりました」

「ふっ、あの腕前なら私がいなくとも問題はなかったでしょう、“蒼狗”殿？」

案外有名になっているものですね。真に不本意ですが。

「改めて名乗ろう、私は姓を趙、名を雲、字を子龍。以後見知りおきを」

「これはどうも御丁寧に、私は上代刃と申します」

「ふむ、では刃殿とお呼びすることとしよう。先程の呼び名は気に入らぬご様子ですしな」

おお、そういった気遣いを受けたのは初めてです。趙雲さん、意外と良い人ですね。

「しかし、まさか噂の剣豪と会うとは私もなかなかに運が良い。見たところ旅の途中のようですし、路銀稼ぎに一つ良い話があるのですが」

「良い話？」

「ええ、詳しい話は近くの街についてからといたしましょう」

……なぜでしょう。今こちらを見る趙雲さんの目が獲物を見るように細くなり妖艶な笑みが口にはりついているのですが。これは……本当についていっていいのでしょうか？

＊

地面を震わす喧騒の中、私はとある広場の脇、選手控え室と銘打たれた部屋にポツリと座っていました。

「……どうしてこうなった？」

街に引き摺られ、あれよあれよと言う内に申し込み、ここに放り込まれたのですが。

「まぁまぁ、よいではありませぬか」

隣にはそれを行った元凶、やけに愉しそうな趙雲さんが。

どうやらこの街では黄巾党を始めとした賊の脅威に屈しないため、強い戦士を集めよう、とか、街の住人を元気付けようだとかいう理由で武芸大会なるものが行われているらしい。

確かに腕の立つ人材を見つけたり、住人の不安を取り除くっていう効力は多少なりあるとは思いますが……。

「我らがぶつかるには決勝しかありませぬ。ふふふ、期待しておりますぞ？」

う、それ嫌な予感が止まらないワードです。でもまぁ、

「賞金は魅力的ですし、やれるだけはやりますよ」

この時勢になかなか太っ腹な額ですしね。バックに名家の資産家がついているというのもあながち嘘でもなさそうです。

「へっへ～、博打ならこの私、文醜さんに任せなさいってね」

「もー文ちゃん、なんで私まで参加なのー？」

「焔耶、わしと戦うまで負けるでないぞ？」

「任せてください、桔梗さま！」

「我が武、存分に見せつけてくれよう！」

……なんというか、参加者も多種多様ですね。

かくして、第一戦。

「へへへ、兄ちゃん、そんな細いなりで大丈夫かい？」

見るからにごついオッサンが鉄球を持って威嚇しています。

「大丈夫だ、問題ない」

刃、踏み込んで一閃。オッサンは倒れた。

オッサンに勝った！

二戦目

「残念だったな、貴様に勝ち目はない。なぜなら――俺は最強だ」

いかにもナルシストっぽい人が剣を構えて自己陶酔しています。

「いや、俺がガン〇ムだ」

刃、一太刀で叩き伏せた。ナルシストは倒れた。

ナルシストに勝った！

三戦目

「正義の一撃、受けてみろ！」

なんかもういろいろ暑苦しい熱血漢が突進してきます。

「理想を抱いて溺死しろ」

刃、ヒラリとかわし背後から斬りつけた。熱血漢は倒れた。

熱血漢に勝った！

＊

さて、次は四戦目。そろそろ腕の立つ連中しかいなくなってきましたね。

あ、ちなみに武器は刃を潰したものが運営側に用意されていてそれの中から選ぶという方式になっています。流石に真剣じゃ笑えないですしね。……いや、一応鉄球とかは失格にすべきだと思うんだ。

「ふん、貴様が次の相手か」

と、目の前で斧を構えているのは銀の髪に鎧を纏った女性。確か、名前は――。

「我が名は華雄。我が武の前に砕けろっ！」

そうそう華雄さんです。見た感じ強そうではあるんですが、どうも脇役臭が……。

「っと、良い太刀筋ですね」

初撃、重く速い斧の一撃を身を翻してかわす。

「貴様こそ今のをかわすとはな……どうやらやっと本気をだせそうだ。いくぞ！」

続けて放たれる一撃はその言葉通り紛れも無い本物。まともに受けるのは避け、剣の腹で滑らせるように受け流す。

「次はこちらの番です」

そのまま片足を軸に反転、素早く斬りつける。

「まだだっ！」

が、それはギリギリ柄で防がれる。そのまま間髪入れずに連撃を繰り出したが、それも防がれ、距離を空けられた。

ふむ、想像以上の腕前ですね。

「ふ、やるな。――はぁぁあ！！」

持ち前の力で得物ごと粉砕せんとする豪撃が放たれる。確かにあれは相当重い一撃、ですが――

「いろいろと真っ直ぐ過ぎますね」

剣で受けると見せかけて振り下ろされた縦の一撃と平行に側転、振り向き様に首筋を一閃。

剣から確かな手応えを感じ、華雄さんはその場に崩れ落ちた。

＊

第五戦目、言い換えれば準々決勝。

「そろそろ決勝が見えてきましたな、刃殿」

先んじて勝ち進んだ趙雲さんはまたしてもあの不穏な笑みでこちらを見る。

「……薄々気付いてましたが、貴女も相当の戦闘狂ですね」

「これはまた失礼な。私は自身の武芸を他者と競い合い、自己を高めるという向上欲の塊ですぞ？」

それがバトルジャンキーだと言っているんです。

「先程の者も中々の使い手でしたし、私としてはこれからが楽しみでなりませぬ」

趙雲さんの五戦目の相手……確か魏延さんでしたっけ？　確かにあの金棒を振り回す力といいなかなかの武芸者ではありましたね。まぁ相手が悪かったですが。趙雲さんの最大の武器はその速さ、あの得物では彼女の槍についていくのは酷でしょう。

「無論、私が最も楽しみにしているのは貴方との戦いですが」

その笑みはやめてください。生きた心地がしません。

「ですが、今回の相手は一筋縄ではいきませぬぞ。警戒された方が良い」

おお、これは珍しい。あの趙雲さんが忠告するなんて。それほどの相手、ということですか。

ま、その忠告の根幹にあるのが私との戦いを望む気持ちなのには溜息しか出てきませんが。

＊

「……成る程、これは忠告されるまでもないですね」

第五戦目、目の前には妖艶な出で立ちからは想像もできない武者の気迫を放つ美女。その手に持つのは弓。そして猛禽のごとき眼光でこちらを射殺すように見据えている。

「ほう、お主、相当な手練じゃな。殺り合う前に名乗っておこうか。わしは厳顔、お主は？」

「上代刃、と申します」

話している間も感じる裂帛の気迫。これは……きつそうですね。

「ふむ上代刃、か。……相分った、ゆくぞ、刃！」

彼女が声を張り上げた時、目の前には既に数本の矢が迫っていた。

「くっ！」

回避を不利と判断し、剣で弾き落とす。続けて放たれた矢は両足へ。それをギリギリの高さまでジャンプして回避。

「速攻で機動性を殺ぐ戦法……かなりの熟練者ですね」

次は額、心臓、首の三点射撃。まとめて一太刀で叩き落し、体勢を低くしたまま彼女へ迫る。

「ふふふ、よう落とすもの、だっ！！」

次は五本、どれも正確無比でしっかり私を捉えている。

三本だけ弾き、残りは体勢を更に低くしてよける。互いの距離はもうほとんどない。これで弓は使えな――

「なっ！？」

クロスレンジでも正確に矢を撃てる、って貴女ホントに人間ですか！？

「ちっ、はぁっ！！」

無意識的に行った足捌きで横転して矢をかわすと、這いつくばった体勢から体のバネを利用して逆袈裟に剣を振り上げる。

流石にこれは――

「な、っ！？」

「今の矢をかわすとは、お主本当に人間か？」

さっきの私と似たようなことを言っていますが、今ここにおいてもうそれはいいです。

あれを受け止めたのも普通にありえませんが、それ以上に、

「ここで、金棒ですか！？」

なんと、今の今まで後ろ腰に持っていたらしい金棒で私の一撃を受け止めていた！！

「武器は一つという規則はないので、な！！」

振り下ろされる金棒を後退してかわす。ていうかそんな無茶な装備誰もしませんよ！？

「わしの本当の武器は少々特殊でな、どうもそれは用意されておらんのよ」

「いや、確かに気持ちはわかりますけど」

でも、だからってソレは……。

「ほらほら、呆けている暇はないぞ？」

いつの間にやら弓に持ち替えている厳顔さん。続けて放たれる矢はまたしても恐ろしいくらいに正確無比。慌てて叩き落しつつ今の距離を維持する。

今退いたらもう一度近づくのは難しい。幸い金棒がある今、彼女はあの場から動けないし、ここで踏ん張るしかない！

普通なら動きながら弓を引かれてもそうそう危険視するほどじゃないんですが、あの人なら動きながらでも急所を射抜いてくるだろうという確信があります。

「っく、はっ！」

「……ふむ」

傍から見れば私のジリ貧。でも実際には――

「むむ、仕方ないのう」

弓から金棒へと持ち替える厳顔さん。

そう、いくら百発百中の弓の腕前を持っていても矢に限りはある。あれ程の腕なら普通数が足りなくなることもないですが私の様子を見て矢が尽きる方が先だと悟ったのでしょう。

「来い、刃！」

「では、お言葉に甘えて！」

全力で踏み込み、渾身の一撃を放つ。並みの者なら見ることすら叶わないソレを彼女はしっかりと見据えて金棒を構えた、が。

「っ！？」

先程の一閃と、今の一撃。全く同じ場所で受け止めた金棒は半ばから折れ、私の剣は厳顔さんの首筋へと伸びていた。

「なんと、まさかたった二発受けただけで……お主、実は悪鬼の類だろう？」

……通り名的に否定できないのが悲しいです。

「見事、わしの負けだ」

＊

五戦目が終わり、熱狂した観客の歓声を聞きながら控え室に戻る。

もう……お腹いっぱいです。あんなに本気で戦う事になるなんて正直、割に合わないですよ。もう嫌です。

「ふふっ、素晴らしい戦いでしたぞ、刃殿」

このまま、勝ち進んで、この人と、戦う元気が、もう、ありませんよっ！！

「即時棄権ヲ申請シマス」

「ほう、それは聞き捨てならんのう？」

げ、人外、もとい厳顔さん。そのやけに愉しげな目はなんですかっ！！

「わしに勝った男が途中棄権など許されんぞ？」

私は燃え尽きたんですよ！　真っ白に！！

「のう、刃？」

「……ハイ、了解ＤＥＡＴＨ」

無論誤字に非ず。

「では、私は次の死合がありますゆえ。ふむ、次は準決勝。相手は文

醜、ですか。刃殿、決勝で待っておりますよ？」

うわーい、サラッと勝利宣言。後生ですからその危険が香る死合に私を巻き込まないでください、お願いします。

＊

「なんだかなぁ……」

言葉通りあっさりと決勝へ駒を進めた趙雲さんと肝っ玉姐さんの厳顔さんに見送られて立った準決勝。無論、二人の無慈悲な圧力が手を抜く事を許さない。

相手は、黒髪ボブカットの女性、ですね。見事に後半は女性ばかり。しかもほとんどが美女ときたもんです。目の前の方も含めて。これで強いんだから最早訳が分りません。

金が基調の鎧に武器は大きなハンマー。ハンマー、疲れそうな相手ですよね……。

「うう、無理だよぉ文ちゃん。あの人の試合見てたけど、勝てる気がしないよぉ……」

はて、なんかブツブツ言ってらっしゃいますね。というか今までの相手と微妙に違うんですけど。なんというか、気迫的なものが。ああ、さすがにさっきの厳顔さんは特例ですが。

「えっと、顔良さんでしたよね？」

「は、はい！！」

……妙です、ただ声をかけただけで縮み上がっているような。

「あの、お、お手柔らかに……」

「は、はぁ……」

これはこれで調子狂いますね。ま、とりあえず。

「では、いきます」

「――っ！！？？」

全速で駆け、彼女の首筋に剣を突きつける。反応しようとしたのは見えたけど、体が固まってうまく動けなかったみたいですね。

「……」

剣はピタリと首元に突きつけられていますし、反撃できるようにも見えない、これは勝利、でいいんですかね？

「あの……」

声をかけてみる。無反応。あの、ピクリとも動かないんですが。

「はふぅ……」

「っと」

無言で崩れ落ちる顔良さんを抱きかかえる。
……完全に気絶してますね。気迫にあてられた、のかな？　ともあれ――

「なんでしょう、この居たたまれない空気……」

その後、呆然とする観客を尻目に顔良さんを抱え、急いで控え室に戻りました。

＊

準決勝後、「斗詩はビビリだなぁ～」と笑いながら顔良さんを抱えていった文醜さんを見送り、軽い休憩を挟んだ後。

ついに、決勝戦。

「本気で面倒くさいです……」

「おや、つれないことを言わないでください。私はこの戦いを待ち望んでいたのですから」

その背筋の凍る笑顔はやめてください、戦闘狂。私はもう厳顔さんだけで今日はお腹いっぱいなんですから。

「むむ、本当につれない御仁ですな、刃殿は。それに……このような美女を前にしてそんなことを言っていては雄がすたりますぞ？」

「心を読まないでください。それに意味を曲解しすぎです」

「ふふっ、まぁそちらの話は後日にでも。今日は武芸の大一番、用意はよろしいか？」

「その後日は永遠にきませんがね。今回だけ、どこまでもお付き合いしましょう」

徐々に張り詰める空気。それが弾けた時が死合の幕開けになる。

「つれない、だが良い返事です。いざ、参る！！」

視界から彼女が消えたかのような錯覚。すぐさま真横に剣を薙ぐ。ガキン、という音と共に飛び散る火花。続けて繰り出される三連突き、剣の腹で受け、薙ぎ、斜めに打ち下ろす。

「ふっ！！」

続く全身を駆使したなぎ払いは後ろへ飛んでかわす。

「ほう」

感心したように口元を緩める趙雲さん。もし飛び込んでいたらった今空を切った回し蹴りが脇腹に突き刺さっていたことでしょう。

「まだまだっ！！」

間髪入れずに繰り出される突き。それを薙ぎ、返す刃で手元を狙う。

「っ！？　……いやいや、そんな無茶、なっ！！」

放った一撃にあろうことか槍を手放した趙雲さんはそのまま跳躍、剣の過ぎ去った後空中の槍を掴み、上から叩き下ろすように斬りかかってきた。

頭上に構えた剣で防いだ私はその槍を撥ね退け、再び互いの距離がひらく。

「予想以上の速さ、ですね」

普通なら知覚すら困難なレベルの速さにその立ち回り。まるで霧か雲でも相手にしているような回避と牽制。雲を掴むよう、とはまさにこのことだろう。

「なら、こちらも少し本気でいかせてもらいますか、ねっ！！」

軽く腰を屈め、かの槍すら越えんとする速度で迫撃する。

「くっ！？」

二の太刀要らず、光の一太刀は咄嗟に回避した彼女の衣服に一本の太刀筋を刻み付けた。

「……決めるつもりで放ったんですが。化物ですか、貴女」

「ふふふっ、面白い。刃殿、やはり貴方との戦いは面白すぎる！」

失礼、ホントに化物の類でしたね。なんか一気に冷や汗が出てきましたよ？

「はぁぁぁあああッ！！」

「っとに、この戦闘狂がッ！！」

さらに速くなった連撃は残像すら残し執拗に攻め立てる。その全てを薙ぎ、払い、叩き、弾く。回避はできない、彼女の攻撃から退いた瞬間彼女の槍は知覚できなくなる。

――それがどれくらい続いたか、少なくとも当事者にとっては永遠に等しいその攻防にも終わりが来ようとしていた。

互いの武器は磨耗し、耐え切れてあと数合。それに気付きながらも互いに退くことができない。そして、先に限界を迎えたのは、剣の方だった。

「くっ！？」

神槍の名に相応しい雷鳴のごとき一突き、それによって私の剣はいとも容易く砕け散った。

「――もらった！！」

目の前に迫るのは鈍く光る銀色の閃光。二つの陰は交差し、長いようで短かった闘いは終局を迎えた。

＊

「いやはや、なかなかに刺激的な一日でしたよ、刃殿♪」

「貴女は……いえ、もういいです」

大会終了後、準優勝者まで賞金が出るという衝撃の事実を聞かされ「じゃあ決勝あんなに頑張った私って……」とかぼやきながら賞金を持って向かったのは街の酒場。この酒場、酒だけでなく食堂もかくやというほどメニューが豊富なため空きっ腹には有難いのですが……。

「はっはっは！　今日は酒が美味いのう！」

「うむ、酒も美味いし、メンマも美味い。言う事なしですな」

「うう、ご飯が……酒の味がする」

主に両サイドを固める酒豪のせいで。まずもって酒場に行くことを決めたのもこの二人だ。私の意見も少しは――

「まぁまぁ、刃殿もどうですか？　メンマ」

「さっきからメンマメンマ、貴女はどんだけメンマ好きなんですか！！」

先生、頭痛が、痛いです……。

「オヤジ～餃子に坦々麺追加ね～」

「も～文ちゃん。そんなに食べるの？」

「だってアニキの奢りだも～ん。な、アニキ♪」

「なんかもう、好きにしてください……」

「す、すみません。刃さん」

そう、私の奢りっていうのも勝手に決まってましたし……。

まぁ、“優勝”してそれなりに余裕はあるんですし、いいですけど。

「にしても驚いたぞ。まさかもう一本の剣を持っていたとは」

「同じ事した人が何言ってるんですか」

「いえ、しかし流石の私でも想定外でしたよ」

元来したたかな性格だったことがこんなところで役に立つとは思いませんでした。

最後、完全に獲った、と思っただろう趙雲さんの全霊を込めた突き、それをかすりながらもかわし、もう一本の剣で打ち倒したわけですが……思わず脇腹をさする。

「掠ってこんな痣ができるって……」

想定内なら殺す気だったでしょ、貴女。ケロッとしてメンマ食ってんじゃないっすよ。

「そういえば、お主、本当に“鬼”だったとはのう。今度この豪天

砲で鬼退治、というのも悪くないかもしれんの」

「その時は私の龍牙も加勢しますよ」

「……次に会った時が死期かもしれませんね」

というか私も“狗”ですし、出来ればそちら側に加えてください。

「オヤジ、ワタシもおかわりだ！」

他と同じく私の奢りでひたすらに食って食って食いまくってるのは魏延。

「……ん、どうした？」

「……なんでもないです」

「……食うか？」

「……いいから全部食べなさい」

「そうか、わかった」

なんか、無邪気すぎてつっこめませんよ貴女！！

「あ、そういえば、華雄さんは？」

「えっと、私が聞いたところによれば打倒刃さんに燃え、早速帰って特訓だそうです」

ああ、もういいや。あの真性バトルジャンキー。

「そうだ、ときに顔良さん。私もそっちに混ぜてください、お願いします」

サラリと自然に唯一の良心へと逃亡を図る。

「おや、刃殿」

「わしらの酒が」

ガッシリと肩を掴む二つの手。

「「飲めぬと？」」

「……両手に花、最高」

「「よろしい」」

こうして朝まで飲み明かし、結局私と顔良さんでみんなを宿へ連れ帰りました。

うう、酒臭い……。

第6章　はわわ軍師とものぐさ偽善者

ども、波乱の武闘大会から数日、新天地へと向けて進行中の上代刃です。

約数名が飲んでないのに、二日酔いに苦しんだ翌日、星さん、あ、星というのは趙雲さんの真名ですが。ともあれ、昼過ぎに星さん達と街の入り口で別れ、次なる目的地は天の御遣い、とやらがいるらしい街です。別れ際、星さんは旅に同行したい、とか桔梗さんは家に連れて帰りたい、だの世迷言をのたまっていましたが丁重にお断りしました。毎晩晩酌につき合わされてはたまりません。

にしても中々面白いシステムですよね、真名って。心を許した人間にしか呼ぶことが許されない聖なる名。一応知識としては知っていましたが、知らない一刀とかは初対面で呼んで斬られたりしてませんよね？　……よね？

いや、なんとなく不安になってきましたね。ここらで会って不安の種をなくしておきたいものです。まぁそれが死体でも驚きませんが。

あと、酒場で飲んだ彼女達とは全員と真名を交換しました。星さんや桔梗さんはともかく、猪々子や斗詩、焔耶が許すとは思えなかったんですが。気さくな人たちです、はい。

ともあれ、そんな私の珍道中にまたしても暗雲が。

避難してますね。街の人たちが歩きで、別の街まで。長い行列は

途切れることなく視界の端から端を占めています。寄ろうと思っていたのですが……こりゃ無理ですねぇ。

「……ん？」

とりあえず街の前まで来たところで行列から遅れて、ゆったりと進む二人組を発見。

一人は歩くのも大変そうなお婆さん。そして、それに付き添う大きな帽子が特徴的な金髪の女の子。……むう、お節介はよくないんですが。

「おばあさん、頑張ってください。あの街まで行けばきっと――」

「こんにちは～」

「はわわっ！？」

……なんか鳴きましたよ、この子。

「あ、えと、あなたは……？」

「通りすがりの旅人ですよ。ちょっと失礼しますね、おばあさん」

風鈴から降りて自己紹介、ついでにおばあさんを抱き上げて鞍の上に乗せる。

「よし、私が馬を引くのでじっとしててくださいね？」

「ああ……ありがとうね」

「君も乗る？」

「へ？　あ、いえ！　だいじょぶです、歩けます！」

うむ、元気でなにより。

「……」

歩き出してから少しした頃、少女はどこか落ち着かない様子でこちらを見ては視線をそらすことを繰り返していました。これは、こちらから歩み寄るべきですよね～。

「そういえば自己紹介がまだでしたね。私は上代刃です、貴女は？」

「はわっ！？　は、はい！　私は諸葛孔明と申しましゅ！！」

……鳴いた後は噛みましたよ、この子。

「孔明、ですか。貴女はあの街の？」

「あ、いえ。私、もとは水鏡先生の下でいろんな学問を学んでいたんですが、それを世の為に生かそうと思って。あの街には立ち寄っただけなんです」

へぇ、こんな歳から世のことを考えて。

「大したものです、阿呆な賊達に爪の垢でも煎じて飲ませたいですね」

「は、はわわわっ！！　そんなことないでしゅ！！」

……あまり褒めるべきではないかもしれない、この子。

「あの、じ、刃さんはどうして旅を？」

「ん、ああ私は人探しと、そのついでに世界を見て回ってるだけですよ」

「世界を？」

「ええ、何をするにもまずはいろいろな世の中を知っておかなきゃならんと思いましてね」

「な、なるほど……」

あれ、考え込んでしまいましたね。そんな深遠な考えがあったわけではないんですが。

「……刃さんから見て、今の世の中ってどうだったんですか？」

ふむ、今の世の中ですか。そうですねぇ。

「無辜の民が犠牲になることがまかり通っている非情の世。皆が今、笑って暮らせる世を創る英雄を待っている。っていうのが、一般的にして最も善良的な認識でしょう」

「私もそう思いますけど、違うんですか？」

「それでいいんですよ。正解のない問答のなかで最も正解に近い答えですから。でも、私は他の諸侯やこの大乱を見て思うんですよ。

これは下準備、その後にくる大きなうねりの、ね。時代は移ろう、人に安定なんてないですし、平穏はひどく脆い」

「……はい」

「――でもまぁ、そんな中でも天下泰平。みんなが平和を愚痴って暮らせるような世の中を長くゆる～く続けてくれる君主を探して、恩恵に預かろうってわけです」

「……」

あれ？　茶化して終わらせましたが、どうやら彼女には思うところがあったみたいで黙ってしまいましたね。

――っと、天下泰平はまだ遠いようです。

「孔明」

「はい？　どうしたんですか、刃さん？」

「後ろ、見てください」

そこに見えるのは明らかに柄の悪い賊の集団がこちらへ向けて進んでくる光景。百には届かないまでもその数は多く、砂塵を巻き上げる様は脅威足りえるもの。

「ま、仕方ないですね。孔明、手綱頼みます。お利口な馬ですから、心配いりません」

「手綱って、刃さんはどうするんですか！？」

「殿役を務めますよ、小さな軍師さん」

アレは先発隊のようだし急げば殲滅後に逃げ切ることもできるでしょう。

……そういえば、前もこんなことありましたね。

「だ、ダメです！　無茶ですよ！」

「安心してください。絶対に戻ってきますから」

俯く彼女の頭をポンポン、と軽く撫でて安心させる。

この子は頭が良い。これが最良だとすぐに理解するでしょう。私自身死ぬ気なんて毛頭ありませんしね。

「じゃあ孔明、後は任せ――」

「し、朱里ですっ！」

「？」

「私の真名、朱里です。私、刃さんのこと信じてますから！」

……いや、なかなかどうして出来る子ですね。十二分に評価したつもりでまだ幼いと侮っていたかもしれません。

「了解です、後で会いましょう。朱里」

人知れず笑みを浮かべた私は迫る砂煙に向かって駆け出した。

＊

Ｓｉｄｅ諸葛亮

近頃噂になっている天の御遣い。当初こそ噂の一つと思っていた彼の者の噂は徐々に現実味を帯びて私のもとへ届くようになってきました。

曰く、突如現れては義勇兵を募り、見事黄巾党を打ち倒したとか。
曰く、光り輝く衣服を身に纏い、神々しい光を放っているとか。
曰く、善政を敷き、民のために奔走しているとか。

そして、いつしか私はその領主様に会って、そこで私の学んだことを役立ててみたいと思うようになりました。

その道中、立ち寄った街で聞いたのは街に賊の集団が迫っていること。皆が他の街へと移っていく中、一人のおばあさんが目に留まりました。

助けないと。私が頑張ってきたのはあの人達を助ける為なんだから。

そう思って手を貸すもののこのままでは街まで着けそうもない。

そんな時、

「こんにちは～」

どこか間延びした優しげな声が降ってきました。私は突然の声に

驚いてしまったけど。

ともかく、旅人を名乗るその人はあっという間におばあさんを馬に乗せました。街まで連れて行ってくれるみたいです。

それでもまだ完全に信用するわけにはいきません。騙されていることも考慮にいれつつ、彼と二人、歩き始めました。でも、その考えはすぐに覆されることになります。

名前を知り、話をしていく内に彼、刃さんが良い人だと自分でも驚くくらいあっさりと納得してしまったからです。何を考えているかわからない、どこか惚けた目はそれでもすごく優しく、澄んでいたからかもしれません。そして今の世を語るときの刃さんは……。

そんな刃さんは賊を食い止めるために一人、戦いに行ってしまいました。……振り向くことはできません。真名を預けた彼を信じればこそ私は足を止めずに歩き続けました。

彼なら、刃さんと一緒なら私はなんの迷いもなく、自分の力を捧げたい。彼の中に理想の君主像を私は見出したのかもしれません。

「……刃さん」

人知れず漏れた声。

「――はい、お待たせしました」

虚しく虚空に消えるはずの言葉に返答、同時に頭に置かれる暖かい手。

「お、おかえりなさい、です」

私はその時思った。この人についていってみたい、って。

＊

いや、案外使える時もあるんですねぇ、通り名って。十人ほど打ち倒したところで黒鬼の異形な意匠に気付いた輩がいたらしく、みんな仲良く一目散に逃げ出しましたよ。

朱里との約束が死亡フラグにならなくてなによりです。とはいえ後ろに控えるは本隊。流石に二人を庇いつつ逃げるのは厳しいですし、さっさと街へ逃げてしまいましょう。

「あ、刃さん。あれって」

前をちょこちょこと歩く朱里。あ、ちなみに星さんの時もでしたが真名を持たない私は便宜的に刃を真名代わりに交換しました。とはいえ交換以前から呼んでいるからか、妙だと笑う人と申し訳無さそうになる人の二つが現在までのパターンですね。朱里は後者。

そんな朱里が指差す先には結構な数の人影が。運悪いですねぇ、と溜息をつきそうになって気付く。

「賊では、ないみたいですね」

「はい、風体からしても正規兵っぽいです」

……待ってください、それ以前に先頭の人物とか超見覚えあるん

ですが。
あ、あっちも気付いた。
「刃!?」
探し人現る、ですね。こんなところで一刀と会うとは……死体じゃなくてなによりです。
というか天の御遣い、って、そういうことですか。
「無事だったんだな！　良かった!!」
涙すら浮かべて両手を握る一刀。相も変わらずお人好しですねぇ。
「お兄ちゃん、知り合いかー?」
その後ろには身の丈を優に超える矛を持った活発そうな女の子。
「……知りませんでしたよ、一刀」
「え?」
「――貴方がロリコンだったとは」
「な!?　ち、違う！　誤解だ!!」
「ろり、こん……ってなんなのだー?」
「鈴々は知らなくていいの!!」
「それって、真名ですよね?」

「うん、鈴々は鈴々の真名なのだ！」

弁明の余地無し。

「どうやら貴方の人間性を誤解していたようです……この変態」

「ぐはっ！！」

刺さりましたね。胸の深いところに。

「そ、それを言えば刃だって！　その子はどうなんだ！　真名交換したんだろ！？」

「ぬぐっ！」

痛い所をつきますね。一刀にしては頭が回る。

「……やめましょう。不毛です」

「……異議なし」

で、途中で予想していた通り天の御遣いとやらは一刀のことで近くの街で県令をしているらしい。今回は付近の街に賊が現れたという情報を聞きつけ、援軍として来たとか。

ちなみに例の少女は張飛、他にももう一人の君主、劉備と忠臣、関羽がいるらしいんですが、関羽っていえば名高い武芸者で噂も耳にしたことがあります。

でも一番驚いたのは朱里の名前を聞いた途端、一刀が彼女を軍師として迎えたことですね。彼女としては願ったり叶ったりですが、一刀の考えはよくわかりません。まぁ、彼女の頭脳明晰っぷりは信頼に値するだろうし問題はないでしょうが。

ちなみにその朱里の強い要望で私も一刀のとこで厄介になることになったりしました。……まぁ、私も少しやることもできたし、いいんですが、それ以前に一刀自身私を迎える気満々だったらしいです。……甘いですよねぇ。まぁ、悪くはないです。

で、現在は鈴々（お兄ちゃんの恩人ならいいのだ、と言われて真名を交換）の率いる隊に賊の足止めを、後発隊の劉備、関羽を待ちつつも残る部隊で住民の撤退支援中。おばあさんも劉備軍の兵士さんに送ってもらいました。

ちなみに朱里はまだ馬に乗れないらしく私と同じ馬に乗ってます。いつの間にやら一刀は乗れるようになってるようですし、そのうち彼女も乗れるようになるでしょう。
にしても後発隊の二人は――

「ご主人様！！」

噂をすればですね。というか。

「ご、ご主人様……」

うわぁ、と顔を歪めてドン引き。

「そんな目で見るなぁ！！　誤解じゃないけど、でも、誤解なんだ！！」

「いや、冗談ですよ、冗談」

「あの、ご主人様？」

ほら、二人が困ってますよ？

「ねーご主人様。その人は？」

薄く暖色が入った髪を両サイドで結んだ、どこかほんわかとした少女が私を指して言う。おそらく劉備さんですかね。噂では関羽さんは黒髪ですし、噂のまんまの出で立ちの女性がその隣にいますし。

「ああ、俺と同郷で恩人でもある上代刃だよ」

「同郷……ということは天の――！！」

「わ～！　もう一人の天の御遣いさんだ！」

「はわわっ！！　そうだったんですか、刃さん！？」

三者三様の驚きをありがとうございます。というか噂にあった例の占い師が「天の御遣いは二人いる」とかボケたこと言ってるっていうのは本当でしたか。

「ご主人様からお話は聞いています。黄巾党の拠点から身を挺してご主人様をお守りいただいたとか」

「うんうん、ホントに会えて良かったね～ご主人様」

「ああ、ホントに良かった」

……どうしましょうか。目茶苦茶盛り上がってるんですけど。

「……いや、そんなことより早く援護に回りましょうよ」

「「「え？」」」

え？　じゃないでしょ。え？　じゃ。貴方達なんのために来たんですか。

「そ、そうですよ！　ご主人様！」

いち早く気を取り直して言ったのは朱里。さすがだ、私の見立ては間違ってなかった。

「そ、そうだな。桃香、愛紗、遅れたけど新しく軍師として登用した諸葛亮だ」

「よ、よろしくお願いしましゅ！！」

よしよし、少し落ち着こうね、朱里。

「は、はぁ。しかし彼女が本当に軍師足りえるかは――」

「朱里、今回の場合の作戦は？」

一応さっき私と一刀は聞きましたけど。

「は、はい！　えっと――」

朱里の理に適った戦術に関羽さんの目が武官のソレへと変わる。
そして、聞き終えた後。

「成る程、確かに有能な軍師のようです」

と、納得させることに成功した。内容は、まぁ簡潔に言うと一当てして誘い込み、そのまま包囲殲滅。あの数の賊程度ならそう時間もかからず撃破可能でしょう。

「すごいね！　諸葛亮ちゃん！」

「あ、いえ、大したことないです。劉備様」

「桃香でいいよ」

「あ、じゃあ私のことも朱里で」

とまぁ、こういった流れが彼女達の間でとりなされたが、割愛。
ちなみに一刀も朱里とは交換済みです。

「えっと、あなたのことは――」

ん、私の番ですか。

「ああ、上代でも刃でも好きなように呼んでもらって結構ですよ。
一刀同様真名を持たぬ身なので」

「じゃあ、私のことは桃香って呼んでね」

「私のことも愛紗とお呼びください」

「いいんですか？」

私の認識ではそうそう認められるようなものではないと思っていたのですが。というか実際それが常識です。

「いいの！　ご主人様の恩人は私達の恩人なんだから！」

「ええ、その通りです」

なんとも……いえ、悪くないですがね。

「では、行って参ります」

「うん、気をつけてね。愛紗ちゃん」

「はっ！」

馬を走らせ颯爽と駆けてゆく関――じゃない、愛紗は確かに噂に違わぬ風格を感じさせるものでした。それを見送る劉――桃香も今まで会った二人の王、そのどっちとも違う包み込むような大きさを感じさせます。といってもまだ未完のようで、かの二人にはまだまだ及びませんが。

「さて、どうなることやら」

＊

結果としては、快勝といって差し支えない戦果でした。街の住人は守り抜けましたし、自軍の被害も最小限。これも偏に将軍二人の武に軍師の策のお陰でしょう。そして兵達の頑張りは言うまでもありません。

そんなこんなで一刀と桃香が県令を務める街へ到着。城内に招かれ、個室まで与えてもらえたので、なんかもう逆に居心地悪いです、はい。一応前の大会の賞金で余った分を有無を言わせず渡しておきましたが。

そんな折。

「あ、そういえば刃って制服もう捨てちゃった？」

「いいえ、まだとってありますが」

「ならどうせだから着てみたらいいんじゃないか？」

いや、わざわざ着る必要はないでしょう。別に私はこのままで、

「わー見たい見たい！」

「見たいのだー！」

「私も見てみたいです！」

「……えっと、その、私も」

悲しいかな、逆らえない絶対法則、多数決。全会一致なんて夢のまた夢ですね。
世の中オールフォアワンよりワンフォアオール。

数分後。

「わ～ご主人様とは少し違うんだ～！」

「ん～これなんなのだ？」

「な、なにか機能が備わってるのかな？」

「ふむ、ふむ……」

見事にパンダ状態ですヨ。というか鈴々ネクタイを締めるのはやめなさい、苦しいから、機能とかないから。愛紗もそんなまじまじ見ないでください。

「ふぅ……さて、もういいですか？　これはもう金輪際着ませんから」

『えぇ！？』

当然でしょう。何を驚いているんです。

「な、なんで！？」

「なんでもなにも、こんな服着てたら噂の天の御遣いに誤解されるじゃないですか」

「え～別にいいじゃない！」

「ダメ」

「占い通り二人の方が信憑性が――」

「私には向いてません」

だって、面倒くさいじゃないですか。

「別に上に立つことだけが国を支える方法じゃないでしょう。その役目だって二人なら必ず果たせますよ」

目立つの好きじゃありませんし。

「貴方には才能があります！」

食いさがりますね、朱里。でも、

「やっぱり、面倒くさいですし」

やっぱり柱が三本もあると大変ですよ？　私は普通の文官なり武官で――あ、心の声と実際の声が。

「それが本音ですか……！！」

な、愛紗の後ろに禍々しいオーラがっ！？

「もう一度聞きます、貴方は我らの旗印となる、よろしいですね……？」

「え、いや――」

「よ・ろ・し・い・で・す・ね！？」

「――ハイ、ワカリマシタ」

こうして私は便宜的に劉備軍三人目の君主と相成りましたとさ。

反論？　ははは、出来るわけないじゃないですか……愛紗怒らすとか、ダメ、ゼッタイ。

第7章　あわわ軍師現る

「さて、と。こんなもんですかね」

目の前に積まれた書簡は全て処理済みのもの。こっちの世界に来て覚え始めた割には案外早く字が読めるようになって良かったと改めて思います。

劉備軍に参入してから数日、主君となったとはいっても慢性的に人手不足な劉備軍で私の仕事は主に文官と変わらないものとなっています。

特に政務に関しての人手がほとんど足りていない現状。県令が下す最終判断のみの書簡は一刀にまわして、一刀の手の回らない書簡と比較的簡単な案件を桃香に、そして残る小さく専門的な書簡はほとんど朱里と私に回ってくる始末。一応部下にも手伝わせていますが、一刀達同様まだまだ勉強中の身。細かな案件は任せられない。それに加えて自分の隊の調練も暇を見つけて行っている。無論普段は隊を分けて愛紗達に頼んでいますが。

というか、政務担当なしでよくここまで頑張れましたね、この国。奇跡ですよ。

そして、正直過労で死ぬかもしれない。私もだが、特に朱里。

他よりも多少心得があるとはいえ本当に専門的な案件は朱里しか処理できないという現状。一刀や桃香もかなりバテバテだが、それ以上に朱里への負担は甚大でしょう。

「……いやいや、いつからこんなにお節介になったんですか、私は」

自分の仕事を手早く終えて、執務室に。そこには黙々と書簡を処理する朱里の姿があった。
その机の上から未処理の書簡を持ち上げ、隣の机に座る。

「はわわっ!?　じ、刃様!?」

「自分のは終わったし、手伝いますよ。というかその様付けはやめてください」

「で、でも刃様もご主人様の一人ですから!」

……どうしてそう退く気がないんですか。貴女と愛紗は。

「まぁいいでしょう。わからないものは回しますから」

「そ、そんな、悪いです!　刃様もお疲れでしょうし、私に任せて――」

「そう思うなら手元の書簡を処理してください」

「う……は、はい。すみません」

数刻後。

少しでも早く終わらせようとした甲斐あってか今日の分の政務はなんとか片付きました。時刻はちょうど正午過ぎ。
……張り切りすぎて目が痛いです。

「お、終わった……あっ、じ、刃様!　ありがとうございまひっ!

！　――――っつ！！」

あ、舌噛んだ。

まったく、疲れているのに無理するからです。

「今日はゆっくり休みなさい。明日からも朱里を頼る事になるんですし」

ポンポンと小さな、それでいてとても頼りになる頭を軽く撫でる。

「は、はひ！！　わはりまひた！！」

「ぷっ、ははは。じゃ、しっかり休むんですよ？」

私は処理した書簡を持って次の執務室へ向かった。

＊

「……見事に潰れてますね。二人とも」

「「刃（君）～～助けて～～～～」」

県令用の執政室。そこにある二つの机には同じ格好で突っ伏す二人の県令様がいた。

「二人とも安心してください」

「「！！」」

がばっ、と素早く起き上がる二人。大方私が手伝うとでも思っているのでしょうが。

「まだまだ今日は始まったばかりですから♪」

再び崩れ落ちる二人。ま、これぱかりは仕方ありません。

「頭が回らないなら昼食にしましょう、少しゆっくりしてからでも政務はできます」

「そ、そーだよね！　刃君の言う通りだよ！」

「そ、そうだな、これは合間の息抜きってやつだ！」

ええ、そのまま昼寝直行ルートが目に見えるようですが、ね。

＊

「失礼します」

主君様方が昼休憩に入ってからしばらく。全く帰ってくる気配のない執政室で書簡の処理中、

「……あの、刃様。桃香様やご主人様は？」

入ってくるやいなや露骨に溜息をつく愛紗。うむ、多分貴女の想像通りですよ。

「現在休憩中、らしいですが。帰ってきませんね」

「……ふぅ」

おや、珍しい。いつもなら青筋を浮かべながら二人を探し回る愛紗が今日は空いている椅子に座りました。

「わかってはいるんですが、こればかりは仕方ありませんよね」

更にはいろいろすっ飛ばして結論から話し始めましたよ。まぁ予想はつきますが。

「私が――」

「もう少しでも政務をこなせれば、ですか？」

驚いたようにこちらを向く愛紗。

……真面目に過ぎますよ、貴女。

「愛紗はキチンと自分の役割をこなしています。大体貴女がいなければ誰がこの軍を統括できるんですか？　自分に出来ない事があるのを悔やむより、自分が出来る事でみんなを助ける。それが仲間だと、私は思います」

かなり曖昧な記憶の受け売りですがね。

「刃様……」

「だからほら、私が今片付けているのは今日のうちに出来る明日の

自分の政務だけです」

無論、最近ずっと続けてます。そうでもしなきゃ今日だってあんなに早く終わるわけありません。

「……ふふふっ、それは少し違うような気がしますが？」

「その通り。実際は手伝うのが癪なだけです」

茶化して言ったその言葉が面白かったのか愛紗はしばらくクスクスと笑って、

「――ありがとうございました、刃様。私も自分に出来ること、やってみます」

吹っ切れた顔で立ち上がった。

「ああ、そうだ。今度私も警邏に連れて行ってくれませんか？」

「警邏に、ですか？」

「政務は手早く済ませますので、息抜きに。自分の役割を全うするっていうのもいいですが、新しい世界を開拓するのも悪くないですから」

私はあっさりとこれまでの遣り取りを水に流す。

「……ふふっ、本当に不思議な御方だ、刃様は。ええ、検討しましょう」

少しの間ポカーンとしていた愛紗はまた小さく笑って執政室を後にした。

これが私ですからねぇ。慣れないことはするものではありません。

＊

今日出来るだけの政務を終え、夕日に照らされた城門の塀の上で大きく伸びをする。明日は調練もある。また忙しくなりそうですね～そろそろ働きすぎで死にますよ、私。

まぁ今も聞こえる執政室からの呻き声の主たちは今日辺り峠かもしれませんがね。

「ん？」

そんな中、下の城門からなにやら困惑した様子の声が聞こえてきた。

「どうしました？」

とりあえず城門まで行き門番に話しかける。

「あ、刃様！　実はこの子がどうしても刃様達に会わせて欲しいと」

門番が指したのはやけにデカイ三角帽を目深にかぶった小さな少女だった。長い銀髪は左右に結われ、縮こまった体はプルプル震え

ている。
……ふむ。
「わかりました、この子のことは私に任せてください」
「よろしいのですか？」
「心配いりませんよ。お仕事、励んでください」
「はっ、了解いたしました！　あ、あと刃様宛てに街の鍛冶師からこちらが」
そう言って渡されたのは一本の直刀。時間をかけたのでしょう、なかなかの業物です。
「依頼していた剣ですか。ありがとうございます、後日礼に伺うと伝えておいて下さい」
「はっ！」
「では、行きましょうか？」
「……」
＊
さて、そんなわけで中庭のテーブルに連れてきたわけなのですが。

「……」

目茶苦茶緊張してますね……若干涙目ですし。なんでしょうこの罪悪感。

「お名前、聞いてもよろしいですか？」

「ふぇ、あ、あの。わ、わたし、あの、あわわ、えと」

モゴモゴと口ごもる少女の言葉を出来るだけ穏やかな表情で待つ。こういったのは根気が大事ですからね。

「――ほ、鳳統、です」

「鳳統、ですか。私達に一体何の御用だったのでしょう？」

「え、えと、その朱里ちゃんに――」

朱里？

「あーーーー！　雛里ちゃん！？」

そこへ登場したのは件の朱里。鳳統に駆け寄って手をとって喜んでいる。

「来てくれたんだね！！」

「う、うん」

はて、私は蚊帳の外でちんぷんかんぷんですが。

「あ、刃様！　この子、私と同門、水鏡先生の弟子なんです！」

朱里と同門？　ということはつまり、

「もしかして仕官に来た、ということですか？」

コクコクと頷く鳳統。

「ふむ、朱里、彼女の能力は？」

「はい！　私と同じか、それ以上です！」

あの朱里がそこまで言うとは……。あ、もしかして。

「政（まつりごと）って詳しい？」

「す、少しは」

「採用！」

手を取って即登用宣言。え、独断で決めていいのか、って？　今拒む者がこの軍内にいるとでも？

「よ、よろしく、おねがいします」

「がんばろうね、雛里ちゃん♪」

「うん……頑張る」

「じゃあ、早速お目通りといきましょうか」

特にあの二人は泣いて喜ぶでしょうしね。

「む？」

クイッ、と袖を引かれる感覚。見れば鳳統が顔を真っ赤にしてモジモジしている。

「あの、わ、私の真名……ひ、雛里、です」

「いいんですか？」

再びコクコクと頷く鳳統、もとい雛里。

「わかりました。よろしくおねがいしますね、雛里」

我知らず待望の新戦力に興奮していたのでしょう、思わずくしゃくしゃと頭を撫でる。

「ふぇっ！？」

帽子の裾を掴んで縮こまる雛里は耳まで真っ赤……少し自重するべきでしょうか。

こうして二人目の軍師が加入、徐々に大きくなりつつある劉備軍。

その中で、

「うむ、やっぱり女の子多すぎじゃないですかね？」

と初心に立ち返った夕暮れでした。

後日。

「うわ～ん、終わんないよ～！」

「刃、これってホントに前より少なくなってるのか！？」

雛里の加入に大喜びしたのも束の間、二人の前には書簡の山。

「何言ってるんですか。雛里は執務能力が朱里と同じかそれ以上なんですから、普通に考えて人手の足りない朱里の仕事を手伝うに決まっています」

「「騙された～～！！」」

なんて人聞きの悪い。

「でも安心してください」

「「え、また？」」

前回のことが頭を過ぎりつつ、それでも期待を込めてこちらを見る県令様方。

「前より一割ほどは少なくなっていますよ♪」

精根尽き果てたのか机に突っ伏す二人。

「さて、と。それじゃあ私は愛紗と警邏に行ってきますので、ちゃんと終わらせてくださいよ？」

「一人だけずるーい！」

「刃の悪魔ー！」

仕事を全うした者の特権です。大体一割減でもかなり便宜を図ったんですよ？

「ああ、政務が終わるまで夕食は出さないよう言ってありますので、餓死したくなければ死に物狂いで頑張ってください♪」

言って執政室を後にする。

「「刃（君）の鬼～～～～！！」」

……通り名的に否定できないことをハモらないでください、二人とも。

第8章　変装と誤爆、その先の再会

さて、ただいま遠征中の上代刃です。
目的は国境沿いに現れた黄巾党の征伐。発見こそ早かったものの、これまでの敗残兵達が寄り集まったことで今までと違いかなりの数なため正直時間も兵力も足りません。つまり本当なら大ピンチと言っていい状況なのですが。

「白蓮ちゃんがいてくれてホントに助かったよ～」

安心したように言うのは桃香。そして、件の人物こそ今、目の前にいる公孫賛殿です。公孫賛といえば幽州の有名な智将。

有能な人物で兵力も我らと比べるべくもない、のですが……なぜでしょう、以前会った華雄さんに近い脇役臭は。それにどことなくお人好しのきらいがありますね。後々誰かの踏み台にされないか心配でなりません。

「なに、ちょうど賊の討伐帰りで近くを通りかかっていたところだからな。それにしても驚いたよ。桃香が県令になっていて、その上噂の天の御遣い達と一緒だなんて」

「あはは、私もびっくりだよ～」

いえ、自分が驚いている場合じゃないでしょう。

「私は公孫賛。桃香から聞いていると思うが、コイツとは旧友でね。お前達は？」

「俺は北郷一刀、天の御遣いを名乗らせてもらってるよ」

「私は神城珠希（しんじょうたまき）、同じく自称、天の御遣いです」

声帯をいじって少し高めの声で挨拶する。

どこで覚えたんですか、前の私……。

「北郷と神城だな。よろしく」

当然偽名です。

しかし、それになぜ誰もツッコまないかというと、劉備軍に正式に加わった際に有事はこの偽名で通すよう一刀達に言っておいたからです。

さらにはカツラやカラコン、化粧品で完璧な変装っぷり。この時は神城瞳である、と劉備軍内では暗黙の了解となっています。さらには刀も先日届いた新たな物へと変えていますし。以前のものより造りこみが甘いところは腕でカバーです。

わざわざこんなことをしている理由は、当然私が“蒼狗”で“上代刃”だということを隠すためです。

もし曹操さんとかの耳に入り、そこからいろいろとばれるのはマズイなんてものじゃありませんしね。

そのために偽りたくもない性別まで偽って……いえ、それは他者の介入によるところが大きいですが。

・回想

「しかし、なぜ身を偽るようなことを……」

「まぁ、そう言うなよ、愛紗。変装も必要時以外ではしないらしいし。なによりそれを蹴ったら天の御遣いを降りる、って刃は言ってるんだから」

「でもなんでだろうね～？」

広い会議室で円卓に座るのは桃香、一刀、愛紗、鈴々、朱里、雛里。今日は刃の変装お披露目ということでこうして集められている。理由を知らない一同は揃って首を捻っているが。

「――お待たせしました」

『……え？』

ガタン、と扉を開く音。そこに現れたのは変装前とは似ても似つかぬ刃の姿だった。

セミロングの黒髪、長い睫毛からのぞく琥珀色の瞳。肌も白く、心なしか目も大きくなった気がする。正直、服装と声がなければ全くの別人である。というか、

「わ～！　すごい綺麗～～！！」

「これほどとは……」

「お兄ちゃんがお姉ちゃんになったのだ！」

「刃、様……？」

「はわわ……」

「……」

もとが中性的な顔立ちだからか長身の女性にしか見えない。
女装した男にやいのやいのと騒ぐ女たち、一人ただ呆然と見惚れる男。なんとも面妖な光景である。

「……って、ちょっと待った！　私は変装したのであって女装したわけではありません！」

「でも女性にしか見えませんよ？」

「ぐっ……！」

朱里の冷静なツッコミに落ち込む刃。

「どうせ変装するなら服装も女の子にしてみようよ～」

「あ、いい案です。ね、雛里ちゃん？」

「う、うん」

「面白そうなのだ～！」

そしてこの流れ。最早鉄板、テンプレと言っていい。そして、こういう場で多数決に勝てないのは以前体験済みの刃。

「愛紗！　一刀！」

頼みの綱である二人を見る。

「えっと、その……いいんじゃないでしょうか」

「……ゴメン」

が、若干顔を赤らめつつあっさり反旗を翻した二人により女装確定。

「……変態」

ボソッと一刀に向けて放った呪詛は桃香達に引き摺られて届くことはなかった。

・終

今の服装は黒いシャツ、赤いネクタイに黒のミニスカート、白いジャケットに腰周りから白いロングコートの下半身部分が延びている。ちなみに黒のニーハイソックス。どこぞの白い魔王と赤い贋作者、それに少し閃光の死神を足して均等に割ったような姿です。

加えて実は劉備軍女性陣のアイデアと街の娘たちによる力作らしいです。

……その時彼女達の私を見る目がやけに煌めいていたのですが。

いや、お姉様ってなんですか？

「ふむ、にしても美人だな、神城。やっぱり天の御遣いだからか？」

「関係ありません、というか美人じゃありません」

即答。
ちなみに一刀と桃香、今笑いそうになった件は帰ってからたっぷりと、ね？

「そ、そうか。ともかく、奴らについてだが――」

私の気迫に言及を避けた公孫賛殿が黄巾党の状況について話そうとしましたが、

「公孫賛様、大変です！　趙雲殿が単騎で敵軍へ突貫してしまいました！」

「って、アイツ本当に突撃したのか！？」

はて、今あまり思い出したくない名が出ましたね。

「ああもう、好きにさせておけ！　もう奴の独断先行にはついていけない！」

「な、見捨てるのか！？」

叫んだのは一刀。
どうしたんでしょう、私と同じく知り合いと同じ名でも聞いたかのようですが。

「む、そうは言うがな北郷。奴を連れ戻すのにかかる被害も計り知れないぞ。大体現状の戦力では戦って勝てるかもわからないんだ。現状の戦力で奴らを討つことを考える方が建設的だろ？」

「ま、当然ですね」

「刃まで！？」

普通はそうしますよ。正しく聡い判断です。というか今は珠希なんですが。

「が、まぁ彼女の武も捨てるに惜しいのは事実。我らと公孫賛殿が少しばかり無茶をすれば救出と撃破、同時に出来なくもないですね」

「なっ！？　正気かよ、神城！？」

いえ、狂気の沙汰です。でも仕方ないでしょう。一刀とか一人でも飛び出しそうですし。

「私でも思いつくんです。朱里達ならもっと良い策を考えてくれるでしょう。ですよね、二人とも？」

「あ、はい。一応、策はあります。珠希様より優れているかはわかりませんが」

さすがは我らの名軍師様。

頼りになるお利口な頭を軽く撫でる。

「えへへ……ナデナデされちゃいました♪」

「……」

そして、微妙に突き刺さる視線。

三角帽子からのぞく目には私だって、という思いが容易に見て取れる。

「勿論、雛里も頼りにしてますから、そう拗ねないでください」

「べ、別に拗ねてない、です」

朱里と同じようにポンポン、と頭を撫でると、口では反論しつつも嬉しそうに顔を綻ばせる雛里。

ううむ、和みますね～。ま、和んでいられる状況でもないんですが。

「ともかく、それでいいですか、桃香？」

「……うん！　私もそれがいいと思う！」

これで我らの総意となりましたね。まぁまぁ不本意ですが。

「聞くだけ聞いてもらえませんか、公孫賛殿？」

「……まったく、とりあえず聞くだけだぞ？」

え、ホントにいいんですか。自分で言っておいてなんですが、どんだけお人好しですか貴女。

ともあれ、突撃部隊の編成を愛紗に任せ、一刀と鈴々はすぐに軍を組織して布陣準備。残った私と桃香は公孫賛殿と共に朱里と雛里の策について打ち合わせと相成った。

＊

「お～、さすが。大した槍捌きですねぇ」

整然と出陣準備を終えた関羽隊プラス神城隊を背に前方の戦場を見やる。

相も変らぬ武勇は大したもの、ですがあのままではその内ミスって死にかねません。やっぱ無謀ですし。

つか、馬鹿でしょう。一騎当千どころか二万は越える数ですよ、アレ。

「見えるのですか？　珠希様」

隣の愛紗は目を細めていますが見えないみたいですね。

「目だけは昔から良いような気がするんですよ」

尋常じゃなく、ですけど。

「さて、作戦通りに進めるためにも貴女の力、頼りにしてますよ？」

「無論です、お任せ下さい。……ですが、やはり刃様は桃香様達と」

「心配性ですね～愛紗は。名前も戻ってますよ？」

「し、失礼しました！　ですが、貴方のことは心配して当然です！」

まぁ普通は大将の一人が最前線には行きませんからね。

「今回のことは私の無茶のようなものですし。それに……いざという時は貴女が守ってくれるでしょう？」

「……その言い方は卑怯です」

「ですね～、すみません」

「それこそ無論です。我が身に代えてもお護りいたします」

良い忠臣を持って私は幸せです。少々妄信的な気もしますが。

さて、後ろで待つ一刀達のためにも少しばかり頑張るとしますか。

「では、行きましょうか」

「はっ！　関羽隊、神城隊！　数に頼った賊など義の勇士たる我らの敵ではない！　恐れず、己が誇りを見せつけよ！　総員、我らに続けーーーー！！」

『おおおおおおぉぉおーー！！！』

＊

Ｓｉｄｅ趙雲

「くっ！　次から次に面倒な奴らだっ！」

迫る剣をいなし、そのまま胸元を刺し貫く。そして、すぐに抜いた槍を横薙ぎに一閃。数人の賊を吹き飛ばすと、更に剣が振り下ろされる前にその首を貫いた。

次々に倒れる賊共。だが、私の勢いは明らかに落ち、劣勢であることは否めなかった。

「ふっ、なんと無様なことだ」

賊など物の数ではないと突貫し、結果がこの様だ。

並ぶ死体に足をとられぬようにしつつ壁のように迫る賊を薙ぎ倒す。

しつこく寄ってくる賊を前に私は前進などもっての他、後退と退避を余儀なくされている。

このままでは……。

心を翳らす暗雲。諦める気はないが、その可能性を無いとはいえない。

「――っ！？　しまった！」

その翳りからか転がる死体に足をとられてしまう。膝から崩れ落ちた体勢に襲い掛かる賊共の凶刃。

「く、ここまで、か……」

私が諦めかけたその時、

「残念でしたね。貴女はまだ、死ねません」

凛とした力強い声が耳を震わせた。
途端に周りを囲む賊が倒れていく。
そして、跪く私を見下ろしていたのは黒い髪を風に靡かせた白き女性。

私は呆然としながら伸ばされた手をとろうとして、

「なっ！？」

パコン、と頭を叩かれた。

「早く立ちなさい、大馬鹿。誰の為にここまで来てあげたと思っているんです？」

「……む、むう。かたじけない」

釈然としないが確かに呆けている場合ではない。
見れば彼女の率いる兵たちの姿も見える。助けに来たというのは本当らしい。

「で、その馬鹿はまだ単騎突撃を是とする気はありますか？」

「……むう」

自身の無策は認めるが、どうもコレに答えたら負けのような気がする。

「よろしい、否を自覚できるなら改善の余地はあります。そして、

理解しているなら重畳。作戦を伝えるので従ってください」

「……従いましょう」

背中合わせで群がる賊を討ちながら策についての概要を話す白き女性。

聞けば、あの伯珪殿が助力してくれるらしく、このまま戦い、銅鑼と共に退却。賊に矢の雨を浴びせた後、挟撃する形で伯珪殿の部隊が登場するのだとか。

「珠希様！　ご無事ですか！？」

と、そこへ現れたのは長い黒髪と青龍堰月刀を構えた、おそらく名高き関羽将軍と思しき人物。

「ええ、なんとか。貴女も無事でなによりです」

「……お願いですから突出しないでください。生きた心地がしません」

彼女が主と仰ぐということは彼女は劉備か天の御遣いか。

ともあれ最前線に来るような人ではない。

「ほう、面白い御人ですな。大将自ら、とは」

「一応、貴女のせいなんですがね……」

「おっと、これは失礼した。薮蛇でしたか」

互いに背中合わせとなった三人で群がる賊共を薙ぎ倒していく。

噂どおりの強さを誇る関羽将軍ももちろんだが、主たる彼女の武も凄まじい。おそらく私と互角以上だろう。
そしてあの武器に身のこなし、ある人物と重なって見える。

「本当に面白い方だ。おっと、合図ですか」

響き渡る銅鑼の音に賊共を押し戻した彼の兵たちが一時退却を開始する。

「では、私たちも一旦退きましょうか」

「御意」

我らも遅れぬよう退却を開始。すでに向こうでは一斉掃射の用意をしているのが見える。

そんな中、私はどこか心が躍るのを感じていた。

＊

後ろから軍勢を率いて現れた公孫賛殿や、調練を共にする機会が多いからか息の合った関羽・神城部隊の活躍もあり、賊の掃討はなんとか完了、現在は帰還中。

「二人ともお疲れ様～」

「無事で良かったよ」

「む～」

戻った私たちを迎えたのは二人の主とむくれる小さな将軍様。

「そう拗ねないでくださいよ、鈴々。次の機会には貴女を先鋒にしますから、ね？」

「あ、ああ。絶対だ、絶対」

「……わかったのだ」

私と一刀の言葉にしぶしぶ頷く鈴々。そして編成を決めた朱里達は苦笑い。

と、そこで二人の前に進み出て趙雲が一礼する。

「貴方がたが私の救出を要請していただいたとか。私は姓を趙、名は雲、字を子龍と申します。助太刀、感謝いたします」

「うん、無事で良かった。私は劉備だよ」

「俺は北郷だ」

「ほう、貴方が天の御遣い殿でしたか。と、いうことは貴女は」

妖しげな笑みを浮かべてこちらを見る趙雲。

「ええ、私は神城珠希。同じく天の御遣いを名乗っている者です」

なるほど、と更に笑みを深くした趙雲と共に全員で砦へと歩き始

める。

「しかし、なぜ私を助けようと？　そちらに利があるとは思えないのですが」

「ん～、私よりご主人様とじ……珠希ちゃんが率先して助けようとしてたよね？」

桃香、ここでばらしたら……明日の政務、どうなるかお分かりですね？

「……！！」

必死にコクコクと頷く桃香に思わず溜息がもれる。

「私は一刀の気持ちを代弁しただけですよ。私一人なら見捨てていたやも知れませんしね」

実際一人だったなら私が動いた確率は五分といったところです。

「ほう、そうなのですか？　北郷殿」

「へ？　い、いや、でも刃も――」

「一刀？」

思わず遮る。貴方もいいかげん慣れてください。ここまで物覚え悪いの貴方だけですよ？

「刃……？」

げ、聞こえてましたか。地獄耳ですねぇ。
まぁ、さすがに女装中の私には――

「ふむ……失礼」

「――マジですか、貴女」

いきなり私の胸を揉む趙雲。いえ、無論ただの詰め物ですが。

『なっ!?』

「貴様っ！　いきなり何を――!?」

殺気立つ愛紗。でも確信を得たらしい趙雲はその顔を愉しそうに歪める。

「お久しぶりですな。刃殿」

「……どうも」

声を元に戻して答える。
あの一言からって、ホント貴女何者ですか……。

「は、え？　ど、どういうことですか？　刃様」

怒りが抜け困惑に彩られる愛紗。他のみんなも同様。

「以前会ったことがあるんですよ。彼女とは」

『は？　――えええええええぇぇぇぇ！？』

だから隠したかったんですが……。この人には。

「いや、しかし随分と面妖、いえ、愉快な格好ですな。まさか女性となっているとは」

「ええ、身を偽らざるを得ないのっぴきならない事情がありまして。この場においてはぶち壊されましたが」

「ふむ、深くは聞きますまい。今はただ再会を喜びましょう」

……他をあたってください。今私は運命を呪いたい気持ちでいっぱいなので。

「――ふ、今度こそ逃がしませぬぞ？」

こうして、星は二つ返事で劉備軍に加わることとなりましたとさ。

ちなみに後日。

一刀の政務が今までのツケも合わせてドドンと三倍になり、真っ白になった一刀の叫び声が城内に木霊しましたとさ。

めでたし、めでたし。

「めでたくない！！」

口は災いのもと。皆さんも気をつけましょうね♪

第9章　厨二と電波は紙一重？

え～、今日はお日柄も良く、絶好の現実否定日和です。

あ、申し遅れました、上代刃です。

突然ですが、皆さんは信仰や神霊の類を是とする人でしょうか？
それとも、非現実的だと断じて否とする人ですか？

「ねぇ」

私は是としつつ、否とする人間です。

そういった存在は私たちの心の中に確かに在ります。そして、それは人の無知を包容し、時に人を支える。概念として必要ではあるが、存在自体は保留という名の結論で曖昧にするようなモノ。
そもそも確定してしまっては、それはもう神霊とは呼べないでしょう。人の数だけ神は在る。八百万の神とはよく言ったものです。

「ねぇってば！」

だから、私にも神は在るのでしょう。而してその形は曖昧模糊。

「いい加減コッチ向きなさいよ！」

そう、だからコレも私の頭のネジが外れて顕現させてしまった夢想に過ぎないのです。

「むむ、あくまで無視する気ね……なら」

自分の深層心理に在った神聖な存在がこんなカタチなのは半端なくショックですが。

目を覚ませ、私。現実から逃げても碌なことになりませんよ？

「すーちゃーん、キーーック！！」

「ぐふっ！？」

だから、この痛みも、目の前に浮遊するミクロな少女も、私の創りだした空想でしかない、そして私に空想具現化なんてバグキャラなスキルはない、だから私はこの現実という夢を否定するっ！！

……ん～、無理がありますかね、やっぱり。

＊

話は一刻ほど前、朝のうちに自分の仕事を一段落させ、昼過ぎに荷物整理をし始めた時にまで遡る。

コッチの世界で手に入れた物はともかく、初めから持っていた物を改めて整理することにしましたが、大した物はないですね。

携帯電話はとっくに電池切れ。

音楽プレーヤーはなぜかソーラー電池付きなので、まだ使えそうだが、実際あってもあまり意味はない。

変装セットは現在絶賛活用中。

「で、残るのは…」

特殊な形状の拳銃に怪しげなメモ帳。

拳銃も大概危ないですが、それ以上に危険そうなのはメモ帳。

……黒歴史を掘り起こしそうで怖いです。具体的には自分の考えた最強能力とか、自己解釈から創りだしたチート魔術だとか。

でも、このままじゃモヤモヤして気持ち悪いのも確か。

というわけで仕方なく、純日本的な教室で学級委員に立候補する程度の覚悟は決めて、そのアブナイメモ帳を開いたのですが。

「――え？」

中に書かれた内容を一目見た瞬間に感じる違和感。

感覚的にはパズルでの最後の一ピースや、何かの拍子で噛み合った歯車みたいな感じ。

そして、清々しいほどに理解できたのは自分が以前、使用していた所謂神秘と呼べる代物。

それは、神霊やら妖魔やらのファンタジックにしてクラシックな存在と対話して、力を借りるというとってもメルヘンチックな胡散臭い術だったり。

「……忘れましょう。どちらにしろ、そう簡単に会える存在じゃありませんし」

そう呟いて、中庭へ向かい、お茶を啜りながら一服。

庭の一角に設けられた庭木をボーっと眺めて、

ふと、青桐の枝に座る掌サイズの少女と目があった。

目を擦る、消えない。

頬を抓る、目は覚めない。

もう一度、お茶を啜る、意図的に自己の記憶を消去。

「平和ですね～」

「ねぇ、アンタ」

「……え～」

なにこのエンカウント率。

冒頭に戻る。

＊

「ったく、私を無視するとはいい度胸してるじゃない」

「どちら様でしょうか？　個人的には無意識に脳内変換された小鳥あたりがまだ損傷が軽微でありがたいのですが」

「でも、それじゃアンタの頭が修復不可レベルってことになるけど？」

確かに悲しい事実ですが、どちらに転ぼうと頭のネジは外れてるようですし、後々の厄介さ加減で言えばまだマシです。

「ふふん、じゃあ名乗ってあげようじゃない。きっとアンタ吃驚して腰抜かすわよ？」

そんなにまな板を反らさないでください、逆に居たたまれないので。

「聞いて驚け！　私こそ四霊の一角、鳳凰様よ！」

「……まぁ、でしょうね」

予想通りの結果にうな垂れざるを得ない。
伝説の霊鳥とか、徳が高すぎて私の管轄外ですよ。

「驚きなさいよ!?　鳳凰だよ!?　ゲームとか漫画で大人気のアレよ!?」

と思ったけど、存外、世俗にまみれた霊鳥様のようです。

「知ってますよ。中国において、羽を持つ生物の王とされる神様でしょう？」

「おお～、私が見えるだけじゃなくて神話にも詳しいんだ？」

アレな能力の特性上、仕方なくですがね。

青桐にしか止まらないという伝承から、そうじゃないかなぁ、とは思ってました。

「う～ん、疑うわけじゃありませんが、本当に鳳凰さんなんですか？」

実際の鳳凰っていえば諸説あるといえど、嘴は鶏だったり、頸が蛇だったり、尾とかは魚、身丈も人と同等以上っていう、奇想天外過ぎる容姿のはずですが。

目の前の鳳凰さんは、赤い髪に黄色の髪留め、白を基調とした中に青の取り入れられたシャツ、そして黒いショートパンツといった格好の小さな女の子。

一応、五色で構成された見た目や、背面に浮かぶ五枚の羽根が鳳凰の要素を残していると言えなくもないですが……。

「なによ～その目は。仕方ないじゃない、化け物みたいな恰好じゃ特殊な嗜好を持った人しか萌えな――もとい、信仰しないんだから」

さらには、この言い分や性格。萌え＝信仰って……。

想像上ではもっと荘厳で尊大な神様だと思っていたのですが。

「それで、その萌え萌えな鳳凰さんは何故こんな場所に？」

崑崙山にでも帰って霊泉飲みまくってればいいじゃないですか。

「だってさ～仙人達って目茶苦茶つまんないのよ？　ゲームとか付

き合ってくれないし」

仙人にゲーム勧めないでくださいよ。

「と、いうわけで人間達が七転八倒してる様(さま)を見物しに来たってわけ」

「性質悪すぎです。心変わりでもして、さっさと帰ってください」

「うん、そのつもりだったんだけどね。事情が変わったのよ」

「前言撤回。初志貫徹って素晴らしいと思います」

「実は人間も人間でつまんなくてさ～。みんな私が見えないから会話も出来なくて、見るだけも飽きたところだったんだけど」

これはアレですか。私のせい、とでも言いたいんでしょうか？

「じゃ、これからはアンタに憑いてくことにするから♪」

「拒否権は？」

「え、なにソレ、食えんの？」

ですよね～。

まさか、霊は霊でも神霊に憑かれるとは思いませんでしたよ。

「改めて、私は鳳凰。特別にすーちゃん、と呼ぶことを許す」

「なぜにすーちゃん？」

「鳳凰、とか鳳ちゃん、じゃ締まらないでしょ？　だから、朱雀からとって、すーちゃん」

ほう、てっきり同一視を嫌がると思っていたんですが。

「ただし、不死鳥（フェニックス）は不可ね。自ら焼身自殺して生殖するようなのと一緒にされたらたまんないし」

……神様にもいろいろあるようです。

結局、私と同行する代わりに多少の力添えをしてくれる、といった形に話が纏まりました。

ちなみに彼女は鳳凰と朱雀の伝承に籠った想いがこの世界において具現化した姿で、どちらの性質も持ったハイブリット体だそうです。

だからなんだ、という話ですが。

話を無視して現実否定をしようとすると、彼女自慢の蹴りがとんでくるし、加えて「アンタの頭って中々蹴り心地が……」的な発言。

神様、私が何をしたんですか？

……まぁ、他でもない神様が悩みの種なわけですが。

第１０章　希望の塔、未だ粗悪品につき

「今日は一人で街に行ってくるから！」

鳳凰さん、もとい、すーちゃんに憑かれてから数日。
その数日は話し相手がいて嬉しいのか、溢れんばかりの元気で私を引き摺り回していたのですが。

「珍しいですね、人間観察ブームでも到来しましたか？」

具体的には“はじめてのおつかい”でも見たとか。
アレ好きなんですよね、泣けます。

「まぁそんなとこ、じゃ行ってくる！」

部屋の窓をすり抜けて街へ飛んでいくすーちゃん。

どこぞの英霊達みたいに実体化と霊体化を使い分けられるというハイスペックな彼女にはセキュリティという概念は存在しないようです。
しかも、ポルターガイストを起こすのが趣味という性質の悪さ……。

「さて、仕事しますか」

ここ数日はいつもより時間がなかったので仕事もたんまり残っていますからね……はぁ。

＊

Ｓｉｄｅ鳳凰

「む、どこからかいい匂いが……！」

街に出た私がまず見つけたのは以前刃に連れてきてもらった屋台。
できたての焼売が店先に並んで良い匂いを運んでくる。

「そ～っと、そ～っと……」

見つからないようにソレを二つほど抱えると、代わりに代金を置いて屋根へ飛ぶ。

「モグモグ……ん～、やっぱ美味しい～」

さっきの代金は刃に渡されてちゃんと支払うよう言いつけられた。
別にいいんじゃないか、とも思うけど、義理が云々と長々説教されるのも面倒だし。

「ふぅ～、ご馳走様」

少し遅めの昼食を食べ終えて、屋根の上からボーっと街を眺める。

刃と歩いていろいろ話すのもいいけど、こうして無為に時間を過ごすのも悪くない。
それに、

「う～、届かない～」

妙な人間にも事欠かないしね、この街は。

眼下には枝に引っ掛かった服を取ろうとして、大きな木に登る少女。

彼女は……確かここの県令の一人だったはず。刃に聞いた性格では良くも悪くも濁りがなさ過ぎるということだったけど。

どうやら鳥に持ち去られた町人の服らしく、下には不安げな子供が右往左往している。

そして、県令の少女には見えていないだろうが、服は鳥の巣の一部を形作っていたりもする。

「やった！　取れ、っ――！？」

その服を引き抜けば巣が崩れるのは自明の理。受け皿を失った卵と雛は引力のなすがままに落下していく。

「あ――」

それに手を伸ばし、一緒に落ちる少女。

あの高さに体勢、漫画なら地面から足が生えて、犬神家的な喜劇で終わるけど。

「どっちにしろ、笑えないか～」

意識を集中、少女と雛たちを受け止めるように、地面へ向けて突風を起こす。

「え？」

跳ね返る風は徐々に弱くなり、少女たちをゆっくり地へおろした。

「よし、十点満点」

うん、卵すら割れてない。

正直、どうでもいいことではあるけど。

局所的な突風に周りの町人はしばらく呆然としていたけど、すぐに少女へ駆け寄り、その少女はというと、服を子供に渡した後、雛や卵を優しく手に取って、考え事をし始めた。

「なるほどね……私はあんまり好きじゃないかな～」

なんとなく刃の言ったことを理解して、かつ、やっぱりどうでもいいか。と意識を切り替えると、再び賑わう街へと繰り出した。

＊

「おや、主ではありませぬか」

「……貴女も昼間くらい自重しなさい」

仕事を終えて、中庭で休もうと移動した先には酒とメンマをテーブルに広げた星の姿。そしてその近くには木製の剣や槍。鍛錬後に誰かが置き忘れたものでしょうか、その内の一本を手慰み程度にいじる彼女の頬には薄く朱が差していた。

嫌な予感しかしないが、自分の手に持ったお茶と点心を見て、中庭でゆったり飲茶という予定を変えるのも些か以上に悔やまれるので、仕方なく空いたスペースに腰を下ろす。

「今日は非番なのです。そういう主は仕事終わりのようですが？」

それが顔の疲れを見ての言葉なら見当違いです。今、瞬間的にドッと疲れたので。

「む、そう遠くに座らなくともよいではないですか。今ならこの美女がお酌いたしますよ？」

「いえ、経験上そのお酌は私の平穏を崩しますので」

「ふふっ、相も変らぬつれなさです」

星は酒を一口、こちらを見る目にはいつも通りの愉快そうな表情。私もお茶を啜ると、一息つき、続けて包子に手を伸ばした。

「……ああ、平穏といえば、この軍の最終目標は民たちが平穏に暮らせる世、とのことでしたな？」

「誰がそんなことを？」

「愛紗と一刀様が、それに桃香様もいつも言っておられるでしょう？」

「確かに……そうですね」

この軍の理想、それは彼女にとってはどうなのか。
もしかしたら――

「いえ、それを聞いたから軍を抜けるだとかは考えておりませんよ？」

「心を読まないでくださいよ」

「そうは言われましても顔に出ているのですよ。――そう、そんな理想で天は衝けない、とも」

「……」

顔に出やすいと言われたことはあまりないのですが。

「まぁ、人それぞれに理想も思惑もある。今は聞かずにおきましょう」

「貴女なら読み取れるんじゃないですか？　今、私の考えていることも」

「そうですな……ふむ、主もなかなか大胆な方だ」

ああ、世のポーカーフェイスの方々が羨ましい。
もし私がそうなら目の前で世迷言をのたまう戯け者を黙らせられるだろうに。

「今夜閨に来い、とは――」

「どうやら、その慧眼には時たま阿呆な色が混じるようですね？」

「ふふっ、仕方ありますまい。人の考えなどそうそう読めるものではないですよ」

「……ま、違いありませんね」

一通り適当な話題を滔々と話し、星の酒が切れたところで彼女は立ち上がる。

「では、私はこれで」

「ええ」

「また今夜に――」

「また明日、会議室で」

にべもない私の言葉に薄く微笑むと、星は歩き去っていった。

＊

「私もそろそろ戻りますかね……」

じっくりと時間をかけた飲茶は思ったよりも心身共に癒しとなったようです。

今度はすーちゃんでも誘ってみますかね。

「あ、刃も休憩？」

と、そこへ現れたのは私同様、仕事の休憩に来たらしい一刀。

……たまには大きなお世話でも焼いてみますか。

「――色男さん。一手遊んでいきませんか？」

言って、テーブルの傍から拝借した木刀でもう一本の木刀をすくい、一刀へ放る。

「え？　わっ、っとと。ど、どうしたんだ？　いきなり」

なんとかキャッチした一刀は不思議そうに首をかしげる。

それには答えず、私は中庭の中心、開けた場所へ移動して構えをとった。

「どれくらいできるか、見せてください」

「……わかった」

意図が伝わったかはわかりませんが、一刀も顔を引き締め、私と対峙する。その目には困惑こそあるが、真剣そのもの。

空気が張り詰め、この空間が切り取られたような錯覚。

「……いきます」

「――くっ！？」

一瞬で距離を詰めて、振り下ろした一撃。それをかろうじて受けた一刀はそれでも受けきれず、後退する。

「一刀、貴方は桃香の理想を、どう思っていますか？」

「っ、なん、で！　今、そんなこと！？」

続けて繰り出す攻撃を不恰好ながらも全て防いでいく一刀。

「どうなんです？」

「くっ！　俺は、桃香の夢に、自分の夢を見たんだ！　だから、俺もそれを目指して――」

「――それでは駄目です」

「ぐっ！？」

防御しきれなかった一撃が胴を強かに打ち付け、苦悶の声を上げる一刀。

だが、それでも倒れることはなく、よろけながらも構えをとり、こちらを見据えている。

「駄目、って。一体何を……？」

「私に一撃を入れることができれば、お教えしましょう」

私の目から問答を無意味と悟った一刀はふらつく体に喝を入れると、静かな気合いと共に私の前に迫り、木刀を一閃する。

「――いい太刀筋です」

思わず呟いた言葉に嘘はなく、真っ直ぐで、確かな研鑽の見える一太刀。

「くっ、はぁぁぁあああっ！！」

受け流され、弾かれても構わず猛進する一刀の目には余分な感情などない、文字通りの一心不乱。

数十合に及ぶ剣劇。
その中でも問答は止まない。

「民が平和に暮らせる世をつくる、そのために世を乱す輩と戦っていく、ですか？」

「そうだ！　俺やみんなはそんな世をつくるために戦ってる！」

「では、聞きますが――貴方達は今、一体、何と戦っているんです？」

「何、と……？」

「一刀、貴方は桃香達と駆け抜けた今までの自分に間違いがないと、言い切れますか？」

「そ、そんなの当然……」

「――貴方は、桃香の理想を最後まで信じ続けられるんですか？」

私の言葉に驚愕の表情が浮かぶ、それはさっきまで一つに定まっていた心に疑惑の影が差した何よりの証だった。

「それ、は――ぐぁっ！？」

乱れた心は体に反映される。

あっさりと叩き伏せられた一刀の眉間に切っ先を突き付け、見下ろす。

「今の貴方の夢では、天下どころか私にすら打ち勝てない。それは、桃香も同じです」

「……」

「貴方はもっと、知るべきです。自分だけじゃない、その他の天下に住まう人々、その数多の世界を」

「数多の世界……？」

「人の夢は、どんな形であれ、他者の夢を食い殺す。夢は希望であり、絶望の魔獣です」

「……」

木刀を引き、テーブルの脇に置いて、片付けた食器を持つと、身を翻す。

「桃香は、あのままではいずれ何処かで躓きます。それは、支えの理想を砕き、彼女を追い詰めるでしょう」

「そんな――むぐっ！？」

最後に一つ残っていた包子を座りこんでいる一刀の口に突っ込む。

「――だから、貴方が支えるんです」

「え……？」

呆ける一刀を置いて、城内へ向かって歩き出す。

「まずは、自分達の夢とこれまでの道程を考え直すことからです。頑張ってください。これでも期待してますからね、天の御遣い殿？」

後ろ手に振った手に返答はなく、らしくないことをしたなぁ、なんて頭をかきながら中庭をあとにした。

＊

「あ、おかえり～」

自室へ戻った私を迎えたのはいつの間にやら帰ってきていたすーちゃん。

「ただいま、って普通逆ですよね？」

ぼやきつつ机の上に置くのは自分のものとは別個に用意してもらった彼女用の夕食。
霊泉とか竹の実しか受けつけないと思っていたのですが、普通の料理も大好きだったのには驚きました。
まぁ、霊泉を用意しろ、なんて言われてたらとっくに外に放り出していますが。

「あ、そういえばさ～、今日ここの県令の娘を見かけたよ」

「……今日執務室にいなかったのは街に行っていたからですか」

小籠包を食べながら話す彼女をボーっと見ながら、後日桃香に与える罰を思案し始める。

「アンタの言うとおりだね。綺麗すぎるよ、アレは。あのままじゃいつか現実っていう濁りに汚されて壊れるんじゃない？」

「……さて、どうですかね？」

昼間のお節介を思い出し、苦笑がもれる。
そんな様子に首をかしげつつも食べることはやめないすーちゃん。

「彼女は一人じゃありませんから。清濁併せ呑んで、ボロボロに磨り減って尚、それでも理想を追い求められるなら、或いは――」

「なにソレ、どっか切れてんじゃないの？　人として大切なところが」

「まぁ、ほどほどに夢を見て、必要十分量の現実を見据えれば重畳ですがね」

世界を知りすぎるのも体に毒だ。

そんな中でも夢を見てる奴はもう人間じゃない。ヒトとして壊れすぎている。

「ま、私にはどうでもいいことなんだけどね～。よし、象棋やろ、象棋！」

「またですか……この前みたいに早朝までは勘弁してくださいよ？」

意外に気に入ったのは良かったのですが、弱い上に負けず嫌いなのだから手におえない。

その後、結局朝まで付き合わされた私は、罰と称して自分の仕事を桃香に押し付け、久々に城門の上で昼寝をするに至った。

ちなみに深夜、夜這いをかけてきた阿呆を叩き出したのはまた別の話。

第１０章　希望の塔、未だ粗悪品につき（後書き）

誤字、気になる点などあれば、是非とも忌憚ないご意見をお願いします。

作者は基本的に厳しいものも、むしろ自分の糧となる。という考えの持ち主ですので誤字などには『え、なんでこんなに馬鹿なの？』と罵倒するくらいの指摘もドンと来い！　です。

そんなわけで、もしあれば気軽にどうぞ。

第１０章　おまけ　現状把握、恐怖の妹達（前書き）

おまけです。

なので、いつも以上に思いつきに走った駄文です。

読まなくてもそこまで問題ない内容なので、『思いつきの駄文とか断じて否！』という方は無視することをオススメします。

『仕方ねーな、暇つぶしに俺が読んでやんよ！』という方のみお進みください。

第１０章　おまけ　現状把握、恐怖の妹達

「むぅ……」

パキリ、ポキリ、と盛大に鳴る肩に首をかしげる。
最近やけに肩が凝るなぁ……。

あ、こんにちは。上代刃です。

桃香の有り得ない仁徳（にんき）と軍師達の途方もない頭脳、それにリアルに一騎当千を成す武将達（ちょうじん）が災いしてか、遂に平原郡を治めることになった劉備一行。

今は昼の会議を終えて、自室へと戻るところ。

今回の会議は主に志願した民の軍への編入について、それと農耕や治水の問題点への対策、加えて税制の検討など。

「はぁ、内政は門外漢なんですが……」

正直、今の平原郡の内情は相当ヤバい。

何が拙いって、唯一の（というのは言い過ぎですが）長所である桃香の仁徳溢れる方針が状況を圧迫しているんだから皮肉にも程がある。

現在の平原郡を一応は太守という形で治めているが、内実では軍閥のように独立してしまっているのがホントの所。

だからこそ以前の県令の税制を始めとした政を屑籠にポイして、朱里や雛里のチート頭脳と一刀と私の現代知識を駆使して一新、とりあえず善政と呼ばれるような政治を行えている。

ていうか、軍師様二人の知能に現代知識という二大チート使ってギリギリって……此処の政治、マジで半端ありません。

問題その1。

腐ったとはいえ、まだ力のある漢王朝をいつまでもガン無視するわけにもいかない。

この大乱が無ければ、すぐにでも新しい太守様が派遣されてるでしょうし。

太守の上に州牧っていう役職もできるらしいですしね。

まぁ、この問題は私ではどうしようも案が浮かばないので、むしろ諦めてます。

洛陽では宦官の十常侍と何進大将軍が火花散らしてるらしいですから、ゴタゴタで支配は疎かになるでしょうし、運が良けりゃ、王朝が倒れて群雄割拠まで持つかもしれません。

で、問題その2が深刻です……。

まず、旧態依然の豪族やら領主に碌な奴はいません。

宦官の親族、というコネで入った奴とか、領民だとかは無視して己の領土を拡げようとする阿呆ばかり。

無論、優秀で慕われる領主もいますが。

運悪く、この平原郡ではそうした人がかなり少なかった。

領民の一斉蜂起や、黄巾党との戦いで領主を失った領民が民を第一に考える桃香の甘美な善政を聞いたらどうなるか。

……寄ってきますね、ええ。

で、それを快く受け入れ、領土の整備、生活の保護などで膨らむ領土。

ちなみに危機感を覚えた私と朱里、雛里によって残る面倒そうな領主を乱に乗じて処罰したりもしました。

領民がついていたとはいえ、かな～り狡い真似して殺っちゃいましたが。

ここで確認ですが、劉備軍はそれほど裕福ではありません。

いえ、ぶっちゃけて言えば赤貧です。

そんな状態で大勢の領民の保護に体制の整備。

……いや、出来るわけないでしょう？

軍師様の能力と私達が無い知恵絞って必死で作り上げた効率化を図る制度改革や農耕具がなければ、受け入れた内の半数は見殺してましたよ？

商人や金持ち連中にはいろいろと条件付きで融資してもらいましたし。賊の被害もまだ少なからずある。

そんな訳で暇も無ければ金も無い。まさに貧乏暇なしです。

今日はこれから調練、その後、先日始めた開墾の視察も兼ねて警邏。明日からもしっかり予定が詰まっている。

「生きることは劇的だ！　とかどっかの生徒会長も言ってましたが……劇的な人生なんて送るもんじゃありませんよね。平凡万歳、普通こそ至高でしょう？」

まぁ、そんなモノと現実には某聖剣の鞘レベルの断絶があるわけですが。全て遠き理想郷、とは言い得て妙ですね。

＊

少女警邏中。

「へぇ、なかなか活気づいていますね。これなら凡庸に過ぎる頭をフル回転させた甲斐があるというものです」

はい、ご察しの通り警邏中の神城珠希です。

軍内でならまだしも、旅人などもいる街で視察となれば、自然とこうなりますね……。

「やっぱ、性別なんて偽るものじゃないです……」

などと、どうせ叶わなかったことに思いを馳せる私に突き刺さる、視線。

そちらへ目を向け、上がるのは街の女性達の歓声。

「はぁ……」

近頃、習慣的に届く怪文書。しかも、相手は全て女性。

私とて男です。現在の恰好はいろいろと大事なものを捨ててしまっている気もしますが、それでも生物学的にはれっきとした雄なのです。

たとえその想いに応えられなくとも、一瞬くらいは『まさか……恋文!?　じ、実在していたのですかっ……！』と若干以上にテンションが上がったことを誰が責められましょうか。

深呼吸で動悸を抑え、ゆっくりと開いた文の文字を目で追って、

「……？」

目を擦り、もう一度見るが、意味不明な文字は紙の上に未だ厳然と鎮座していた。

『神城様、姉妹の契りを結び、私の姉……いえ、お姉様になってください！！』

以下、数十通に同じような文が。

……少し泣きかけた。

ちなみに一刀へ愚痴った際、『羨ましい』的なことを言いやがったので、鉄拳制裁を加えた後、無理矢理女装させて過ごさせたのに

は後悔してません。

「あ、珠希様」

「ん？」

突然の声に思考を中断し、辺りを見回すと、自分と同じように視察に来ている雛里の姿を見つけた。

「そういえば、貴女も視察に行くと言っていましたね。もう見て回りましたか？」

「あ、いえ、これから、です」

「じゃあ一緒に行きましょうか」

「はい」

街を少し出たところにある開墾地へ向けて歩く間、話すのは平原郡の政治について。朱里と雛里には特に多くの案件を任せているから相談は尽きることがない。

「あ、そういえば」

そんな中、前々から一つ疑問だったことを思い出した。

「聞きづらいことですが、いいですか？」

「え？　は、はい！」

そう畏まられても困るんですが……。

聞く此方が構えてしまったのが拙かったですかね。

「雛里は……此処に仕官して後悔していませんか？」

「？」

ポカン、と首をかしげる彼女の様子にほんの少し安堵する自分がいる。

「いえ、貴女と朱里には特に無茶な政務を押し付けていますし、この軍がこの先どこまでいけるか、私には判別できませんからね。……言いたくなければいいですが、よければ何故この軍に残っているのかを聞きたいと思いまして」

後悔云々は勿論ですが、言外にこの郡の行く末、それに劉備軍の矛盾についての意見を求める。

義兄弟（姉妹？）の三人は聞くまでもないですし、一刀とは話しました。星は何を考えているのか未だ掴みきれません。

以前聞いた時も『ふっ、乙女の秘密です』とか誤魔化されましたし。

当然ながら、朱里と雛里が此処を見限ればこの郡は機能しなくなります。

だからあまり聞きたくはないですが、彼女達の頑張りに甘えすぎるのもどうかと思いますからね。

「あ、えと……こ、後悔はしてないです」

「……ふむ」

存外はっきり言い切りましたね。

となると、ちゃんとした理由があるってことでしょうか。

「わ、私には桃香様の方針や、この郡の行く末は、まだ判別できないです。でも、みなさんの才能は、凄いですし……わ、私も朱里ちゃんも後悔はないと、思います」

「それは、桃香の王道を信じて、ということですか？」

孟子の王覇。

個人的には覇道の方が理に適っていて好きですが。

「それも、ありますけど……その、わ、私達は――！」

「む？　おい、君。ちょっといいか？」

雛里の言葉を遮って話しかけてきたのは一風変わった雰囲気の男。

赤い髪に鷹のような鋭い目、黒と白を基調とした服を身にまとい、私を探るように見つめている。

「……あの、なにかご用でしょうか？」

間近でそうジロジロ見られていると目立ってしょうがないんですけど。

「ああ、すまない。俺は華佗。医者だ」

「……医者？」

とてもそうは見えないのですが。

「少し、君に聞きたいことがあってな。それに、少々疲れも溜め込んでいるようだし、それについても――」

『待ちなさい！！』

「ぐふぉっ！？」

私の肩に触れようとした華佗さんが突如凄い勢いで吹き飛ぶ。

そして、私と彼を遮るように立つのは数人の街娘達。

しかも、目茶苦茶睨んでます、華佗さんを。

「なにがどうなってるんです……？」

彼女達から放たれる殺気に怯え、私にしがみつく雛里をあやしながら呆然と呟く。

「いきなりなんなんだ、君たちは！？」

起きあがった華佗さんは困惑気味に怒鳴る。

あの殺気に気づかないとは……相当に鈍感ですね。

『私達は神城様の親衛隊よっ！！』

あれ、おかしいな……普通、親衛隊というものは本人が存在を知っているもののはずですが。

「お前こそ、神城様に何をしようとしたの！？」

「いや、俺はただ――」

『問答無用！！』

再び近づいてきた華佗さんは無情にも再度、宙を舞った。

「――なら聞くなぁぁぁああッ！！」

１００％正論を叫びながら。

「神城様、ご無事ですか？」

「え、ええ……あの、親衛隊、というのは……？」

「はい、神城様をお慕いする者達で結成しました！」

眩しい笑顔で事後報告しないでください……。

「名前は“妹同盟（シスターズ）”です！」

そこで超電磁砲（レールガン）！？

まさかのミサカネットワーク！？

「安心してください、不埒を働こうとしたあの男は記憶が無くなる

までボコボコにした後、遠方の街まで送りつけておきます」

安心できませんよ！？

というか、貴女達何者ですか！？

「いえ……その、人を街に送り付けるというのは……」

一応、現実的な面をつっこんでみるが、彼女は『少々お待ちください』と目を瞑ると、

「商人の隊員（いもうと）と送り付ける街の隊員（いもうと）の快諾を得られました。後はお任せください」

……マジでクローンじゃありませんよね、貴女達？

なに普通にネットワーク使っちゃってるんですか？

結局、華佗さんや彼女達のことを深くつっこむのが怖くなった私は雛里と視察を済ませ、今日のことは忘れることにした。

ちなみに私が警邏へ出る回数が激減したのは言うまでもない。

第１１章　野良狗と？？の暗躍物語

唐突ですが、約束、って厄介ですよね。

現在すーちゃんを連れて隠密行動中の上代刃です。

少し前の公孫賛殿と協力してあたった黄巾党残存兵力の殲滅。

この時期に多くの黄巾党の主力部隊は漢王朝の皇甫嵩将軍や朱儁将軍、そして曹操さんによって同じく敗走寸前まで追い詰められていました。

勿論、これで黄巾党が全くいなくなることはないでしょうが、今までの大乱のひとまずの終結となることでしょう。

さて、そんな中、私が劉備軍のみんなにも黙ってはるばる広宗まで来たのには当然理由があります。

劉備軍へ加入してからというもの、各地の情報をひたすらに集め、他の地方の太守達のことは勿論、黄巾党の動きを探っておいた甲斐あってか遂に張三姉妹のいる軍勢をつきとめるに至ったのですよ。

で、私の見立てでは今回の戦いで彼女達は捕らえられるでしょう。

曹操さんと皇甫嵩将軍が相手というのは分が悪すぎます。

そして、私はその戦いが決する前に彼女達と接触する必要がある。

黄巾党は砦で篭城戦。

そこへ風鈴を連れて行くわけにもいかず、結論としては風鈴は近くに隠れさせ、残る私達で――

「忍び込んで隠密行動、ですね」

「つくづくアンタって、よくわかんない人間よね～。面倒事に関わってばっかだし、Mなの？　……うわ、キモっ！」

（認めてないのに変な想像しないでくださいよっ！？　……まぁ、自分の行動が馬鹿げている事に関しては認めますが）

すーちゃんの言葉にテレパシーというか、念話的なもので返答する。

これがないと、オチオチ話もできませんからね。

とりあえず、見張りが交代して、人数の少ない時に音を立てずに制圧し、潜入。

で、今回は張角さん達を擁する軍。さすがに前のような変装は無茶です。

よって、すーちゃんの能力で至急兵士の行動を索敵、見つからないよう砦内に隠れ、時を待つ。

元々曹操さん達の軍が到着する頃合いを見計らって行動しましたから、すぐに――

「お、来ましたか」

突如、砦内部に響く怒号。

大軍を率いての迅速な奇襲、十分な連携と優秀な将兵がいなければ成功することはないでしょう。
さすが、あの金髪縦ロールは伊達ではありません。

それと同時に私達も行動を開始。

前もって砦の簡単な見取り図は見張りから奪っていますし、おそらく大将がいるとするなら、この奥まった場所でありながら逃走経路も確保しやすい一角でしょう。
そこから逃走するとなると。

ルートを思い描きながら向かってくる兵士を迎撃する。
黄巾党と正規軍、どちらも入り乱れて道を塞ぎますが、一々付き合う気は毛頭ないので。全て一撃で沈めながら全力で駆ける。

久方ぶりの黒鬼は血を求めるように煌めいて――って、怖っ！？

「見つけたっ！！」

そして、長い通路の先、いつか見た三姉妹の姿が。
周りの兵士達の声で彼女達がこちらを振り向き、その表情が一様に驚きに彩られた。

「刃さん！？」

「なんでここに！？」

「ちょ、アイツは攻撃しちゃダメ！」

すぐにピタリ、と動きを止める親衛隊達。

……助かりましたよ、張宝さん。
全員昏倒させたりするのはあまり得策じゃないですから。

「お久しぶりです。いきなりですみませんが、時間がありません、逃げながら話しましょう。“太平要術の書”は知っていますね？」

詳しくは知りませんが、噂と一刀の話をまとめるにそれが彼女達を導いた物のはず。

「は、はい。変なお爺さんから渡されたんですけど……」

「それ、使いましたね？」

「ええ、私や姉さん達がここまで人気を得られたのも、アレに書かれていた人心掌握術のお陰だけれど、なぜそれを？」

人心掌握……なるほど、それでアイドルとして異常なまでに信仰されたということですか。

「今、手元にありますか？」

「あ、それなら燃えちゃったよ」

「燃えた！？」

「う、うん……結構前に」

燃えた……それは少し想定外ですが、それなら、

「張角様！　こっちに――ぐぁぁぁっ！？」

先導する親衛隊の一人が倒れる。

逃走経路の先、その道筋を断ち切るように立ち塞がっているのは、

「ここまでよ。私からは逃げられないわ」

空間を呑み込まんとする覇気を纏った英雄、曹孟徳。

そして、その周りを固めるのはその側近、夏侯惇に夏侯淵、その部下達。

さらにはネコミミフードをかぶった少女、頭に太陽の塔（？）のようなオブジェを乗せた少女が控えていた。

……なにこの奇怪な集団、とかツッコミを入れている場合じゃない。

三人を庇うように立ち、曹操さんを見据える。

「……なぜ、ここに居るのかしら？　皇甫嵩将軍の配下についた、というわけ？」

驚きは三者から。

曹操、夏侯惇、夏侯淵はそれぞれ違いこそあるが、その表情は一様に驚きを隠せないでいた。他の将や後ろの者達は意味がわからず困惑の表情を浮かべているけど。

「違いますよ、私はこの三人を救いに来たんです」

『!?』

「……あなたは黄巾党だった、と？」

「違いますね、言ったはずです。私は“この三人”を救いに来たんです」

「違いがわからないわ」

「華琳様！　構うことはありません！　邪魔をするなら斬れば――」

「春蘭、今話しているのは私よ？」

「……はい、わかりました」

一応の興味は持ってくれましたか。とはいえ、まだ気は抜けませんが。

「はっきり言いますと、私は黄巾党の者を助けるつもりは全くありません。私はただ、曹操殿に三人の助命を請願しに来たのです」

『え!?』

驚きは後ろから、三人にもまさかの言葉だったのでしょう。

「……なぜ？」

「理由はいろいろとありますが……強いて言うなら、約束、だからです。彼女達の命を助ける、という」

「誰からの？」

「平和を夢見る民から……ですかね。名は知りません」

「名も知らぬ者のために、ここまで来たというの？」

「約束ですから」

……雰囲気が変わりましたね。まるで全身に針でも突き刺さるようなプレッシャー。

「私にその三人を救う理由がないわ、大体ソレ等は今回の大乱の首謀者でしょう？」

「いえ、正しくは違います。彼女達は――」

彼女達がこうした立場についた経緯を簡単に説明する。

……全然効いてませんね、当然ですが。

まぁ、彼女相手に人情を期待する気はないです。

「そう……それで？　故意でないから助けろと？」

「まさか、故意だろうとなんだろうとこうなった以上関係ありませ

ん。問題は彼女達がどうやってここまでの勢力を統べるに至ったかです」

そう、いくら彼女達の歌が魅力的だろうと、容姿が可憐であろうと、その程度であれほどの勢力のトップに立つなど出来はしない。

腐敗した漢王朝の皺寄せで困窮した民たちのきっかけになるには、それだけではまだ弱い。

それこそしっかりした食事と休養で病と呼ばれるものに苦しむ民を治療したりしていれば神の御業が云々ともなるかもしれないけれど。

「曹操殿はもう知っているのではないですか？　“太平要術の書”がその原因であると」

「っ！　そう、やはりあの書による力だったわけね」

「ええ、それには高度な人心掌握術が記されていたそうです……が、それは戦いの中で失われてしまっています」

『！？』

一同の顔が驚きに変わる。無論、完全に信じたわけではないだろうが、実際にないのだからこの際関係ない。

「そこで、彼女達の有用性から助命を請願したい」

「くっ……そういうこと」

顔を顰める曹操さん。私の言いたい事は伝わったみたいですね。

「ど、どういうことだ？」

要領を得ていないのは、夏侯惇さんと後ろの張角さん達。

……一応彼女達にはわかっていて欲しかったんですが、来て良かったですよ。

「つまりですね、夏侯惇さん。失われた“太平要術の書”の力を使って成功した彼女達にはその書と同等の価値があるということですよ。そして、彼女達の話を聞き、その命を助けたとなれば、その書によって彼女達に心酔する黄巾党の兵を取り込むことができますし、同時に黄巾党の元となった民の間での風評も良いものとなる。なにより人心掌握術を身につけた者を手元に置いておけるのはかなり有益ですしね」

「う、む……とりあえず、役に立つのだな？」

「ええ、ザックリ言えばその認識で合ってます」

まぁ、私が言わなくても“太平要術の書”を知っている曹操さんなら最終的にはこうしたでしょうが、皇甫嵩将軍はどうするかわからないから避けたい。

あとは万が一、書のことを曹操さんが知らない可能性も考慮して、ですね、私が来たのは。

「……嫌だ、と言ったら？」

「強行突破、ですかね？」

「出来ると思うの？　我が軍の武将や精強な兵たち相手に」

「もとより、いざという時は死ぬつもりで来ています。……試してみますか？」

冗談ではなく、本心からの言葉、それにむき出しの敵意を上乗せしてプレゼント。

瞬時に曹操軍の武将や兵が構え、一様にその顔からは嫌な汗が伝っている。

「……冗談よ。ついでに聞くけど、貴方どうやってここへ？」

「どうやって、ですか？　生憎と黄巾党の所属じゃないので曹操殿の軍が動く少し前に潜入して、混乱に乗じただけですが」

すんなり来れたのには、すーちゃんの力によるところも大きいですけどね。

「ふふん、惚れ直した？」

無い胸を張るすーちゃん。

そして、その胸同様、惚れたという前提自体が無いという罠。

『……』

あれ？　何故みんな変なものを見る目でこっちを見るんです？

「いいわ、その三人と残る黄巾党の身柄を保証しましょう」

おお、さすが有用な人材を得ることにマニアックなまでの趣向を持つ曹操さん。変態的な趣味も度を超せば王者の風格。

「助かります。では――」

「ただし、一つ条件があるわ」

「……なんでしょう？」

「貴方が私の下へ来ることよ」

あれ、私はそのお眼鏡に適うような行動をとった覚えはありませんが。……いや、ありませんよ？

「それは呑めません。それに、私を曹操軍に入れるのは得策ではないかと」

「どうしてかしら？」

（すーちゃん、頼みますよ？）

「ま、仕方ないわね」

やれやれ、という感じで肩を竦める彼女を確認すると、世間話でもするように軽く、話を切り出した。

「……そういえば、結構前に黄巾党との戦いで大変なことがあったみたいですね？　夏候淵さんに聞いたのですが、一人の者に先遣部隊が敗走したことを受けて、黄巾党との戦いは十分注意を払って当たるようにという命令を下していたとか」

「え？　ええ、それが……どうかしたのかしら？」

「黄巾党との主要な戦いはここで最後でしょう。その男と、会えましたか？」

「何を言って――っ、まさか！！」

驚きによって生まれた一瞬の隙、そこへ吹くのは神霊様による、文字通りの神風。

吹き飛ばされないように踏ん張る曹操さん達を尻目に予定していた脱出ルートへ駆け出す。

「くっ！　至急、奴を捕縛しなさい！！」

『御意！』

「だが断る！」

続けて通路の曲がり角で隠し持っていた小麦粉を空中にばら撒き、すーちゃんの風の力で爆発下限、上限濃度を調整、さらに彼女の火

で着火。

そして、起こるのは――そう、いわゆる粉塵爆発。

「なんだこれはっ！？」

ドゴォォン、という爆音によって夏候惇さん達の声は掻き消され、衝撃で崩れた天井は私と彼女達を見事に分断してくれた。

そして、私は比較的見つかりにくい出口から悠々と逃走。風鈴を迎えに行きませんとね。

「ふう、約束が死亡フラグとかホント勘弁ですよね……」

すーちゃんが居てくれて助かりましたよ。

居なければ最悪、曹操軍に降ることにもなりかねませんでしたから。

そして、いずれはアレがばれて……いえ、過ぎたことです。忘れます。

さて、帰るまでが暗躍です。明日に向かって全速前進ですよ～。

一方、平原の劉備軍では。

「ん？　なんだろ、コレ」

一刀が自分の机の上にある竹簡を手に取り、目を通す。

『置手紙。

ちょっとその辺までアサシンってきます。慢心王とか征服王に見つからなければ、生きて帰れるかもしれないので、探さないでください。

それと、愛紗達は……一刀、足止めをお願い！』

「ふっ、足止めはいいが、別に説得してしまっても構わんのだろう？　――って、んなこと言うかぁぁあああッ！！」

『ちなみに……大体、黄色いアレのせい、という責任転嫁』

「なんでさっ！？」

「あの、ご主人様。刃様を知りませんか？　どうも見当たらなくて――」

そこへノックの音と共に現れた、ラスボスによる死刑宣告。

「ええい、ままよ！　……言い訳の貯蔵は充分か、天の御遣いっ！！」

第１２章　嗚呼、不条理にして不可解なこの世界

世界は、こんなはずじゃなかったことばっかりだ。

運命なんてクソ食らえ、とは思いますが、実際にセオリー通りにならなかった時のこの無情感。

すみません、混乱しているようです。

改めまして、現在冀州を抜けてどこぞの土地を放浪中。上代刃です。

あのつるぺた覇王様を嘗めていたようです。

彼女達が砦に残る黄巾党を殲滅している間に逃げる予定でしたが、あのチビッ子、そっちを完全に皇甫嵩将軍や自軍の別働隊に任せて、広宗一帯に包囲網を形成しやがりました。

どうやら彼女の逆鱗に触れたようですね。あの時の私はどうかしてました。

強行突破するわけにもいかず、敵影から逃げるうちに冀州を抜け、今はどこにいるかわからない。

そして既に数日どころか数週間放浪しっぱなし。

久しぶりの野良生活ですが、大した蓄えもない今。

「……Ｉｔ’ｓ　ａ　ピーンチ」

某銀河的な美少年の真似をしてみるが、残念なことにこの荒野で青春を謳歌するのは難しそうです。

「綺羅星☆」

隣のすーちゃんが某十字団の挨拶をしてくるがスルー。

二人だけで結成しても意味ないでしょう。もれなく頭が弱い子というレッテルを貼られるという結末しか思いつかない。

「すーちゃんキーック♪」

「ごぶっ！？」

……く、このまま無視し続けても突如奇声を発する変人、というレッテルに変わるだけで解決にならない。

なにか良い手は……と、んなことはどうでもいいんです。

遠目に見えた希望の光について考えましょう。

「お～、あれに見えるは」

「ええ、いかにも札付きの雑魚が根城にしそうな小屋ですね」

「行く？」

「まぁ、このまま迷うよりはいいでしょう」

もしかしたら食料を交換してくれるかもしれませんし。路銀は多少ありますから。

「『颯爽登場！』とか言って踏み込めば？　黒鬼掲げながら」

もしそれで相手が乗ってきたら、折角見つけた人間との関係をその身と共に即、断ち切りたくなるのですが。

「そういえば、なんですーちゃんは憑いてきたんですか？」

彼女だけなら戻ることもできただろうに。

「……一人ぼっちは、寂しいもんね？」

「そっか、貴女と話せるの私だけでしたね」

「そこで肯定するくらいの可愛げが欲しい今日この頃」

無理をおっしゃる。

＊

（セオリー通りの世界も面倒ではありますね……）

小屋の近くまで来て、登場の仕方を悩む間にいつの間にか隠れてしまっていた。

結果的には良かったんですがね。

小屋の中に居るのは裕福そうな身なりをした壮年の男女に白いフードを被った数人の男。

男女は縛られて床に転がされている辺り、よくある賊だか悪役に捕らわれた富豪Aというところでしょう。

で、周りの男は恰好から察するに頭を漆黒の闇（厨二の妄想）で埋め尽くされたアブナイ現行犯どもですかね。

「アンタが言っても説得力ないね～」

（外観に出ていない私はまだ末期じゃない）

断片的な話を聞くに、彼らはどこかから人質として二人を連れてきたらしい。そして、特に情状を酌量する余地も感じられない、と。

（じゃ、よろしくお願いします）

「は～い、っと」

とりあえず、すーちゃんに頼んで小屋から少し離れた所で小さな粉塵爆発を起こす。

「……なんだ？　爆発？」

「少し、見てこよう」

それに驚き、小屋から出た男達をやり過ごすと、

「っ！　なんだ貴様――ぐぁっ！？」

「ただの迷子ですよ」

小屋に残る二人の男を不意打ちで叩き斬る。

「き、君は……？」

「通りすがりの方向音痴です。詳しいことは後で」

言って小屋から出ると、戻ってきた男達をこれまた不意打ちでぶった斬り、改めて捕らわれていた二人を解放した。

にしても、弱かったですね。しかも賊、というよりは……文官のような身のこなしでしたけど。

「では、話を聞かせてもらえます？」

「はい、実は――」

＊

……いつまで話してるんだろう、この人。

目の前では喋りだしたら止まらない、関西人どころか某ＳＮ的な映画ばりに早口で話し続ける男の姿があった。

……そんなに尺が大事か。

おい、隣の貴女。寝るんじゃありません。一応貴女の連れでしょう？

さて、各々の感情や関係性まで事細かに話す彼の話は書いていられないので、簡潔に話しますと。

仕える帝が亡くなり、周りで腹黒去勢野郎とアレな大将軍、金ぴかお馬鹿がもめ始めた。

←

勝手に同士討ちしちゃったし、ここは民の信頼も厚く、有能な将を抱える幼女に泣きつく。

←

幼い帝を立派に支える様子に安心していると、さっきの変態どもがその帝を殺害、この二人を拉致る。

←

『よく見たらコイツら目死んでね？　ヤンデレ？　空鍋？』とか思って泣きながらガクブルしてたら剣鬼的な少年が颯爽登場してた！

↑今ココ。

「……とりあえずツッコミ所が有り過ぎるのはよくわかりました」

まずいい大人がロリに頼るな、とか。

まぁ、最近隣にいる永遠の（２１）に頼ってる私が言うことでもないですが。

「なんで“美”が抜けてるのよ！　……とか？」

そこはツッコまなくていいんですよ。

……べ、別に気にしてなんかないんだからねっ！

「あの、重ね重ね申し訳ないのですが……」

おっと、起きていたんですか貴女。

「私達だけでは、街に戻れるかどうか……」

目に涙を浮かべてこちらを見る女性。

……なんでしょう、私の勘が彼女を凄まじく忌避しているのですが。

でもまあ、悲しいかな私だけで街まで辿り着けるとも思えませんし。

「まあ、いいです。私が貴方達を送り届けましょう」

なにより、その話にある街まで行ければ寝床も食料も確保できますからね。

＊

その後。

「ここが洛陽です」

「まぁ、そうですね」

「貴方は恩人ですから、城へ案内致しましょう」

「え？　いや、ちょっと……」

「遠慮せずに」

「別に謙虚さという故郷の美徳をアピールしてるわけじゃ――」

「ああ、そうです」

「私の話を――」

「くれぐれも、よろしくお願いしますね？」

いい笑顔の女性によって強引に城内へ連れ込まれてしまいましたとさ。

＊

Ｓｉｄｅ賈駆

なぜ、こんなことに……。

洛陽での度重なる政変。

愚鈍と噂される霊帝の崩御により、何進大将軍と宦官の十常侍達の対立は表面化。宦官達によって何進と劉弁様は殺され、その宦官も袁紹によって斬殺された。

そして、生き延びた宦官の張譲から劉協様を助け出し、その後月（ゆえ）は彼を擁立して王朝を支える。

月のご両親も月の頑張りを喜んでいたし、僕を始めとした臣下も彼女を護っていこうと思っていた。

なのに、そこへ現れた怪しげなフードを被った連中。奴らによって、帝は殺害され、僕達も人質を盾に従わされている。

今、この謁見の間でも僕や月、張遼達を監視する連中の姿がある。

「なに、これは……！？」

そして今、奴らから提示された書簡に我が目を疑っていた。

「なんや、これ……！　こないな政治できるわけないやろ！！」

隣から覗き見た張遼が声を荒げる。

そう、そこに記されていたのは誰が見ても暴政、悪政としか言えないような内容。

「従え、さもなくば――」

奴の続く言葉はわかりきっている。

犠牲となるのは人質の命。そして、僕達も彼女を思えばこそ反論できない。

「詠ちゃん……私」

「くっ……ゴメン、月。……わかっ――」

僕は月の言葉を続けさせまいと先んじて謝り、要求に肯定しようとして、

「た、大変です！！」

慌てて部屋へ入ってきた兵の言葉に遮られた。

「どうした？」

「じ、実は城内へ、その……董母様が現れたようで」

「……なんだと？」

珍しく表情を変えた男は兵の方へゆっくりと歩いていく。

「奴は捕えていたはずだが……いったいどこに？」

「――今、此処にですよ」

「そういうこと♪」

一瞬、光が煌めいたかと思うと、男の体はその白い外套ごと真っ二つになり、宙を舞った。

そして、兵士の言葉に続いて扉の陰から現れたのは人質になっているはずの董母様。

次の瞬間、僕が知覚したのは一陣の風と男たちの断末魔だった。

「これで全部、ですか……」

呆然とする僕の前で残る数人の白フード達を斬った兵士は返り血に濡れた服を脱ぎ、元々の服装らしい恰好へ戻る。

その腰にはさっき奴らを斬り裂いた、異様な意匠が施された剣が携えられていた。

「あれは……まさか」

噂ぐらいなら聞いたことがある、あの剣の持ち主。賊を斬るその姿から“狗”とも“鬼”とも呼ばれた無頼の将。

「いったい、どうなってるの……？」

事態を全く理解できない僕はただ、そう呟く他無かった。

＊

兵士達にはあの女の人が話を通してくれたらしく、大した障害もなくオカルト的な連中を殲滅。

目の前ではいわゆる感動の再会、というのが行われています。

にしてもホントに人質で抑えていたみたいですね。無事だとわかった途端にほとんどの兵士さんは寝返ってくれましたし。

「お母さん！　無事だったんですね、良かった……！」

「おお、月。父もいるぞ」

「ええ、ごめんなさい、心配をかけて」

「ご無事でなによりです、慧様」

「貴女も無事でよかったわ、詠」

「あの……私もいるんだが……」

「そちらの方は？」

にこやかな顔でこちらを見るのは例の幼女さん。

……それはいいのですが、他の眼鏡の子やさらしとか袴を着用し

た和風な女性は完璧こっち睨んでますよね。

私だって好きで巻き込まれたわけじゃないんですけど……。

「申し遅れました、私は旅の迷子で上代という者です」

「おお、そうだ。実はこの上代さんが――」

『貴方（お父さん）は黙っててください』

「……」

よく見ますよね、こういう家庭のヒエラルキー。彼が話し始めると長いので同情の余地はありませんが。

「あの、この小さくなってる人の名前って……」

「ああ、夫のこと？　董君雅ですが」

……マジですか。

つまり話にあった良くできたロリっ子っていうのは――

「私が娘の董卓です。ありがとうございました、上代さん」

「……私の明日はどっちだ」

――ああ、ホントに世界はこんなはずじゃなかったことばっかり

だ。

第１３章　犬将軍降臨？

「……どうしてこうなった？」

董卓親子の感動（？）　の再会の後、賈駆さんの口から発せられた言葉に私はそう呟くしかなかった。

「主にアンタの方向音痴が理由じゃない？」

……なるほど、否定できませんね。

賈駆さん曰く、ほんの数日前、帝を擁立している董卓さんを快く思わない例の金ぴか馬鹿女が黄巾の乱で頭角を現した諸侯へ檄文を放ったらしい。

まぁ、その帝は既に殺されているわけなのですが、どうやらあの白フード達によって隠匿されていたようです。

それで、その檄文というのが、簡潔に纏めると。

『名家の自分でなく、地方領主である董卓さんが帝を支え、政治の実権を持っていることが気に食わないので、適当に理由つけてボコりましょう』

みたいなことです。

優雅とか名門とか袁本初という単語が無駄に多くて真面目に読むのがあほらしくなったのは言うまでもなく。

で、言ってること自体は馬鹿馬鹿しいですが、これに悪政を布いているって理由がつけば、俄然状況は変わってくる。

各諸侯はコレを名声を高めるための好機ととるでしょう。

つまりはあのチビッ子覇王や江東の虎娘を始めとした実力者がその反董卓連合とやらに呼応する。

公孫賛殿や馬騰殿も加わるかもしれませんし、理念からして彼女達も十分参加する可能性があります。

……え、なにこの無理ゲー？

しかも、悪政が無いという事を証明しようにも、ここで帝が居ないのはかなりネックです。

たとえ暴政を布いていなくても皇帝を暗殺し、政治を行っていたとなれば悪政云々なんてレベルじゃない大罪人となる。

証人となる例のオカルト連中も全員漢王朝に、ひいては董卓さんに仕えていた人間であることから彼らの発言に力はない。

……詰んでるよね、チェックメイトですよね？

「では、私はこれで――」

三十六計逃げるにしかず。

見なかったことにするのは人生での必須スキルです。

じん　は　にげだした。

「どこへ行くのかしら？」

しかし　まわりこまれてしまった！

目の前には通す気ゼロで立ち塞がる張遼さん。

後ろからは董母さんの鋭い眼光がこちらを見据えている。

……ですが、今の張遼さんは彼らの監視のせいか武器を持っていない。彼女一人なら抜ける――！

じん　は　にげる　を　せんたくした。

かのじょ　から　にげる　なんて　とんでもない！

「まさかの強制イベント！？　つか文脈的にソレはおかしいでしょう！？」

「話を聞いてもいいですね？」

「……イエス、マム」

うな垂れるように頭を下げる私は今後危険そうな人物には関わらないようにしよう、と固く胸に誓ったのだった。

＊

嗚呼、どうしてこうなった……？
って、デジャヴ？

結局あの後、董母様は勿論、賈駆さんにも目をつけられていたみたいで、あっさり“蒼狗”であることがばれました。

その際、董卓様は驚きで目を点にしていましたが、その後に期待に満ちた目へ変わるのは反則です。

謀りましたね、董母様？

初めからそのつもりだったらしい彼女には空恐ろしいものを感じずにいられません。

私はそのまま将として召し抱えられることになり、現在は私用で街に出ているという呂布将軍を探しているところ。

「――なんて事があったんですよ」

「ほう、それは災難だったな。私としては嬉しい話だが」

隣を歩く華雄将軍と一緒に。

先ほど手合せを強制的に予約され、渋々了承、非常に喜ばれたのは言うまでもありません。

あ、すーちゃんなら洛陽のような都が珍しいのかフラフラっと飛んでいきました。いつものことですし、その内戻ってくるでしょう。

にしても華雄さんが董卓軍に所属していたのは知らなかったのですが、知り合いがいるというのは中々に心強いものです。

で、私が何故呂布将軍を探すのかというと、一応顛末自体は兵士達から連絡は行っていますが、顔合わせをしておけ、ということらしいです。

ちなみに同行者が彼女一人で良いのか？　と聞いたら『逃げられるなら逃げてもいいですよ？』と底冷えするようなお言葉を董母様からいただきました。

あの一言で逃げた際に彼女がすることが思い至った私としてはその悪女っぷりに震えが止まりません。

「しかし、なぜ正式に仕官しなかったのだ？」

「い、いろいろ事情がありまして……」

もし正式に仕官なんてしようものなら董母様の思惑通りの展開になりかねません。

董母様の計画では巻き込んだ後にいずれは娘の側近にするつもりだったようですし。なんとか感づいた私と賈駆さんで必死に止め、客将という立場を勝ち得たわけですから。

「それにしても……ホントに何処にいるかわかるんですか？」

この広い洛陽で人一人を見つけるのは相当難しいと思うのですが。

「ああ、いつものことだ。居るとしたら、さっきの店か家くらいだろう。ほら、あれだ、呂布は……居たな。やはり陳宮もいたか」

家？

と疑問符を浮かべる私は華雄さんの指す先へ目をやって――

「――な」

見つけてしまった。

「あ、あれは――！！」

その愛くるしい姿は私を一瞬で魅了し、無意識のうちに私の身体は全力で駆けだしていた。

＊

Ｓｉｄｅ張遼

ここ最近の董卓軍内部情勢は二転三転、当事者のウチらも巻き込んで、それでいて全く他所で加速していった。

一時はようわからん連中の言いなりになる運命を呪ったもんやけど、それも董母様やあの“蒼狗”によって糺された。

でも、こっからが実際一番ツラい。

反董卓連合の連中をどうするか。帝が暗殺されたことでウチらの

状況は最悪。

賈駆っちや董母様は必死に考えを巡らせとるけど正直どうにかなるもんでもない。

そんな中でこの董卓軍に加入した物好き、というより加入させられた可哀相な奴。

それが、“蒼狗”。

噂では賊の大軍を一人で壊滅させ、義勇軍に参加しては見事に兵を率いて戦い、あの曹操の勧誘を蹴り、恨みを買いつつも各地を放浪する武辺者。

……のはずなんやけど、実際見てみての感想は綺麗な顔立ちした優男、いや、優男っていうよりはどっか呆けたような印象を受ける。

とても噂通りの人間には見えん。

でも、謁見の間で奴らを斬った動きは十分以上にその力を確信させた……はずだった。

「なんや……これは……？」

しかし、今目の前で繰り広げられている光景がその確信を大きく揺さぶっていたりする。

「はふぅ……」

最早魂すら抜けているのでは、と思うようなだらしない声を出して、尚且つ至福、という言葉を体現するかのような形に顔を歪ませ、

犬の耳と尻尾が生えているかのような幻視すら感じる幸せな雰囲気を出しながら、

あの“蒼狗”が、抱きしめていた。

呂布――――

――――の飼い犬であるセキトを。

……あまりの混乱で文法が難儀なことになってしまったみたいだ。

「……ああ、張遼か」

呆然とするウチを見つけた華雄が困惑の抜けきらない顔で話しかけてきた。

彼女曰く、呂布や陳宮と戯れる犬たちを見た瞬間、視認出来ないほどの速さで犬たちを抱き上げ、頬擦りし、埋もれていったらしい。

最初こそ驚いていた犬たちもその溺愛ぶりに警戒を解き、なすがままになり始めたとか。

……いや、待て。その動物用の手入れ道具はどこから取り出したんや。

しかも、犬たちはともかく、周りの人間はほぼ全員が固まったままだ。

「……セキト、嬉しそう」

唯一、呂布だけは同じように犬たちと遊んでいるが。

「――って、なんでやねん!?　アンタは呂布ちんを呼びに行ったんとちゃうんか!?」

回復したウチの叫びにも一瞥しただけですぐに興味を失ったように犬を撫で始めた。

「――はっ!?　あまりの突然さに呆然としてしまったのです!いきなりなんなのですか、お前は!」

それで陳宮も我に返ったようで問い詰めるが、今度は見向きもしない。

「ぬぬぬぬ……無視するなです!　ちんきゅーキーック!!」

「邪魔です」

憤った陳宮の跳び蹴りもあっさり足を掴まれ、無造作に投げ捨てられた。

「なぁぁぁぁあああ!?」

そのまま屋根上に突き刺さった陳宮を見て、改めて思う。

……コレはさっきのと同一人物か?

「ってか、なんやねん、お犬様って……」

お前は某幕府五代目将軍か!?

……はっ!?今何か妙な電波が。

「え～っと……いつまで続くん、コレ……？」

ちなみにその状態が彼の満足するまで確り数刻ほどかかった。

犬を愛でている間に呂布との意思疎通は出来ていたらしく、一応顔合わせという目的は達成できた。

……そう考えないとやってられん。

投げやりな溜息と共にそう言い聞かせ、尋常じゃなく無気力になった自分を納得させた。

第１４章　愚者の縋る細い糸

絆、というものは不確かで定義のし辛いモノだ。

時として、人を強く自由に羽ばたかせ、また時には、人を鎖で縛り腐らせもする。

と言ってもこの世界で不確かなものなんてそれこそ腐るほど在るモノ。

そして、それも当然だろう。

この世では何かを得るには何かを失くすことが絶対の掟として定められているのだから。

「……なに？」

だからこそ目の前で起きている現象もある意味では必然のことと言える。

……まぁ、失う物は目に見えるのに、得る物が見えないという詐欺紛いの等価交換ではあるのですが。

「……あの、呂布さん」

「……？」

「まだ、食べる気なんですよね？」

聞き方が誘導的なことは否定しない。

「……（コクッ）」

だが、そんなモノに釣られるような人でないことは嫌になるほど分かりきっていたりした。

不思議そうな顔を浮かべて止まっていたのも数秒、すぐに次から次へと運ばれてくる料理に取りかかる呂布将軍。

今居るのは、彼女の行きつけであるという飲食店。

そこで彼女は食べまくっていた……私の奢りで。

支払うのは金銭、得る物は彼女との信頼関係。

よしんば恩義を感じてくれる程度の対価で私の懐は加速度的に寒く、寂しくなっている。

「この絆が値千金となることを期待……できませんね」

不確かな物に信頼を寄せる程、お人好しにはなれない、とぼやいた私はお茶を一口啜り、現実逃避を再開した。

＊

可愛いお犬様と邂逅したあの日から、やけに懐かれた呂布を連れての昼食後。

路銀として用を成さない程度に空っぽとなった軽過ぎる財布を嘆きつつ、呂布と二人で城門の屋根に寝転がり、今は日向ぼっこの真っ最中。

先日、華雄さんとの手合せに登用試験を兼ねたことで、軍での今の立ち位置は武官ということになっていますが、軍に入ったばかりの私がすることは特になく、暇を持て余す日々。

武官として調練を行おうにも文官の方では例の厨二病連中が居なくなったことでてんやわんや、反董卓連合の事もあり、新入りに指示を出すことも、軍の編成について考えるのもままならない。

とどのつまりが放置。ついでに今日もまた街へお出掛け中の神霊さんも放置。

「……？」

隣で首をかしげる将軍様はお忙しいはずなのにいつも抜け出してきては私と共に時間を過ごすという怠惰ぶり。

注意しない私も私ですが、どこかお犬様に似た彼女といると落ち着くため、私に改善を促す必要性があるわけでもない。

いや、それ以上に何か理由がある気もしないでもないですが。そう、どこか懐かしさを感じるような……。

「――お～やっと見つけたで。呂布ちん」

「……霞？」

考えに埋没する私を現実へ引き戻したのは疲れた様子で現れた張遼将軍。

一通り呂布へ説教を加えた彼女は、しかし呂布に説教などは馬耳東風だとよく理解しているらしく、次なる標的を私へ定め、ジト目で無言の圧力を加えてくる。

「アンタもアンタやで、上代。一緒におるなら説得してくれてもええやんか」

「無茶を言いますね。私の言葉を彼女が聞くとも思えませんよ？」

彼女との間にあるのはせいぜい金で買った信頼関係ぐらいのものです。

「大体、アンタにも仕事がないわけやないねんで？」

「……はて、そんな情報は記憶にありませんが」

少なくとも調練や警邏を言い渡されたことはないと思いますが。

「華雄がアンタを探しとる、董母様とか陳宮もや」

「それ、仕事と何か関係あります？」

「三人の相手っちゅう大事な役目があるやろ？」

武官の仕事に上司の玩具となることは含まれませんよね？
というか、陳宮に至っては私を蹴りたいだけでしょう？

「ま、冗談は置いといても月っちとか董母様はアンタに用があるみたいやから、今からでも行ってくるべきやな」

「……仕方ないですね。わかりました」

華雄さんの用事が省略されるのはご愛嬌。
どうせまた手合せに決まっています。連敗しているのが相当悔しいようですからね。

「……恋も行く」

「ダメや。呂布ちんには別の仕事が残っとるんやから」

「……　（フルフル）」

「ダ・メ・や！　もし仕事せえへんのやったら食事抜きやで？」

「……霞、意地悪？」

「ええ、性悪ですね」

「どの口が言うん！？」

「この口ですが？」

「誇らしげに胸張んな！　サボり魔ども！！」

「正論を盾にするとは……悪辣な」

「……非道」

「え、ウチは正しいやろ！？」

そんな言い合いも日常。

呂布を引き摺る張遼さんを見送って、私も目的地へ足を向けることにした。

＊

Ｓｉｄｅ董卓

「ふぅ……これで一段落、かな……？」

目の前に積まれた様々な案件を処理していた私は、伸びをすると、疲れた頭を休めるように一つ息をはいた。

先日の出来事で人手が減った上、私達には反董卓連合をどうにかする、という課題もあるから詠ちゃんを筆頭に日々気苦労が絶えない。

反董卓連合。

その単語に気分が萎むのを感じた。私で出来ることを頑張ろうとしたのに、この結果を導いてしまったのが何より悲しい。

それに、私だけならまだしもお母さん達を始めとした仲間の皆まで巻き込んでしまったことで私の心はわかり易いくらいに乱れていた。

詠ちゃんや皆はどうにかして私を護ろうと、戦おうとしてくれている。

でも、それが大変なことであるのは彼女達の様子を見れば容易に窺い知れた。

また、多くの人が命を散らすかもしれない、他ならない私の為に。

背負う覚悟は出来ていた、でも、それでも私が原因となっているのはどうしようもなく私を落ち込ませる、私一人の命で皆を救えれば、そう考えてしまうほどに。

「失礼します……董卓様？　どうされました？」

「――え？　あっ、その……！」

いつの間にか溢れた涙、そして現れたのは驚いた様子の刃さん。

涙を見られた、と思い至った私は急いでそれを拭い、平静を装った。

「ど、どうしたんですか？」

「董卓様が私をお呼びしていると聞いたもので」

……そういえば、霞さんにそんな言伝を頼んでいた。

こんな状況で巻き込んでしまった彼と一度話がしたくて、それに改めてお礼も。

「あ、えっと……」

でも、いざ話すとなるとどう話していいかわからない。

ありがとう、だろうか、それともごめんなさい？　いや、恩人を巻き込んでしまったのだからまず謝るべきだろう。

「董卓様」

「ふぇ！？　は、はい！　な、なんでしょうか？」

だが、そんな考えは一息で霧散してしまった。

気遣わしげに此方を見る刃さんに己の発した奇声が恥ずかしくなる。

「私を無理に巻き込んだ、と気に病んでおられるなら、どうか気になさらないでください。その代わり、と言ってはなんですが、一つ質問してもよろしいですか？」

「っ！？　――は、はい。なんですか？」

自分の懸念をあっさり見透かされた私は心を必死に宥めながら、先を促した。

「失礼ながら、今回の連合との戦い、コレは相当に厳しいものとなるのは確実であると私は思います。で、あればこそ、大将たる董卓

様のお考えをお聞かせ願えませんか？」

「っ、そ、それは――！！」

どう、答えるべきだろう。

戦いに関しては連日、詠ちゃんやお母さんとも忌憚なく話し合った。

そして、私は、私自身は、完全な負け戦となることをどこか確信している。

戦力差は明らか、献帝が亡くなられて大義もあちらにある。

この戦いは……負ける。だからこそ、私の心はこんなにも乱れているのだ。

でも、それを一人の将として所属している彼に言うべきなのだろうか。

答えは、否だ。

不安を煽る大将なんて聞いたことがない。

まして、彼は多分ソレを理解した上で巻き込まれているのだ。

そんな彼に不安を打ち明けられるわけがない。

なけなしの、意味の無い気遣い、だとしても。

「確かに、勝てるかはわかりません。でも、私は仲間の皆と一緒に戦って、生き残ることを信じて戦いに臨みます」

「そう、ですか。……今回の戦い、多くの死者が出るでしょうね」
「……それでも、私には皆がいますから。全て背負って、共に戦います」
「（……まったく、絆、とは……本当に御しがたい）」
「？」
目を瞑り、ボソボソと呟く彼の声は小さく、聞き取れなかった。
「月、董母様が――なんだ、上代も居たのね」
そこへ新たに現れたのは軍師であり、親友の詠ちゃん。
「いえ、話は終わったところです。お邪魔になるようでしたら私は」
「ちょうどいいわ。董母様が二人を呼んでるから一緒に来て」
退室しようとする刃さんをひき止めた詠ちゃんは急いだ様子で歩き出す。
それを刃さんと一緒に追従する私はどこか、妙な予感を感じていた。
＊

賈駆さんに連れてこられたのは董卓軍の将が揃いぶみの会議室だった。
皆、一様に表情が優れないことから面白可笑しい会議ではなさそうだ。

「さて、今回の論点は一つ。反董卓連合をどう迎え撃つか、よ」

全員が席に着くと、賈駆さんが議題について発表する。
概ね想定通りの内容に若干気が重くなった。

「でも、賈駆っち、正直勝てると思うんか？」

「……思わないから、こうして話し合いを行っているんでしょ？」

「そりゃそっか」

「陳宮、あなたはどう思う？」

賈駆さんの言葉に珍しく顔を顰めた陳宮は苦々しげに口を開いた。

「恋殿とねねが居れば負けるわけがないのです！　と、言いたいところですが……今回はさすがに分が悪過ぎですぞ。？水関と虎牢関で耐えて蓄えが尽きるのを狙うしか……」

彼女の言葉で室内に沈黙が流れる。
賈駆さんもそれしかないだろう、と思っているのか顔を険しくするだけだ。

「――刃、貴方は何かないですか？」

そんな中、私に矛先を向けたのは黙って会話を聞いていた董母様。
鋭い視線は私をジッと見据えて動かない。

そして、部屋中の視線が自分へ集中するのを感じる。

……こういった問題は管轄外にも程があるのですが。無言が許される空気ではないですね。

「その前に……董卓様、それに董母様に董君雅様。お三方にお聞きしたいことがあります」

「なん、ですか？」

「董卓様、貴女はこの戦で皆を助けるためなら死んでも良い……そう、考えていますね？」

「上代！？　アンタ一体何を――！」

「……はい」

『！！？？』

董卓様の静かな肯定に、憤る賈駆さんや他の将もその顔を驚きに染めた。

そんな中、私は告げる。

不確かで仕方ない、とても現実的でない妄言を。

「――貴女がたという存在を殺すことが前提なら、一つ、愚にもつかない策があります」

第１５章　三文芝居は偽善に満ちて

反董卓連合。そんな名目で集められた時代を駆ける群雄たち。

だが、彼女たちは集合して早々その大義の名目を変更せざるを得ない状況となる。

献帝と標的である董卓の訃報。

その事実は洛陽を離れた民や、行商人の口から瞬く間に連合まで届いた。

その噂は、諸侯に多大なる衝撃を与えたが、同時に大義は当初を遙かに超える意義を持つようになり、彼女達には不謹慎ではあるが吉報と言ってもいいようなものだった。

それに状況自体は変わらない。

二人を殺害し、洛陽の政治を牛耳る栗嵩（りつすう）という宦官を討てばいいだけで、行動目的もほぼ同じ。

？水関と虎牢関に配置された将も軽視することはできないが、主君を殺され士気は下がり、立場も以前とは大きく違う。

人間、誰しも正しいと信じることが出来る行動は意欲面は勿論だが、信念のようなものを持てるという強みがある。

だが、今の彼女らは自身が従わされている状況も勿論だが、風評の面でも悪を自覚できる状況にある。

董卓軍改め栗嵩軍の敗北、それはもう決まりきった運命だった。

＊

Ｓｉｄｅ曹操

「歴史上、類を見ない程の度重なる政変、漢王朝も終わりね……」

曹操軍の陣営に設置された一際大きな天幕の中。自分を除いては入口の見張りしかいない静かな空間で小さく呟くと、思い出すように記憶を巡らせる。

領民や旅商人の噂によって知らされた政変と真実。それが私達に与えたのは大きな衝撃と安堵だった。

まず董卓の悪政が事実無根であるという真実。

これには内心冷や汗が伝った……。

董卓が悪政を布いていないのであれば、献帝を支える董卓軍を攻撃する私達こそ逆賊の誹りを受けることになる。

董卓が生存している間の洛陽は情報収集に隠密を何度放っても帰ってこず、行商などの行路も完全に遮断されていたため、確認できなかったということもあるが、少し早計だったのは認めざるを得ない。

しかし、それももう一つの政変によって逆転することになる。

献帝と董卓を殺害した栗嵩による暴政。

更には栗嵩が自身を帝と称し、反董卓連合に服従を促したことで私達は天の意思とでも言うべき大義に守られることとなる。

にしても……連合の総大将を名乗る麗羽の激昂ぶりは中々に見物だった。

ただでさえ、自分の掲げた大義名分がまったくのお門違いであったところへ、以前彼女が行った宦官の殲滅の中で特に目立たない小者、と討ちもらしていた者が嘲笑うかのように二人を殺害して服従を迫ってきたのだ。

顔を真っ赤にして地団駄を踏み、怒鳴り散らす様は見ていて呆れつつも笑いを誘うものだった。

今回の戦いはもう結末が見えている。

天がついている、という言い方は傲慢だが、事実そんな状況だ。

そう、本当に面白いくらいに自分達が正しく、勧善懲悪を形にしたような構図。

「……いえ、考え過ぎね」

その完全無欠な正義を、どこか気持ち悪く、作為的に感じる私は何故か以前取り逃した男の顔を思い浮かべていた。

＊

Ｓｉｄｅ賈駆

会議で刃が口にした策は、彼の言うとおり、明らかに愚策で最良を模索する軍師としては賛同しかねる内容だった。

有り体に言えば、馬鹿の絵空事だ。

でも、僕を始めとした全員が最終的にはソレに賛意を示した。

理由なんて一つしかない。

月を、董卓親子を死なせたくない、それが臣下の偽らざる意思だったから。

そして、今僕は栗嵩軍と反栗嵩連合軍の戦闘の行われている？水関で待機中。辺りは戦闘時の慌ただしさこそあるものの、徹底して防衛のみを行う栗嵩軍には淀んだ空気が漂っているのが見て取れる。

現在、栗嵩軍の配置は？水関に華雄、陳宮、虎牢関に張遼、洛陽に呂布と刃となっていて、今は？水関での籠城戦により戦局が硬直している。

だが、栗嵩軍の士気は明らかに低く、戦闘にも消極的なのは一目瞭然だった。

「詠ちゃん」

「どうかした、月？」

隣で不安そうにしていた月が話しかけてくる。そのさらに隣へ目を向けると彼女の両親の姿も見えた。

いずれもその恰好は以前までの煌びやかなものではなく、兵達の中に埋もれるような地味な服装へと着替えている。

「あの、じ――あ、そ、その、皆大丈夫かな……？」

慌てて言い直したけど、誤魔化されるような僕じゃない。

「僕にはアイツがそうそう死ぬような人間にも思えないけどね」

「そ、それは、ちょっと失礼な言い方かも……」

月が口にしかけた上代刃、という男について思い返す。

あれは、洛陽から？水関へ出発する時のこと。

「アンタも相当に甘い考えの人間よね。軍師の見解を言わせてもらえば大馬鹿以外の何者でもないわ」

「はは、賈駆さんにそう言われるのは予想してましたよ」

苦笑いする上代はいつものように呆けた掴み所のない表情。

「ううん、刃は優しいんですよ、ね？」

「無理矢理巻き込んだ貴女が言いますか……？」

慧様の言葉に上代の顔がひきつり、それを見た慧様は嬉しそうな表情を更に歪めた。

ほぼ脅迫に近い手法を駆使した慧様が悪びれずに言う光景にさしもの僕も人知れず顔がひきつるのを感じる。

「それに、優しさで言うなら貴女がたも大概ですよ。董卓様のことを想って今回の博打に乗ろうというんですから」

それは……確かにそうかもしれない。

でも、それに違和感を覚えないのが月の凄い所だと僕は思う。

「嬉しいこと言ってくれるじゃないですか♪」

「貴女には言ってません」

「ふふっ。貴女、じゃなくて慧、ですよ、刃？」

「け、慧様！？」

「……どういうつもりでしょうか？」

何の脈絡もなく、真名を預けた慧様に驚き声を上げるが、慧様はまったく意に介さず言葉を続けた。

「今回の策が成功して、生き延びれるかもわからないのなら、一蓮托生の仲間でしょ？　真名を預けてもおかしくはないと思うけれど」

……正論ではあるが、毎度この方の行動は突飛だと思う。

「そう、ですか。わかりました、真名、謹んでお受け致します。私に真名はありませんので、これまで通り刃と呼んでください」

「了解、じゃ次は月と詠の番ね」

「って、当然のように言わないでください！」

そして毎回巻き込まれる僕達の身も慮って欲しいとも思う。

「――は、はい！　わ、私は姓を董、名を卓、字は仲穎。真名は月

です！」

……何の疑いもなく乗せられる月を少し不安に思う今日この頃。
だが、筋が通った話であるのは認めざるを得ないし。

「……私は賈駆、字は文和、真名は詠よ」

「お二人の真名、確かにお受けしました。……あの、そんなに睨むくらいなら無理しなくても――」

「うっさい！　一度預けた真名を撤回しろっての！？」

「いや、あの……なんかスミマセン」

「なんだ、仲良しじゃないですか」

「どこが！？」

慧様の目に世の中がどう映っているのか少し不安になってきた。

「あら、詠だってこの案に乗ったということは少なくとも刃を信じているんでしょう？　命を賭けられるくらいには」

「むむ……」

いつものことだが、時たま鋭い慧様は卑怯だと思う。
今の状況で反論しても無意味だし、それでも納得いかない僕は黙るしかない。

「そうですね、信頼に沿えるよう私も祈ってますよ」

「それに、貴方も死んじゃ駄目ですよ、刃。貴方にゆくゆくは娘のことを任せるつもりなんですからね」

「サラッと空恐ろしい計画を暴露しないでください。詠さんが睨んでるじゃないですか」

別に、睨んではいない。

頬を赤らめた月を見て、刃を殴りそうになったのは事実だけど。

「――上代殿、準備が整いました」

「ご苦労様です。……すみません、月様。出発前に一つ、よろしいでしょうか？」

出発の知らせに、刃も表情を引き締めて月を見つめた。

「は、はい」

「貴女……いえ、貴女と臣下の間には確たる絆があります。それは、彼らの忠誠心はもとより、貴女の彼らの運命を受け止め、背負う強さがあるからに他なりません」

目線を月に合わせ、優しげな表情を浮かべる刃に思わず見入ってしまう。真摯で包容力のある目は今までに見たことのないものだった。

「だから、貴女はそのままで……自分が一人ではない、というあの言葉を忘れないでください。いいですね？」

「――はい」

よろしい、と満足そうに頷いた刃は将に出発の旨を伝え、自身も準備のために城内へ向かって歩き出す。

「じ、刃さん！」

「はい？」

それを呼びとめた月はとても綺麗な笑顔を浮かべて続けた。

「その皆には刃さんもちゃんと入ってますから。それを、忘れないでくださいね」

「……ええ、肝に銘じておきます」

それに悪戯っぽく微笑む刃の顔は、何故か私の脳裏に焼き付いて離れなかった。

「……ふむ。変な、じゃないか。気味の悪い、は言い過ぎ？」

自分の中で刃への評価が定まらない、ある意味不気味なのは確かなのだけれど。

そんな彼から渡された書簡。

それをボーっと眺めながら”少なくとも嫌悪感を覚えるほどではないが、人格が信頼に値するかは微妙”という結論を便宜的に下して、思考を切り替える。

まだ気を抜くには早すぎる。僕はもう一度、段取りについて考えて、

「た、大変だっ！！」

聞こえてきた伝令の大声に気を引き締めた。

「さて、ここからね」

硬直した今の戦況を僕達の軍と一緒に大きく瓦解させる一報、それは、

「洛陽の呂布将軍が栗嵩を裏切った」というものだった。

第１６章　幕間。裏方のお仕事と記憶の欠片（前書き）

２０１１／０７／２０
修正しました。

第１６章　幕間。裏方のお仕事と記憶の欠片

大なり小なり人を率いる者にとって風評というものはかなり重要な意味を持っているのは少し考えれば当然のことだ。

風評、ひねくれた言い方をすれば民意とも取れるその見えざる意思は、しかし確実に世の中を動かしている。

どんなに優れ、強い力を持つ統治者であろうと、その意思を管理することはできず、いずれはそれによって身を滅ぼすことにもなる。栄枯盛衰とは誰しも避けることのできないことであるということの一因でもあるだろう。

だが、それはとてつもなく大きなモノでありながら、容易く変容する柔軟性を持った厄介極まりない代物だったりする。

で、あるなら誰にも自由にできないモノでありながら、それを意図的に動かすのは無名のペテン師でも可能だということだ。

だからこそ、この世界はままならないモノであるのだろう、と考えたり、考えなかったり。

……どちらにしろ、諦観に浸った退廃的で不愉快な話ではありますが。

「どうも、栗嵩（りつすう）さん」

暴政が布かれ始め、あの檄文さながらの状況となった洛陽の都城。
その一室で黒鬼を片手に携えながら見つめる私の視線の先には、一人の男が身を震わせている。
困惑と恐怖に彩られた表情を浮かべるその男は栗嵩。私達によって生かされ、今回の生贄に担ぎ上げられた哀れな宦官の一人だった人物。

「か、上代に呂布、いったい私に何の用だ!?」

「お気になさらず、すぐ終わります。呂布、他の者の確保は？」

「……（コクッ）」

部屋に居るのは私を含めて三人のみ……ああ、いえ。私の肩に止まるすーちゃんも入れて四人（？）ですか。
城内も静まり返り、喧噪から切り離された空間で栗嵩の喚き声ばかりが響く。

（念のためにもう一度聞きますが、他には誰も逃げ出してませんよね？）

「大丈夫だって、私の索敵能力を信じなさい。ま、そんなに心配ならもう一回りしないこともないけど――」

（わかってます、ちゃんと後で好きなだけ食べさせてあげますよ。なので最終確認を）

「わかってるならよろしい。じゃ、行ってくるかな」

（ええ、行ってらっしゃい）

霊体化して消えていくすーちゃんを見送り、喚く栗嵩へと視線を戻した。

「じ、城下での噂はなんなのだ！？　なぜ私が逆賊の首魁に！」

そんな中、彼の発した一言で無意識に自分の眉がピクリ、と吊り上る。

「ほう、監禁状態だったというのに、あの騒ぎでは伝わりますか」

「や、やはり貴様らの仕業か！　何の目的があって――」

「目的は一つ、貴方のその汚れた首ですよ」

私のにべもない言葉で絶句し、視線に込めた殺気にあてられたのか尻餅をつく彼の表情は恐怖一色へと変わっていく。

ここにきてやっと自身の末路を理解できたようです。

「……く、なぜ私を殺すのだっ！　私が何をした！？」

と、思いましたが、さすがは私腹を肥やすために弱者から搾取し国を腐敗させただけはあります。まだ喚きますか。

「自身の行いを顧みもしないその性根も大概ですが……あえて、こう言いましょうか。私は、自分の為に貴方を殺します。計画のために死んでください」

歩み寄る私は片足を上げると彼の太腿を踏みつけて動きを止める。

「ぐっ！？　ふ、ふざけ――」

もう語ることはない。

依然言葉を紡ぐ口は躊躇いなく振りぬかれた黒鬼によって首を斬り落とされ、その役割を終えた。

「呂布、隊の皆さんに彼の首を運ばせてください。私は残る者達が集まった広間へ行きます」

「……恋も、行く」

踵を返した私の服を引く呂布の顔は俯いていて見えない。

だが、腕に込められた力が拒否を許さないことを物語っていた。

「……わかりました」

どうしてか、彼女を見ていられず、目をそらす。

胸にチクリ、と刺すような痛み。

一つ息を吐き、心を切り離す。

広間へ向かう途中、呂布隊の者に栗嵩の首を任せた私はふと、黒鬼の刀身に映る自身の顔を見つめた。

そこでは、どこまでも無感情な人形がまるで此方を嘲るかのように微笑んでいた。

＊

Ｓｉｄｅ公孫賛

「はぁ……」

自軍、公孫賛軍の陣営で人知れず溜息をつく私の気分はあまり良いものじゃなかった。

圧倒的優位に立った連合軍に所属していながら、おかしな話ではあるけれど。

「桃香……」

？水関の前に立つ、旧友が率いる軍を一瞥して私は少し前の軍議へ思いを馳せた。

「ぐぐぐ……なぜ栗嵩などという小者が率いる軍に手こずっているんですの！？　私はすぐにでも奴のもとへ急ぎ、その首を刎ねなければならないというのに！」

激昂するのは連合軍の総大将になった袁本初こと麗羽。

先ほど献帝や董卓の訃報を聞き、憤り冷めやらぬまま自軍で？水関へと突撃。が、いくら勢力が勝っているとはいえ、あんな考えなしの突撃だ、？水関を破るのは無理というものだろう。その上、栗嵩軍には勝とうという気概を感じられない。防衛に徹する戦法は正しくも消極的過ぎる。

結果、他の諸侯が思った通り兵を無駄に減らすだけに終わった。

「アンタが考えなしに突っ込むからでしょ、麗羽」

曹操は率直にして辛辣な意見を述べ、侮蔑の視線を送る。

「まったくじゃ、妾に任せれば良いものを。まるで子供じゃな。な、孫策？」

「はいはい、そうね～」

袁術の勝ち誇ったような笑いに麗羽の顔がみるみる赤くなる。……またか。

「貴女のような餓鬼に子供呼ばわりされる謂れはありませんわ！　子供はさっさとお家に帰って寝ていればいいでしょう！」

「誰が餓鬼じゃ！」

「あ～ら、そこの蜂蜜離れできないお子様に決まってますわ！　おーっほっほっほっ！」

こいつらの喧嘩が始まると長いんだよなぁ……。

「……ん？　桃香、どうかしたのか？」

馬鹿の騒ぎ声を無視して、隣の桃香に声をかける。その顔はどこか疲れたような、沈んだ表情が浮かんでいた。

「え？　あ、えっと、その――」

明らかに挙動不審な桃香に首をかしげる。思えば、この連合軍に

参加してからというものどこか元気がなかった。

「と、桃香は？水関がどうやったら攻め落とせるか考えてたんだよ、な？」

「あ、う、うん！」

それをこれまた怪しい様子の北郷が遮るように声を張り上げた。

苦笑いを浮かべる二人……怪し過ぎる。

どうしたのだろう、留守に残っているという神城が関係しているのか？

「あら、それは本当ですの？」

考え込む私の思考を断ち切るように声を上げたのは喧嘩の真っ最中であったはずの麗羽だった。北郷の声が大きかったからか、諸侯の視線が劉備軍の二人に集中する。

「え〝！？　……あ、うん、ま、まぁ」

北郷の上ずる声に思わず溜息がもれる。

それじゃ、どう見ても嘘ってばれるだろう。

「なら、次はあなた達に攻略を任せますわ。精々頑張って連合軍の勝利に貢献しなさい」

って、ばれてない？　……ああ、こいつは思考停止と空気読まない、の二重苦持ちだったっけ。

――いや、待て。攻略を任せるって、

「待てよ、麗羽。そんな無茶――」

「あら、いいじゃない。任せてみましょうか」

「曹操!?」

いくら此方が有利だからって劉備軍だけで?水関を攻略なんて無茶に決まってる!

「む～。七乃～妾も～」

「大丈夫ですよ、美羽様。どうせ無理なんですから」

「え、あの――」

「では、そういうことで決まりですわね。よろしくお願いしますわ、劉備さん」

ほとんどの諸侯は反対意見を挙げるどころかむしろ賛成に傾いている。

「ま、待てよ！　そんなの――」

私や桃香達の声も届かず、曹操を始めとした諸侯は各々の陣営へと戻っていく。そして麗羽までもが帰った時、劉備軍の?水関攻略は決定となった。

「あの軍勢で攻めるのはかなり難しい、いくら有能な武将と軍師がいるにしても……それに、桃香のあの様子……」

何か懸念事項があるのは間違いない。

それが何かはわからないが、戦いに臨むような顔ではない。

救援に向かうのは可能だ。でも、私も自軍やひいては自分の治める領地を守るためにも無駄に首を突っ込むわけにもいかない。

「ああ、もう。甘いな、私は……」

思わずついた悪態に私は苛立ちを禁じえなかった。

＊

吐き気がするような匂いの充満する赤い広間。

床を染め、生々しい死の香りを発する血の海の中に立つ私は感情のこもっていない視線を贄となった肉塊へ向けていた。

宦官やそれに繋がりを持っていた者を始めとして計画の障害となりそうな者を現在の主君を守るために一斉粛清した、と言えば聞こえはいい。

だがその実、自分の思うとおりに事を進める上で邪魔な者を虐殺しただけ。しかも厳しい判断基準から“可能性がある”だけで殺される謂れのない者もまとめて、というのだから救いようのない三流悪党だ。

「……呂布」

ガタン、と扉の開く音に視線を移す。そこには部屋の外で待機させていた呂布の姿があった。
開かれた扉、部屋の外から伏し目がちにこちらを見る目に宿るのは静かな憐憫、いや悲哀か。

「……刃」
《……なんで》

「――っ！？　く……！」

その瞳を見た瞬間、頭に鋭い痛みが走った。
脳裏に浮かぶのは確かに記憶に残っているはずの少女。その悲しげな瞳が呂布のものと重なり、私の胸に貫くような痛みを植え付けた。

感じるのは寂寥、そして温かな親愛。それでいて守りたい存在であってもソレは違う、と正反対の感情が去来していた。

「……なぜ、来たんですか」

必死に激情を切り離し、平静を装って聞いた。

「心配、だった」
《いつも一人で、抱え込むの？》

彼女の言葉にまた、鈍い頭痛を感じたが気にしないようにして一つ息を吐いた。

「いえ、心配には及びません。次へ行きましょう」

自身の余裕の無さに苦笑がもれそうだったが、顔が引き攣って表情を崩すことは叶わなかった。そんな自分の不甲斐なさに再び呆れ、彼女のこの凶行への参加を断固拒否して正解だったと確信する。

個人的な感傷でもこんな三下の謀略で汚したくはない。救うための経過を無視するというのも詭弁ではあるが、結果は全てにおいて優先されるのだ。

「っ！？」

突如、体がのけ反った。

見れば、呂布の隣を通ろうとした際、彼女に腕を掴まれていたらしい。それにすら気付くだけの余裕が無いのか、今の私には。

「刃のこと、心配」

さっきと同じ言葉。だが、今その目ははっきりと私を見据えている。

そう、だった。

彼女は常に素直だ。言葉や瞳にこもるのはただこちらを案ずる気持ちのみ。

そのあまりに真っ直ぐな彼女から目を背けようとして、できなかった。

《私達、仲間だよね？》

そして、同時に痛みは激しさを増した。

「ぐ――!?　……ふ、不要、な気遣いです。その手を、離しなさい」

「嫌」

いつものように首を振るでなく、言葉とした明確な拒否。今も徐々に強くなる痛みが私から冷静さを欠かせる。

《貴方は、どうしたいの？》

「わ、私に構――!」

「……守るから」

《私が……守るから》

「……な」

記憶と言葉が、重なった。

そして、生まれたのは無かったはずの執着と心を埋め尽くす空虚。

さっきの言葉が私を縛った錠を開ける鍵であったかのように。

私の意識は、そこで途切れた。

＊

「――ん？　あ、私、は……？」

暖かい。

妙なまどろみの中で目を覚ました私は少しの間呆然としていたが、視界に映る呂布の姿と天井で自身が彼女の膝枕で眠っていたことを理解した。

目覚めた私を窺う目は心配そうに伏せられていて、その真っ直ぐな好意にまた記憶の中の誰かと重なった。

そう、記憶だ。

記憶というものが私の空っぽな心に幾ばくかの色を与えた。無色な中に生まれた、色という染みは残る空白を痛いほどに感じさせる。

「……怖、い」

怖い……？

……そう、か。今、私は明確に、疑う余地もなく、どうしようもない寂しさを感じているらしかった。

かすかに震える体が、額に当てられた呂布の手、その温もりに情けないほど縋りついている。

「……刃、大丈夫？」

「……すみません。もう、落ち着きました」

「良かった」

「……あの……もう少しだけ、このままで」

小さな私の頼み、それに頷いた彼女を見て安堵の息を漏らしそうになる私に気づき、代わりに苦笑いを浮かべた。どこまで情緒が不安定なんだろう、と。

静けさに包まれる城の廊下、その一角で記憶の断片に頭を悩ませる。

記憶。

考えてみれば、それは自己を自己たらしめるモノであるのに私には知識という種の記憶しかなかった。

そして、その記憶が私にどのような影響を与えるのか。

目を塞ぎ、忘れてもいい。でも、賽は投げられた。

それに、自分を作り上げた軌跡だ、気にならないわけもない。

過去であり、戻れない世界でも追い求めるだけの価値はあると思いたい。

「……ん？」

考えに埋没していた私を現実へ引き戻したのは袖をひく感触。

目を向けると呂布が自身を指さしていた。

「恋」

「えっと……？」

「真名、恋」

そこで彼女の言わんとしていることを理解する。

「私は刃です。改めて、よろしくお願いします、恋」

私の言葉に幾分か気分良さげに頷く恋を見て、思わず笑みがもれる。

「……意外、ですね」

彼女の真名を受け取り、少しだけ満たされた気分になった私は内心、不思議とすぐに気持ちの整理ができたことに我ながら驚いていた。

落ち着き、受け入れた記憶は曖昧で、全貌などには一分も届かない。それでも、少しの空しさを置いていったけれど。

まぁこの世界で生き残る理由が一つだけ増えましたが、むしろ喜ばしく思っておきましょう。

「――さて、あまりのんびりもできません。仕上げをしに行きましょうか」

立ち上がった私は自然に、それでいて迅速に周りを見回した。今は城内の確認に従事しているすーちゃんもそろそろ帰ってくるでしょう。こんな姿は見せたくありません。

「……　（コクッ）」

頷いて同じように立ち上がる恋は、しかし私の腕を固く抱いて離さない。

「あの、恋？　私はもう落ち着きましたから」

「……？」

首をかしげる彼女の力は異常に強く、無理にほどこうとすれば肩やら腕の関節がもれなくパージされかねない。

「……なんでもないです」

……彼女の好意に少しだけ心地良さを感じていたのは、さすがに口にできませんね。

こうして、体の大切な結合部を守るために譲歩した判断が正しかったと知るのは後に合流したすーちゃんが実は一部始終を見ていたことを笑いながら話した時だった。

ちなみにその笑う神霊を斬ろうと黒鬼を振り回して徒労に終わったのが尋常じゃなく腹立たしかったことをここに明記しておく。

第17章　終幕。信頼と欺瞞、一枚のワイルドカード

軍師、という人たちは現実的な現在を見つめながらも、未来というとてもあやふやなものを相手にする役職でもあると思う。

運命を導き、可能性を模索して提示する。

彼の者はそんな数多くある運命の道筋から最も可能性の高く、自身で妥協できるような道を掴み、策を弄してそれを手繰り寄せる。

だが、それも自分の視界のみでは把握しきれるものではない。他者の干渉もある。

かと思えば、勘という第六感で予期せぬ最良を手にする者もいる。

世界は普遍的に平等に不平等、というわけだ。

え？　何当たり前のこと言ってるんだ、って？

……たまにはそんな常識も確認したくなるような事態が起こり得る、ってことですよ。

＊

Ｓｉｄｅ賈駆

？水関へ籠ってからしばらく、栗嵩軍は徹底して籠城戦の構えを崩さなかった。

最初、物量と勢いのみで突貫してきた袁紹軍には驚きつつも呆れたものだけど、同じように僕達の隣で、

「あんな雑兵どもを相手に籠城など必要ない！　今すぐ出陣して奴らに一泡吹かせてやればよいではないか！」

とか今回の主旨を全く理解していない猪、もとい華雄には呆れを通り越して無知な子供へ向けるような生温かい感情すら湧いてくる。

「今回は無駄な戦いは避ける、ってことになってるでしょ。それにいいの？　出発前にあれだけ刃が釘を刺していたのに、それを無視して」

「ぐ、む……それは、そうだが」

すぐに思い直して、それでも苛立ちは露わに押し黙る彼女にまた一つ大きなため息がもれる。？水関に着いてからというもの、もうかれこれ十数回は今のような世迷言を言い出すのだからその脳筋ぶりには恐れ入るというものだ。

僕や陳宮だけでなく、月まで此処へ置いた刃の采配に改めて感謝する。主への忠誠はしっかりと持っている華雄なら少しでも彼女を危険にさらすような行動には自制心が働き、渋々ながら抑えるだろう、という予想通りだ。

まぁ、それ以上に、

「刃にあれだけ苛められれば少しは懲りもするか……」

「くっ……！」

顔を顰める華雄は洛陽にいた時に、ことあるごとに刃へ手合せを申し込んでいた。

そして、途中までは嫌々だったはずの刃は華雄の猪突猛進ぶりに呆れ、同時にそれを矯正しようと倒す度に授業と銘打たれた苛め、もとい個別講義を始めたのだ。

しっかりとした論理的な用兵術を知れば、猪っぷりも改善される。というなかなか理に適ったものだったはずなんだけど……相手が悪かった。

華雄の直感と感情で判断するところは刃との手合せごとに設けられた講義の甲斐もなく、ほとんど改善されることはなかった。

しかし、講義の度に嫌というほどしごかれたためか、華雄が涙目で僕達に助けを求めてきた時にはほんの少しは同情したものだ。

「まぁ、現在の状況では同情どころか突撃しようとした瞬間、縛り上げさせて刃につきだすけどね」

「ううっ……」

唸って小さくなる華雄。理詰めの長時間講義は彼女に相当な恐怖を植え付けたみたいだ。

「さて、あとは時期を見極めるだけなんだけどね」

洛陽からの噂は順調に伝播していっているようだし、後は連合軍に伝わったのを確認するだけ。全将兵への伝達も既に済んでいる。

あれ、そういえば、

「華雄、陳宮は？」

「ああ、陳宮ならさっきむくれながらぎゃあぎゃあと騒いでいたが」

「はぁ……馬鹿ばっかりね」

同じく此処に配置された陳宮にも困ったものだ。呂布と離れて行動することに不満があるのはわかるが、刃への恨み言を言いながら再会時の蹴りを練習するくらいなら軍師として働いてほしいのだが。これぱかりは上手く難を逃れ、一人で悠々と虎牢関に陣取る張遼の要領の良さが恨めしい。

と、そんな中に見張りの兵が駆け寄ってくる。

「賈駆様、連合軍に動きが！　おそらく洛陽からの噂が伝わったものと思われます！」

「そう……目の前に陣取っているのは劉備軍、か。怖いくらいにアイツの想定した展開通りね。注意するべき曹操軍もまだ動く様子はないし」

何より情報が伝わった今、行動は迅速なほどいい。

「門を開けて。華雄、月達を連れて出るわよ」

「ふ、やっとか。籠城する必要がなくなった今こそ――」

「余計なことしたら、個別講義……」

「なっ……！　わ、わかっている！　粛々と投降すればいいのだろ

う！？」

まったく、気が抜けない。

一つ溜息をついた私は刃から渡された書簡を取り出すと、月達を連れて行動を開始した。

＊

Ｓｉｄｅ諸葛亮

策の要とも言える、華雄将軍への挑発。それの成功を願う私のもとへ急遽飛び込んできたのは「洛陽の呂布将軍が栗嵩の暴政を見かねて裏切り、連合軍へ降伏の意を示した」という予想だにしていなかった情報だった。

そして、ある意味当然、というべきか？水関は開け放たれ、策を弄するまでもなく、元栗嵩軍の将たちは降伏を宣言した。

「……」

胸をなで下ろすべき状況なのに、私がまず感じたのは違和感だった。

これまでの政変もどこかおかしかったけど、悪政を布いた栗嵩に明らかな不満を持っていた配下の将たち、そして栗嵩は軍でも屈指の武将に討たれ、栗嵩軍は降伏する。

私達が関与することがない、まるでそれは出来上がった物語をただ傍観しているかのような感覚。

「朱里ちゃん。これって変……だよね？」

私と同じような感覚を覚えたのか雛里ちゃんもどこか浮かない顔で首をかしげている。

「うん。どこか……作為的っていうか、筋書きが用意されたような違和感があるよ」

勿論、そんなことが出来るとは思えない。でも、そんな中にもその可能性を捨てきれないことに驚きを覚えずにはいられなかった。

だが、そこで、私達は更なる驚きに襲われることになる。

最も門に近かった我ら劉備軍へ降った多くの兵の中に紛れた女の子。

劉備軍へ降った華雄将軍や賈駆さんの懇願で桃香様の前に現れた彼女は、とある書簡を差し出した。

「これは――！？」

宛名を見た全員が揃って驚愕の表情を浮かべる。

「刃、様……？」

そこには、見慣れた筆跡で確かに“上代刃”という名が記されていた。

＊

「領民の避難はどうですか？」

「ん、全員終わった」

「それは重畳、では連合軍が来る前にさっさと終わらせますか」

恋率いる呂布隊の皆さんによる領民の避難も片付き、そして私たちの目の前には赤々と燃え盛る都城。

残るは後始末と、隠蔽工作。それでこの騒動も一つの終局を迎える。

簡単に言えば今回の“出来の悪い狂言作戦”は内輪で揉めた事実を広めることによる心理操作という一言で片づけられるものだったりします。

まずは、例の白装束を掃討した際に、事情を聞きだす為に生かしておいた宦官の栗嵩を装った私が将軍たちを連れて、洛陽を闊歩、董卓一家の殺害という誤報を流す。勿論、白いフードで私の顔は隠してますがね。

次に明らかな、それでいて死人がでない程度に暴政を布き、領民や商人を装った兵を都からわざと逃亡させると、洛陽の状況を少し誇張して流布する。

そして、前もって打ち合わせしておいた将軍たちには従わざるを

得ない状況で嫌々戦っているように装ってもらって、戦いをぬるく長引かせる。

ついでに栗嵩の名で諸侯を挑発などして、印象を強めれば準備万端。

そして時期を待てば、後は簡単です。

栗嵩の首を刎ね、呂布将軍の裏切り、という体(てい)で領民たちを救う。

栗嵩の首だけあればいいので、最後に証拠を隠滅するために都城へ火を放つ。これには現在進行形ですーちゃんに当たってもらってます。

前とほぼ同じ要領でその情報を流し、将軍たちが降伏すれば作戦は終了。

邪魔者は全員消しましたし、徹底した情報統制を布きましたから大丈夫……だと信じたいですね。

城の放火に関しては死人に口なし、栗嵩になすりつければいいでしょう。

しかし、かなり綱渡りの作戦であったのは否めない。

何よりもまず、この作戦では董卓軍の信頼関係が全てと言ってもいい。

敢えて全将兵へ伝えたこの作戦を誰かが声を大にして吹聴でもすればこの作戦は水泡へ帰す。

コレが上手くいったのは偏に主君と将に対する忠誠心の賜物でしょう。彼女たちには提案した私も脱帽です。

加えて、月さん達の安全を図るために、劉備軍への投降、そして書簡による説明と助命の嘆願。これも成功率は高いと信じていても不安要素の一つでした。

まさか私が彼女達の甘さにベッタリと甘えることになるとは夢にも思いませんでしたが。それに、私の提案を信じた月さん達の気概も大したものです。

今のところ、ばれていないことを考えればどちらの懸念も杞憂だったようで何よりです。

今回の作戦には信頼、という不確定要素が多すぎる……というかそれしかないため愚策中の愚策ではありますが、時には博打も悪くない、ということでしょうか。

「しかし……気が重いですね。後々彼女達の下へ戻って何を言われるやら」

勝手に飛び出して、さらには突然の不可解過ぎる嘆願。どんなペナルティが待っているかは想像するのも怖ろしい。

一日中正座で愛紗の説教とか……あ、ヤバい。想像しただけで天に召されかねない。

いや、その前に陳宮に無理を言ってしまった仕返しに跳び蹴りが先ですかね。

「そういえば、貴女はどうするんです？　誰に降るか決めてますか？」

「……なにが？」

いや、そこは首かしげるポイントではありませんよ。

「恋、ついてく」

「その、私に突き付けられた指はどういう意味でしょう？」

わかっていても問いかけなければならない時はある。いつの間にここまで人間臭くなったのか自分でも不思議ですが。

「一緒」

「む……いや、否定する理由もありませんが、いいんですか？」

「……　（コクッ）」

「そ、そうですか」

そっと、胸をなで下ろそうとして、止めた。惰弱極まりないですね。

「……刃？」

ま、まぁ、どうやら私は彼女に対して自覚できるくらいは好意的のようですし、もれなくお犬様がセットなのには諸手を挙げて歓喜したいくらいですから。こういうのも悪くはないです。

……私も人のことは言えませんね。

そんなことを話しているうちにも作業は完了。

これで例の連中も残らず掃除しましたし、証拠となりそうな物も焼却済み。お犬様たちも呂布隊によって避難しました。

そろそろ連合軍も到着する頃だろうし、仕上げもギリギリ間に合いましたね。

「さて、後はすーちゃんが戻ってくるのを待つだけですか。一応、私でも証拠は出来るだけ隠滅したつもりですが、まさか残って――」

「ねぇ、刃。コレは？」

「ん？　ああ、それは伝国璽ですね。貴重ではありますが、特に証拠には――――は？」

「ふ～ん、コレがねぇ……」

「な、なんで――」

「ん？」

「なんで、さも当然のように貴女がいるんですかっ！？　孫策さん！！」

「あ、覚えててくれたんだ？」

「一瞬、すーちゃんだと思った私を殴ってやりたい……！」

不味い、とりあえず非常に不味い。いくらなんでも到着が早すぎる。一体、どこから聞かれていた？

それに、いくら気を抜いていたといってもここまで自然に近づかれるとは。ともかく誤魔化さないと――

「で、証拠、って何のことかな♪」

……にこやかに言う孫策さんに困惑はなく、その笑みには確信がはっきり浮かび上がっている。

人間、必ずしも思った通りに事は運ばれない。

この世は、明確に不平等だ。そう、失念していた私にはもう怒りも覚えない程。

「貴女が、私のジョーカー（理不尽な存在）でしたね……」

特に、彼女の第六感はその条理を時に捻じ曲げるであろうことを知らなかった私は“偶然という名の必然”という言葉を呪う他なかった。

第17章　終幕。信頼と欺瞞、一枚のワイルドカード（後書き）

とりあえず、反栗嵩連合編完結です。

散々長引いておきながら盛り上がりに欠ける終わり方で申し訳ありません……。

できれば刃を戦わせたかった！

私にストーリーを構築できるだけの文才があれば……ないものねだりですね、はい。

読んでいて面白いモノを書けるよう精進していくつもりなので、何か気になる点や、感想、誤字などあれば大歓迎です！

第１８章　闇魔の審判。再会は激痛と共に（前書き）

遅ればせながら……お気に入り登録１００件を超えました！

いつも読んでいただいている方、ありがとうございます！

アクセス数とかも増えているのですが、なにぶん素人なので何が何やらよくわからない……ｏｒｚ

第１８章　閻魔の審判。再会は激痛と共に

「ただいま～」

「刃様！」

「良かった……無事だったんだな」

「心配、しました……」

久しぶりの再会で朱里達との間には温かな、居心地の良い空気が流れる。

「まったく、ただいま、ではありません！　私達がどれだけ心配したと――」

「ふふっ。ええ、特に愛紗の落ち込みようは凄いものでしたよ」

「なっ！？　何を言うのだ、星！」

よほど心配してくれていたらしい愛紗は星の軽口に顔を赤らめ、どこか落ち着きなさげにこちらの様子を窺っている。

「心配をかけてすみませんでした、愛紗。貴女達も無事でなによりですよ」

「……はぁ、刃様は仕方のない人ですね。今回はこれで許しますが、もう勝手に居なくなったりしないでください。貴方は私達の大切な主君なんですから」

「にゃはは、愛紗は素直じゃないのだ！」

「だよね～。愛紗ちゃん、書簡見てからすっごく嬉しそうだったもん」

「と、桃香様！　べ、別に私は刃様に会えるのを楽しみにしていたわけでは――」

「ないの？」

「な……くもないですが、その、それは……」

皆からからかわれる真面目で正直者の愛紗を見ていると自然に笑みがこぼれた。

「愛紗」

「な、なんですか？」

「ただいま」

「……おかえりなさい」

こうして私は劉備軍の面々と穏便に心温まる再会を果たすことが出来た。

という願望に満ちた白昼夢を想定していた私は確かに馬鹿でした。

が、それでもこの法廷を思わせるような厳粛で圧迫感のある雰囲気はおかしいでしょう。これに関しては私に否はない、はずだ。

「さて、では私達の質問に答えていただきましょうか？」

目の前で仁王立ちし、鋭い視線を向けているのは物凄くお怒りになられているらしい愛紗。

隣に立つ星も普段の飄々とした様子はなく、とてもイイ笑顔を浮かべられている。

ちなみに私は地面に正座をさせられ、太腿の上に伊豆石のような大きい石を載せられていたりします。

……あれ？　これ十露盤（そろばん）がないだけで明らかに石抱（いしだき）ですよね？

質問から尋問すっ飛ばして本物の拷問になってますよね？

「ど、どこからこんなものを……」

「洛陽の蔵から拝借したのですよ。ちなみにまだまだたくさんありますので」

すごく要らない情報をありがとうございます。

「まずここに至る経緯と失踪の理由を聞きましょうか」

「そうですね……強いて言うなら運命の悪戯か風の吹くまま気の向くまま――嘘です、ホントは主に私用と方向音痴のせいです、だから石を上乗せしないでくださいっ！？」

あ、足が痺れっ……！

「じ、実は――」

彼女達の躊躇いのない行動に恐れをなした私は懇切丁寧に経緯を吐いた。

無論、張角さんとか曹操さんについては精一杯ぼかして、人助けの約束を果たしに行った、ということにしましたが。

「ほう、それで私達には書簡一つ残しただけ、ですか」

「あれ、もしかして頼って欲しかったとか嬉し恥ずかしなことを――ごめんなさい、調子に乗りました！　もうこれ以上増やさないでッ！！」

言えることは全て吐き出したのに目の前の鬼、いや闇魔様方の怒りは静まる気配がない。

ここは、速やかな救援要請を選択しなくては。

まずは、一番可能性のありそうな朱里と雛里に助けを求め――

「……やっぱり、常時監視をつけるべきかな？」

「でも……刃様なら、監視が何人いても意味ないと思う……」

「私財も没収して管理すれば、なんとかなるかな？　それともいっそ何か此処に縛りつけられるような理由を――」

るのは論外ですね、ええ。私は何も聞いていませんヨ？

となれば、次は鈴々。

「鈴々ちゃん、おなか空かない？　あっちで炊き出しやるみたいだし、行こっか」

「桃香さん！？」

読んでいたかのようなタイミングでの無慈悲な誘導。鈴々の手を引いて去っていく仁君様は私の叫びにもプイ、と顔を背けて頬を膨らませるだけだ。

あの桃香までもが……私が何をした！？

くっ、ならここは同じ男であり、苦楽を共にし――

「刃、俺に助けを求めても無駄だ。俺だって刃の書簡のせいで酷い目にあったんだから」

あの一刀が先手を打つ、だと……！？

「それなのに刃は、月と将来を約束した仲になって楽しくやってたみたいだし」

「なっ！？　誰がそんなことを！？」

「慧さん」

あの腹黒っ！　ことあるごとにあることないこと吹き込む悪癖はどうにかならないのですかっ！！

「誤解ですっ！　そんな事実無根な話が本当なわけ――あ、ちょ、愛紗、星、腕の関節はそっちに曲がらない、って何その超怖い笑顔！？　ぐ、朱里、雛里、これ以上石を追加されたらホントにヤバいですからっ！」

「本当に、あんな少女にも手を出す刃様の奔放さには驚かされるな、星……！」

「ああ、まったくだ。少し、節操を持てるよう調きょ――もとい指導が必要らしい……！」

不名誉過ぎるっ！　“も”って何！？　しょっちゅう鼻の下を伸ばしている一刀ならともかく私には種馬を始めとした称号は冤罪以外の何者でもないですよ！

「嘘です、虚言です、根も葉もないですっ！　私と月さんの間にそんな感情はありません！だから更に力を込めないでっ！！」

このままでは肘から先が３６０度曲がるという不必要極まりない進化をとげますからっ！

『……本当に？』

「ち、誓って……それに私自身はちゃんと戻ってくるつもりでしたし、書簡一つで済ませてしまったことや不在の間かけた迷惑に関しても謝罪します。その、なんていうか、ともかくスミマセンでしたっ！」

『……』

「ふむ……」

「そこまで言うなら……」

二人の力が弱まったところで畳み掛けるように怒涛の謝罪。

かなり手足を束縛されているため頭は下げられませんでしたが、一応謝罪の意は伝わったらしく、腕は解放され、石も徐々に取り除かれていく。

勿論、既に足の感覚はありません。

「まぁ、刃なら仕方ないかな。ともかく折角戻ってきたわけだし、これからも一緒に――」

気を取り直した一刀が言おうとした言葉を自然に、やんわりと遮る。

「あ、私はこの後しばらく孫策軍と行動を共にしますから」

そして、私の私財は空っぽとなり、代わりに追加の石が倍に増えましたとさ。

結論。

最初に夢見た白昼夢でもどうせ最後はこうなってたよね？　主に最後の一言で。

……無性にマルチエンディングやルート分岐の素晴らしさを叫びたくなりました。

＊

「あっはっはっはっ！　大変な目にあったね～、刃」

「少し、黙ってください……」

体の節々が今までにない痛みに悲鳴を上げて休養を訴えてくる。

しかし、そんな暇も無く、拷問から折檻へと移行した闇魔様達の説得という名のサンドバッグ役を終えた私は孫策さんに言われた天幕へ足を引き摺り歩いていた。

最近の私はどこかおかしい。

慧さんに続いて孫策さんにも弱みを握られるなんて、こんな詰めの甘さはなかったはずですが。

「でも、良かったんじゃないの？　アンタが軍門に降れば他言無用にしてくれるっていうんだから。ま、言ってることがホントなら、だけど」

「それに関しては信用できるでしょう。付き合いは短いですが、そういう契りを破るところなんて想像できませんし」

「へぇ、随分買ってるんだね。あの子のこと」

……確かに、自分でも驚くほど彼女のことを評価している節はあります。

なぜ？

「っ……！」

そう考えると頭が痛む辺り、記憶に関係しているのかもしれません。今度、少し話してみますかね。

「あ、やっと見つけました！」

「ん？」

突如、そんな声と共に私の前に現れたのは綺麗な銀髪と印象的な翡翠色の瞳の少女。

肩ほどまでの髪は後ろで一度折り返され、数本の髪留めで止められていて、一本だけ不自然に跳ねた、いわゆるアホ毛がぴょこぴょこ動いている。

しかし、そんな優れた風貌もさることながら私をさらに困惑させたのは、

「……なんで紬（つむぎ）？」

彼女が着ている和服だった。

紬と呼ばれるその着物はここが中国だということを忘れさせるほど和の香り漂う一品。まぁ、この世界では他の人も時代や場所に合わない服装をしていますが。和に関して言えば張遼の袴とか。

でも、それにしたって、暗い藍に白で流れるような紋様が描かれた紬は見事なもので、数代に渡り着繋がれるというのも頷ける程の代物。

「これは……良いものだ」

思わず某軍人の最期の言葉に似た呟きがもれた。

「えっと、どうかしましたか？」

いけない、少しジロジロ見過ぎたようです。居心地悪そうに此方を窺う彼女に少しでも場を繕えるよう、愛想良く謝罪する。

「ああ、すみません。私に何かご用……？」

が、それはすぐに困惑の表情へ変わってしまった。

この子、どこかで会ったことが……？

「あの、以前どこかで私と――っ！？」

そこまで言いかけて目の前の少女の手を引くと、立ち並ぶ天幕の一つに隠れる。

視線の先に居たのは華美な赤い服に身をつつんだ黒髪の女性、夏候惇将軍。

彼女に見つかって騒ぎになるのは不味い。ただでさえ曹操軍の顔見知りには会わないようにしているのに、彼女は最悪の部類に入る。

「あ、あの――むぐっ！？」

「すみません、少しの間静かにしていてください……」

その後ろ姿が見えなくなってから、腕の中にいる彼女の方へ視線を向けて――記憶とピッタリ重なった。

と、言ってもそれは前の世界ではなく、この世界でのもの。

「貴女は、あの時の……」

「あ、は、はい！　その節はお世話になりました！」

真っ赤な顔で頭を下げる彼女は、この世界で最初の受難といえる黄巾党の拠点で助けた少女だ。
あの後は孫策さんに保護をお願いしたはずですが、なぜこんな所に？
気になった私は、とりあえずわけを聞こうとして――
「……刃」
愛紗達に続いて、本日二度目の底冷えするような声に遮られた。
「れ、恋……？」
そこに立っていたのは先に孫策さんの所へ行っているはずの恋。
いつもなら癒しを提供する瞳には機嫌の悪さがありありと見て取れる。
「ど、どうした――痛っ！　恋、ちょ、力強すぎですよ！？」
私の腕をとり、有無を言わさず腕を組んだ恋は、しかし凄まじい力を込めているため、“腕を組まれている”のではなく“万力で腕を締め付けられている”ようにしか感じない。
「む、負けません！」
そして、逆の腕に少女の意外と強い、でもまだ人の領域内である腕がまわされたことにより、恋の力は更に強くなった。
本格的に万力と化した恋の腕は痛みを与えるに止まらず、私の腕

の感覚をどんどん稀薄にさせていく。
ミシミシ、という音は幻聴であると願いたい。

「ああ、もう不幸だぁぁぁっ！」

生涯でなかなかないくらい拷問に縁がある今日この頃。
腕をホールドされたまま引き摺られていく中で、実は右手に幸運とか打ち消すわけわからん力とかないよね？　と真剣に考え始めた私は、とりあえず目の前で大笑いする神霊への仕返しを誓っていた。

＊

「雪蓮、コレがそうなのか？」

「うん、まぁ。コレがそれのはずなんだけどね～」

目の前では孫策さんと軍師である周瑜さんが人をコレ扱いして会話を進めている。
まぁ、片腕と足がすごいことになっていて動きがぎこちない上、動く度に苦悶の息をもらす私が大将の推薦で仕官してきた者には見えないのでしょうし、仕方ありませんが。

ちなみに先ほどの少女は孫策さんの隣に立ち、恋は私の隣で同じように跪いている。そして、その隣には陳宮の姿もあった。

「ふむ……まぁ、飛将軍と名高い呂布に智謀に長けた陳宮、それに噂の蒼狗となれば受け入れないということもないが」

「じゃあ決まりね」

「待て、いくら有能だからといって即登用というわけではない。少し見極める時間が必要だろう」

「大丈夫だと思うんだけどな～」

「はぁ……雪蓮、勘で判断するのは貴女の悪い癖よ？」

ああ、それに関しては激しく同意です。それで的中率が高いんだから性質も良いのか悪いのか。

「とりあえずここでは判断できない、結論は一度戻ってからだ。そういうわけで保留という形になるが、構わないか？」

周瑜さんの問いに私を含め、全員が頷く。

一応、保留ではあっても仕事ぶりや人格がよほど酷くない限りは内定しているようなものだ。それに簡単に受け入れられるよりはこちらも安心できる。

「あ、後一つ刃に伝えとくことがあったのよね。この子のことなんだけど」

そう言って孫策さんが指したのは先ほどの少女。

こちらも聞いておこうと思っていたし、ちょうど良かった。

「保護をお願いした子ですよね？　なぜ此処に？」

「なんだ、覚えてたのね。実はあの後この子が孤児だってことがわかったのよ」

初めて聞く事実に思わず顔を顰める。
この歳であの時期、それなら両親は……

「……それで？」

「一時的に私が引き取ったんだけど、頭も良いし、武芸にも才能があったからしばらく鍛錬を積ませて将として取り立てたのよ」

「へぇ、そんな短期間で、ですか」

見た感じまだ鈴々よりも少し上くらいなのに、それが本当なら確かに才能がある。

「ああ、私を始めとした文官、武官にも仕事ぶりを認められたからな」

「そ、そんなことないですよ！」

周瑜さんからの賛辞に照れ笑いを浮かべる彼女は、しかし見た目通りでは無いのだろう。厳しい評価を下せる冷静さを持った周瑜さんが認める彼女の武と智に可愛い少女のソレは当てはまらない。
まぁ、この世界では朱里や鈴々のような前例もあることですしね。

「にしても、彼女が危険とは言いませんが貴女が自ら引き取るって、ホントに目茶苦――器が大きいですね」

「そう？」

「……言い直したことには触れないのね」

慌てて言い直した私にツッコミをいれるのは周瑜さん。その様子からは苦労人である雰囲気がありありと感じられた。

「なるほど、つまり彼女は孫策軍の将として此処に居るわけですね？」

「そういうこと。で、後は……本人に任せましょうか」

「は、はい！」

私自身の疑問は全て解消されたのですが、まだ何かあるようで孫策さんに促された少女が一歩前へ進み出る。

「どうしました？」

「は、はい。えっと、あの……」

言いづらそうに口籠る彼女の顔を覗き込む。

すると、意を決したように勢いよく顔を上げ、さっきと同じように至近距離で見つめ合うことになった。

「……」

隣から発せられる恋の不機嫌オーラは冷や汗ものだが、少女の顔は真剣そのもの。しっかり聞いてやるべきだろう、とどこか懐かしい、温かな気持ちで答えを待つ私。

「か、上代刃さん！」

「は、はい」

気迫のこもった声に少したじろぐが、手を掴まれ、後退はさせてもらえない。

「わ、私は姓を程、名は普、字は徳謀と申します！　あの、わ、私の……お父さんになってくださいっ！！」

「……はい？」

あと十数年は呼ばれることはないだろうと思っていた呼称に私の頭はフリーズ。

続いて先ほど感じたばかりの腕の感触と、頭に受けた跳び蹴りの衝撃によって既にボロボロだった私の意識は根こそぎ刈り取られた。

第１８章　閻魔の審判。再会は激痛と共に（後書き）

今回再（？）登場のオリキャラ、程普ちゃんです。

完全に設定弄ったので古参ではなく、新参者でかなり幼くなっていますが、お気になさらず……はい、ごめんなさい。容姿は完全に作者の趣味です。

では、ご意見、ご感想などあれば、是非お願いします！

第１９章　新たな家族（前書き）

時間が空いた割に駄文です。
改めて心情の描写って難しいなぁ、と痛感していたり。

第１９章　新たな家族

Ｓｉｄｅ曹操

「……どこか腑に落ちない点が多すぎるわね」

連合軍は勝利した。

麗羽の馬鹿が感情をむき出しにして突貫した時以外の被害もほとんどなく、完勝とも言える、実際には全然戦っていないからか実感はないけれど。

栗嵩を討った呂布は孫策軍へ投降、虎牢関では張遼が私達の軍門へと降った。

「桂花、貴女は今回の出来事に違和感を感じる？」

「はい、あまりにもすんなり事が運びすぎているように思えます。降った張遼の様子からしても何か裏があるのは間違いないでしょう。……ご命令であれば、奴を――」

「いいえ、それには及ばないわ。今は領民の保護と復興作業、帰還の準備を急がせなさい」

「御意」

投降時の張遼の目を見ればわかる、彼女はどんな責め苦を受けようと吐くことはないだろう。

それでも私を仕える主と認め、力を揮うことには疑う余地はないし、なによりあの人材は切り捨てるに惜しい。

それに――その裏がどんな影響を与えようとも、それを踏み砕いて進めないような覇道を敷いてはいない。

できれば呂布も欲しかったけれど、先を越されたのなら諦める他ないだろう。

とはいえ、相手はあの孫策。英雄の器を持った彼女の下へ降ったのならいずれ必ず私の前に立ちはだかることになるはずだ。

それでも、いずれは欲しい力ではある。まだ私の中で諦めるには早いと思わせるほどの。

「ふふ、最近は逃してばかりね」

私はそこで二人の人物を思い浮かべた。

一人は関羽。そしてもう一人は、蒼狗こと上代刃。私の誘いを二度も蹴り、手の内からすり抜けるように消えていく男。

私にはあの男がいずれ我が進みを妨げる大きな障害となるように思えてならなかった。だが、それでも胸に湧き上がってくるのは苛立ちなどではなく、心地良い高揚感。

「私の覇道はまだ始まったばかり……そして、その障害たるに相応しい英雄たち」

これから来る群雄割拠の世。その大きな舞台で私と舞うに足る存在に私の口元は知らず、大きく歪んでいた。

＊

「……ん、ここは――――ぐっ！？」

妙な違和感と共に目を覚ました私は、続いて体中に走る激痛に身をよじった。

「あ、起きましたね」

そして、目の前に居たのは先ほど再会した、

「確か……程普、でしたね」

「はい。良かったです、目が覚めて」

彼女の屈託のない笑みに思わず息を吐き、落ち着いた私は、次に意識を失う前のことを思い出した。

「……あの、もう一度聞きたいのですが、貴女の――」

「お願い、のことですよね？」

程普の言葉に頷く。

記憶が確かなら父親になって欲しい、ということでしたが。

「……私の、両親がいないのは聞きましたよね？　二人とも……賊に村が襲われた時に抵抗して、殺されたんです。私だけが、生きて連れていかれました」

苦しそうな顔で、それでもしっかりと話す彼女を見て、最初会っ

た時も感じた精神の強さを感じる。
あの時も、年齢からは想像もできない苦痛を受けていながらも他の人たちの為に耐えていた。

「……ふふっ、刃さん。そんなに私、強くないですよ。あの時の私は怖さと悲しさで何も考えられなかった。ただ、泣いてるだけだったんです」

そんな驚愕や悲哀の混じり合った感情が顔に出ていたのでしょう、本当にこういう時に私は余計な愚直さを発揮するものだと呆れる。
こんな小さな少女に気を遣われてしまうのだから。

「でも、私を背負って逃げていた時の刃さんは、すごく……温かかったんです。それに、私を安心させようとかけてくれた声は優しくて、不安を塗りつぶしてくれたんです」

なんでしょうね、この可愛い生き物。お持ち帰りしても――え？
ロリコン？　いやいや、ロリ“も”好きなだけですよ――とか戯言でも呟いて精神の安定を図ったり図らなかったり。

なんというか、どうもこういった真っ直ぐ過ぎる子の相手は苦手なんですよね。私が後ろめたいことしかない人間だからかもしれませんが。

……後は、罪悪感ですかね。今にも崩れそうな彼女を見ていると、私なりにも力にならなくてはいけないような気がしますし。

「あの時は勇気が足りなかったけど、雪蓮様に引き取られた後も…
…刃さんと家族になりたい、って。それで、その」

「……まったく、どうしてこの世界の子達はこうも強すぎるんですかねぇ」

「えっ……？」

一つ、溜息をついて以前会った時のように程普の頭を優しく撫でた。

強くなくていいとは言えませんし、強がりを悪いとも思いません。でも、たまには甘えるくらいの弱さがあってもいいでしょう。

「え、あ、っ……わ、私っ……」

俯いた彼女の肩は先ほどまでとは違う、年相応に小さく、弱弱しく感じた。

そんな肩が震えている、そして続けて聞こえてくるのは途切れ途切れの嗚咽。

当然だ、この子はまだ幼い。両親を亡くして、それでも懸命に生きた、もしその支えとなっていたのが私だというなら溜め込んでいた感情くらいは受けとめるべきじゃないですか。

「家族になるんでしょう？　少しくらい甘えても誰も責めませんよ」

静かに、それでいて強く小さな体を抱きしめる。まるで、体が覚えているかのような自然さで。

「ぁ……」

そして、しばらく程普は泣き続けた。

それを見守る中で、ただ“家族”という言葉が何故か頭から離れなかった。

＊

「へぇ、じゃあこれで晴れて二人は家族ってことね」

私と程普は本日二度目となる孫策軍大将の天幕にいた。

要件は泣き止んだ程普がまず真っ先に報告したかったという孫策さんに会いに来るため。

「はい。私、程普の真名は灯理（あかり）です。雪蓮様にお預けします」

「うん、了解。にしても灯理、ね。可愛い名前じゃない、刃」

面白がるような笑みを浮かべる孫策さんの視線が突き刺さる。

その目からは意外と可愛いネーミングセンスしてるじゃない、という言葉が聞こえてくるかのようですね、ええ。

私だって家族となる者の真名を考える時くらい真面目になるんですよ。

正直、程普が真名を持っていないというのには驚きましたが、親から授かる前に死別した上、その命名権（？）を私に任せようと考えていたというのには驚天動地どころの話ではありませんでした。

責任重大過ぎて胃が痛いですよ。

「でも良かったの？　父親じゃなくて兄っていう立場で」

「はい、兄さんの希望でしたし、私も兄妹になれて嬉しいですから」

……そこ、シスコンとか言わない。

私はまだ未成年なんですよ？　親父とか言われたら少しは傷つくんです。まぁ、灯理はそんな呼び方しないでしょうけど。

ちなみに呼び方もお兄ちゃんとお兄様が灯理の第一候補でしたが、全力で却下しました。

私はまだ公衆の面前でそう呼ばれて平気でいられるほど紳士的じゃない。

というか、その呼び方はなんか無性に違和感と悪寒を感じるんですよね。頭の奥も痛むことから前世での記憶がそうさせるのかもしれません。

「うん、灯理が納得してるならいっか。私も一応親代わりみたいな立場だったし、少しは肩の荷が下りたわ」

親、って年齢的にまだ妹のようなものだと思いますが。

いや、実際の年齢って知らないですし、もしかしたら――

「……刃？」

「いや～、孫策様は若くて綺麗だなぁ！」

南海覇王と殺気のコンボはヤバいです、孫策様。

今、首が落ちたような幻視すらしましたよ？

そして、そこからは灯理の孫策さんへの感謝を交えた談笑へ移行

した。

どうやら、少々立ち入った話になりそうなので、私は一言断って退席する。

そのまま天幕を出ようとして、もう一度二人の様子を一瞥した。その光景はまるで本当に親子か姉妹というところ。

「っ……！」

それを見た瞬間に鋭い頭痛を感じた。そして、重なるのは知っているはずの光景。

一瞬ではあるが、その光景に懐かしさと悲しさを感じた私は痛みを飛ばすように軽く頭を振ると天幕を出た。のだが、

「どうした、顔色が悪いな」

入口の陰に立っていた周瑜さんによってまた足を止めることになる。

「いないと思ったらこんな所にいたんですか、周瑜さん」

「まぁ、な。さすがに少し入るのが憚られた。それでもお前を警戒して周りには兵を潜ませておいたが、あまり意味はなかったようだ」

「三人とも気づいていましたからね」

私の言葉に苦笑する周瑜さんは相変わらずの怜悧な雰囲気のまま口を開く。

「程普はお前を留める楔になりそうか、放浪者？」

「さて、わかりませんよ？　私は野良犬ですから。それに楔ごと引っこ抜く、って手もあります」

「……ふ、まぁいい。今回の事を見るにお前は随分甘い人間のようだからな、私の考えるような心配は杞憂だろう」

「あれ、ばれてたんですね？」

さすがは名軍師様、この程度はお見通しですか。

「少し頭が回れば推測は立てられるだろう。私はお前や雪蓮がいたから確信を得たが」

確かに、多分私が話さなくても朱里や雛里あたりは思い至っていたでしょうしね。

でも、それぐらいで十分でしょう。どちらにしろ、

「証拠となりうるものは元董卓軍の将兵くらいだろうし、こんな状況で好き好んで首を突っ込むような馬鹿もいない、か」

「ですね～、実を言うと大した利は得られないですし」

鬼が出るか蛇が出るか、という分の悪い賭けが好きな軍師なんていませんよね。

「ともかく、私達はこれからが大変な時期だ。お前のことも頼りにしているよ、何せお前自身はもとより付随する者が大きすぎる」

袁術からの独立、ですか。
確かにこれからは戦いも増えるでしょうし人手は大いにこしたことはないですからね。
特に恋の武力は喉から手が出るほどの大物ですし。

あれ？　私がいつの間にか重要な立ち位置になり始めているような……。

「それに最悪、お前への切り札として雪蓮もいるわけだしな」

「……わかりますか、やっぱり」

全然敵う気がしませんよ、ええ。
主に生来生まれ持った相性的な意味で。

顔を顰める私を見て、周瑜さんが薄く、愉しそうに笑う。
……この人、多分ドSですね。

感じた寒気に身を震わせる私を置いて去っていく周瑜さんは、一度此方を振り返ると少し真面目な顔で告げた。

「ああ、それと――義妹とはいえ程普を泣かせるなよ。私もだが、それ以上に我らの軍のほとんどの将を敵に回したくはないだろう？」

「……肝に銘じます」

大変な妹を持ってしまったことに、兄として少しだけ気遣いレベルが上がったような気がしました。

第１９章　新たな家族（後書き）

程普改め、灯理のターン、でしたが……かなりグダグダな感じになってしまいました。

曹操みたいな覇王様や純真な子供、あとは記憶なんかが絡むとすぐにスランプへ落ちていく不思議……ｏｒｚ

感想などあれば作者のやる気や質の向上に多分つながるので、よければお願いします！

第２０章　不吉な予感。義妹は予知能力者？（前書き）

もう少し洛陽編が続きます。

最近スランプが持続中。

それに伴って進みが遅くなって仕方ないのですが、呆れずにお付き合いいただければ嬉しいです。

第２０章　不吉な予感。義妹は予知能力者？

洛陽の復興作業や領民の保護も進み、各諸侯も帰還を考え始めた今日この頃。

自分の考えで城を焼いたり、追い出してしまったこともあり、それらに精力的に取り組んでいた私も、そろそろ孫策軍が帰還するということで今日ばかりは目的地である劉備軍陣営へ向けて歩みを進めています。

さすがにもう一度くらいは話す必要があるでしょうしね。

「……今のところ怪しい人影は、ないですね」

そして私の隣でＳＰさながらの護衛についているのは、我が義妹である灯理。

周囲を警戒しているのだろうが、ちょこちょこと動き回るその様は小動物のようでむしろ微笑ましい。

そんな彼女が自分の仕事も後回しにしてまで挙動不審な行動をとっているのは何故か。

それは彼女が今日の朝、言い放った一言で言い表せる、らしい。

曰く、

「兄さんの貞操が危ないっ！！」

……ええ、見事にわけわかりませんね。

どうやら灯理には孫策さんの勘とはまた違った、具体的に近しい

未来を察知できるという、「もうそれ超能力じゃね？」的な力があるらしい。

元来、先を読む力に優れた彼女は時折こういった事を言い始めるのだとか。

しかも的中率は孫策さんや周瑜さん曰く、事実上必中らしい。

どっかの赤い槍みたいに因果律捻じ曲げてませんよね？　それ。

というか、そんな能力でさっきの台詞が出てきたあたり、真面目に笑えないんですけど……。

しかも性質の悪いことにたとえ今日の予定を変えようと、引きこもろうともその危機は迫ってくるらしい。強制イベントなんて大嫌いです。

とまぁ、そんなわけで即席サーヴァントと化した妹は兄の操（みさお）を守り抜くためについてきてくれているわけですが。

……駄目だ、言ってて頭おかしくなってきました。

よし、切り替えていきましょう。

これは、過保護な妹が兄を他の女性に取られないようにむきになっているだけなんだ。

「に、兄さんは私のなんだから！　他の人には絶対に渡さないもん！」

……なんだろう、すごく温かい気持ちになれる。これが“萌え”というやつなのでしょうか？

いいぞ、私の妄想。もっとやれ。

「あの、兄さん……？」

そんな私を心なしか蔑みの目で見る灯理。
……現実はシビアなようだ。私の妹がこんなに可愛いわけがない。

「って、恋。どこに行くつもりですか」

私についてきたもう一人の人物である恋は進行経路を大きく外れ、炊き出しへ向けて一直線。
急いで連れ戻そうとするも、穢れの無い瞳が私を貫く。

ふ、甘いですね。最早慣れっこの私がその程度で――

「……ダメ？」

「ぐはっ！？」

くっ、上目遣いでその聞き方は卑怯でしょう。
……ええ、そうですとも。捨てられた子犬とか後先考えずに拾いますが、なにか？

「炊き出しはさすがに駄目ですが、後で店にでも寄って奢ります。それでいいですか？」

「……セキト達の分」

「当然です」

「……（コクッ）」

さて、これ以上出費が増える前にさっさと――

「あ、灯理！　こんな所にいた！」

息つく暇もありませんね。

次に現れたのは、長い黒髪に大きな刀を背負った少女。

確か……周泰でしたか。灯理と歳が近く、仲の良い子だと聞いていますが。

「明命？　どうかしたの？」

「どうかしたの、じゃないよ！　ただでさえ帰還前で忙しい時なんだから仕事して！　他の皆も困ってるんだから」

「で、でも一応代理は――」

「人手が足りないの！」

まぁ、やっぱりそうですよね。

前日に周瑜さん達に申告した私はともかく、今朝になって急遽時間をとろうとすれば自然とこうなるでしょう。

「呂布さん、貴女もです！」

「……？」

首をかしげる恋に苦笑がもれる。やはりサボりらしい。

陳宮もいないことから考えて勝手に抜け出したんでしょうね。

「じゃあ、二人とも行きますよ！」

「……」

恋、視線でこちらに助けを求めるのは止めて下さい。

さすがに今回は庇えませんし、罪悪感で私の精神がゴリゴリ削られるだけですから。

「恋、仕事しっかり出来たら、後でお土産に食べ物買っていってあげますから」

「……（コクッ）」

即座に身を翻し、去っていく現金さはむしろ清々しい。

「では、私は行きますが、周泰さん、灯理のことよろしくお願いしますね」

「はい！　あの、できれば上代さんも……」

「ええ、用が済んだら雑務のお手伝いに向かいます」

「すみません、お願いします」

そう言って、灯理の手を引いていく間も灯理の叫びは続く。

「明命、待って！　このままじゃ兄さんが穢されるっ！」

瞬間的に突き刺さる数多の視線。

……灯理、変なこと叫ぶなら場所を選ぼうね。ホントに。

呆れつつも私の足は当初の目的地へと向かった。

＊

「――と、いうわけで私は孫策軍へ降ることになったんです」

現在、劉備陣営の一角。

「そうか……残念だな」

そう言って唸るのは劉備軍へ降った華雄さん。一応、事の経緯を説明しに来たのですが、

「まったく、人の子を傷物にしておいて……」

「そこ、黙りなさい」

今回の元凶であり、私に対してのみ非人道的な性悪さを全開にする慧さんが何故か同席していたりします。

「まぁ、冗談は置いておいて……ごめんなさい、刃。貴方にはいろいろ迷惑をかけた上に今回の投降も私達のために――」

「え？　あ、別にそんな」

少し、意外だった。あの慧さんも罪悪感を――

「折角、これから月と詠を美味しくいただく予定だったのに」

「今、確信しました。貴女を消さない限り私には平穏が訪れないのだと……！」

罪の意識を感じている、なんて考えを持った私はまだ彼女を侮っているようです。

腰に携えた直刀、黒鬼へ手を伸ばすが、目標の姿はすでになく、

「あら怖い、じゃあ私はこれで」

いつの間にやら天幕の外に移動していた慧さんは一つウィンクをして、

「ありがとう、刃」

笑顔を浮かべ、去っていった。

「ふぅ、まったくあの人は……」

ウィンクって……年齢を考えてほしいものです、っ！？

サクッ、という音と共に私の足元に突き刺さるのは一本の短剣。

誰が投げたかは考えるまでもない。

「……ホントに掴み所のない人ですね」

「ああ、同感だ」

呆然と呟いた私は少しの間立ち尽くしていたが、慧さんにからか

われるために来たわけではない。
改めて華雄さんとの話を再開した。

「華雄さん」

「む、どうした？」

時間は有限です、さっさと本題に入りますか。

「すみませんね、月たちのことを任せるような形になってしまって」

「なに、構わん。元より私の主である月様を守るのは当然のことだ。……だが、やはり残念だな。お前となら今よりもっと高みを目指せると思ったのだが」

「いえ、貴女なら私がいなくともももっと強くなれますよ。事実、今回もしっかり堪えたじゃないですか」

「う〝っ！？　ま、まぁな！　もう私は今までの私では――」

「と、言うとでも思いましたか？」

明らかな動揺、その馬鹿正直さは可愛らしくも思えますが、生憎と私の教育方針はスパルタです。

「後々の為に此処でまた講義を開いても良いのですが……」

「ひぅっ！？　そ、それだけは」

……そんなに嫌ですか？

涙目でここまで弱弱しくなるとは、用兵術だけでなく戯れに九章算術をひたすらに解かせたのはやり過ぎだったかもしれません。

むう、数学を学んでいた身としてはそんなに難解だとも思えませんが、これもカルチャーショックというやつでしょうね。

「冗談ですよ。だからそんなに震えながら縋るように見ないでください、あと早急に手を離しなさい」

普段とは違うその姿には多少の庇護欲をかきたてられますが、無我夢中だからか腕を掴む握力はソレと真逆で凶悪の一言。

このままでは折角感覚の戻った腕がまたしても使い物にならなくなります。

「代わりに、少し質問をしてもいいですか？」

「ん……わ、わかった」

講義は無しにしても、軽く最終テストでもしてみますかね。

「自軍に少数の軍勢が攻め入ってきましたが、その軍はすぐに反転して撤退を始めました。どうしますか？」

「すぐに追撃して撃破する！」

「……追撃中、多数の軍勢に囲まれてしまいました。一箇所だけ明らかに脆そうな所があります、どうしますか？」

「無論、その箇所に突撃し、突破する！」

「……突破はできましたが、更に多くの軍勢に滅多打ちにされました。目の前には敵の大将旗が、どうしますか？」

「本隊へ突貫をかけて粉砕するに決まっている！」

「……」

……玉砕の間違いでは？

はぁ、どうしてそうも迷いなく言い切れるのでしょうか。まぁ、悲しいかな大体は予想通りでしたけど。

未だ彼女は猪の汚名を返上することはできないようです。

「では、最後です。私が、貴女やその主の敵として貴女の前に立ち塞がりました、どうしますか？」

「なっ！？　それは――」

一瞬うろたえた華雄さんを私はただ、無言で見つめる。

見つめ合う時間は時が止まったかのようで、しかしすぐに終わりを迎える。

「……主の為に、私が、お前を倒す」

「……よろしい。とりあえず及第点、ですかね」

ふっ、と笑うと彼女の頭を軽く撫でた。本当に予想通り、ただし今回に関しては嬉しいものですが。

「離れてっ！」

「――え？　ぐふぉっ！？」

そして、踵を返そうとした私を待っていたのは無慈悲な腹部への衝撃。

見れば、先ほど連れて行かれたはずの灯理が私と華雄さんを遠ざけようと間に割って入っていた。

「な、なぜ此処に……？」

数あるツッコミ所からとりあえず無難なものを選んでみるが、その問いには答えず孫策様に鍛えられたという有り得ないほどの力で私を引っぱっていく。

「危なかった……もし、あのまま感極まった怪力女に押し倒されでもしたら――」

呆然とする華雄さんを置き去りに進んでいく灯理の口からは安堵の色が窺えますが……それ、色々と失礼ですから。

とは言えない立場の弱い兄なのでした。

ちなみに残っていた仕事はしっかり休憩を入れられるくらいまで済ませてきたらしい。

……早くも、兄として妹がよくわからなくなるという壁にぶち当たりそうです。

第２０章　不吉な予感。義妹は予知能力者？（後書き）

灯理の隠された（？）能力によって始まったこのお話はまだ続きます。

次回にまたぐのもどうかと思ったのですが、文の長さが尋常じゃないものになりそうだったので、一度切りました。

というわけで、次回で刃の貞操の行方　（笑）と洛陽編が終了します……多分。

一度切ったのにまだまだ量が多いっ！

では、感想などあれば是非よろしくお願いします。

第２１章　王道と甘い妄言。地揺らす漢女と白い影

別れる前の劉備軍への訪問。
灯理も怖いですし、すぐに終わらせたかったのですが、兵士さんに聞くと全員部隊の編制やら領民への炊き出しへ向かっていてバラバラなんだとか。

「うわ～、面倒くさいね～」

（……霊体化で姿消して声出すのやめてください。心臓に悪いです）

声は聞こえど姿は見えず、ってリアルだと本気で怖いんですから。
まぁ、この自由奔放な神霊様に言っても無駄でしょうけど。

「さて、最初はここですか」

目の前には新たに加わった兵の編制を終え、簡易的な調練を行っている劉備軍の兵士たち。
ちなみに灯理は休憩が終了したらしく、さっきまた周泰に連れていかれました。

しばらくその様子を見ていた私は、兵士にテキパキと指示を出している将軍さん達に休憩を見計らって声をかけた。

「精がでますね、三人とも」

「刃様！？」

「おや、主ではありませぬか」

愛紗、星、鈴々の劉備軍が誇る三大武将は突如現れた私に驚きの声をあげた。

「今は主じゃないですし、様もいらないですよ。少々別れる前に挨拶をと思いましてね」

私の言葉に三人の顔に少しの翳(かげ)りが差した。

説得の際に次に会った時は味方であるとは限らない、と言っていたのがまだ尾を引いているようです。

実際、私は自分の生涯を賭けるに足るものとして桃香や一刀を主君に据えようとしていたわけではない。

ただ、自身の甘さが招いた結果。

彼女達には桃香と共に叶えるべき王道がある。

私が、それに敵対することになることも無いとは言えません。

「……鈴々は刃兄ちゃんと戦いたくないのだ」

むくれたように言う鈴々の頭を撫でながら、それでも頷くことはできない。

どちらにしろ、その覚悟くらいは持っていなければ進めないですから。

「やはり、主――いえ刃殿は桃香様を主君として戦い抜くことはできないのですか？」

「断言はできない、というのは卑怯でしょうね。正直、今の私では彼女の理想を共に追いかけることはできません」

「……ふむ、私としては刃殿についていくのも一興ですが」

「なっ！？　星、お前まで！」

「嘘はいけませんよ、星」

他の二人と違い、未だ飄々とした物言いの星を窘める。

「おや、自分が認めた人についていきたいのは事実ですが」

「桃香達の理想や人柄に惹かれたから此処へ居るのでしょう？　ならばその程度で去ろうと思うわけがないじゃないですか」

「ふっ、さすがですな。主にはお見通しですか」

わかっているなら言わないでくださいよ。

生真面目な委員長気質の愛紗などは真に受けるのですから。

「しかし、改めて見ても兵の練度が目に見えて向上してますね。特にあそこの部隊などは。誰が率いているんです？」

そう言って一つの部隊へ視線を移した。連携や速度、個人の腕も他より一段上をいっているように見える。

まぁ、知っている顔もいるのですが。

「あれは愛紗の部隊なのだ」

予想通り、ですね。神城隊として調練していた者もちらほら見えますし。

「刃様に言われてから、私にできることを少しでもと思ったので」

それでスパルタ教育、ですか。

まぁ、厳し過ぎるくらいじゃないと確固とした意志を持った精強な兵を育てるには不足ですから当然ではありますが。

よくもまあ、あれだけ残っているものです。剛毅な人達が多かったのでしょうか。

「……逃げ出した者も多くいましたが、いっぱしの軍たるには仕方のないことだと割り切りました。それに、刃様が指導していた隊が良い模範となってくれましたから」

ありゃ、やっぱり逃げ出した者もいましたか。

というか、彼らが良い模範となっているのは意外……でもないですね。

「ときに刃殿はどうやって彼らを鍛えたのです？　練度よりむしろ精神力に目を見張るものがありましたが」

「いえ、ただ甘い考えを持っているような者を理詰めで何度も、徹底的に叩き潰しただけですよ」

無論、言葉責めに並行して物理的にですが。

……なんですか、三人のその哀れむような目は。

結果的に良い方向へ行ったのですから、問題ないでしょう？

「ま、少しは安心しました。さて、そろそろ私は行きますよ」

「……」

それに難しい顔で沈黙する愛紗の胸中は計れない。

でも、軍を統括する彼女にはこうした決断も必要になるでしょうし、これ以上私が言えることじゃないですね。

「次に会う時が味方であるよう願っておりますよ」

「鈴々もなのだ！」

……存外、私もそう願っているあたり、救いようがないですね。

「アンタもまだまだ子供だね～」

（だから霊体化して声をかけないでくださいよ）

「ま、頑張んなさいよ、若人」

（はいはい、年長者の言葉として心に刻みますよ）

踵を返した私は自分の幼さに自己嫌悪の念を禁じえなかった。

＊

洛陽の町中へ移動した私は復興作業の指示と視察に向かっているという桃香一行を探して辺りを見回し、

「おーっほっほっほっほっ！」

正気を疑うような高笑いと常軌を逸したセンスの鎧をまとった女性が目に留まった。

隣にはそれに呆れている様子の一刀に、ポカンとする桃香、苦笑いを浮かべる朱里と雛里の姿がある。

「……うわぁ」

目的の人物を見つけたのはいいのですが、何あの金ぴか。趣味悪過ぎでしょう。装飾過多は無粋の極みですよ？

「あの子が気になるの？」

「……確かに、あんなに目が痛くなるような色に染まれる理解不能なベクトルのバイタリティなんかは気になりますね」

「あはは、刃は枯れてるね～」

「落ち着いていると言ってください。枯山水（かれさんすい）は好きですが」

あれ？　しかもその両脇にいるのは見知った顔じゃありませんか。あ、片方がこっちに気づいて会釈してる。

「こんにちは、斗詩さん」

「はい、お久しぶりです。刃さん」

一刀達との話に夢中になっている件（くだん）の女性に気づかれないように

近寄って話しかける。

「つかぬ事をお聞きしますが、もしかしてあの人が……？」

「……はい、私達の主君の袁紹様です」

私の言いたいことがわかっているのか苦笑いを浮かべる斗詩さん。

檄文での内容、？水関での感情に任せた突撃、そしてその突撃の稚拙に過ぎる指向性のなさ。

あれが、名高い名家の大将様だとは……世も末です。

「苦労のほど、痛み入りますよ」

「あはは……刃さんみたいな人が居てくれれば助かるんですけどね」

その言からすると猪々子さんも袁紹さんのストッパーにはなりえていないみたいですし、斗詩さんから感じる苦労人の雰囲気には苦笑いを浮かべるしかない。

そうして二人で袁紹さんの話をしていくが、聞けば聞くほどその惨状に呆れる他なかった。

いつの間にか愚痴を聞く役になっているあたり斗詩さんにも精神的な疲れが溜まっているようですし。

折を見て、ならば何故彼女についていくのか？　と聞いてみると、苦笑を浮かべながら、

「二人を放っておけないんです」

なんて言われた時には少し袁紹さんを見直そうかな、とも思いましたけどね。

人柄や求心力は気にすべき点かな、と。それでも、君主としての目に見える能力は言語道断ですが。

「お～い、斗詩！　なにやってんだ？　置いてくぞ～！」

おっと、いつの間にかあちらの話は終わっていたようです。

少し先に見える袁紹さんと猪々子さんが斗詩さんを呼び、それに答える斗詩さんの顔はどこか明るい。

「では、また。敵ながら応援してますよ」

「あぅ……す、すみませんでした。失礼します」

ここに至って愚痴をこぼしたのが恥ずかしかったのか、少し慌てながら駆けていく斗詩さんを見送り、どこか疲れた様子の一刀達に話しかけた。

「随分、疲れてますね？」

「まぁ延々と実が無いわりに高笑いと自慢の詰まった話を聞かされたからな……」

「ご主人様、やっぱり気に入られてるんじゃない？　いつも笑って聞いてあげてるし」

ほう、それは大したものです。

私なら数分聞いたあたりで物理的に黙らせてしまう自信がありますから。

「いや、だって可哀相じゃないか。まともに話を聞いてもらえないのは」

いやいや、そんな気遣いができるのは貴方くらいですよ。

もう、二人はくっついちゃえばいいんじゃないですかね。もれなく私含めた多くの人が平和になりますよ？

それでも一刀に袁紹さんを抑えきれるとも思えませんが、そこは天の御遣い補正でなんとか。

っと、話が逸れましたね。

「ともかく、探しましたよ」

「え？　どうかしたのか？」

「いえ、別れる前に挨拶をと思いまして。一刀と桃香には言うこともありますしね」

「……そ、っか」

言葉に少しの真剣みを帯びさせたからか、二人の顔も引き締まる。

「やっぱり、俺たちと一緒に戦うことは出来ないのか？」

「ええ、今の私は共に道を行くことはできません」

「私が頼りないから、かな……？」

落ち込んだように言うのは桃香。

そんな彼女に話し始める私はそれでも擁護するような言葉を言うつもりはない。

なにより、彼女は民や兵を率いるリーダーなのだから。

「そうですね。確かに、今の桃香は知らないことが多すぎる。人と世の中はそんなに綺麗ではありません」

「綺麗じゃ、ない……？」

上に立つ者として無知は罪ですよ。まぎれもない、ね。

それに前提からして彼女は矛盾を抱えているのだから、それを自覚していないのは致命的でしょう。

「――まぁ私が言いたいのは、この乱世では“誰かを助けること”はそれ以外の誰かなくしてはあり得ないということ”だけです。貴女には稀有な才能があるんです、間違いを重ねながら進めばいい。今は不恰好な理想でも、それが王道となることも十分望めますからね」

押し黙って考える桃香に普段の呆けた様子はない。

ま、じっくり考える必要のあることですし、しっかりと悩んでもらいましょう。

彼女はもとより、彼女についていく民草（たみくさ）のためにも中途半端な王道では惨劇を生むだけなんですから。

「あと、一刀」

「な、なんだ？」

「貴方は自分の立場をもっと自覚することです。学ぶことが多すぎる貴方は、まだまだ君主としてはダメダメなんですから」

「う、はい……」

「……ま、少しは期待もしているんです、名ばかりにならないでくださいよ？」

「え？」

驚いたように呆然とする一刀はあえて無視。

さて、あとは――

「朱里、雛里」

悲しげな雛里とどこか思いつめたような顔の朱里は何を言うべきか悩んでいるようにも見える。

「二人の君主様はまだ他の英雄に比べ不甲斐ないですし、貴女達が支えてあげてください」

押し付けるようで心苦しいですが、彼女達なら私などでは及びもつかない智謀で桃香の王道を強固なものにしていけるでしょう。

惜しむらくは私という駒がそれに沿わないということ――

「……私は、諦めませんから」

「朱里？」

「私は、私達の往く道と刃様の道が重なることを信じて――ううん、私が刃様を巻き込んじゃいますから、絶対同じ道を進めるように。だから、覚悟してくださいね」

「は――」

ホントに、どこまでもこの子は私の予想を超えてくる。

「――ふふっ、なるほど。心しておきましょう」

必死にコクコクと頷く雛里にも知らず、笑みがもれる。

ここまで心を揺らされることになるとは、正直思いませんでしたね。

心なしか、実際に地面も揺れて――

「ん？」

ドドドドドッ、という地響き。

気のせいだと思うには無理がある音の大きさと、震度として観測されるレベルの揺れに首をかしげる。

が、次の瞬間に聞こえた、

「刃様ぁぁぁぁぁっ！　会いたかったわぶへっ！？」

身の毛もよだつ野太い声と突如現れ、一直線に突貫してきた化け物に体は勝手に反応し、その“何か”の顎を躊躇なく、それなりに

手加減なく蹴り上げていた。

空中へ跳ね上がったソレはまったくその一撃も意に介さず、綺麗な着地を見せると内股のいわゆる女の子走りで駆け寄ってきて、私のことを指でつつく。

なんだ、この超再生能力は？　いや、この場合は耐久力バグの方が当てはまるかもしれない。

「んもぅ、再会のハグに照れるなんてシャイなんだかばぼっ！？」

言い終える前に顔面目掛けてほとんど本気で蹴りを繰り出し、数メートル離れたところまで吹き飛ぶ筋肉達磨。

「あの、刃……？」

「なんでしょう？」

「いや、今の――」

「はて、私は何も見ていませんよ？　そうですとも、浅黒い肌に筋骨隆々、そしてなぜかピンクの水着らしきものを着用した気持ちの悪いオッサン的な存在なんているわけがないじゃないですか」

「むしろ、詳細に見知ってるじゃないか……貂蝉と知り合いだったのか？」

……記憶からは抹消したかったのですがね。

それに、一刀達が知り合いだったのが私としては意外ですよ。

「一刀と再会する前、旅の途中で賊に捕まっていたところを助けたことがあるんですよ」

ま、捕えられたとは名ばかりではぐれた仲間と会うためにそんな噂を流していただけなのですが。

一応、曹操軍に引き渡したはずなのに……どっから湧いたのやら。

「うふ、あの時思ったわ。刃様が私の運命のひぼふっ!?」

またしても近くに湧いて出ていた貂蝉を踵落とし＋踏みつけで地面へ叩きつける。

ドゴン、という音と共に顔面から地面に沈みましたが……また復活するんだろうなぁ。

以前会った時も疲労を感じるくらい叩き伏せてやっと気絶したくらいですし。

「一刀達はどこで？」

「いや、洛陽を歩いてたら突然現れて、俺の事をご主人様だとか……」

「……一刀……貴方がこんなＵＭＡにまでそんな呼び方を要求するとは。私の知る一刀はもう遠くに行ってしまったんですね」

「違うよ!?　俺が言ったわけじゃないよ!?　それに物理的に遠くに行っているのは刃だろっ!!」

「当然でしょう。そんな特殊性癖の人間に関わらないというのは」

「倒置法で言わないでくれ！　誤解が広がるからっ！」

「大丈夫よ！　私は刃様もご主人様も平等に愛し――」

「「お前は黙ってろ！」」

二人の息が合った蹴りは復活した筋肉達磨を再び地に叩き伏せた。

今度は地面に罅が入っているのですが……まったく効いていないように思えるのはなぜでしょうね。

「まったく、何が何やら……」

「貂蝉の話によれば、この後は俺たちと一緒に平原へ向かうつもりらしいけど」

「へ～、ソレハヨカッタデスネ」

「何その他人事な言い方！？」

だって、他人事ですし。

ああ、でもとどのつまりが、

「これで一刀ハーレムも新境地を開いたんじゃないですか？　やったね！」

「囲（かこ）わないよ！？　って、何故さらに距離が遠ざかるっ！？」

いや、ハーレムについてはスルーですか？

「んもう、刃様ったら相変わらずつれない――ごふっ！？」

と、いつの間にやら音もなく私に接近していた貂蟬が、再び吹き飛んだ。

しかし、それは私の手によるところではなかったりする。

「やっと姿を現しましたね！」

私を守るように立つのは愛用武器の鉄脊蛇矛（てっせきだぼう）を持った灯理。

しかし、アレを吹き飛ばすとは……。

「あらん、この子は――」

「成敗ですっ！」

話を聞くつもりはないらしい。

鬼気迫る一撃は再び無傷で立ち上がっていた貂蟬を吹き飛ばし、

「え？　ちょ、なんで俺のとこに――！」

見事、一刀に命中した。

「さぁ、戻りますよ。兄さん」

騒ぎの中、私の手を引いてさっさと歩いていく灯理。

「危なかった……あんな生物がいたなんて。それに、あの天の御遣いまで変な性癖を持っているとは思わなかったです、気持ちの悪い」

どうやら、灯理の中では一刀が男色に目覚めた危険人物に認定さ

れてしまったようです。

まぁ、例の貞操云々に関しては貂蝉のことだろうから彼女（？）に関しては気にしなくてもいいのですが……。

「……ご愁傷様です」

現在も貂蝉に押し倒されてもがく、我が妹に間違ったレッテルを貼られた一刀には同じ男として同情の念でいっぱいでした。

合掌。

＊

「ふぅ、まぶしいまでの快晴ですね」

妹の活躍により、貞操を守り抜いた（？）翌日。

なんやかんやあった洛陽での日々もお別れ。

出発前ということでこれまでの旅でお世話になった、そしてこれからもお世話になる相棒のもとへと向かう。

が、そこには私の相棒、風鈴を撫でる先客が。

「あら、刃。この子の餌ならもう済んだわよ？」

そう言って笑いかけてくる孫策さんはどこか明るい顔をしているように見える。

「随分、懐いているんですね？」

「ん、まぁ私が昔から面倒を見てたからね」

それはまた……大事な馬を与えていただけたものですね。

ホントにこの人の突飛さには驚かされます。

「でも、無事でまた会えて良かったわ。私の勘に狂いはなかった、ってわけね。名前は？」

「風鈴、です。というか育てていたなら名があったのではないのですか？」

「ん～、まぁあったことはあったけど。主人が変わったならその名前が新しい名前でしょ？　でも、風鈴か……うん、良い名前じゃない」

「育ての親にそう言ってもらえるとありがたいですよ」

「うん。ホントに……良かった」

静かに呟く孫策さんは少しの間、穏やかに風鈴のことを撫でている。

そして、最後にポンポン、と風鈴の頭を撫でて離れると、私と場所を代わり、普段の笑みを浮かべた。

「――さて、じゃあ行きましょうか」

「了解です。……これからもよろしく、風鈴」

私は一言、小声で風鈴にそう告げて先を行く孫策さんを追った。

「ふん、あれがもう一つの始点か」

洛陽の城壁の上、白い衣に身をつつんだ少年が小さく呟く。

言葉に込められたのは明確な悪意。端正な顔立ちは忌々しげに歪められている。

「ええ、彼とはまた違った加護をその身に受けているようですね。そして、それ以上にその力……」

その呟きに同じく白い衣を身に着けた青年が答える。

少年とは違う、それでいて静かな悪意は眼下の厄介極まりない存在に向けられている。

「それに――」

その瞳が、ちらりと街中の異様な大男に向けられた。

「貂蝉……チッ、面倒だな」

「彼は私達と希望を異とする存在ですからね。属性を同じくしながら、本当に理解しがたい」

「希望……？　ハッ、笑わせるな。絶望だろう、俺達の目指せるものは」

少年は心底可笑しそうに嘲笑を浮かべる。

まるで、この世界を嘲るように。

「ふふっ。ええ、そうでしたね。ともかく、制限時間（タイムリミット）は確実に迫っています」

「わかってる」

「ですが、別れてくれたのは僥倖ですね。少しは厄介さも軽減されるでしょう」

「別に関係ない。どちらにしろ――」

怪しげな笑みを浮かべる青年とは対照的に無表情で見下ろす少年は、

「殺すだけだ」

感情を殺した声で吐き捨てた。

第２１章　王道と甘い妄言。地揺らす漢女と白い影（後書き）

洛陽編、完結。

なんとかなりました……劉備軍に関しては賛否両論あると思いますし、感想などあればどうぞ。

そして、不吉な予感こと貂蝉登場！

相変わらず一刀君大好きですが、今回は刃君も好みだったり（笑）

今回が駆け足だったので次回は少しゆっくりになると思います。

ではでは、感想などあれば何でも大歓迎ですのでよろしくお願いします。

第２２章　野良犬と契りの首輪

日は高く、晴天の下で鳴り響く甲高い金属音を聞き、その発生源をボーっと眺める。

「……ふっ！」

「……甘い」

疾風を思わせる速さで繰り出された曲刀は、それを超える速さと威力で重厚な光と化した戟によって弾かれ、続く戟の振り下ろしは素早く身を翻した対象を捉えられず地を大きく抉った。

「……く」

「……次は、こっちの番」

暴風。

そう表現するに余りある凄まじいスピードと凶悪な連撃は常識というものを踏みにじり人という小さな存在を消し飛ばさんと迫る。

そして、それを成すのは非常識な身体能力と技術を持った武の化身。

「おお、凄いですね。あれを凌ぐとは……」

私の口から無意識の賛辞がもれる。

縦横無尽に躍（おど）る戟をかわし、受け止め、防戦に徹する者の顔は明

らかに歪んでいたが、その非常識な武に食い下がる力はまぎれもなく本物。

互いに無口ながら気迫のこもった戦いは、この世界でも個の武力でならトップレベルのものでしょう。

だが、それでも恋という少女はそこから更につきぬけている存在だというのが厳然たる現実だと改めて思い知る。

「ぐっ……！」

防御から転じての一閃。

軌跡が光り輝くほどの速さのそれは、しかし視認すら困難な戟の一撃によって高々と弾き飛ばされ、さらに迫る拳によって腹部を殴られた少女は、曲刀と同じように吹き飛ばされた。

「が、はっ……！」

数メートル空中を滑った彼女は体勢を立て直し、立ち上がろうとするも苦悶の表情を浮かべて膝をついた。

「はい、そこまで！」

これで、勝敗は決した。

孫策さんの制止の言葉によって戟を下ろし、テクテクとこちらに歩いてくる恋。

「恋、頑張った」

「ええ、見てましたよ」

子供にするように頭を撫でると、気持ち良さそうに目を細める恋。

ふむ、ホントに小動物チック、というかなんというか。

私的に眼福は眼福なので構いませんが。

とまぁ、そんなわけで現在孫策さん達の本拠地。その城内、練兵場にいます。

状況は洛陽から帰ってきて、早速試験というもの。

そして、陳宮は文官志望なので仕事をさせながら長い目で見ていくようですが、私と恋は武官志望、とりあえず実力を示せ、という感じ。

まずは恋からということで孫策軍でも指折りの武人である甘寧さんが相手だったのですが、さすが天下の飛将軍、出鱈目な強さです。

見ていた私自身、まともにぶつかったら勝てる気がしないですね。

「恋殿なら当然なのです！　というか、お前はいつまで恋殿を撫でているのですか！」

「いや、だって……やめますか？」

「……（フルフル）」

首を振る恋に言い返せなくなったのか怒りに身を震わせる陳宮。

ああ、この流れは――

「ぬぐぐ……ちんきゅーキーッ――」

「はい、そこまで」

「みぎゃっ！？」

先ほどと同じ言葉で跳び蹴りの体勢に入ろうとしていた陳宮をパコン、と叩く孫策さん。

完全に不意打ちだった陳宮は痛みに悶えているが、それを意に介する者はこの場にいない。

「うん、呂布に関しては想像通り、じゃないか。想像以上の強さだったし、合格ね」

満足げに頷く孫策さんは周瑜さんに視線を向け、周瑜さんもそれに気づき苦笑いを浮かべた。

「ああ、さすがは人中の呂布だな。異論をはさむ余地はない」

周りのギャラリーも恋の強さに未だどよめきが残り、感嘆の息がそこかしこから聞こえる。

ま、恋に関しては私もまったく心配していなかったし、想定内ではありますけど。

「じゃあ、次は刃の番ね」

「了解です、どなたが相手でしょうか？」

少なくとも甘寧さん以外だとは思いますが。

最後、とっさに防御していたのは見えましたが、あの様子では完全に防御ごと抜かれてダメージ受けてるでしょうし。あの恋のメガトンパンチですからねぇ。

多分私もあれをもらったら数分は足腰がたたないと思いますし。

となれば周泰さんか、黄蓋さんか。

できれば灯理は勘弁してほしいですね。

むしろ、それなりに実力のある普通の男武将でも私は一向に構わない、いや、できればそれでお願いします。

「ん、私♪」

「……はい？」

あっけからんと自身を指す孫策さん。

え、マジなのこの人？　本気で言ってるの？

助けを求める視線を周瑜さんに向けるも、溜息をつきながら頭を押さえるだけで異議を唱えるような様子はまったくない。

なに、そのやっぱりか……みたいな諦めの表情。説得する気ゼロですか？

……仕方ない。ここは自分で「異議あり！」を選択しなくては。

「待っ――」

「“約束”でしょ？」

開始数秒で敗訴。

法廷では証拠がすべて。厳然たる“約束（事実）”によって逆転するチャンスごと叩き潰されました。

……珍しく正論とかずるい。

「じゃ、やりましょうか」

嬉々とした表情の孫策さんに促され、模造刀片手に向かい合う私。

「あの、条件って……そのままですよね？」

「当然♪」

この瞬間、勝負に私の人としての尊厳が賭けられた。

「ま、負けられない……！」

仕官云々などが可愛く思えるほどの重大なベットがのしかかっている気がするのは錯覚ではないでしょう。

未来なんて担保にするもんじゃないです、ホントに。

「本気でいくわよ？」

「今回に限ってはその言葉、花でも添えてお返ししますよ」

向かい合い、互いに構えをとる。

その気迫は試合などという生易しいものでなく、まさに死合。

……というか、私にとってはある意味で死を賭けてるも同然ですが。

それに、対峙して改めて感じる。

この人は王であると同時に生粋の武人であると。視線に含まれた狂的な愉悦は獲物を前にした猛獣に似た輝きを放っている。

『……』

ジリジリとプレッシャーが私の感覚をむしばむ、彼女は一歩も動いていない、なのにその存在は徐々に近づいているように思えた。

「――っ！」

そして、弾けるように感覚が訴える警鐘。

迷いなく踏みだし、振るった模造刀は大きな音と共に火花を散らす。

野良犬と猛虎、二度目の戦いが始まった。

＊

Ｓｉｄｅ周瑜

「……さすがに凄まじいな」

雪蓮の態度から噂以上の武人だろうとは思っていた。

だが、目の前で雪蓮と戦う上代の強さはその想定をも軽く超えている。

「っく、相変わらずやるわね、っ！」

「こっちの台詞ですよっ！　ちっ、無茶苦茶にもほどがある！」

孫呉の王でありながら、軍内で屈指の武を誇る雪蓮。

その彼女と渡り合うだけの腕前というだけでも十分な戦力となりうることは確かだが、なによりその戦い方には驚かされる。

剣を手足のように操り、途中途中に足技と武術をからめたその動きは人のソレではない。

剣をかわしたかと思えば垂直に伸びる蹴りが爪のような鋭さをもって迫る。それを防いでも、空中で体を捻りもう一つの足を回し蹴りの要領で繰り出す。

その次の瞬間には剣が迫り、雪蓮の攻撃は始動を裏拳で潰していた。

そして、その剣に体術が織り込まれた戦い方は雪蓮のものと酷似しているように私には見える、いや実際に似通っているだろう。

そんな攻防が互いに繰り広げられているのだ。

縦横無尽、目まぐるしく駆ける二人の戦いは常人の知覚の範疇を遥かに超えていた。

事実、私もそれなりに武の心得を持ち、軍師として武将を見てきているが、二人の間には割り込める隙を見出すことができない。

「ほう、想像以上にやるのぉ、あの小僧。あそこまでの腕があるのであれば策殿に譲らず儂がやればよかったかの？」

「祭殿……あれは無理でしょう、今回は雪蓮が譲るとも思えません」

面白いものを見つけた子供のような目をする祭殿には二人の戦いに触発されている様子が容易に見て取れる。

彼女の喧嘩好きにも困ったものだ……まぁ、そのくらいの気概がなくては我らが軍の将など務まりはしないだろうが。

「はっはっはっ！　確かにあんな楽しそうな策殿も珍しい」

「はぁ……」

ああいったところは雪蓮の悪癖なのだけど……また、頭が痛くなりそうね。

にしても――

「また、か……」

そんな目まぐるしく移り変わる戦いの中、私は違和感に首をかしげる。

「しかし……妙じゃの。奴のあの動きは一体……？」

祭殿が私と同じ疑問を持ったようで考え込むように呟いた。

上代の動きが、少しおかしい。

奴に触発されて普段以上の力を発揮しているだろう雪蓮と渡り合う上代は、それでもその戦いの中で数回の勝機をつかんでいる。

だというのに、奴はまるで雪蓮に攻撃することをためらうような動きの鈍さがあった。

実際に傷つけることを恐れている、とは思えない。

奴の性格をまだ深く知っているわけではないが、例の“約束”とやらを聞いた際の上代は雪蓮を打ち倒す気構えだったはずだ。

攻撃の好機になった時に顔を顰め、一瞬急激に動きが緩慢になるその様子は明らかに異常なもののように映る。

「体調が悪い、というわけでもなさそうじゃな。どうする、止めるか？」

「……それを判断するのは私ではないでしょう」

言いつつも、私にはこの戦いの結末が見えたような気がして、思わず口元が緩むのを自覚していた。

＊

「兄さん、こっちです」

時は流れて……といってもあの試合から数時間しか経っていませんが。

私室となる部屋に向けて移動中の上代刃です。

先を行くのは案内役の灯理。

彼女の要望が通ったとかで、私の私室は灯理の隣に位置しているらしい。

妹とはいえ、それは不味いんじゃ？　とか一応言ってみましたが、灯理に「私と近くじゃ嫌ですか……？」とか意気消沈した様子で言われては白旗を揚げざるを得ません。

ちなみに同じように希望した恋も私の隣らしい。そしてそうなれば、当然その隣は陳宮になっています。

でもまぁ灯理と恋に関しては同室を希望したので、それを防げただけでも重畳でしょう。

自ら、小さな軍師に跳び蹴りされたり、軍内でシスコン扱いを受けるような趣味はありません。

……え？　そんなことより、試合はどうなったんだ、って？
それは――

「ふふっ、兄さんも大変ですね」

そう楽しげに言う灯理の言葉からもお分かりでしょう。

負けましたよ、誠に遺憾なことに。

何が遺憾、って何故あそこで少し無理をしても試合を思いとどまらなかったのか、ということに尽きます。

……失念していいことではなかったのです。
彼女が私の勝てない相手だということを。

試合の最中、ずっと私を悩ませた頭痛は彼女に攻撃を加えようとした途端に激痛を与えてくるわ、記憶の中の誰かと姿が重なって精神的にも疲弊するわで、最終的には傾向を読み切った孫策さんの一撃で模造刀は高々と宙を舞った。

やけくそで放った蹴りも孫策さんの模造刀を捉えこそしたものの、同時に感じた脳天への衝撃で私の意識は闇へ沈んでしまいました。

後で聞いた話によると、踵落としをまともに食らってしまったらしいです。

「私に助けて、って言えばよかったのに」

肩にとまるすーちゃんが言う言葉に、私は軽く溜息をついた。

（そうもいかないですよ。恩義が前提としてある、個人同士の戦いに他者の力を借りるほど私は外道ではありません）

いくらプライドはなくとも義理をたてるくらいの良識は持ってるつもりですから。

「義理堅っ。そんなんじゃ将来、相当搾取されるよ～？」

（この問題に関してはむしろ望むところですよ～。はぁ……）

ともあれ、負けはしたもののその腕は認められ仕官は正式に受理。同時にあの約束も正式に成立。

……起きた時、看てくれていた灯理に抱きついて気を紛らわせようとした私は悪くないはず。

いや、嘘ですけどね。思いとどまりましたよ、ちゃんと。

まぁ、約束の内容自体少し変わったので、まんま呑まされたわけでもないんですよね。

孫策さん曰く「一生とかはさすがに可哀相だし、借りを返しきった、って刃が思うまででいいわよ」とかなんとか。

最初こそ意外にいい人だったのか。とか思ったりしたもんですが、後々考えてみれば自分が恩義を返しきったと感じた時とか、純日本製のヒューマンである私に訪れるのか？　という壁にぶち当たり、再び落ち込んだりしました。

謙虚は美徳、異論は認めない。

「そういえば、兄さんって家庭では弱そうですよね」

それは私が尻に敷かれるタイプだと言いたいんでしょうか？

はっはっはっ、そんな馬鹿なことあるわけが……ない、とはいえない……。

「というか、なぜそんなに嬉しそうなんですか？」

私と孫策さんを除けば、ただ一人“約束”の内容を知っている灯理がそんなに喜ぶ理由がわからないです。

「私は二人のこと応援してますから」

「……こんな所に伏兵が」

主に私の人生を波乱に巻き込む的な意味で。

「あれ、雪蓮様のこと嫌いなんですか？」

「いや、そういう問題じゃないでしょう」

それに、仮にも孫策軍の一兵士に聞くことじゃないですよ。

「折角、私も兄さんと一緒に雪蓮様とちゃんとした家族になれると思ったのに……」

ちょっと待った。衝撃発言ばかり連発しないでくれますか、灯理。

そして、じっとこちらを見るのはやめてください。何か答えなき

ゃいけない空気になりますから。

「……まぁ、嫌いじゃありませんよ――私は彼女が苦手ですが。むしろ少しは好意的に感じている所もありますし――私は彼女が苦手ですが。それに恩人でもありますし――私は彼女が苦手ですが。というか、いきなり壮大にして赤裸々な計画を暴露しないでください、孫策様の気持ちもあるんですから――私は彼女が苦手ですが」

「……えっと、嫌いじゃ、ないんですよね？」

「ええ、全然嫌いじゃありません――私は彼女が苦手ですが」

「とりあえず、兄さんが雪蓮様を苦手だということは理解しました……」

うん、意思疎通は概ね不調。

別に何度も言ったからといって強調しているつもりはないですよ？ただ口癖になってしまっただけの話です。

言った通り苦手ではあっても、そうそう恩人を嫌うなんてことは――

「あ、おかえり～」

「……なにしてるんですか、孫策様？」

私室へつき、扉を開けるとそこには寝台に腰掛ける私を昏倒させた張本人が。

足をぶらつかせながらお茶を飲む彼女に顔が引き攣るのを感じる。
隣の灯理も苦笑していることから私の状況把握は予感から確信へ変わった。

「はぁ……なに仕事放ってくつろいでいるんですか？　しかも私の部屋で」

「お、すごい。なんでわかったの？」

「少しは悪びれろっ！　ああもう、なんで私を巻き込むんですかっ！？」

「わ～、すごいすごい！　私の考えは完璧にお見通しってわけね」

できれば外れてほしかったですよ……。

先ほど灯理から聞いた話によれば、今は人手が足りない状況。
そんな中で大将である孫策さんの仕事が少ないわけがない、いやむしろトップレベルに忙しいはず。

「大丈夫、ちょっと休憩しに来ただけだから」

「……いつまで居座るつもりです？」

「冥琳に見つかるまで♪」

笑顔で虚言を暴露。

ある意味大物といえるその豪胆さに、私も感動……するわけがない。

そんな会話の間にも侍女がお茶と点心の補充に来て、状況は更に悪化している。

――いや、もう手遅れだろう。

だって、私の肩に細くも異様な握力でミシミシと存在感をアピールする手が置かれているもの。

「……雪蓮、上代。この忙しい時分、優雅に飲茶とは良い御身分だな……？」

私は一口たりともご相伴にあずかっていません、という正論とか、孫策さんは実際良い御身分ですよね、という屁理屈を言おうとした私は振り向いて、

「……ハイ、スミマセンデシタ」

デビルスマイルによって凍りついた。

そして、むくれる孫策さんと共に引き摺られていく中で、信頼の違いかお咎めのない灯理に向けて私は口を開いた。

「灯理……やっぱ、少し嫌いかも」

その後しっかりお叱りを受けた私は、今日は仕事がないはずの私にも雑務を用意された周瑜さんの用意の良さに舌を巻くほかありませんでした。

第２２章　野良犬と契りの首輪（後書き）

以前書いたように、これからはゆったりした進行になると思います。

文章の長さとか勢いのなさに関しては作者スペックの問題なので改善は難しい、かも。

感想や指摘などあればお待ちしてます。

第２３章　武官、刃のとある一日　前編　～超能力者～（前書き）

前編、ということで二部構成となっています。

第２３章　武官、刃のとある一日　前編　～超能力者～

どうも。孫策軍に将として正式加入した上代刃です。

突然ですが、最近……久々のデスクワークに睡眠時間をガリガリ削られていたりします。

いやいや、お前武官じゃん。そんな言うほど仕事なんて回ってこないだろ。

――そう、思っていた時期が私にもありました。

気づくべきだったんです。あの日、冤罪によって周瑜さんの怒りに触れた後、命じられた雑務をこなす私を見ていた彼女の眼鏡がキラリ、と光ったことに。

そして、武将としての指揮能力を見るとかいう口実で巧妙にカモフラージュされた質疑応答によって文官としての仕事もできるとか判断されたという運びに。

思惑をオブラートに包む作業にまでその知略を生かさないでほしいです。

私が天才と名高い周瑜さんの思考を読めるわけがないじゃないですか。そんなのは同じく天賦の才を持った朱里たちの仕事ですよ？

で、結局は武官でありながら文官の仕事もする、という非常に都合がいい役職におさまることに相成りました。

「――ぁふ。眠い……」

そんなわけで今朝も睡眠という至福にしがみついていた私。

今日は私が任される部隊との顔合わせがあるとかで文官の仕事はない。久々の睡眠時間に歓喜した私はまだ寝ていて当然なのですが。

その至福から私を物理的にひっぺがした極悪人が一人。

今現在、私の首根っこを掴み引き摺っている彼女には私の眠そうな様子も見えていないようです。

まったく、こんなに私がアピールしているというのにこれだから老眼――

「ぐっぁ、ごほっ！」

いきなり襟首を締められて息がっ……！

「お主、今相当失礼なことを考えたじゃろ？」

全力で首を横に振る。

ふん、とそれを一瞥して襟元を緩めた黄蓋さんは、それでも朝から変わらずどこか楽しそうだ。

「はぁ……」

ずるずる引き摺られる状態から立つのも億劫になった私は、半ば自棄気味に睡眠時間を稼ごうと体から力を抜き、意識を夢の中へと落としていった。

＊

――白い。

思考がぼやける。これは……夢、というやつだろうか。

「おい、そこの幸薄そうな少年A」

……誰？

家の縁側で俯く私は顔を上げずに答えた。

「ん、なんて顔してんだよ。なんかあったのか？」

……なんでもない。

覗き込んできた彼の瞳にたじろぎながらも顔を逸らした。

「暗いな～。こんないい天気なんだから遊べよ、子供。ガキはそれがフツーらしいぞ？」

どうでもいい。そんなことより、自分に関わらないで欲しい。

私にはそれによって生まれる結果を受け止めるだけの強さがないから。

それに誰も私を気味悪がって近づかないんだ。

「なんだそりゃ。悲劇のヒロイン気取りですか、結城君」

いや、誰だそれは。

「俺の名字さ、相沢君」

……それも誰さ。

「俺の友人の名字だよ、宇津君」

……。

「むむ、これも違うか。適当に言って当たったら――実は俺、超能力者なんだ……とかカミングアウトするつもりだったのに」

無謀すぎる上に何の意味もない挑戦だよ、それ。

「まぁいいや。名を名乗れ、幸薄そうな顔を装ってる少年A」

呼称が少し腹黒くなったらしい。

さすがにそんな呼ばれ方はしたくない。

……私の名前は、神……いや、上代刃だよ。

「刃か。よし、じゃあ遊ぶぞ、刃」

なぜ？　私は誰とも関わりたくな――

「お前は子供だろ？　なら遊ぶ義務がある、らしい。というわけで拒否権はない」

なんて無茶苦茶な理論だ。

「大体、俺と会った時点で関わらないっつーことの意味はなくなってんじゃないか？　ならいいじゃん、別に」

……今度は正論だ。

凄まじく強引だけど、彼は正しい、そんな確信さえさせるような自信に満ちた言葉。

「だが、俺も鬼じゃない。どこからどう見ても貧弱で虚弱で暗弱（あんじゃく）なもやしっ子の刃を気遣って最初はインドアな遊びにしてやろう」

……いや、君は鬼だよ。

とりあえず言葉の取扱説明書を読みなおしてみよう？

「ということでチェスだな」

って、意外に知的なゲームだ。

もっと短絡的なものを選ぶと思っていたのに。

「んじゃ、俺白な」

どこから取り出したのか、ボードと駒を並べていく結城。

「――よし、じゃあ始めるか」

なんという、驚きの白さ。

私の黒陣営は普段通りの配置なのに、相手はキングとポーンのみ。

……そして、敵のポーンは白側の四列を完全に埋める３１体。盤面の半分を埋める白いポーンたちは壮観ともいえる。

「名付けて、物量の勝利作戦！」

それ、作戦名じゃなくて勝因。

兵法の基本に則って、決められたルールをぶち破った結果だよ。

まさに大軍の蟻は象をも倒す、みたいな。

「は？　蟻がいくら集まっても象にゃ勝てねぇだろ。馬鹿？」

理不尽だ。

「ともかく、始め――ん、なんだあいつら？」

仕方なく策を練ろうとしていた私は結城の怪訝な声に首をかしげ、その視線の先をおって――――後悔した。

そこには、私をいつも蔑視し、無邪気な暴力をふるっている同年代の男子たち。

親からの受け売りなのか、その悪意は邪気がないからこそ苛烈なものだった。

いつものように、結城がいることも気にしていない、いや、それどころか彼にまでその矛先は向いたようで、口々に気持ちが悪い、だとか消えろ、などの罵声を浴びせてくる。

そして、またいつものように手近な石を拾って投げてきた。

……っ！

私は、無意識に結城を庇おうと動き、彼の手で制される。

飛んでくる多くの礫（つぶて）、それが彼に当たりそうになり、私はその制止を振り切ろうとして――固まった。

飛んできていた大量の石、それは彼の目の前まで来て、消えた。逸れたのでも砕けたのでもない、消えた、まるでそれが幻であったかのように。

途端にざわめく子供たち。

それに向けて、結城は鋭い視線を向けると、息をすぅ、と吸い込んで、

「散れ！　屑（くず）どもッ！！」

獅子の咆哮を思わせるような恫喝（どうかつ）を放った。

それは空気を大きく震わせ、地を揺らしているような感覚すら覚えるほど凄まじいもの。

文字通り、蜘蛛の子を散らすように逃げていった彼らに厳しい視線を送っていた結城は一つ息を吐き、さっきと変わらない、柔らかな表情でこちらに振り返った。

「驚いたか？」

さっきのは……なに？

勝手に口が動いていた。

異質で普通からは排斥されるような異常、でも、それを怖ろしいとは思わなかった。いや、むしろ期待に胸を躍らせている自分がいる。

「ああ――実は俺、超能力者なんだ」

――――こうして私は、一人の超能力者と出会い、その未来を大きく変えることになる。

「あ、どうせこうなるんならさっきカミングアウトしなきゃよかった」

……いろいろ台無しだよ、結城。

＊

「……ん、あれ、私は――ぐ、ぁっ！？　な、なにがっ……がふっ！？」

まどろみの中から意識を覚醒させた私は、急激に締まる首元に目を白黒させながら手足をバタつかせる。

「む、起きたか」

首元が緩み、地面に尻餅をついた私の目の前には二度も安眠を吹き飛ばしてくれた黄蓋さんの姿が。

周りを見ると、城内の中庭のようだ。ときおり鍛錬にも使われる

というだけあってなかなか広い。

「まったく……揺すっても起きんとは怠惰極まりないのう。若いならもっとシャンとせんか」

「え、あの……揺すった、って今みたいにですか？」

当然だろう、というような顔になる黄蓋さんに冷や汗がドッと流れる。

どうやら、今回に関しては永眠コースだったようです。

吹き飛ばしてくれた彼女に感謝……は、できませんね。まずもって元凶ですし。

まぁでも、今ので目は覚めました。不本意ながら。

「それで、一体何の用です？　私、久しぶりの休眠中だったんですけど」

若干棘があるのはご愛嬌。

自重するつもりはない、正義は我にあり。

「うむ、今朝は珍しくお主の時間が空いていると冥琳に聞いたものでな。一度やり合ってみたかったんじゃ。模擬戦に付き合え」

……周瑜さん、私のこと嫌いですね？

というか孫策さんといいこの人といい、なんでそんなに当然のごとく私の意見を無視できるんでしょうか。

良心に上代刃専用のフィルターとかないですよね？

「ほれ、さっさと準備をせい。すぐに始めるぞ」

模造刀を放って寄こした黄蓋さんはすぐに準備を始める。

彼女に逃がすつもりはないらしい。私もそれに倣ってまだ起ききっていない体を軽く動かし始める。

「……なんだかなぁ」

そして、すぐに自分の顔が緩んでいて、いつになく体が軽いことを自覚した。

結城。

彼のことはまだ全部思い出せないが、それでも自分の中のわだかまりが一つ解けたような、そんな安心感が心を満たしている。

人のことを貧弱だとか言っておきながら、遊びと称していろいろなことに巻き込まれた気がする。

今の、自分の他者に比べて高い身体能力も彼の影響は大きかっただろう。

「よし、では始めようか。……む？　お主、なにをにやけておるんじゃ？」

「あ、いえ、なんでもないです」

思わず、表情を引き締めると可笑しそうに黄蓋さんが笑い始めた。

「ふふっ、折角初めて見る穏やかな表情だったのだから、そう無理

をせんでもいいぞ？」

少しバツが悪くなった私は黄蓋さんの言葉には応じず、そそくさと向き合い剣を構えた。

まだ少し笑みを湛えていた彼女もそれに呼応するように表情を引き締め、同じように構えをとる。

『……』

互いに見つめ合い、意識を集中させていく。

中庭に流れていた穏やかな空気は掻き消え、緊迫に満ちた空気で塗りつぶされた。

「では、いきます」

一言、声をかけて体を前に傾ける。

「ああ、来い」

その言葉が終わるか、終わらないかという時には既に一息で迫撃し、放つのは体のバネの力を乗せた逆袈裟の一太刀。

「っ！？　ちっ、やはり速いのう」

一瞬、驚きこそしたものの黄蓋さんの剣はそれをしっかりと受け止めている。

が、それで終わるわけがない。

剣から力を抜いて体勢を低くすると、足元を掬うように回し蹴り、

さらに剣も同時に振りぬく。

蹴りの鋭さに防御を諦めた黄蓋さんは斬撃を自身の剣で受けながら後ろに跳んだ。

しかし、退避は許さない、とばかりに力いっぱい足を踏みしめ跳躍、それに追いすがる。自覚するのは身の軽さ、幾分全力を尽くせる程度ではあるらしい。

「これは、策殿の時より速い……！？」

追撃として体の捻りも加えた横薙ぎの一太刀。

当然のごとく防ぐ黄蓋さんは、しかしその端正な顔を苦々しげに歪めた。

慣性の力も乗った渾身の一撃は相当重いもの、それも当然か。

そして、その一瞬、踏みとどまるために体はその場を動けない。

そのがら空きの胴へ、剣を絡めつつの回し蹴りを予備動作なしで振り抜く。

「――な、ちっ！」

しかし、それも片腕で防いだ黄蓋さんは意識の逸れた剣をいち早くほどくと、首筋めがけて矢のような突きを繰り出した。

「ぐ、ッ……！」

思い切り体を反らし、バク転の要領で距離を空けた私の顔には一筋の汗が伝っている。

「さすが、黄蓋さんというところですか……今のは焦りましたよ」

古くから孫呉を支える猛将。

数多の経験に裏打ちされた戦い方にはほとんど隙が見受けられない。

堅実に敗因を潰していき、最後には自身の勝利するパターンへと戦いを導いていく。

私の浅い経験では到底不可能な芸当だ。

「いや、儂こそ焦ったぞ。まさかお主の一撃がこれほどに重いとはな」

言って、顔を顰める黄蓋さんの左腕はぶらりと不自然に伸ばされている。

加減したとはいえ、それなりに重いものを放ったつもりだ。おそらく痺れていて動かせないのだろう。

「回復を待つつもりはないので、あしからず」

「ふっ、当然じゃ。もしそんな腑抜けたことを言えばはっ倒しておるところよ」

黄蓋さんの軽口に小さな笑みがこぼれる。

そして、一気に距離を詰め、フェイントをまじえて左腕側からの袈裟斬り。

それも類稀なる動体視力で防いだ黄蓋さんだが、体勢が厳しいのかその力は普段よりも随分弱弱しい。

「ぐっ、しまっ――！」

そんな隙を逃すわけもなく、彼女の手元の剣を蹴りで跳ね上げると、その首筋に剣をつきつけた。

「私の勝ちですね」

「……ああ、儂の負けじゃ」

敗れてなお、黄蓋さんは楽しげに笑う。

いや、むしろ負けたことでさらに機嫌が良くなっているような気もする。

武人の性（さが）というやつですかね。以前、星も言っていましたがその向上心には驚かされます。

「ああ、そういえば、少し気になったことがあるのじゃが」

「ん、なんでしょう？」

休憩に近くの椅子へ一緒に腰掛けた黄蓋さんが思い出したように話し始めた。

曰く、私の戦い方と武器が合っていないとかなんとか。

さすが、歴戦の武人だけあって目をつけるところが違うというところでしょうが、それに関しては同意と同時に諦めもついています。

確かに私の手に最も馴染むのは使い慣れた日本刀ですが、あるとも思えませんし。

「そう言うでない、この街には優れた名匠もおる。幸い儂の知人でもあるし、試しに頼んでみてもよいだろう？」

やけに協力的な黄蓋さんは私に詳細を書き記した書簡と黒鬼を準備して、明日一緒に鍛冶師のもとへ向かう約束をとりつけてしまっていた。

随分強引だが、厚意からのものだと思えば悪い気はしない。

「では、また明日に」

「うむ、ではな」

「はい――と、その前に」

立ち去る前に近くの木に近づき、その幹に蹴りを見舞った。

大きく揺れる木。

そして、どしゃっ、と上から人影らしきものが落っこちてきた。

「っ、いった～～い！」

「……さて、孫策様、こんなところで何を？」

落ちてきたのは我らが大将様。

無論、こんなところで油をうっていていい人ではない。

「あはは～、ばれてた？　あの、刃？　顔が怖いわよ？」

「ここで、何を？」

「……ちょ、ちょっと、お昼寝を――あ、でも途中からは刃と祭の試合見てたわよ？」

ええ、そうでしょうとも。途中から視線を感じていましたから。

なぜこの世界の英雄たちはこうもサボり癖があるんでしょう？

例外は曹操さんだけです。

「あ、あの、刃……このこと、冥琳には――って、ちょっと、待っ――！」

喚く孫策さんを無視し、腕を引いていく。

貴女がサボったことによる周瑜さんの心労は私の仕事にダイレクトに繋がっているんですから、少しは自重してください、ホントに。

そんな私達を笑って見送る黄蓋さん。

なに他人事みたいな顔してるんですか、貴女は。

「ああ、それと黄蓋さん」

「んむ、なんじゃ？」

「後で数人向かわせるので、きっちり仕事をしてくださいね。特に、お酒……とか仕事に一分の関わりもない物には近づけないよう言っておきますので」

「なっ！？　そ、それは――」

聞く耳は持ちません。
普段、周瑜さんの心労の元といえばこの二人なんですから。それに手を打つのは当然です。

背後と隣から非難の声が上がっていましたが、完全に無視した私は縋るような目をした孫策さんを満面の笑みで周瑜さんへ引き渡し、次の予定までの残る時間を睡眠へあてようと、自室の寝台へ倒れこむようにして眠りについた。

ちなみに孫策さんを引き渡した際に周瑜さんの目が「計画通り」といわんばかりに黒い笑いを浮かべていた気がしましたが、背筋に走る寒気にその考えを封殺した賢しい武官こと上代刃でした。

第２３章　武官、刃のとある一日　前編　～超能力者～（後書き）

ゆったり進む、とか言っておいて、ホントに無茶苦茶鈍足になってしまいました……ｏｒｚ
スミマセンです、はい。

半日、というのは自分の中で最短記録かもしれないですね。
次回からはもっと進められるといいなぁー。

お気に入り登録数が１５０件を超えたっ！？
評価もいただけて歓喜のあまり、机に膝を強打する始末です、膝超痛い……。

ともあれ、ありがとうございました！
これからも精進していく所存であります！

あと、感想などあれば大歓迎です！

ではでは。

第２４章　武官、刃のとある一日　後編　～友達～（前書き）

後編です。

ただし、今回は真面目な話になっているのであまり面白くないかも……。

まぁ、これまでが面白かったかどうかは謎ですが（笑）

サブタイトルが適当になっているのは仕様です。

考えた末、思いつかなかったという噂があったりなかったり。

第２４章　武官、刃のとある一日　後編　～友達～

目の前が白い景色に包まれている。

私は……確か、寝台で眠りについたはず。となれば、これもまた夢、ということか。

ふぅ、ここまで自覚があるとは明晰夢どころの話ではない。

白く淡い中で色を持っているのは二人の人間のみ。

チェスで戯れる結城と幼い頃の私だ。

「へぇ、刃は意外と熟考タイプか？」

「……これ、熟考云々とか以前の問題だと思う」

思わず苦笑がもれる。

それもそうだ。盤上の黒い駒は残すところ二つ。キングとクイーンのみ。

相手のポーンも随分目減りしたが、それでもキングを守る絶対的な壁として厳然と布陣している。

そして、戦場を支配するのは白い三つのクイーン。

プロモーションによって誕生した三体の白い悪魔は見事に黒い軍勢を蹂躙（じゅうりん）し尽してくれた。

手の打ちようがない。せめて三体のうちの一体でもいなければまだ継続の余地はあるのに。

「……さすがに無理、かな」

投了（リザイン）を決めたのかしばらく唸っていた私は黒のキングに手をかけた。

「なぁ」

そんな私に結城が声をかける。

その表情は真剣でありながら、どうでもいいと思っているような不思議な顔だった。

「なに？」

「もし、この状況から白い駒の一つでも黒に寝返ったらどうなると思う？」

「え……？」

驚いた。

心を読まれたのかとも思ったけれど、結城にそんな様子はなく、ただ答えを待っているだけだ。

「う、ん。このクイーンが白になったら……勝機が出てくる、かな」

盤上でただ一人、白でありながらどっちつかずの中途半端な位置にいるクイーン。

プロモーション後にほとんどその役目を果たさず、ただ彷徨うその姿はまるで迷子。でも、だからこそ、起死回生の一体になりえる位置にいた。

「ふ〜ん、これがねェ……」

言って、そのクイーンをつつく結城はどことなく嬉しそうに見えた。

「よし、ドローだ。違う遊びにしようぜ。今度はアウトドアだな」

立ち上がる結城の顔はまた眩しいまでの笑顔に彩られている。

「さっきの言葉、もう忘れたの？」

「成せば成る！」

前言をあっさり撤回した結城はそれだけ言うと私の手を引いて駆け出した。

その言葉の後半がないのはツッコむ気になれなかった。

結城には成さねば、という仮定はそもそも始めからないんだろう、と出会って少ししか経っていない私にも理解できたから。

それから時間はあっという間に過ぎ、地面を赤々と染める夕日が一日の終わりが近づいていることを告げているような時刻。

人気もまばらな公園の芝生で結城と共に寝転がる私の身体には心地良い疲労感が染みわたっていた。

「なァ、幸薄そうな顔してた少年Ａ。どうだった？」

穏やかに聞く結城の髪や服には木の葉や小さな木の枝がついていて、それに少し笑みがこぼれた。
まぁ、かくいう私の様相も似たようなものだ。木の上、山の中、河原など様々な場所を駆け巡った体は今までにないくらい汚れていて、しかし、生気に満ちていた。

「楽しかった」

意識せずに出た言葉は心からのもの。
何も考えずに遊びまわった時間は初めて見る色に満ちている気がした。

「そりゃ重畳だ。で、まだ人と関わりたくないか？」

「……」

「およ、無言ってことは改心失敗か？　折角、あっはっはっ、刃、意思弱ぇ。って笑ってやるつもりだったのに」

「いい性格してるね、結城は」

「褒めんな、知ってる」

さすが、皮肉なんて通用するはずもない、か。

「うん……まだ、わからないよ。……でも、結城とは関わりたいと思った、かな」

どこか気恥ずかしいけど、事実だ。

ああ、そういえば、こんな関係のことを表す言葉をどこかで聞いた気がする。
あれは――

「へぇ、まぁ合格だな」

「結城」

「ん？」

「友達って、何かな？」

そう、友達だ。
深い意味までは覚えていないけど、そんな感じのものだった気がする。

「友達？　――あァ、そうか。そうだな。友達ってのは、簡単に言やぁ信頼を押し付け合う相手だな」

「ほ、本当にそうなの？」

かなり乱暴な解釈だと思う、本当の意味は知らないけど。

「そんなモンだ。お前風に言えば、互いの及ぼす影響を受け入れあってる仲、ってとこか？」

不思議と自然に意味が理解できた。いや、そもそもそれは自分がさっき得ようとした答えそのものだからか。

「……結城と私は、友達かな？」

「はァ？」

目を丸くする結城に胸がチクリと痛んだ。
原因はわからない、でも少し暗い気持ちが広がっていくような気がする。

「友達、ってのは自分主体なモンだろ。んなもんお前が決めろよ」

「え……？」

そして、次に放たれた言葉でまた呆然とする。

「お前の中で俺が信頼を受け入れてくれるような奴なら友達なんじゃねぇの？」

「えっと……うん。じゃ、じゃあ結城は……？」

思いっきり肩すかしをくらった気分だ。

苦し紛れに聞いてみて……少し、後悔した。
聞かなければわからない、どこかの毒箱猫みたいな話だ。

「あのなァ、友達じゃない奴と一日中遊ぶか？」

「……ふっ、はは、そうだね。結城はそういう奴だっけ」

しかし、すぐに追い詰められた気分だった自分に呆れて苦笑する。
彼の性格を少し考えれば杞憂なのは明白なのに。

「それは、いつから？」

「ん、あァ……ま、最初からだな」

苦笑を更に深めた。

目の前の友人はまだまだ計りきれない、複雑怪奇な性格をしているらしい。

後日、初めて会った時に言っていた相沢さんと会った。

いや、女の子だったのかよ、というツッコミは心の中に止めたけど。

相沢さん曰く、彼女も皆に除け者にされていたところで結城に会い、巻き込まれたらしい。

「ねぇ、結城」

「なんだ？」

「宇津君ってどこにいるの？」

で、あるならばもう一人のことが気になったのも当然だろう。

「ああ、あれホントの名前は宇津じゃねぇよ。実際の名前は鬱蝉（うつせみ）」

なに、その悪意しか感じない名前。

「ちなみに命名、俺」

お前が元凶か。

「でも、つけてしばらくしたらどっか行っちゃったんだよなァ。野良だったけど、今頃なにしてんのかねェ」

挙句人ですらないのかよ。

＊

Ｓｉｄｅ周瑜

執務室、書簡を整理する以外の音を許されていないとも感じる静寂の中で政務に勤しむ。

「冥琳、ちょっときゅうけ――」

「駄目よ。今日までに仕上げる案件がまだ残っているでしょう？」

私が一言で断ずると、机に座る雪蓮が口を尖らせて不満をもらす。

このやり取りが今日すでに数回では足りないほど繰り返されていることに怒りを通り越して呆れたのもこれで三度目。

上代を利用して雪蓮と祭殿を回収したはいいが、この様子では今日中に終わるかどうか……。

「あ、じゃあ刃に手伝わせれば――」

「いい案だけど、上代は今日の朝は非番、昼からは部隊の調練よ」

まぁ、奴の非番を利用した私が言うことではないがな。

「む～。じゃあ命令にしよっかなぁ～」

「はぁ、それはやめてあげなさい……」

冗談よ。と笑う雪蓮は唸りながらも再び書簡の処理に取りかかった。

しかし、最近少し働かせすぎただろうか、祭殿から聞いた様子ではそろそろ限界という感じだったそうだし。

数刻前。

「なるほど、祭殿と互角以上の腕、ですか」

「ああ、まさかあそこまでとは思わなかったがのう」

苦笑する祭殿は片腕をぶらぶらさせて軽い動作確認をしている。

気で防御した腕を貫いて衝撃を与える蹴り。祭殿が言うには上代は無意識ながら気の扱いを身につけているらしい。

蹴りに乗った気は鋭く最適化されているし、防御や身体の制御、瞬発力にも自然に利用しているのだとか。

「よほど良い師に学んだのじゃろう、奴の戦い方に根付いた見事な運用だった」

祭殿にこうまで言わせるか……。

知らず、口元に笑みが浮かぶ。

個の武でなら間違いなく一級品、指揮に関する知識、判断力があることは先日確認済み。

それでいて雑務の中に文官の仕事も混ぜたが、それも並以上に速く、的確に処理していた。

雪蓮の勘を疑っていたわけではないが、得難い人材だ。

「しかし、随分と仕事を押し付けていたようじゃが、あれではそのうち倒れるぞ？」

「それは仕方ありません。雪蓮が上代に隊を率いるよう命じてしまいましたから。雪蓮を説得するよりはまだ良い判断でしょう」

いくら武に優れ、噂とはいえ名を知られていても、仕官して数日で隊を率いる将になるというのは難しい。

特に武官ならともかく、現場を見ない文官に認められるとは到底思えない。

その筆頭である私が言うのもおかしな話だが。

なら、どうするか。

単純だ、優秀であることを認めさせればいい。武官がその武をもって実力を認めるように、文官になら知で応じて黙らせる。

幸い、奴の世界――上代曰く、天などではなく、海を越えた遠い国らしいが――の治水や農耕、区画整理などの案は奇妙でありながら理に適ったものだ。

雑務の処理速度と正確さは言うに及ばず、そうした実績をこの十日で凝縮して積み上げさせた。

そして、今日が部隊の初調練。

完全に認めた者は少ないだろうが、それでも隊を率いることに異を唱えるような者もいないだろう。

「ほう……なんじゃ、お主も存外奴を認めておるのじゃな？」

「優秀な者を正確に判断できなくては軍師など務まりません。奴の能力は呉の柱の一本となるに足るでしょう。……まぁ、孫呉に忠誠を誓えれば、の話ではありますが」

懸念事項はその一点。人格は……まぁ、合格だろう。

「じゃが、問題はなかろう？　策殿と灯理がおる限り、奴がどこぞへ逃げることなど想像もできん」

そう言って笑う祭殿に私も思わず笑みがこぼれた。

「ええ、確かに。想像以上に強固な楔（くさび）だったようです」

「――あ～、疲れた～」

脱力して情けない声を上げる雪蓮によって思考から引き戻される。

そして、自分の口元に薄い笑みが浮かぶのを感じる。

私には時間がない、雪蓮の天下を成すためにこの身体に残された時間はおそらく相当に短い。
なればこそ、逸る気持ちを必死に抑える。
今は雌伏の時。機を待つべきだ、だがそれとは矛盾した思いが頭を悩ませる。

もし……もし、私が道半ばで倒れることになっても、祭殿に蓮華様、穏、灯理たちによってその天下が成される為に。
優秀であるなら積極的に、それでいて慎重に取り入れる。

「上代刃、奴も……必ず」

小さいながらも決意に満ちた声は窓から吹く風によって掻き消された。

＊

「ふぁぁ～あ」

「でっかい欠伸だね～」

時刻は昼。
身支度を整えて、調練場へ向かう私の大欠伸に隣を飛ぶ神霊様が呆れたように声をかけてくる。

ここ数日は雑務に追われて相手をする暇がなかったからか、どこかへ遊びに出ていた彼女も今日の調練には興味があるらしい、その目は少し楽しげだ。

「……」

「ん、なに？　そんなじっと見て。惚れた？」

どことなく似てるような気もする。

自由過ぎるところとか。

「……って、私も最近どうかしてますね」

「？」

記憶が所々戻ってきているからか、妙に重ね合わせてしまう。

といっても、明確に思い出したのは結城との出会いくらいのものだけど。

それに、その記憶が私を苦しめるどころか心を埋めていくのだから意外だ。

もう届かないものであっても、それは私を確固たるものとして支えてくれるし、形作っていく。

「今度、またあのメモ帳とか見てみますかね」

忌避していた物ではあるけれど、あれも間違いなく私の一部だったものだ。

試してみる価値はある。……少し怖ろしくもあるけれど、厨二的な意味で。

と、そんなことを考えているうちに調練場へ到着。

整列する兵士達が現れた私に気づき、身なりを正してこちらへ視線を向ける。
その目には私を見定めようと、試すような色と同時に噂や試験時のことが伝聞しているのだろう、畏怖にも近い怖れが見える。

「私が、あなた達を率いる上代刃です」

彼らの前に立ち、ゆっくりと話し始める。
見た感じ、聞いていた通り数は五十。男女比はほぼ半分ずつ、といったところですか。

「私は、命令の為、ましてや隊長である私の為に生き、死ねというつもりは塵ほどもありません。あなた達は己の大切なモノの為に命をかけ、戦いなさい」

彼らの表情が驚愕に変わる。
当然だ、私は将として言うべきでないことを口走っているのだから。

「だが、それを守り抜くには力が要る。生き残り、戦い抜くための力が」

今は乱世。力なき者は何も守れず、何も得られない。

「私が、鍛え上げましょう、死すら生温い鍛錬によって、あなた達が自分の敵を屠れるだけの強さを。そして、私が、指示しましょう、あなた達が効率良く敵を殺しつくせる、ただそれを果たすように」

それが、私の思い描く将たる者の務め。

「あなた達の大切な者が生きるこの孫呉の地。――それを守るために、私と共に行く者のみついて来いっ！！」

『――――応ッ！！！』

上代隊、全員から怒号のような返答が返る。

その目に宿るのは護るための力を求める真摯にして獰猛な輝き。

――悪くない。

精強な兵に必要なものは強靭な精神力。だが、それだけではない。

理のある策や指揮に従う姿勢、そしてただ命令に従うだけでなく自己を柱とする気骨。

若輩者としての見立てだが、彼らにはその見込みがある。

「まずは、その力を見極めさせてもらいます。時間が惜しい、まとめてかかってきなさい！」

言って模造刀を構える私に皆もそれぞれ練習用の剣や槍を手に取り、距離をとる。

「――ッ、はぁぁぁぁっ！！」

うち一人、槍を持った男が力強く踏みこみ、その穂先を突き出す。

が、まだ遅い。

「――ふっ！」

最小限の動きで横に移動、槍をかわしつつがら空きの胴へ一太刀を浴びせ、地に叩き伏せた。

「さぁ、もうおしまいですか！」

動かない皆を叱咤するように声を張り上げる。

それが合図となったのか、全員がそれまでの硬直状態から一変、我先にと打ち込んできた。

斬り伏せ、蹴り、投げ飛ばす。

ただひたすらに向かってくる者を片っ端から打ち倒していく。

そして、それから数十分ほどで全員が地に伏せることになり、少しの休憩。

再開された模擬戦により、全員数度叩き伏せられてから模擬戦は終了。

その後は号令と共に陣形を組むことに取り組み、

隊の中で指揮能力に優れた者を選び出す為に隊を分けての指揮訓練。

副隊長として隊を任せられるようになりそうな人物を数人候補として選別したところで今日の調練は終了になった。

この調練によって周瑜が抱いていた少々の懸念は杞憂と終わり、上代隊の頭には隊長である刃が噂の“蒼狗”に違わぬ武人であることを根深く刻みつけられた。

調練前とは違う確固とした存在に対する畏怖は、彼らを恐れさせるどころか奮い立たせたことはその計算外ではあったが。

「あぁ、至福……」

「……セキト。刃、嬉しそう」

「ワンッ！」

勿論、彼らはそんな鬼が自室に帰還後、待っていた恋と共にセキトたちと戯れ、だらしのない顔で癒しを得ていたことなど知る由もない。

第２４章　武官、刃のとある一日　後編　～友達～（後書き）

記憶が絡むと全体的に駄文になるのが最近の悩みｏｒｚ
まだまとめきるだけの文章力がないですね。

本編はこれからしばらく呉での日常が続きます。
お気に入り登録や評価、ありがとうございます！
とても励みになりますし、嬉しいです！
あと、気になる点や感想などあれば気軽にお願いします。

第２５章　疑惑、碧眼の賢王（前書き）

サブタイトル通り、今回は拙作初登場のあの方中心です。

第２５章　疑惑、碧眼の賢王

孫呉の将としての生活もそろそろ慣れ始めた今日この頃。

軍内でもそれなりに信用を置いてもらえるようにもなったみたいです。

……まぁ、その代価として課せられる大量の政務と調練に日々の安穏たる時間はガリガリ削られていますが。

今日も今日とて朝から仕事に奔走。

昼は調練。その後、少し時間を空けて以前、黒鬼と日本刀の詳細図を渡していた名匠と名高い鍛冶師の方から連絡が入ったので黄蓋さんと一緒に受け取りに行く予定まで入っているため休む暇（いとま）もありません。

もう一つ仕事、と言っていいかわかりませんがやることもありますしね。

「ふぅ、ゆっくり休む暇くらい与えてくれても良いと思うんですが」

「あはは、立場が弱いと大変だね～」

肩にとまる鳳凰様の言葉が的確すぎて、溜息すら出てこない。

孫策さんには君主という地位的な面と約束という義理的な面で逆らえない上に理知的に眼鏡を光らせる軍師様までも休日返上で働かせてくるため、私に逆らう権利は一分もなし。

孫呉のツートップは私に何か恨みでもあるのでしょうか？　いや、一応心当たりはありますけどね。連合の時に計画していた戦功をふいにしてしまったこととか。独立を遅らせてしまう結果にも繋がっ

ていますし。

「……ま、愚痴っても仕方ないですね」

それでもサボることはできない純日本人的な性格の私は気を取り直しながら仕事へと向かう。

そんな私を訝しげに見る視線には気づかずに。

＊

Ｓｉｄｅ孫権

母様が亡くなられ、孫呉が袁術の下で雌伏の時を過ごす今、私には一つ気がかりなこと、というより気がかりな人物がいた。

それは洛陽で我らの軍へ仕官し、帰還後短期間で一介の将として認められつつある男、上代刃のことだ。

初めての挨拶でも殷懃（いんぎん）でこそあったが、どこか影のあるような印象を受けたし、遠い異国から来たという話も胡散臭い。そしてそれ以上に蒼狗と噂される武や呂布を動かせる影響力などからも危険な存在なのは間違いない。

冥琳は上手く取り込んで孫呉の力にしようとしているみたいだけど、我が軍の内情に少なからず通じている奴をそうそう信頼することはできない。

程普――灯理の家族である以上疑いたくはないけど、あの子の義兄であるからこそ灯理のためにも目を光らせる必要はある。

今は見かけたら注意して観察するくらいにとどめているけど、いずれは隠密を数人監視につかせるべきかもしれない。今度、姉様や冥琳に相談してみようか。

「さっきなんて廊下を歩きながらブツブツ独り言を言っていたし……」

「蓮華様」

「――え？　ど、どうした思春？」

隣を歩く思春の声に自分が考え事に埋没していたことを自覚する。

目的地への進路を外れている、それを確認した私は正しい進路へと戻ろうとして、

「あれは……上代？」

近くの調練場で陣形の指示を出している懸念、いや疑念の人である上代を見つけた。

確か上代隊として隊を率いるようになってから十日もしないうちにその手腕を祭に認められて増強されたらしいが……今は百、いや二百人といったところか。

軽く見たかぎりでも上代隊の動きは迅速であり、同時に的確。

奴自身の指揮もその腕を認めざるを得ないものだ。

「よし！　ひとまず休憩。休憩後は個々人での模擬戦です」

ボーっと様子を眺めていた私は上代の声でハッ、と我に返った。

そんな私を見るのは隣に立つ思春。

無言ではあるが、その目は私の様子を窺っているように見えた。

「まだ、時間はあるだろう。少し、見学していく」

「……御意」

調練場の中でも死角とまではいかなくとも、見えづらい場所を選んで腰を落ち着ける。

邪魔するつもりはないし、気づかれていないほうが都合がいい。

そして、始まった試合。

兵達で個々に行われるものの練度も大したものだったけど、上代が隊の全員を軽くあしらう姿には思わず呆然と見入ってしまった。

仕官の際に姉様と戦った時も凄まじい武だとは思った、でも今の奴はそれ以上だ。

「……思春。お前は上代のこと、どう思う？」

それは、思わず自身の忠臣へ確認をとってしまうほどに。

「……武官としての目で申し上げますと、先ほどの指揮、現在の武、どちらも一流かと。特に、個の武では私以上かもしれません」

冥琳に認められる文に思春に認められた武。文武両道、やはり優

秀なのは間違いない。でも、それは同時に大きな危険にもなりうるということ。

「――戻るぞ」

すべてを打ち倒した上代の休憩合図に合わせて調練場を後にする。

なんとなく気になったけれど、私の中での意識は特別変わることはなかった。

危険性は依然残ったまま、優秀であるということだけ再確認できただけの話。

しかし、そんな私が今日、その認識を変えざるを得なくなることなどこの時の私には知る由もなかった。

執務を終え、昼食へ向かう途中の廊下。

「ワンッ！」

「……犬の、鳴き声？」

鳴き声をおって廊下と隣接していた庭へ視線を向けると、そこには、

「っと、そう暴れないで。おとなしくしててくださいね？　今綺麗にしますから」

呂布と共に多くの犬に囲まれ、その内の一匹を抱き上げて毛並みをととのえる上代の姿。

穏やかな声、そして優しげな瞳は今まで私が見たどんな表情とも違っていた。常に何を考えているかわからない、ある意味老成した普段とは違う、無邪気な子供のようだ。

「よし、綺麗になりましたね。次は……あなたです――って、うわっ！？」

手を伸ばした犬に飛びかかられて顔をなめられる上代は、それでもまだ笑みを絶やさず犬たちを撫でている。

「……え、っと？」

どういう、ことだろう。

あの姿には危険性という文字が似合わな過ぎる気がする。

見間違いか？　いや、でも――

自身の幻覚すらも疑った私が再び見た視線の先にはもうその姿はない。

幻覚、ではないみたいだ。彼らが居た場所の草が少し窪んでいる。

どうやら私が放心しているうちに手入れが終わってしまったらしい。

「……なんなんだ、奴は」

いまだに少しの混乱を残しつつ私は昼食へ向かった。

昼食を終え、警邏のために街へと出た矢先。

「ほら、刃さん！　怖がらずに手を伸ばして！」

「く、しかし……！」

「……思春、あなたにはアレ、どう見える？」

「……上代が、明命の抱いている猫へ恐る恐る手を伸ばしているように見えますが」

またしても幻覚ではないみたいだ。一瞬、自分の目と精神を疑った私は間違っていないと思う。

「おや、これは権殿ではないか」

呆然とする私に二人を見守っていた祭が声をかけてきた。その顔はどこか楽しそうに見える。

「祭、あれは？」

「ああ、実は――」

そして、祭から聞いた話はなんとも呆れる他ないような話だった。

なんでも、街の鍛冶屋へ頼んでいた剣を取りに来た帰りに猫と戯れる明命と遭遇。

上代と明命の間で犬と猫、どちらが可愛いかの論議が勃発したらしい。上代は無類の犬好き、明命は異常なほど猫を敬愛しているのだから、この争いも起こるべくして起こったとは本人たちの弁。

……いや、正直知ったことじゃない。

そんな話を聞くあいだにも二人は犬と猫の良い所を挙げて議論を交わしている。

最初見た光景は、猫が苦手だという上代を実際に猫と触れ合わせて懐柔しようとしていたということだけど、成功して猫の良さを少しは認めて尚、上代は一歩も退かなかったみたい。

それにしても、よくもあんなに長所を挙げられるものね。いくつかは明らかに贔屓目だけど。

「そういえば、その依頼していたという剣は？」

「それならほれ、刃の腰にかかっておるでしょう？」

言われて見てみると、確かに剣のようなものが携えられている。

少し特徴的な形だが、どこかで見たことが――と、そこまで考えて、すぐ隣にも同じような物があることに気づいた。

明命の長刀「魂切（こんせつ）」に似ている。

魂切より少し短く、反りがある。鍛冶師の名は私も知っている名匠だ、名剣ではあるのだろうが……。

「その、なんというか……独創的ね」

そう絞り出すのがやっとだった。
良い剣であるのは間違いないだろう。でも、それをおさめる鞘が、なんとも……歯に衣を着せぬ言い方で言うなら……禍々しかった。

悪鬼羅刹が絡み合い、互いを食い殺さんとしている、幼子が見れば間違いなく泣き出すこと必至の意匠の施された黒い鞘は、あまりの禍々しさに一度見たら忘れられそうにない。

「はっはっはっ！　まぁ、刃の奴も相当嫌がっておったしのう」

笑う祭に一応、話を聞くと、上代の元々持っていた剣を生まれ変わらせるという名目で未知の剣の製作に取りかかった鍛冶師が、元の剣の意匠を引き継がせなければ意味がないと頑として譲らず。名匠ではあるけれど、頑固で気難しいと噂の鍛冶師。結果、上代が「なんの呪いですか……」などと嘆きつつ泣く泣く折れた、と。

話を聞いた後、私は勿論あの思春までもが憐れむような視線を上代へ向けていた。
それほどに酷い。

「……蓮華様、そろそろ警邏に戻りましょう」

「え？　あ、うん。そうね」

確かに、あまり長居することもできない。

いつの間にか和解して握手をしている二人に改めて呆れながらも、踵を返す。

「ん、もう行かれるのか？」

「ええ、祭も酒はほどほどにね」

「ふっ、さすが権殿は策殿と違って手厳しいのう」

笑う祭の言葉で、一緒に盃をかわしている姉様の姿を容易に思い浮かべられた私は苦笑しながらも、その頭では別のことを考えていた。

上代刃。

さっきの犬たちと戯れる様子といい、明命と親しげに話す様子といい、私の中の印象とかけ離れたものばかりだ。

思い直してみれば、祭や隊の兵士とも親しげに話していたような気もする。

……本当に私の思い違いなのだろうか？

しかし、冥琳が言うには奴は相当な切れ者でもあるらしい。

であるならば、あれも演技？　でも、そんなことをする目的がわからない。

警邏に戻った私は、疑心暗鬼であることを自覚しつつも、奴の真意がわからず思考が混乱するのを止められなかった。

夜、いまだに思考が混乱していた私は夜風に当たりながら中庭で黙考していた。

護衛として思春が近くにいるはずだけど、希薄にしているのか、

その気配は感じられない。
静寂に包まれた空間。そこへ、
「失礼します、孫権様」
「――っ、上代……？」
静かに現れたのは私の疑念、その元凶である上代刃だった。
頭を垂れた後、私に用事があったようで許可を求める上代に私は頷き、次の言葉を促した。
「私用、なのですが」
意外な言葉に驚く私と少々警戒の度合いを上げるように私の横につく思春。
静かで、緊張感に満ちた空気の中、上代が懐に手を伸ばす。
そこで、最悪の可能性を思い浮かべた私が息をのみ、上代は懐の手を私につきだした瞬間、思春の曲刀、鈴音の鈴が鳴って――
「これを、孫権様にプレ――じゃなくて、贈りたいのですが」
『……は？』
二人して固まった。
曲刀を抜き放っていた思春も完全に固まり、二の句をつげないで

いる。

「……え、えっと、それを、私に？」

なんとか状況を把握して、声を発した私はその実、全く状況を把握できていなかった。

発言を、そのまま受け取れば……贈り物、ということらしい。

私に？　なぜ？　贈り物をもらうような覚えはない、はず。

「ええ、孫権様の好みに合うよう選んだつもりですが……」

受け取ってもらえませんか？

と、目で聞いてくる上代に私はまたしても混乱する。混乱しすぎて、顔が熱いような気さえするほどに。

「……中身を確認しても良いのか？」

いち早く平常心へと持ち直した思春は怜悧な声で上代に聞く。

思春はそれが罠でないか警戒しているのだろう。今はその冷静さが頼もしい。

上代は、どうぞ、と特に気にした様子もなく頷く。

続けて、私へ確認をとる思春に戸惑いながらも私は首肯した。

「失礼します」

一言断って、思春が包装していた布を外すと、そこには綺麗な、明らかに装飾品の類であろう腕輪が光っていた。

「……綺麗」

思わずもれた言葉に慌てて口を塞ぐ。

それでも、上代には聞こえていたみたいで安堵したように笑う彼にまたしても恥ずかしさで体が熱くなった。

「……特に不審な点はありません、ただの腕輪のようです」

一通り腕輪を見た思春がこちらへその腕輪を差し出した。

それを受け取り、もう一度眺めて、緩みそうになる口元をなんとか引き締めた。

「……なぜ、これを私に？」

気を取り直して聞く。

「えっと……ですね、それは――」

上代は言いにくそうにしながらも、少しずつ話し始めた。

数日前。

「ねぇ、刃。あなたもこの軍にそろそろ慣れてきた頃だと思うけど」

「なんですか、藪から棒に。……まぁ、確かに慣れてきたようには思いますけど――主に貴女のお手伝いで元々多い仕事が輪をかけて

忙しいこの現状に」

「あら、藪蛇？　それでね、冥琳とか祭はともかく蓮華とか思春とも少しは仲良くなるべきだと思うのよ」

「あっさり流しましたね……。にしても、孫権様と甘寧さんですか。確かにかなり危険視されているみたいですが」

「でしょ？　必要以上に仲良くなることはないけど一緒に戦う以上、疑念を持たれたままは不味くない？」

「いや、私の素性的に仕方ないと思いますが……どうしろと？」

「それを考えるのが刃のお仕事でしょ？」

「いや、丸投げですか……」

「――というようなことがありまして」

「姉様……」

共に戦う者を敵のように疑っても仕方ない。

言っていることは正しいが、それでいて無茶苦茶なのが姉様の悪い癖だ。

「それで、私に贈り物をしようと？」

安直ながら、上代からそんな方法が思いつくというのは意外な気

がする。

そんな視線に気づいたのか苦笑する上代はバツが悪そうに、

「いえ、その、どうしても方法が思いつかなかったので……灯理に相談したんですが」

小さく言って、明後日の方向へ顔をそむけた。

「灯理に？」

聞いてすぐ、私たちと仲良くなるために難しそうな顔をして灯理の助言を聞く上代、という光景が頭に浮かぶ。

灯理のことだ、きっと義兄に対して姉ぶった諭すような口調で相談に乗ったのだろう。

「――ぷっ、ふふっ、あはははは！」

私には、それがなぜかとても面白く、微笑ましく感じた。

そしてそれと同時に、心にあった暗い感情が薄れていくのも。

「むぅ……」

そんな私とは対照的に、突然笑いだした私を見た上代は口を尖らせて、言ったことを後悔するように黙ってしまった。

「ふふっ、そう。じゃあ、ありがたくいただくわ」

また、自然とこぼれる笑み。

なんだか、今まで必要以上に警戒していた自分が馬鹿みたいだ。

上代が孫呉のために生き、絶対に敵にならないとは限らない。でも、彼は信頼に値する、そして、少なくともその信頼は絶対に裏切らないと信じられる。

「上代刃。私達、孫呉の臣下である限りその身を孫呉に捧げることを誓うか？」

「……誓います。私が孫呉の将である限り、孫呉の剣となり盾となりましょう」

「そうね、その剣の意匠に劣らない鬼神の如き働きを期待しているわ」

意地の悪いその言葉に、腰の剣を隠した上代は責めるような目を向けてきたが、私は無視を決め込んで、また一つ笑った。

私は、上代刃という男を信用するに至った。

そして少し、姉様や冥琳の彼をからかう気持ちもわかったような気がする。

ちなみに、そんな私が今日最も驚いたのは、

「あ、勿論、甘寧さんへの贈り物もありますよ。孫権様とは少し違う物ですが」

「は――？　私に……？　れ、蓮華様、これは、どうすれば……？」

久しぶりに思春の慌てるところが見られたことだった。

第２５章　疑惑、碧眼の賢王（後書き）

今回は人気投票でも大人気、蓮華さんがメインでした。

ここだけの話、素と王様を意識した口調を使い分ける必要がある彼女は相当書きづらかった……。

なので口調に間違いなどあるかもしれません。

もし見つけたらご指摘よろしくお願いします。

活動報告でも書いていますが、次回更新はしばらくお待ちいただくことになると思います。

感想は随時募集中です。

第２６章　占いと魔術？（前書き）

３週間ぶりくらいの投稿です。

遅れるとは言っていましたが、ここまで遅れることになるとは…

…普段の勉強の重要性が身に染み、短期集中のテスト勉強の恐ろしさを垣間見ました。ノイローゼが半端ないッ……！

そしていろんな意味でテスト終わった……。

そんなわけ（？）で２６章です。

第２６章　占いと魔術？

「はぁ……これは、すごいですね」

思わず声をもらす私の目の前には朝から長蛇の列が。

その列の先にあるのは、私の隣の部屋。つまりが義妹の灯理の私室だ。

昨晩が少し遅かったからか、いつもより遅く目覚めた私が部屋を出ると、部屋の前を遮る人の壁。何事かと驚いたのも束の間、以前灯理に話してもらったことを思い出し一人得心した、のはいいのですが。

「いくらなんでも人気過ぎる気が……」

見れば、私の率いる上代隊の面々もちらほら、廊下に幾重と曲がりくねった列は前の世界で見た人気アーティストのライブもかくやというほどだ。

「これはしばらくはけそうもないですし、朝食にでも行きますか」

一つ欠伸をかみ殺した私はゆっくり食堂へと足を向けることにした。

＊

朝の出来事から数十分後、再び自室前の廊下まで来ると列は綺麗

になくなり、我が私室の前も静寂を取り戻していた。

「お疲れ様です」

外から声をかけ、返事と共に開いた扉から現れた義妹へ労いの声をかける。

苦笑する灯理は慣れているのか大して疲労こそ見えないが、気兼ねする必要のない私の登場に安堵の表情を浮かべている。

どうぞ、と招き入れられた部屋の中には簡素なテーブルと先ほどまで来客が座していたであろう向かい合うように置かれた椅子があった。

その片方に腰掛けるとテーブルには運んできた二人分の朝食を並べる。

「わぁ、ありがとうございます、兄さん。お腹空いてたんですよ」

顔を綻ばせた灯理に着席を促すと、二人で手を合わせ「いただきます」と声を合わせた。

「それにしても、本当に人気なんですね、灯理の占い」

朝食を食べながら驚きも露わに問う。

灯理の未来を予知する力、驚異的な的中率を誇るそれは現代で言う占いとしてこの軍内に浸透している、とは聞いていたがまさかあそこまで人気とは。

「あはは、私もこんなに人気になるなんて思ってなかったです」

まぁ、どの時代の人間も運命やら予言が好きなんでしょうね。実際、天の御遣いとかいう眉唾ものが浸透するような状況でもありますし。

まして無償で一人一人占ってくれるというのだから人気がでないわけがないか。

男女問わず多くの人が数日に一度、決められた日に占いを行う灯理の部屋へ足しげく通う様子は恒例行事ともなっているとか。生憎私は日々孫呉の首脳陣から激務（イジメ）を受けているせいで今日までその様子を見ることが叶いませんでしたが。

「孫策様の話では占いの方法も変えたのでしょう？」

「はい、前は質疑応答形式だったんだけど、私の力はあまり応用が利かないから。今はこの机で向かい合って相手の手を握って占うことにしたんです。……あ、そういえば、その頃からです、人が増えだしたの」

一時、箸を止めた私の片眉がピクリ、とはねる。

「……それは、男の相談者が増えたということですか？」

「え？　なんでわかったんです？　兄さん」

……なるほど、次からは少し目を光らせる必要があるかもしれません。

とりあえず上代隊の男どもには今日、ゆっくり、お話しを。

「でも、やっぱり女の人の方が多いですよ」

まぁ、それはそうでしょう。女性の方がそういった占いとかは好きなものです。

「特に蓮華様は常連様なんですよ」

「へぇ……え？」

孫権さんが？

……い、意外、でもないか。孫策さん曰くあれで意外に乙女なところがあるらしいですし。意識的に王として振る舞っているというところもありますしね。

いえ、口には出しませんが。藪をつついて逆に突き殺されてはたまりませんよ。

その後もシャオ様、確か孫策さんの妹である孫尚香さんも常連で、仲がいいという話や、最近は相談内容に私が関わることが増えているなどという話をしながら朝食を食べ終えて片付けを始める。

「ああ、そうだ。折角なので私も占ってもらえませんか？」

そんな中、ふと思いついた私は軽い気持ちで依頼していた。

頼られたのが嬉しいのか嬉々として私の手をとった灯理は瞑想するかのように目を閉じた。

そのまましばらく両手でギュッと私の手を包む灯理からは静謐な雰囲気が伝わってくる。

「ん、出たんですか？」

手を離した灯理は少し腑に落ちない様子でゆっくり頷く。

「兄さんは近々人生の岐路に立たされる……う～ん、曖昧で靄がかかっていて詳細は分かりませんけど」

……なるほど、確かに占いにありがちな内容ではありますね。まぁそこまで気にするつもりもありませんが。

ちなみにその後、食器を片づけに向かう道すがら、灯理が小さく何かを呟き、しかも難しい顔をしていたのは気にしたら負けです、多分。

＊

時は過ぎ、現在は昼。隊の調練を行ったはずの調練場ではおよそ隊の男のほぼ全員が叩き伏せられていた。

その原因は至極単純、それらを睥睨（へいげい）する隊の長による基本調練後の個別授業という名の虐待によるものだ。

「た、隊長……べ、別に俺達はそんなつもりじゃ……」

その内の一人、副隊長を務める男がよろよろと弁解を図る。

「ほう、では灯理自身ではなく、あくまで占いが目的だと？」

「……モ、モチロンジャアリマセンカ、アハハハ」

「目が泳いでいますが？」

ボロボロになった男たち全員の目が泳いでいるというのもなかなか見られる光景ではない。

もちろん、見たいとは微塵も思いませんでしたが。

「まぁ、灯理が自分で行っていることですし、行くのをやめろとは言いませんが、変な気をおこしたら……わかりますね？」

『っ！？（コクコク）』

必死に頷く隊員たちに溜息をつきながら休憩を宣言する。

「それにしても、隊長もなんだかんだで溺愛してんじゃねぇっすか」

と、休んでいる私に話しかけてきたのは先ほどの副隊長。

私と同年代であり、その肉体は男特有の角こそないものの戦士と言って差し支えない鍛え上げられたものだ。

顔も優しげで人好きのする笑みを浮かべた彼に思わず少し緊張が解けていくのを感じる。

「妹なのだから当然でしょう」

どこか保護者ぶった感情に苦笑しながらも答える。

「まぁ、この軍で程普様は癒しっすからねぇ。変な気起こしたら隊長以前に呉の女性陣全部敵に回しますよ」

「まぁ、私としては灯理がちゃんと選んだ者なら良いと思いますが……それにしても、多すぎでしょう。ほとんど全員というのは想定

外でした」

「それだけ程普様と占いに人気があるってことでしょう。ウチの女どもも行ったことねぇ奴はいねぇみたいですし」

ふむ、確かに能力よりも人柄のなせるものかもしれませんね。

この様子だと隔週に一度くらいの頻度で行う街での占いも盛況だというのは本当のようです。

と、そんな思考に耽っていた私を副隊長がニヤニヤした顔で見つめてくる。

……なんか、無性に殴りたい。

「そういや、最近ウチの隊の女どもが何を占ってもらってるか知ってます？」

唐突な問いに少しだけ考えた私は、諦めて首を横に振った。

「それが、隊長との恋あ――いっ！？」

「！？」

笑いを湛えながら話す副隊長の頭に矢の如く飛んできた練習用の槍が突き刺さった。

刃の潰されたものだったため、刺し貫かれることこそなかったものの、激痛にのたうちまわる副隊長の様子には薄ら寒いものを感じざるをえない。

「すみませーん、手が滑りましたー」

数十メートルは離れた所から女の隊員が声を上げる。あれは……女性側の副隊長か。

あの位置からどう手を滑らせれば地面とほぼ平行に、彼の後頭部を的確に、ズドンという音がするほどの勢いをもって、撃ち抜くことができるのか甚だ不思議ではあるが。

「……触らぬ神に祟りなし」

培われたスルースキルをいかんなく発揮して彼女へ軽く手を振っておいた。

「ぬあぁぁぁ……くそ、あの剛腕熊女ぁ……！」

「うわ、生きてたんですか？　気持ち悪い丈夫さですね」

無限の繁殖力と生命力を持つ黒いアレや洛陽で再会したヒトの形を模したＵＭＡにも匹敵せんとするレベルですよ。

「ち、危うく頭蓋が陥没するところだよ！」

「いや、そこは陥没しておきましょうよ、人として。あなたの頭蓋は超合金製ですか？」

というか、後ろ。頭さすってる場合じゃないです。

「だ、れ、が、熊女だって……？」

私の無言の訴えに気付き、ゆっくり振り向いたまではよかった、

もう遅かったけど。

冷や汗をかきながら、土下座に入ろうとした男副隊長に容赦なく降り注ぐのは最早鉄槌と変わらない音を発する槍の刺突。

ドゴン、と一つ音が響くごとに彼の身体が小さく痙攣していく。

この家庭内暴力ならぬ部隊内暴力に、長たる私は、

「うん、今日も見事に微妙な天気。恰好の腐乱死体繁殖日和です」

快晴とは言い難い天気を仰ぎ現実逃避を決め込んだ。

雲に見え隠れする太陽様は今日も紫外線等の有害物質を照射することに何の躊躇いもないらしい。

そして、音が止んだ時にはボロ雑巾ですら顔を顰めるような様態へ成り果てたモノが地面へとめり込んでいた。

「無機物ですら顔を顰めるってなに！？」

おお、本気で気持ち悪いですね。その生命力。

これはゾンビですか？　とでも言いたくなりますよ。

＊

結局、あの後一通りの調練をつつがなく終えた私は恋と陳宮に引っ張られて街に行ったり、周瑜さんに当然のように追加された仕事を彼女の後継者を嘱望（しょくぼう）されているという陸遜と共に片付けたりと、いつも通りの忙しない一日を過ごして部屋へと戻った。

にしても、名軍師周瑜が期待するだけはある。まだ未完で孫呉の支柱たる彼女には及ばないまでもその才は一級品。劉備軍の天才、奇才にも引けをとらない。一つ困った癖があるという話ですが……あの温和を通り越して浮世離れすらした平穏な性格に、眼鏡越しにもボーっとしたような目で天才軍師とは、この世界の知恵者はわからないものです。

ともあれ、ある意味予想できた予定外の仕事という矛盾したものも終わったことですし、

「ふぅ……」

部屋の机に置いた物を見て、一つ溜息をつく。

そこには今まであえてあまり読まなかったメモ帳と弾の無い銃。

そのメモ帳を一通り読み終えた私は自分の術に関する認識の違いを自覚した。

「すーちゃん、いますか？」

虚空へ声を投げる。完全に不可視になることも多い彼女を探すのは一苦労でもあるけど、実例が居てくれた方が楽だ。

「うん？　どーかしたー？　っていうかテレパシーで呼べばいいのに」

「あ、それもそうですね」

机の上に座っていたらしい彼女が実体化しながら言ったツッコミに苦笑する。

普段から慣れた言葉で会話している弊害がこんなところで出るとは。お気楽を体現したような彼女の呆れ顔に自分を少し恥じたものの口には出さず、本題に入る。

「それで、少し質問に答えてほしいんですが」

「ああ、それのこと、っていうか私のことでもあるか。力についてでしょ？」

机の上で私がメモ帳を読むのを見ていたのだろう、それなら話が早い。

頷いた私は少しずつ質問を始めた。

「貴女を具現化したのは私ですよね？」

メモ帳と記憶の断片から、願いなどの人の意志を精霊という形で“認識（みる）”ことができるのは私の元来持っていた力であることは思い出した。

であるならば、この魔術はどういったものか。それはその精霊を自分の現実として認識して具現化するということに他ならない。

簡単に言えば、世界に存在する神秘的な存在に実体を持たせるというもの。

「そうみたいだね～。刃に会ってから物に触れるようになったし」

ふむ、つまりこの術に関しては記載されたとおりということですか。

「そういえば、それなんなの？」

首をかしげる彼女が指すのは、私のもう一つの所持品である黒塗りの銃。
造りが特徴的で、弾倉が無い。

「簡単に言えば、融合のための媒介ですね」

「融合？　誰と誰が？」

「まぁ、この場合だと私と貴女ということになりますけど」

「はぇ？」

呆気にとられて固まるすーちゃんにあってないような理論をとばして、さわりの部分だけを説明する。

かなりざっくり言えば、その言葉通り精霊と融合して、その力を自在に扱えるようにする、というもの。発動方法も簡単で銃の弾倉部分に精霊を宿して自分に向けて引き金を引くだけ。
ただし、少し問題点があったりする。

「へ～、面白そう！　試しにやってみよ！」

「う～ん、まぁ、大丈夫だとは思いますが……」

予想通り乗り気のすーちゃんに少しの躊躇もあったけれど、試しておきたいという気持ちもあるのは確か。
意を決した私は弾倉へ早々と融けていった彼女と銃の白い発光を確認して銃口を自分へと向けると、引き金を――引いた。

「――っ！」

一瞬衝撃が体を走り、視界がぼやけていたが、それもすぐに治まると身体に暖かく、懐かしいながらも明確な違和感を覚えた。

（おおっ！　視界が違う！　これって刃の視界なんだよね？）

頭に響くのは私と融合したであろう神霊様の声。

とりあえずは成功、ですか。

「そうなりますね……ッ！？」

身体に満ちる力を抜くように脱力した声を出して、気づいた。

（刃、なんか声変じゃない？）

彼女に言われるまでもない。明らかに普段より高い声、気にしていた問題点が見事的中したことを半ば確信しながら部屋の姿見へ急ぎ歩を進める。

姿見の前に立ち、見た視界の中に映っていたのは――

（うわ～、見事に女の子、だね）

赤い髪に翡翠に煌めく瞳、背に背負うのは五色の光の羽根。

そして、スレンダーになった身体から見事になくなった何か、と豊かになった何か。

神秘的な雰囲気を纏った女性がそこにいた。

第２６章　占いと魔術？（後書き）

後半、完全に説明回。
どうやってまとめようか悩みに悩んだ結果がこれだよ……ｏｒｚ

次回からは比較的日を空けずに投稿できるようになると思います。
構想を上手くまとめきれない駄文ではありますが、次回も読んでいただければありがたいです。

感想は随時募集中です。

第２７章　夜陰の中に一条の光（前書き）

遅れ馳せながら２０万ＰＶに２万ユニークを突破しました！
粗の目立つ拙作を読んでくださった読者様ありがとうございます！
これからも続けて読んでいただければ嬉しいです。

とはいったものの、実は未だにＰＶとユニークの意味とか仕組みが完全に理解できていなかったりします……。
週間アクセスって何の数なんだろう？

第27章　夜陰の中に一条の光

「おおっ！　見ました隊長!?　あの娘、なかなかの上玉じゃないっすか?」

「はぁ……少しは真面目に探しなさい」

街中を歩きながらキョロキョロと視線を散らして騒ぐのは上代隊の副隊長を務める男。

それを後ろから眺める私はこれで十回は優に超えるだろう注意を彼とは対照的に疲れた様子で口にしていた。

「いや～、にしても綺麗な女が多いっすよねぇ、ここの街は。さっきからちょいちょい見られてるし、ちょっと声かけてきてもいいっすか?」

「まぁ、女性が綺麗なのは治安も多少は関係しているでしょうしね。あと、高嶺の花って知ってますか?」

大体見られているというのもあなたが無駄に騒いでいるからでしょう。

「それ以前に私達には仕事があるんですよ?」

「えぇ～、いいじゃないっすか、強制じゃなくて努力目標としての命令なんスから。実際非番ですし」

「私の場合は目標の発見失敗がそのまま仕事に直結しているんですよ……」

そう、私達が二人で街へ繰り出すこととなった原因である孫策さんのサボタージュ。
毎度のごとく周瑜さんがその埋め合わせに駆りだすのは私。

この副隊長と共に報告書の提出へ向かった私達に周瑜さんが依頼したのは街への捜索。一応強制ではない、が。
……考えてもみてほしい、もし捜索を怠った場合はほぼ十割の確率で今日を書類整理で潰すことになり、探すにしても折角の非番を削ることになる。

回避不能じゃないかッ……！

というわけで早く見つかれば軽微の被害で済む捜索を選ぶことに。
あの眼鏡軍師、きっと腹の中は持ち前の綺麗な黒髪と同じくらい綺麗に真っ黒に違いないです。

「まぁまぁ、考え方を変えればいいんスよ。探し人は孫策様、なら俺がこうして美女に目移りしてるうちに見つかるかも、ってね。さぁ、隊長も俺と一緒に美女に言い寄りまくりましょう！　隊長がいりゃ美女の一人や二人楽勝っすよ！　……チッ、美形とか氏ね」

「後半、本音が出すぎです。あとボソッと毒吐くな。大体、そんなに気に食わないなら自分一人で頑張ればいいでしょうに」

「俺一人で大物が釣れるとでも？」

「胸を張って言うことではないですね」

「女のためなら誰にでも頭を垂れる男気」

「この状況だとありえないほど格好悪い」

賑わう街中でそんな馬鹿なやりとりをしていると、

「ちょっと、いいかしら？」

「っ！？　ま、まさか向こう、か……ら……」

突如かけられた高い声に驚愕、喜色満面で振り返った男副隊長はその表情のまま完全に石化した。

「あら、近くで見るとますます綺麗な顔立ち♪」

機能停止したそれをスルーした“彼”は歩み寄ると私を値踏みするようにジロジロ見始める。

そう、彼、だ。

目に痛い鮮やかな服に身をつつみ、顔には薄く化粧が施されている。見た瞬間、前の世界で男女の垣根に堂々と居座る方々、その中でも着飾ることに関しての専門的知識を有する、いわゆる美のカリスマ的な人々を思い浮かべた。

「うん、あなたすごい良い素材だわ！　さっ、こっちに」

こんな人種までいるのか……亜種である筋肉達磨に遭遇したことですらありえなかったのに。

そんなことを考えながら呆然とする私を見るからにファンシーな店へ引き摺るのは力強く、理想的な上腕二頭筋を誇る腕。

……これがミス上腕二頭筋、というやつか？

ちなみに副隊長が復活したのはそれから数十分が経過してからだった。

＊

「すごい、まさかこんなすごい原石を見つけちゃうなんて……」

（なんで、こんなことに……）

ひどく目に障るクネクネした動きで話すのは店長を名乗る男。その巨体から発せられる高い声も耳に障り、否応にもあの暴走漢女を思い起こさせた。

「他の服も持ってくるからね♪」という言葉と共に店の奥へ消えていく姿を見送る私の目は既に据わりに据わっている。着せ替えの際、漢女の特徴なのかは知らないが無駄な時に無駄な馬鹿力を発揮され抵抗をねじ伏せられた身としては自暴自棄に荒むしかない。

しかし、あの腕力は異常だ。いくらあの上腕二頭筋を持っているとはいえ、人外指定してもいいんじゃないだろうか。

「つくづく女装に縁があるね～。あ、昨日のはどっちかっていうと女体化か」

（流すに流せない軽口はやめてください……）

目の前に飛ぶすーちゃんの言葉に昨夜の融合実験が思い出される。

確かに、容姿は融合する対象に影響を受けやすいことは知ってのことではありましたが、まさか悪い予感どおり身体が女性になるとは信じたくなかった。

（というか、なんで鳳凰なのに陰の属性持ってるんですか貴女は。普通に性別超越してるでしょうに）

「あれ？　人外化のが良かった？」

（……ノーコメントで）

さすがに人間やめた姿になりたいとは思わない。獣になるよりは女の方がマシ……って、あぁこの考え方でいつも諦めるのか。

「た、隊長！　無事っす、か……あれ？」

「……どうかされましたか？」

「あ、いえ……な、なんでもないっす」

店へ慌てて飛び込んできた副隊長は店内を見回し、私に目を留めたところで呆然と立ち尽くす。

「あの、こっちに俺と同い年くらいで呪いたくなるくらい美形な男来ませんでした？」

……よし、咄嗟に声音を変えた甲斐はあったみたいですね。

というかそんなイメージですか、私の容姿。他人の人生を呪わせるようなものなのはショックですが。

「あ、呪うっていっても同性が害意持っちゃうようなのなんスけど」

……あとで呪術のレジストについて書籍を漁ってみますか、あるかわかりませんけど。

この波乱の人生も他者の害意によるものじゃないことを切に願いたいです。

「いえ、私は見ていませ――」

「こんにちは～、って刃じゃない。なにその恰好、趣味？」

なんてタイミングで現れるんですか貴女は。

「そ、孫策様!？　なんでここ――あ、え？　……孫策様、今なんと？」

「いや、だからあそこで地面に手をついて落ち込んでる刃にすごい趣味があった、って話でしょ？」

「……え？　た、隊長？」

「……私と同じ目を見るか、死ぬか、選ばせてあげましょう」

「なぜいきなり無茶苦茶な二択!？」

知られたくないことを忘れさせるには物理的に記憶が飛ぶまで殴るか、秘密を共有する他ない。そして、この男の気味悪い丈夫さを考えれば残るのは秘密の共有による口封じ。

「安心してください、一人前例がいますが、しばらくの間男としての尊厳を砕かれ、自己陶酔に走りかける程度の精神崩壊で済みます」

「全然安心できないっすよ!?　精神が崩れ落ちるの前提っすか!?」

「そうよ、刃。いくら隠れた趣味がばれちゃったからって他人にまで強要するっていうのはダメだと思うわ」

「なっ!?　い、いつの間にか私が趣味を布教している感じにッ……!?」

「あっはっはっ！　ホント刃って見てて飽きないね～」

そんな収拾のつかない状況は奥からファンシーでメルヘンな服を両脇に抱えた店主が出てくるまで続いた。

そして結局、誤解を解いたあと、副隊長には店主が私と同じように女装をさせることで今回の件を内密にすることに。

私はというと、

「……最近不幸ぶりが加速している気がする今日この頃。もう、ゴールしてもいいよね?」

「なにをブツブツ言っているんだ?　まだまだ片す書簡は残っているぞ」

例によって周瑜さんから命じられた政務のお手伝い。

もういくつ握られたかわからない弱みによって孫策様の捜索を断

念させられた私に逃れえる術はなかった。

「……鬼」

「む、ひどい言い草じゃない？　刃だって一緒に楽しんでたくせに」

「二人とも無駄口を叩かず、さっさとやる！」

『……はい、すみません』

ヤケになって休暇を楽しんだことは否定しませんが、理不尽に嘆く私に否がなかったことも否定したくない、でも結局逆らいきれない悲しさ。

ちなみに私が今度からあの店近辺には近寄らないことを心に決めたのは言うまでもない。

＊

色彩をすべて呑みこまんとする漆黒の空。夜の帳（とばり）が下りた暗闇にそれでも燦然と輝くのは天体が反射する彼方の光。

静謐さを感じさせる冷えた空気を吸い込み、

「……こうして夜風に当たるのも悪くないですね」

一つ、深呼吸をしてから静かに呟く。

地獄のデスクワークを生き抜いた私は現在、城郭の上で盃を傾けていた。

「仕事終わりで酒もおいしいしね」

「貴女がそれを言うんですか……」

隣には私をここへ誘った孫策さん。今この場にいるのは二人だけ、少しは気を張っておくべきなのだろうが、どうも彼女相手では分が悪い。自分のペースを掴める気がしなかった。

「で、私をここへ誘った要件を聞いてもよろしいでしょうか？」

「ん、ただ酒につき合わせたとは思わないんだ？」

返った問いかけに考えを放棄する、と肩をすくめる私。

それに孫策さんは軽く笑い、しばらく静寂につつまれた涼しげな時が流れた。

「刃……私のこと、恨んでる？」

そんな沈黙を破ったのはいつもの余裕ある笑みや、まして悲しみの表情ではなく無表情に放たれた問いだった。

「私は、孫呉独立のために刃をここへ束縛しようとしてる。それも、結構狡い方法で」

「まぁ、そうですね」

「後悔はしてないし、やめるつもりもない。でも、刃はどう思って

るのか知りたい、って思って」

その真剣な目にのまれないよう、視線を虚空へ投げて盃の酒をあおる。

そして、再び流れる静かな時間。しかし、それは先ほどと違い微細に感じるだけの緊張感を伴っていた。

「実際、少しは反骨精神を持っていて当然ではありますよね」

月たちの安全と灯理の心情的効果。賢しいと感じても間違いではない。

そんな私の言葉に少しだけ孫策さんの吐息がもれた。

動揺、個人的にはそれこそ気にかかることだが今の優先序列では下だろう。

「しかし、同時に忠誠を誓っても不自然ではないでしょう」

「そう？」

「ええ、己の約定を違えるつもりはありませんし、それに家族は事実、腰を落ちつけさせるだけの重さをもった荷ですから」

「ふーん……それだけ？」

私の言葉を聞いても彼女の顔は納得しているようではない。

探るような目は鋭く、私の心を見透かすような錯覚すらある。

口が渇く。一つ酒を飲み下し口唇を潤すと、あっさり根負け、声

を発し、

「まぁ、それに――」

続く言葉は口から抵抗なく、なめらかに滑り落ちた。

「最も仕えるに値すると思ったから、ですかね」

「――え？」

目を白黒させて呆然とする孫策さんに思わず苦笑がもれた。

一応、偽りない本心なのですがね。

「この乱世で私は王気と信念を兼ねた英雄たちと出会いました」

さすがに一握りの本物、ともなれば数は片手で事足りますが。

「その信念の中で、私が最も忠誠を尽くすことができそうだったのが貴女だった、というのがここへ残っている一番大きな要因です」

改めて見せつけるかのように言い切り、盃に残る酒を飲み干した。

また流れる静寂、でもそれはすぐまた破られる。

「……そっか、うん」

しばらく呆けていた孫策さんはいつもとは少しニュアンスの違った笑みを浮かべると空を仰いで息を吐いた。

それと同時に今までの雰囲気は霧散し、空気が緩むと二人とも新

たに酒を注いで盃を軽くあおった。

「で、私がよかった理由の方は？」

「……それを聞きますか？　少しは大人らしく情緒溢れる幕切れで満足しましょうよ」

それも無邪気に聞いてくるのだから性質が悪い。懐かしさからくる笑みは押し殺して。

結局、答えを待つ彼女の目に観念して吐いた。

もともとヤケ酒の延長だ、溜め込むのも面倒くさい。

「ただ、気に入ったのかもしれません。理想にもいえますけど、私は天下の人々の為に腐心できるような人間じゃないので」

「ふ～ん、じゃあ似た者同士なんだ？」

「かもしれませんね。あと、義理のある恩人ですし……少しは容姿に惹かれもするんですよ」

……後半は言って後悔した。自暴自棄って怖い。

「へぇ～、ちょっと意外」

いつも以上に意地の悪い笑みへ表情を変えた孫策さんの視線を感じる。

酒が過ぎたかもしれない、頭が熱い。

そのまま上機嫌で飲み続ける孫策さんのペースに少し心配しつつ

も、本格的に酔いが回ってきたのか次は私が気になっていたことをぶつけていた。

「大体、それを言うなら貴女も大概ですよ。私の有用性を見込んで、っていうだけじゃ無理があります」

「んぅ？　あ～そういえばそっか。ん……なんか気になるのよね」

孫策さんは少し考えるような素振りを見せて、盃を置くと両手をついて身を乗り出す。

その動きは緩慢ながら、虚をつかれ固まっている間に顔が至近距離まで近づいてくる。尋常ではない酒気を帯びた酒臭さにほのかな香りまで感じるような距離。そんな彼女の指が私の頬に触れる。

目が合った。自分とは違う、明るく煌めくような碧眼。身体が一段と重くなったように感じる。

「……」

鼓動が耳に響く。普段とは違う妖艶とは程遠い笑みは純粋なもの、それなのに鼓動は加速するばかり。

「この蒼くて深い、悲しい色の眼が……」

そこまで言って、さらに近づく顔に思わず目を見開き、

「……え？」

倒れこんだ孫策さんは私の胸に顔をうずめて動かなくなってしまった。

小さく上下する肩、これは――

「……寝てる」

穏やかな寝息を立てる様子に大きな息を吐き、気を緩めた。

まぁ、今日の政務はいつもより三割増しだったし、あれだけ飲めば睡魔も襲ってくるだろう。

「……決めた理由、か」

明確な理由として理想を基準にしたのは本当だ。

天下を統べ、人々を救う王道、覇道。それは理想として申し分なく、私の目指すものに近しいものだったはず。

しかし、それとは違う自分の正確な行動理念。

記憶が戻りだしてから、さらに明白となった自分の行動の根幹となる意志。それを果たすのはここが最も近しく、想いもある。

でも、それ以上に、

「本当に似た者同士ですね……」

彼を思わせる雰囲気、懐かしさすら感じるほどの親近感と既視感。

私も、どこか気になっているのだろう。まだ相当に曖昧なものではあるけれど。

片づけを済ませ、眠る主君を抱えて部屋へ送りながら、不覚にも先ほどから止まない大きく、早い鼓動を感じていた。

翌朝、二日酔いに唸る呉の王と姿見のように自身を映すものに恐怖する上代隊副隊長という蛇足があったとか。

第２７章　夜陰の中に一条の光（後書き）

前半とサブタイトルがほとんど関係ないのは仕様です。
本当は途中で切るほうがいいのですが中途半端な感じになってしまうので。

次からはついに話が動く、つもりです。
現在は男女の副隊長に名前をつけるかどうか考え中。

では、感想などあれば是非お願いします。

第２８章　輪廻からの刺客は真・漢女！？（前書き）

拙作は作者の脳にある微量な政治、軍事知識に基づくため独自展開に無茶があるかもしれません。

そういったものが苦手な方は注意！　……今更かな。

第２８章　輪廻からの刺客は真・漢女！？

朝日もその輝きを増し、眩しいまでの光と肌を焼くような熱を放ちだす昼前。

孫呉の主要な将官を集めて行う定期的な会議が先ほど行われた城内、その廊下で私の隣を歩くのは有能な文官として共に会議に参加していた義妹の灯理。

その特殊な力を生かし、鬼謀で知られるだけの頭脳に一角の武将とも渡り合える武を持つという才能のインフレっぷりには義兄ながら末恐ろしいものがあります。

「……」

そんな彼女は何やら気にかかることがあるのか考え事に埋没して、吹く風に綺麗な銀髪を揺らす。

以前から髪の手入れをせがまれ、最近は自らそれを日課とする身としては極上の銀糸のように光を程よく透し、柳のように流れる様子に少しの充足感を覚えざるをえない。

「兄さん、さっきの会議であった細作の報告ですけど」

まぁ、顔をあげて聞いてくる灯理の言葉にそんな情緒的なことは一分も含まれていないのはその真面目さを好ましく思う反面、寂しくもありますが。

「確か――各諸侯の領内、その内情でしたよね。何か気になる点でも？」

頷く灯理を見ながら考えを巡らせる。

一つは曹操、彼女の統治領域はまだそこまで拡大されていないが、富国強兵策によって統治状況も良好、その風評と軍事力は鰻上り。あの人材マニア、優秀な臣下を多く召し抱えているようですし、間違いなく最大の要注意人物です。

二つに袁紹、単純明快な力という意味では現状最も脅威になりうるのですが……。

以前洛陽で会った斗詩さんの話や耳にする噂通りのようで、財力とそれに伴う兵力こそあっても領内の状態はお世辞にも良いとは言えない。細作の報告では軍内には醜い膿（うみ）が、そして結果、領地の街にも黒い欲望の流れが見えるようですし。

三つ、桃香や一刀達。平原から領地を拡大して徐州の一部まで統治するに至ったというのは意気軒昂だと思いますが、いかんせん現状は逼迫（ひっぱく）。

天下に名を馳せる名将、知謀の士がいることでなんとかしのいでいる感は否めない。

「……でもまぁ、普通に考えれば袁術、ですよね」

しかし、現状孫呉の将である灯理が気にするというなら四つ目、客将として仕える袁術であろうことは理解に難くない。

曰く、酷い圧政で統治状況は最悪。一度孫策さんに引き摺られて袁術の居城、寿春城へと赴いたことがあったが、あんな無知にして無邪気な子供が主ではそんな報告も頷ける。

というか、その子供を諫めるどころか甘やかし、適度に悪党で過度に脳みそお花畑の張勲が大将軍だというのだから末期だろう。

「アレに顎で使われるというんですから、呼び出された後の孫策様が不機嫌を通り越して荒れるのもわかりますよ」

その結果、黄蓋さんもまじえた酒盛りにつき合わされたり、滞る仕事で周瑜さんに小言をもらうという私怨もありますし。

「はい。それで、起つ為の方策について兄さんに相談があって」

「……なるほど。今日は少し時間もありますしね、部屋に行きますか？」

強く頷く灯理の表情に、孫呉の独立、その重さを感じる。

孫策さん達ともなればそれはさらに重く、悲願とも言えるのだから。

「――孫呉という家を守る第一歩、ですか。多少は尽力しましょう」

私室へ向かう私の目にも少なからずその意志があればいい。

無論、彼女達と同じ悲願は抱くことはできないが、続いていく乱世から守るという想いで僅かでも埋められる。

……まぁ、相当にムシのいい話ですが。

＊

「ねーねー刃。ちょっとお願いがあるんだけどさ」

「却下ですね」

灯理との話し合いを終えた後は普段通りに調練。遅めの昼食を食べ、今は中庭の一角にある木に背を預けて休憩中。

目の前に妖精のように、は可愛くて癪にさわりますね……羽虫のように飛び回る鳳凰様の姿が。

上目遣いに手を合わせて頼む姿は美しい容姿ながらも可愛らしさを併せ持っていますが、残念なことに私には通用しない。

……こら、ジト目で見るだけならまだしも、風力すら乗せた蹴りの準備態勢に入らないでください。ホントに痛いんですから。

「一応、聞きましょうか」

譲歩に姿勢を改めた彼女は真面目な顔になり、

「あなたと、合体したい」

「断固たる拒否を表明します」

世迷言をのたまった。しかし、それで語弊がないのだからホントに怖い。

「気持ちいいよ？」

「意味がわかりません」

そんな他愛もなくはない、むしろそれなりに面倒な話を交わす中、

「うむ、見つけたぞ」

ソレは現れた。

「……刃。あの気持ち悪いの、何？」

（さて、私にはわかりかねますが……二度あることは三度あるものですね。あの異形っぷり、間違いなくアレと同類です）

厳格な顔つきに褐色の肌、髪は白髪で日本古来の時代的には邪馬台国くらいの時期に見られるとかいう髪型、白く立派な西洋風の髭。そして……かなり形容しがたい服装。上はぴちぴちのジャケット、胸板と腹筋丸出しでなぜかシャツの襟とネクタイ、布面積の少ないビキニを着用。下は白い褌とソックス、靴はローファー。

……酷い、酷過ぎる。

無駄に凝っているだけ貂蟬よりもレベルが高い。貂蟬だって紛れもない変態だったが、彼はその上をいく。ド変態という言葉でも足りない、異形とはかくも理解不能なものか。

「むう、気持ち悪いとは失礼な奴じゃな。儂ほどの漢女（おとめ）を前にして」

「その漢女の価値観が一般常識とずれていることを少しは理解して――――待て、今なんと？」

言って、愛刀“黒鬼”を手繰り寄せる。

私は一言も気持ち悪い、もしくはそれに準じる言葉を発していない。

「む……？　おお、そうか。儂も随分鈍ったものよ。このような失

言をするとは」

「貴方は、何者です？　なぜ、彼女が“認識（みる）”える？」

聞き返され、一瞬彼の視線は私でなく鳳凰を捉えた。確信と同時に湧き上がるのは疑惑。

「さて、答える義理はないのう」

「体に聞くことになりますが？」

抜刀姿勢に入る私の気迫は殺気すら混じり始め、空気が剣呑なものへ変わる。

「儂も丁度お主を見極めにきたところ、殺す気でかかってくるがよい」

彼はまったく動じる気配もなく、腰を落とし腕を大きく広げるように構える。

「……」

しかし、互いに動かず張り詰めた空気が流れるだけに止まる。

……情報が足りなさ過ぎる。彼が誰であるか、なぜこの城の中にいるのか、それがわからない以上、孫呉の一将官としての私は動くことができない。

だが、彼が異質な人間であるのも事実。どうすれば――

「――ごちゃごちゃごちゃごちゃ、無駄に考えおって！　たまにはその知性の鎖ぐらい引き千切って感性で動いてみせろッ！！」

「ッ！？」

闘志を全てぶつけられたような錯覚。

空間ごと私を呑みこもうとする気迫に対し、私がとった行動は――その気迫を押し返すように闘志の牙を剥き出しにして、弾けるように飛び出していくことだった。

一息で距離を縮め、放たれた一閃は音すら置き去りにする一太刀。

「呵呵ッ。なんじゃ、やればできるではないか」

手応えは、ない。音と、近づくまで気付かなかった香水か何かであろう鼻につく香りで判別して左側へ上段の回し蹴りを放つ。

ガッ、という確かで、だが硬い感触が足に伝わった。もうすでに、刀は軌跡を描いている。

「ぐ、む。気の乗った、なかなかに重い一撃――ぬおっ！？」

吸い込まれるように胴へ向かっていた刀は紙一重で躱（かわ）された。再び、距離が空く。

「た、確かにやれとは言ったが、本気で胴を切断にくるとは思わなんだ……せめてそこは峰打ちじゃろう？」

「貴方に手加減をする要素が見当たりませんから、それに……数回

斬られた程度では死なないで、しょうッ！」

再度、袈裟斬りで斬りかかり、躱されても二、三と追撃を重ねていく。

「ふっ、受けるばかりでは、ないわっ！」

斬撃を躱しつづける彼の動きに私の目が慣れ始めたのを見取ったか、カウンター気味に放たれる右のフック。

筋骨隆々とした身体から放たれるそれは重く唸り、気すら帯びて私の顔面へ迫る。人体ではありえない、巫山戯（ふざけ）た拳は巨大な槌を想起させた。

「くっ！　その剛腕、鬼か何かですか貴方は」

咄嗟にとびのく私を風圧で煽（あお）るほどの馬鹿げた力に汗が頬を伝う。距離が空き、彼はまた両手を広げた妙な構えをとった。

「うむ、大したものじゃ。……次で最後、儂がお主を希望と認めるか否かを決する」

「何の……話です？」

「ふっ、儂を倒して聞けばよかろう」

「ちっ……！」

言葉と共に再び襲うのは凄まじい闘志。

一度、息を吐き、心を落ちつけると黒鬼を構えなおし――駆けた。

＊

Ｓｉｄｅ変態漢女

上代刃。この外史においてもう一人の天の御遣い。我らの感知できない唯一の不確定要素。

観測者の一面を持つ我々にとっては希望と絶望のコインであり、そして問答無用で収束へ向かわせる最終確立。

話は既に貂蝉から聞いておった。そして、奴は上代の中に光を見出した。なれば、儂も腹を決めるべきなのじゃろう。

聞いていた通り、ある程度切れ者ではあるし人柄にも問題は見受けられない。

武技には人となりが出るというが、真っ直ぐに研ぎ澄まされた太刀筋に濁りや驕りは微塵も見受けられない。澄みきった気も相まって清廉な人物なのは明らか。生来の気骨は甘さによる歯止めもあるようだが、事足りる。

だが、それだけでは不足。奴を信じるにはもう一つ、単純にして絶対な要素――力がいる。

儂に後れを取るようでは託す気にはなれん。ここまで闘えるだけでもこの外史で五指に入る実力ではあろうが、その程度に満足できる儂ではない。

「この一手で見極める」

低く呟いた儂の構えは昔戯れに真似て覚えたもの。戯れでありな

がら、最も効率的に相手を叩き伏せる返し技のための不動の構え。
左手は天に掲げるように、右手は地を支えるように。気を身体に満たし、上代の動きを待つ。

空気が凍るような錯覚を破り、一直線に凄まじい速さで駆ける上代。

儂ですら完全に見切れないほどの速さは奴の姿を霞ませ、コマ送りのように我が懐へ顕現（けんげん）させる。

神速の斬撃。
鞘より抜かれたであろう刀はその動作すらなく、すでに鈍く光る軌跡と化している。

「――ふッ！」

しかし、その軌跡は儚く消える。
自身の最大限に引き出した反射神経と全力の気を纏わせた右手の掌打で刀を受け止める。少し手の平に刃が食い込んだが、意に介する程ではない。

「は――！？」

驚愕に目を見開く上代へ向けて、続けざまに放つのは気を極限まで固めた左手による手刀。千切れんばかりに腕を酷使した速さと岩をも砕く気の強化で並みの刀剣を遥かに凌駕する斧が振り下ろされる。

「――ぬぅッ！？　カッ、やるのう！」

だが、それは鋭く重い蹴りによって勢いを削がれ、上代の身には届かない。そして、完全に相殺しきれなかった奴の身体は慣性の働くままに後ろへと飛んだ。

聞こえた苦悶の唸りは奴のものか、それとも自分のものか。

広がる互いの距離、しかし儂の攻撃はまだ終わりではない。

「吹き、飛べェェイ!!」

腕に気を集中。全力で全開の気が練りこまれ、自身の放てる最大の気弾を放った。不死鳥をかたどる最大にして最高の密度を誇るソレは上代を覆い、消し飛ばすに足りるだけのもの。

ドゴン、と地面をも巻き込んだ気弾により砂塵が舞い上がり、辺りは静寂に包まれる。

「……ぐ、ぬ。少し、無理をし過ぎたかのう」

言って、顔を顰める。腕の感覚がなくなり、身体が異様に怠い。いまだ未完成とはいえ、人体は勿論儂の身体でも無茶な動きの三連撃だ。人の身体であったならば既に壊れているだろう。どこぞの魔王の技だと一刀殿は言っておったが、本家本元は確かに化け物だ。

しかし……やり過ぎた感はある。

「し、死んではおらんと思うが……」

と言っておきながら、正直半々くらいだと思っている辺り本当にやってしまったかもしれない。

が、そんな儂の目の前に現れたのは、

「――――な、なんじゃ、あれは？」

巻き上がる風によって取り払われた砂塵の先、五色の光を背負い刀を構える赤髪の女の姿だった。

＊

砂埃の壁がなくなった私の前には呆然とする変態。どうやら、融合に関しては関知していないらしい。しかし、

「できれば、使いたくなかった……」

（ただし不死鳥、テメーは駄目だ、ってね♪）

あの日から念には念を、と懐に忍ばせていた融合器（勝手に命名）での融合。無駄に意欲的だった鳳凰様の助力込みで風の壁とクッションを作り、刀で気を裂くことで凌いだはいいが、またしても女になってしまった……。

「ふぅ……っ」

それにコレ、実は疲労の度合いが半端じゃない。あがる息を深呼吸で抜くも、肩の上下は少しの間止みそうにない。

しかもいくら生死の危機とはいえ、こんなド変態に露見するとは……最悪だ。彼自身私にとっての災厄な気がしてならない。

「……」

ああ、いい加減何か弁明するべきだろうか、とか考えていると彼の身体がプルプルと震え始めた。

「がっはっはっはっはっ！　いいぞ、まさかそんな隠し玉があるとは！　面白い、気に入ったわ！！」

どうやら興味をひいてしまったらしい。趣味だと思われ笑われるのも不本意だが、気に入られるのとどっちが、と言われると同じくらい不本意だったりする。

「うむ、合格じゃ！　お主にすべてを託そう！　……ふむ、人払いももう必要ないじゃろう」

さらには何かに合格してしまったらしい。そして何かを全部託される、と。近寄られて肩を叩かれる私の意志は置いてきぼりに。

……よくわからないけど、できれば不合格でありたかったと思うのは間違っていないと思う。

というか、今更だけど誰か来ましょうよ。あれだけの衝撃音が城内に響けば普通誰か来るでしょう？

「……なに、これ？」

そこへ見事、心の声を敏く聞き届けて現れたのは可愛らしく首をかしげる恋。

「……っ！」

そして、その目が私達を捉えてからの恋の動きは早かった。

状況としては、変質者すら超えた明白なド変態が少し神秘的な感じがする女性の肩を抱いて笑っている。

ちなみに戦闘の影響で私こと女性の服はところどころ破けて汚れ、さらに、気を使って疲労したからかド変態の身体は汗に濡れ、息づかいも荒い。

結果、見知らぬ女性を襲う異形の構図が完成する。

「ぬ、呂布か。……ああ、今の呂布は呉の陣営に居るんじゃったな」

悠長に話す彼の腕の重みがフッと軽くなる。

見るまでもない、私も視認できないレベルで距離を詰めた恋の方天画戟が彼だけを綺麗に捉え、野球のホームランのごとく空高くへ弾き飛ばしたのだ。

「おお～、城外ホームランですね」

「――なぜじゃぁぁぁぁぁぁぁあっ！？」

私のくだらない駄洒落と共に飛んでいくド変態生物ボール。誰にも拾われないことを願いつつ見送る私は、そういえば名前も聞いていないことを思い出し……まぁいっか、もう忘れたいし、と自分を納得させた。

「だい、じょうぶ？」

そして残るのは私と恋。

「あ、はい。ありがとうございました、呂布将軍」

一瞬焦りこそしたものの、考えてみれば完全に女性となっている私が上代刃と同一人物と思われるわけがない。

自然な女声でお礼を終え、その場を後にしようとして、

「待って」

引きとめられた。余裕の笑みが少し固まった気もしたが、気にせず愛想笑いを続けて振り向き、

「……ん」

抱きつかれた。完全に笑顔が固まる。かろうじて様子を窺うと、胸元に顔を埋めてクンクンと犬のように匂いを嗅いでいた。

そして、数秒の間。上げられた恋の紅玉のように澄んだ瞳が私を射抜く。また、数秒沈黙。

「……刃？」

口元が引き攣ったのがわかった。渇いた笑いすら無意識にこみ上げてくる。

「……」

少しの間をあけて、

「こんなの、絶対おかしいよ」

結局、肯定の意と共にこの世界の女性が持つ直感の理不尽さに異議を唱えた私は見事、不条理に敗訴した。

第２８章　輪廻からの刺客は真・漢女！？（後書き）

まず、前回で進むと言っておきながらあまり進まずスミマセン！
字数がなぜか多くなってしまった……稚拙な戦闘描写のせいだろうか。

そして、戦闘で使われたのは知っている人は知っている、大魔王様のあの技を気で再現したものです。
彼の言うとおりただ話を聞いて真似たものなので完成度はまだ８割くらい。威力とか速さという意味で。

次回はちゃんと進むよう頑張ります！
感想や指摘は随時募集中です。

第２９章　胎動する紅、浮沈する朱（前書き）

定期更新ができない……。
そんなわけで二週間近く空きましたが、第２９章です。

第２９章　胎動する紅、浮沈する朱

「おおっ！　ホントにこれを妾にくれるのかえ？」

「ええまぁ、そうなりますね」

光輝く、手入れの行き届き過ぎた金髪を揺らし、目の前で無邪気に喜ぶ子供は一応、立場上では上司の袁術。顔から服まで、その雰囲気はさながら人形のよう。

そして、その隣で笑いながら「よかったですね～、美羽様」と甘やかし、一方で「ていうか孫策さんが持ってても意味ないし、渡して当然なんですけどね～」と毒を吐くのは側近で大将軍の張勲。

「さすがは上代なのじゃ！」

「いえ、それを譲渡したのは私ではなく孫策様なのですが」

「ん？　そうだったかの？」

そうです、忘れないでください。

というか隣で密かに欠伸をかみ殺し、完全に彼女の相手を私へ任せている我が主君様はどうしたことでしょう。

「ともかく、その伝国璽はお渡しします。その代わり――」

「うむ、わかっておるのじゃ。今回、農民たちの蜂起の討伐に際した兵糧の提供と近辺に駐在させておる兵の派遣じゃな？」

「まったく、強欲ですね～上代さんは」

「恩情、感謝します。あと、散らばった孫呉の兵に関してですが、全て動員しても？」

「ああ、はい。今回は数も多いみたいですしね～。精兵をお貸しするんですから、無様な姿は晒さないようお願いしますよ～？」

どこまでもこちらの思惑通りに、疑うことのない彼女達。

……本当に大丈夫ですかね、この軍。心配する筋合いは微塵もありませんが、不憫でなりません。

その後も頭の痛くなるような話を終え、袁術の居城である寿春城を後にする。

去り際に聞こえた「ふっふっふ、これで妾も皇帝に即位できるのじゃ！」とか「麗羽の奴に目にもの見せてやるのじゃ！」という声と「わ～、どこまでも欲望に忠実ですね～美羽様」という、間の抜けた受け答えにほくそ笑むべきなのですが、頭が痛くなるのはなぜでしょうね？

そして、城への帰還後すぐに反乱の起こった一帯の村を迅速かつ相互の被害をまったく出さずに鎮圧。

集結した孫呉の精強な兵達による制圧とその後の村々の建て直しは当然というべきか、相当に素早く効果的なものだが、今回ばかりは少し時間をかけて進行中。

ああ、そういえば孫呉の兵が集結する際、建業に残っていたという大部隊を率いてやってきた孫尚香様とも対面しました。

「まったく、我が主ながら、あの姉妹は癖が強すぎます……」

私は思わず苦笑をもらしながら、その一幕を思い返した。

＊

時は少し遡り、他の兵達と協力して建て直し作業に精を出す私と上代隊の面々。

その“他”の中には袁術軍から駆り出された兵達もちらほら。前もって探りを入れていたとはいえ、本拠地ならいざ知らず辺境の地に配置されていた兵達の忠誠心は伸びきったゴムのように緩々で、ある程度の餌にあっさり引っ掛かってくれた。

いや、むしろ餌など不要だったかもしれない。贅沢三昧で圧政を布き、実直に務めても腐った将官や、果ては主君、大将軍の気まぐれで適当な場所へ飛ばされるのだから。

事実、数人の将などは代価など必要としなかった。それどころか私や周瑜さんが愚弄に値することを危惧してとりやめたくらいだ。

ともかく、懸念事項の一つは問題なく解消された。

運んでいた大きな木材を下ろす私は同時に精神的な荷も一つ下ろすように嘆息する。

「お疲れ様っす、隊長」

「ん？　ああ、あなたですか」

進捗状況に他の案件も含めた報告書を持って現れたのは上代隊副隊長の男。

普段でこそ三枚目で抜けた振る舞いだが、隊長の補佐として即決した能力は特筆に値する。隊をまとめる統率力と人好きのする性格。事務能力も最低限こなし、武力も女子を除けば隊の中でも私に次ぐ。いや、耐久力というか生命力に関しては隊でも他の追随を許さないかもしれないが。

報告書に目を通すと、一緒に渡された筆を走らせ確認のサインを記す。

「しっかし、ついにその時が来たんスね～、感慨深い」

「皆思っていることでしょうね。ですが、これからが正念場。浸るのが早すぎるのは問題ですよ？」

「まぁいいじゃないっすか。俺この戦いが終わったら、また隊長連れて街に女漁りに行くんスから」

人は、それを死亡フラグという。

「つか、隊長には女を落とすコツを教えてもらうつもりなんスから、逃げないでくださいよ？」

「いや、なぜ私になんですか……」

門外漢にも程があるでしょうに。

「またまたぁ～、孫策様だけじゃなく孫権様まで毒牙にかけといてよく言うっすよ」

冤罪だっ!?　それに毒牙ってなんですかっ、人聞きの悪い。

「よく二人で酒盛りしたり、孫権様には贈り物までしたって話じゃないっすか」

それだけで!?　想像に尾ひれがつき過ぎでしょう!?

あまりにもあんまりな誤解を解こうと、若干の怒りすらまじえた私の弁明は、

「やっほ～上代、何してるの？」

側頭部で輪のように結ばれた桃色の髪を揺らし、その髪と合わせて受け継がれている宝石のような碧眼を煌めかせた孫尚香さんによって遮られた。

白を基調とした服装はジャケットとミニスカートによって臍と足が露出していて、年齢からか性格からか、色香より純粋な快活さが目立つ。

「し、尚香様！」

突然の登場による驚愕から声を上げた、と信じたかったが、彼の顔はいつもの綺麗な女性を見つけた時のソレと相違ない。

「あなたという奴は……立場的にも年齢的にも尚香様は駄目でしょう」

深い溜息と共にコイツもロリコンか……と言いようのない疲労を

感じた。
　ちなみにもう一人が誰かは眉唾の御遣い様を信じる者達のために黙秘しますが。

「何を言ってるんスか！　俺は綺麗な女性でありさえすれば対象年齢に下限と上限を設けない男っすよ！？」

「下衆ね」

「ええ、下種ですね」

「むしろ、人という枠組みすら設けないっす！」

「……いや、ある意味勇者ですかね。理解できないし、したくもありませんが」

「呼んだ？」

（……ややこしくなるので出てこないでください）

　そんなこんなで訳を説明。
　一通り聞いた孫尚香さんはへぇ～、と感心したように呟くと思いついたように話し始めた。

「そういえば、お姉様もだけど冥琳が男を認めてるのは久しぶりに見たかも。今回の策も上代が出したんでしょ？」

「いえ、正しくは灯理の立案したものの細部を詰めて少し変化させたのが私なのですが」

最終的に組み立てたのは周瑜さんですし。それに、彼女が認めたというのもなんか引っ掛かります。

「でも上代が味方で良かった、って言ってたよ？　敵に回したくないって」

それは褒めたんじゃなくて、今回みたいな狡猾な悪知恵を相手にしたら頭痛が酷くなるとかいう類の話ですよ、多分。

話した時も大概意地が悪い、って顔を顰めてましたし。

「そうなの？」

「ええ、まぁそうです」

依然、私に軍師としての実力を期待する目の前の少女に、軍師として戦略などで競わせたら私が周瑜さんの足元にも及ばない、などの事実をつらつらと述べていく。

ちなみに隣で、「普通の姉妹だけでなく、義兄弟の契りを交わした周瑜様まで、だと……！？」とか口走ってた馬鹿はしっかりと顎を蹴り飛ばしておきました。

「そういえばコレ、誰？」

結局、少し不満げに納得した孫尚香さんが指すのは当然のごとく復活している副隊長。

最早彼女の中でも人かどうか怪しいが、呼び方的な意図で。

「はっ！　姓は朱、名を然、字は義封っす。上代隊の隊長補佐を務めております！」

それに無駄な元気で名乗った彼は、そういえば、と懐から一枚の綺麗な紙切れを取り出し、孫尚香さんへと渡す。

「あ、隊長もどうぞっす」

「はぁ……って、これは名刺、ですか？」

同じく渡された紙切れは前の世界で身分を示す時に使われる、名刺と呼称されるもの。

確か、この世界ではないもののはずですが……。

そこには彼の姓名に字、後は副隊長だか隊長補佐みたいな役職が記されていた。

「名刺……？　なんスか、それ？」

「えっと……まぁなんでもないです。で、これは？」

先を促した私に返ってきた答えはある意味驚愕なものだった。

曰く、これをナンパの際に手渡し、それを持った女性が彼に用がある時に城の兵へ見せることで文や面会を取り次いでくれるものらしい。

しっかりと残る物を手渡すことで自分の印象を強める効果も狙った上に、兵たちへの根回しもあと少しで完了するとのこと。

……その行動力を別の所に費やすべきだと思ったのは間違いじゃないはず。

「でも、名刺って良い呼び名っすね。あ、ちなみに自作っす、ほら」

言って懐から取り出したのは屑鉄を加工したケースに入った名刺の束。

「よし、没収」

「なっ、隊長っ！？」

「こんな危険性孕んだ物を放置できるわけないでしょう、他に渡した人は？」

「つい先日完成したばっかの初お目見えっすよ！？」

必死そうな朱然を見ても全く罪悪感を覚えないのは相手が彼だからでしょうか。というか、彼の頭ならそのくらい分かるでしょうに、いつも妙なところで頭が悪い。

いや、一周まわっていないのに基本バカなのでしょうか？

「ふむ、なら問題ないですね」

「酷いっ！？　尚香様、何か言ってやってください！」

「私、どうせなら上代のが欲しい～」

「全く眼中に入れておられないっ！？」

華麗なスルーに撃沈した朱然は放っておいて、孫尚香さんからも彼の名刺を回収しておく。

「上代は作んないの？」

「え、冗談じゃなかったんですか？　というか立場上、貴女が呼べばコレは必要ないでしょう」

「う～ん、それとはちょっと違うんだけど。上代も女心がわかってないよね」

そう言って妖しげに笑う姿に末恐ろしいものを感じた私には曖昧に笑うしかなかった。

ちなみに精神的にも不死身なのか、またすぐに復活して「ま、まさか尚香様まで交えて四人もッ……！？」とか戦慄していた馬鹿を蹴りで叩き潰したのは完全に無意識でした。

＊

孫三姉妹の末っ子で、どちらかというと孫策さんに似た天真爛漫な性格。

……ええ、あれは間違いなく孫策さん似ですね。

歳に見合わない艶やかな愉悦のこもった笑みは孫策さんとベクトルこそ違えど似通ったニュアンスが感じられた。

違いといえば、孫策さんは猛獣の如き猛々しさが本質ですが、孫尚香さんはどちらかといえば小悪魔という言葉が当てはまることくらいですか。

それに加えて孫策さん達に何を吹き込まれたのか私へ過分な期待を寄せているようですし……無邪気な信頼ほど重い荷はないという

のに。
とはいえ、その重荷を信頼という礎にする気概は持つつもりですがね。

ともあれ、閑話休題。
そうして無駄に長く整備作業を行う中、場所は孫呉の将が集まる天幕。

「さて、あと少しもすれば袁術が皇帝を僭称（せんしょう）するだろう」

「……そこに何の不安も持たれない袁術達ってある意味すごいですね」

周瑜さんの言葉に皆が頷き、それに思わず苦笑する。

「まぁ袁術じゃ仕方ないでしょ、それより次は劉表だっけ？」

一言でバッサリ言い切る孫策さんは続く一手を周瑜さんへ確認する。
その目には王というよりは獲物を蹂躙する猛獣にも似た輝きが秘められていた。

「ああ、しかしまだ人選が確定していない。一応予定では幼平の部隊に任せることに決めているが」

「これまでの細作はほとんど戻っていないですからね～、特に女性の方は一人も連絡がつかなくなっていますし～」

荊州を治めているという劉表。

若くして太守となると、持ち前の智謀で財政を建て直し、内部の淀みを洗浄、能力主義による統治の効率化など、有能な人物であることは伝え聞いているが、同時に他者を信頼せず機械的な統治を行っていることも良く聞く。

大体、劉の姓を持ちながら世襲を愚昧と断じていると噂されるような人物だ。相当偏屈なのは勿論、王制すら否定しかねない野心家なのは容易に見て取れる。

少しでもその内情を知ろうと細作を送っているものの、陸遜の言うように多くは帰らず、かろうじて帰った細作も何も掴めないまま。

「しかし、そんなことがありうるのか？　何も掴めないなんて」

怪訝そうに言う孫権さん。

それもそうだ、兵士ならともかく領内の商人、農民にまで探りを広げて何も聞き出せないというのは明らかな異常。

それではまるで、領内が――

「なにかあるのは間違いないですね。でも……冥琳様、本当に明命たちに任せるんですか？」

「……」

灯理の言葉には言外に難色が含まれていた。

多分、無事に戻れる確率が高く見積もれないという懸念があるのだろう。そしてそれは周瑜さんも同じ、苦々しげに考え込む様子には更なる妙手を探る気配が感じられる。

「探るなら女の方が良いのは明らかだ。しかし、顔の割れていない

可能性のある者で無事戻れるとなれば幼平しか……断念、というのも考えるべきかもしれないな」

細作で一人も戻らない女ならその原因に近づける、そして無事戻るなら武勇はもとより咄嗟の判断力、洞察力が必要なのは自明の理。

周泰では顔が知られている危険性も少なからずあり、経験の浅さから必要となる多角的な能力には不安が残る。

しかし、それでも現状では次善。

黙考が続く。そして、そろそろ空気が諦めに傾こうというところ、

「……あ！　私、いい案思いついたかも」

沈黙をあっさりと破り、言葉を発したのは我らが王、孫策さん。

しかし、その顔は妙案を思いついたというには少々以上に無理がある愉しげな笑みに歪められていた。

ああ、このパターンは……。

「悪い予感しかしない……」

できれば外れてほしいと思いつつも、直感的にこれは当たるな、と確信せずにはいられない。

――そして、その予感は律儀にもしっかり的中することになる。

第２９章　胎動する紅、浮沈する朱（後書き）

副隊長は朱然さん。
それなりに強い、かも？　ギャグ要員、これは絶対。

ちなみに描写できているかわかりませんが、基本的に上代刃の知謀は諸葛亮を始めとした天才には全く及びもつきません。
戦術レベルなら一流、でも戦略レベルでは二流。
でも奇を衒った考えで敵軍師とかからは嫌われるようなタイプ。
策の成功率？　良くて６割です。

ちなみに劉表さん好きは気をつけてください。
多分、それなりに嫌われ役です。

では、次回は一週間以内の更新を目指して。
感想は随時募集中です。

第３０章　暗闇へと伸ばした手（前書き）

またしても二週間近い間隔がッ……！
本当に更新遅くてスミマセン。

スランプです。
唐突ではありますが、とにかくスランプなのです。全然まとめられません。

そんなわけで今回は普段より長めになっちゃいました。
加えて、結構やらかした感は否めません。まぁ、そのへんは読んでいただければ理解できるかと。

では、前回までより更に質が落ちていないよう祈りつつ、第３０章を楽しんでいただければ幸いです。

第３０章　暗闇へと伸ばした手

今日は私の内心を映したような曇天。その日は沈み、人工の灯りのみが暗闇を打ち消すという絶好の潜入日和。

「はぁ……」

そして、憂いを過分に含んだ溜め息は昼からずっと継続中。

潜入任務が嫌だ、というわけではないです。確かに今回は一段と危険が伴うものではありますが、決意を新たにこそすれ沈むことなどありえません。

問題はただ一つ、現在の格好に集約されます。

男性も混じった別働隊は別として、現在行動中の私を含めた潜入する細作部隊は全員女性で構成されている、といえばわかりやすいでしょうか。

とどのつまりが、

「また女装……」

孫策軍に来てまで仕事で性別を偽ることになるなんて……。

最近、多種多様な呪いが身に降り掛かっているのでは、と疑いたくなります。ええもう、大嫌いな物の欄に見えざる神の手でも追加しそうな勢いですよ？

その勢いたるや上代刃の憂鬱、もとい上代刃の溜息でも執筆しそうなくらいです。

無論、冗談ですがね。書いたところで大半を孫策様という存在が

占めそうな気がしますし。

続く溜息が大口を開けた沈黙に吸い込まれ、無音へと軌道を修正する中、気持ちが上向きにならない現状にちらりと視線を後ろへと向ける。

「……何か？」

後ろに続くのは数人の女性。

私と同じく潜入任務を帯びた彼女達は細作の部隊から選出されたいわゆるエリートであり、私語を全く口にしない寡黙さは流石といったところです。

が、痛いほどの沈黙は正直耐え難いもので、私に細作は難しいな、と実感させるに足るものだったり。

「いえ、その不言実行ぶりには頭が下がるな～と思いまして」

「……任務、ですから」

おおう、なんというクールな対応。甘寧さんといい、隠密行動に長ける人は総じてクールビューティーが基本なんですかね？

できる女は背中で語る、という感じで。好きになれそうな人種ではあっても個人的には周泰のように茶目っ気残る人と一緒の方が荒んだ心の癒しになります。

「えっと、それでも私は潜入任務に慣れていないところもありますし、至らぬところはご鞭撻をお願いできますか？」

会話の糸口を探すあたり私の心は優しさに飢えているのかもしれ

ない。
今なら私の心を読んで某獅子的な解熱鎮痛剤を手渡してくれた人を笑顔で谷底に蹴落とすくらいの寛容さを発揮できる気がしないでもないです。
狭量？　いいえ、これも優しさですよ。獅子的には。

「……では、僭越ながら一点」

うむ、細く事務的でありはしても久々の会話。若干なりテンションは上がります。
とはいえ、内容が内容だけに内心びくびくしながらも頷き、先を促すのは仕方のないことですが。

「……先ほどから感じていたのですが、過度な嘆息は隠密行動中であれ士気に問題が出るかと」

……鋭い指摘にして正論だ。

「ううむ……それは鬱屈とした気分にしてすみません。感じたならその場で言っていただいても良かったのですが」

「……貴方が、隊長ですから」

またしてもクールにしてｃｏｏｌな返答。
本当に女にしておくのが勿体な――いや、この世界では正しいのでしょうか？　実力と同時に男らしさという個性まで侵略されていないかちょっと不安。がんばれ、男の子。

「ま、その実直な信念に応えられるようしっかり隊長しますかね。頼りない隊長では貴方にとって役不足でしょうし」

「……問題ありません。ここまで我らを導いた隊長の力は信頼しています」

あぁ、尚のこと頑張る理由が増えましたね。

ここまでうまく敵さんをかいくぐっている働きは先行偵察を行っている鳳凰様の力によるところが大きいので。

「……さらに言えば、これは先ほどの提言の続きですが。その姿は悲観するようなものではないかと」

「と、いうと？」

「……愛くるしく、我が琴線にも触れる姿であることを断言します」

「……はい？」

「……無論、その姿での憂い顔も私の士気を上げる要因足り得ます。……失礼、私語が過ぎました」

無表情でありながら微妙に熱を感じる言葉。平坦な声で述べられたからか、その内容を理解するのに数秒を要した。

「えっと、つまり？」

「……目の保養です」

またしても断言。

それでもクールな姿勢を崩さない彼女に真の冷静沈着というものを見せつけられた気のする私は再び嘆息し、図らずも彼女の士気向

上に一役買ったらしい。

……いや、何の話ですか、まったく。

＊

時間は遡り、潜入任務へと発つ少し前。

我が親愛なる主様の素敵な御言葉によって女装の審査はそれなりに驚きを含みつつ迅速に合格と相成った。

その際大笑いしていた我が親愛に過ぎる主君殿に明確な殺気を覚えたのも束の間、その妹君からは「に、似合っていると思うわよ？」という言葉を照れた表情付きでいただき、胸に深く鋭く突き刺さりました。

以前の愛紗にも言えることですが、真面目な賞賛がどれほど無慈悲な刃になりうるかを自覚するべきだと思うんですよ。いや、ホントに。

その他の反応も多種多様。

が、しかし。一人だけ、いかにも「ほう、このような特技まであるとは……使えるな」という副音声が聞こえてきそうな笑みを口元にはりつけた筆頭軍師様以上に私を打ちのめすものもありませんでしたが。

そして、場所は移り、天幕の並ぶ孫策軍陣営の中。

「しっかし、ホントに別人にしか見えないッスね～」

感心したように言うのは上代隊副長の朱然。一度見ていて尚、その変貌ぶりに驚きを隠せないらしい。

ちなみに、どんなに綺麗で可愛くても男性には惹かれないらしく、現代で言う男の娘には一分も興味がないのだとか。私がそうだとは思いませんが、個人的にそういう意味での危うさがないのは諸手を上げて肯定してあげたいところです。

ただし、女性ならオールオッケーという姿勢には当然ドン引きですが。

まぁ、色ボケの嗜好はともかく、そんな私たち、正しくは私の前で心配そうに目を伏せるのは灯里。

気持ちと連動して元気なく下を向くアホ毛に対する疑問はとりあえず棚上げです。

「兄さん、くれぐれも気をつけて」

声音から隠せない不安が感じられる。

心配性の我が妹に優しく慈愛に満ちた笑みを浮かべる、というのが普段の私ですが、今回に関してそれは若干引きつり気味の笑みに変更せざるを得ません。

潜入任務につきまとう危険だけにとどまらない彼女の深刻な表情は容易に付加要素を想定させる。

ヒント的には灯里特有の能力。ああ、本当に笑えない。

「うむ、お主は我らの希望なのだから身に降り掛かる危機にはしっかりした心持ちでいてもらわんと困る」

「……あの、どっから湧いたんですか、ド変態」

いつの間にか会話の輪に加わっているのは先日、恋に吹き飛ばされたはずの異形。

相も変わらぬ風体は日常の空間を歪め、見る者にとある情動を抱かせ、しかしてその情動すら生理的障壁によって阻害される――有り体に言えば、相変わらず気持ち悪い。

「うわっ!?　なっ、た、隊長！　なんなんスか、コレ!?」

「むぅ？　刃よ、この男は誰だ？　見覚えがないが」

「え、なんで友人のごとく話しかけてきてるんですか貴方?」

「兄さん、つっこむところが違います」

そんなことを言われても、自分でも不死身で超絶的な女好きと不可思議な戦闘力に不可解なセンス持ちのド変態の全容は把握できていませんよ?

でもまぁ、あえて説明するなら、

「生物学的にはこっちの男は下種で、こっちの漢女が突然変異種です」

「俺、人間としての尊厳全否定ッスか!?　ってか、コレの下!?」

喚く朱然にも人の尊厳があったということに驚愕を覚えつつも、一応自身の率いる部隊の副隊長と……なんでしょうね、この変質者。

名も知らない彼には改めて自己紹介を要求し、代わりに朱然のことを普通に異常な紹介をした。

「おお、確かにまだ名乗ってもおらんかったな。儂の名は卑弥呼、刃の味方にして流浪の旅人じゃ」

『え、流浪の変態？』

「二人とも、記憶に自分の主観が混じり過ぎです」

冷静につっこみを入れる灯里には彼（？）専用の自動変換機能が脳から欠損しているらしい。

いや、むしろ私たちに余計な機能を追加させられたと考えるべきでしょうね。卑弥呼を名乗る彼や貂蝉などのためだけに人間のキャパシティを一部占領するなど失礼極まりない。

「……ん、卑弥呼？」

いや、変態という偏見の脳内侵略以前に問題もある。彼は今、なんと名乗った？

卑弥呼、日本において数多い偉人に名を連ね、古来の王国、邪馬台国の女王にして神秘を体現する者。奇しくもそれはこの世界で伝えられる道士、仙人にも似る。

そして、彼と出会った際の違和感に彼自身の異質さ、身を以て体感した力。偽名か同姓同名か、しかしその本質は近しいものであるように感じ取れる。

「……貴方は、道士かそれに近い類の者ですか？」

「ほほう、相変わらず頭の回転は早い。是と言えば先ほどから手をかけている刀から手を引いてもらえるのか？」

舌打ちがもれる。気取られないようにはしていたんですがね。
代わりに生じるのは残る二人の警戒と疑念。個人的な知り合いだと思われていた不名誉はこの際無視です。

道士といえば、夢か空ろか幻か。いるようでいないのと同義だ。
敵意を向けるだけ無駄、加えて味方と名乗るのだから警戒も無駄だろう。

「で、道士の貴方たちの希望が私？　意味がわからないのですが」

「なに、そう身構えずともよい。これから野暮用でお主のもとを離れるのでな、忠告をしようと思っただけじゃ」

まるで私を見守っていたと言わんばかりの口ぶりに生理的な嫌悪がわき上がりこそしたものの、人を食ったようで而して意思疎通の困難なのは道士の特徴。いちいち食って掛かっても徒労に終わるだけです。

「忠告、とは？」

「うむ。我らと異なる道士と五胡に気をつけろ、とな。まぁ、五胡の問題はまだ先だが。それと道士の見分けはつきやすかろう、白装束の者どもじゃ」

少しの驚きとともに記憶を辿る。
洛陽での一件、その首魁である者達の風体が完全に一致する。感じた妖しげな雰囲気は錯覚ではなかったらしい。
そして五胡。漢王朝へと侵攻を目論む五つの非漢民族の呼称だが、危険の直接性では特別に注意をはらうべきものとも思えない。

「今は言えんことも多い、しかしこの忠告はお主個人へのものじゃ」

先んじて質疑は遮られ、代わりに一つの疑問は晴らされる。

まぁ、闇雲に手を突っ込むのは私の流儀に反しますし、こんな抽象的な忠告を聞いて損することもない。ほどほどに気をつけることにしましょうか。

「……」

それに、私としては彼の言葉を顰めっ面で聞く朱然の方が気がかりでもありますし。

「とはいえ、お主に限っては心配は無用じゃろう。一刀殿には貂蟬がついておるし、儂も安心して旅立てるというものよ」

なぜ一刀が？　という問いは踵を返した卑弥呼によって封殺された。人外とはえてして勝手なものらしい。

「では、期待するぞ？　お主は救世（ぐぜ）の勇者なのじゃからな」

言って、歩き去る道士は幻のように姿を消す。

「勇者って……ＲＰＧか何かですか」

悪い冗談だ、と確かな質感を持った、吸い込まれるような蒼穹を仰ぎ、放った言葉。

ひどく貪欲に、乾いた音の震えを飲み込んだ碧羅の天は果てしなく、生きる実感を私に見せつけるように広がっていた。

＊

そんなわけで、隠密行動も加えた移動ではありましたが、鳳凰様のお蔭か予定よりは早めに目的地に到着。

劉表さんの治める、過剰に整備された息の詰まりそうな街へと潜入したのはいいのですが……。

迂闊だった、という言い訳すら阿呆らしく思える警備体制でしたね～。

思わず苦笑いすらもれそうになる私とその部下達は寡黙にして覇気のない兵隊さんによって現在粛々と連行中。

寡黙さんが集まることによる惨状は意外と情動的な私には耐え難いです、この際敵だろうとなんでもいいんで喋ってくれませんかね？

ついでに今までの細作が簡単に捕まっていた理由もわかりました。原因こそわからないものの、この兵隊さん達、私たちを外部の人間だと確実に判別できるようです。

数回の徹底的に事務的な質疑応答ですぐに捕縛を決行する彼ら相手では情報収集なんてやってられません。

行商を装ってみたものの無意味、というか余所者＝捕縛対象、ってどんな統治してんですか劉表さん。常識外れすぎて想定の範囲を軽く超えてますよ。

ともあれ、別働隊は無事到着して待機してますかね～？　なんて

ことを考えながら連れてこられたのは城内のやけに大きな広間。

そこには一際立派で大きな椅子――まぁ、普通に考えれば玉座でしょうね。それに座る地味ながら質の良い服に身を包んだ若い男と、その脇を固める女性の将官。他には護衛であろう兵達が配置されていた。

うむ、ほぼ間違いなく劉表さんとその臣下の皆さんでしょうね。劉表さんは線の細い整った顔立ちで煌めく金糸の如き髪は童話の王子のよう。加えてどこか陰のある鉄面皮、精巧な人形と言ってもすぐに判別はできないでしょう。とりあえず、朱然が見ればこれ見よがしに舌打ちでもしそうなイケメンさんです。

に、しても。いきなり常識破りな対応をされた身としてはこれからどう転ぶのかまったく予想がつかない。

「一応、荷物なんかを見た限りだと行商のようだけど……。ねぇ、君」

なので、とりあえず適当に惚けて事の推移でも見守っとこうとか思ってたのに文官、と思われる女性に声をかけられてしまいました。

ううむ……文官、いやその前に将官、ですよね？

歳は十五、六といったところで、癖のある黒い短髪にぱっちりとした大きな目。琥珀のような瞳が不思議な印象をこちらへ与える。

まぁ、そこまではいいです。顔の整った美少女だということもこの世界ではそう珍しいものではないですし。

問題はその服装にあります。

頭には鈍く光るシックな銀の髪留め。そして白いシャツの上から

大きめの黒いパーカー（しかもフードには犬の垂れ耳付き）を羽織り、股下の短い、いわゆるホットパンツを穿き黒いニーハイソックス。口からは飴玉の棒が見えている。

つまるところ、なにこの人だけ時空超越しちゃってるの？　とでも言いたくなるような現代人風な風体なわけです。

まぁ、武官というには無理があるだろうし文官、でしょう、多分。五十歩百歩なのは自覚していますが。

ともあれ、そんな彼女は屈託のなさを微塵も感じさせない、逆に清々しいほど悪意の見える笑みを浮かべて私へ対話を図る。

「どこの細作なのかな？」

おおう、無茶苦茶核心から聞きますね。

ふむ……さて、どう言い逃れ――

「捕まるなんて馬鹿だね～。でも安心するといい、他にも有象無象の塵芥（ゴミクズ）がたくさん捕らえられてきたから。おめでとう、これで君も路傍の砂粒の仲間入りだ」

「――いやいや、挑発とか誘導尋問の域をぶち抜きすぎの罵詈雑言でしょ貴女。人の心へし折るつもりですか？」

続く口からは「尊厳？　良心？　何ソレ食えんの？」というスタンスで常識ガン無視の罵倒。思わずつっこんでしまったじゃないですか。

「あれ？　そんな返し方をしてきたのは君が初めてだよ。はじめまして路傍の石ちゃん、そしておめでとう」

今になって彼女の中でその他大勢へと昇格したらしい。
感情を逆撫でするのが目的ではあるんでしょうけど……まぁ、もしそうでなければ随分口の悪い人ですが。

「徳珪、無駄口はその辺でやめておいたら～？　お子様の下らない捕虜弄りにつきあえるほど私たちは暇じゃないのよ～？」

そんな中、間延びした声が私たちの会話を遮る。

将官の一人だろう、手入れのほどが窺える綺麗な青髪、優しげに細められた目に多くの装飾で飾られたチャイナドレスという出で立ち。歳は黄蓋さんと同じくらいか。
間延びした柔らかな声音でこそあったが、言葉は辛辣（しんらつ）。

しかし、なんともはや……徳珪と呼ばれた彼女、素の毒舌家でしたか。

「あはは、人の愉しみに水を差すなんて無粋だなぁ。でも仕方ないか、歳を重ねに重ねたわりには落ち着きが全然な子柔だもの。婚期も逃して生き急ぐのもわかるよ、うん」

「あらあら～、生き急いでいるのはどちらかしら～？」

「……姉上、蔡瑁（さいぼう）、口喧嘩なら外で。それよりこの者達への対処です。劉表様、手順はいつもどおりでよろしいですか？」

黒々とした不穏な笑みを浮かべ、穏便に睨み合う二人を一言で断じ、主君へ伺いを立てるのは同じく文官であろう少女。

髪が赤く、目が鋭いことを除けば、子柔と呼ばれた彼女を蔡瑁さんの歳まで若返らせ――いえ、子柔さんによく似た容姿です。服装も含めて。

……言い直したことと彼女の鋭く向けられた殺気には全然、何の関係もありませんですヨ？

「ああ」

簡潔に、あくまで淡々と答える劉表さん。

何の気なしに、興味本位から視線を映して彼の表情を窺う。

そして、その瞳を見て――――ゾッとした。

アレは、こちらを睥睨するあの瞳は。目が合った瞬間に襲う虚脱感。相対しているのに実感が湧くことがなく。

「ッ――！」

嫌悪。あの生き物が自我を持ち、動いていることが気持ち悪くて仕方がない。滑稽に過ぎる、壊れた絡繰(からく)りが人を模しているかのような。

白装束の集団にも似た感情。しかし、より生々しく性質が悪い。

「……中々、効果的な容姿の駒がいるようだが」

睨むような私の視線に彼の無機質な目が重なる。

少しだけ眉を顰めた劉表さんは再び顔から色を消し、淡々と言葉を紡いだ。

「うん、それは私も思ったよ。まったく中身がなくても綺麗に描かれれば使い物になるんだから、世の中残酷だね。ああ、中身が腐ってるのも問題だっけ？」

「うふふ、喧嘩を売っているの～？」

あからさまな視線と共に口喧嘩を再発させようとする蔡瑁さんは、しかしすぐにその視線を私へ移し、改めて値踏みするように観察し始めた。

「蔡瑁、退け。？良（かいりょう）の言う通り、時間が惜しい」

「うんうん、わかってるよ。無駄は人間の欠陥、っと。……ホント、陳腐でくだらない。まるで三流悲劇だ」

劉表さんによって私たちの前から退く彼女はもう一度、私を一瞥。その後、顔に不機嫌さをはりつけながら何かを小声でつぶやいた。

そして、兵士達によって押さえつけられ更に身動きのとれなくなった私たちへゆっくりと劉表さんが近づいてくる。

手が、一人の額を掴んだ。

「――――ァガ、ッ……！？」

そして静かに目を閉じた劉表さんと対照的に声にならない叫びを上げる部下。

少しの間を空けて、気を失ったかのようにうな垂れる部下から手

を離した劉表さんは二人目、三人目と同じ行動を繰り返していく。

異様な光景だった。

見た限りでは、物理的な痛みに悲鳴を上げているようではない。

と、なれば精神的……。

思わず、出立前に現れた卑弥呼を連想する。しかし、彼の忠告にあった者ではない。

ならば、それ以外の道士の類に目の前の男が該当するのか、それとも裏で糸を――

「貴様で最後か」

思考を巡らせる間にも、その魔手は私の額を掴まんと伸びる。

再び見た、彼の瞳は変わらずの、いや、近くで見れば見るほど私を不快にさせる。そして無意識のうちに、彼の歪（いびつ）な理想すらも透けて見えたように思えた。

「……やはり、危険だ」

苦笑をもらしそうになって、顔の引きつり具合を自覚、心の中にとどめた。

鏡映し、私と向かい合う彼の顔もまた、これまでにないほど苦々しげに歪められている。

額を掴まれ、対面の男が目をつむる。

「――――!!」

その瞬間、世界が白く塗りつぶされた。

自分がこの世界に立っているという感覚がない。沸き上がるのは思考を投げ出したくなるくらいの嫌悪感。

頭の中がグチャグチャに掻き乱されるかのような錯覚。いや、本当にこれは錯覚なのか？　そんな思いすらすぐに情動で押し流される。

パチパチ、と目の前で光が数度明滅する。戻った視覚、しかしその情報を把握するにはまだ頭が煩雑に掻き混ぜられている。

気持ちの悪さは変わらず、まだ頭が働くだけマシだろうか。生々しい嫌悪感は身体の不調からくるもの、とはいえ過度の疲労感はそのマシだという思いを簡単に薄れさせるが。

「……牢へ連れて行け。後、この駒のみ念入りに施術を行う」

険しい顔で踵を返すダレかと入れ替わりに、また目の前に現れるのは先ほどの少女。名前は……駄目だ、頭痛が酷くて思考するという機能が麻痺している。

「へぇ～アレを食らって意識を保てるなんて。面白い……いや、面白くなってきた、ってとこかな。名前は～、うんまだ喋れそうもないね。じゃあまた後で。――ああそうだ、はじめましてだね、見知らぬ誰かちゃん♪」

やけに楽しげな声を聞きながら、身体を支配する疲労に目蓋を落とし、そして頭に触れる柔らかい触感。

それと同時に思考の糸は切れ、意識は粗もなく綺麗に寸断された。

第３０章　暗闇へと伸ばした手（後書き）

なげーよ。とお思いの方、ここまでお読みいただき、ご苦労様でした。

ふっ、まだまだだね。とお思いの方、ご要望などあれば更に長くなる余地は無駄に残っておりますのでご安心を。

え、いない？　ですよねー。

やらかした箇所はお分かりになりました、よね？

はい、劉表さん旗下の将官さん達です。平たく言えば、オリキャラ出しすぎじゃん。

でもあの人達を出さないという選択肢がなかった……。べ、別に後悔なんてしてないんだからねっ！（ぇ

しかも、さらに二人ほど追加の予定があります。

こ、今回ですら、原作キャラがまともに登場していなかったのにッ！？　と思われるかもしれませんが、今回は漢女一人で我慢してください。次は絶対出します。

そんな次回はスランプがリンクアーツばりにチェインしているため、また少し時間がかかるかもしれません。息抜き大事。

感想は随時歓迎です。

第３１章　捩れた理想、往く船は軋み（前書き）

今回は週一更新……を少しオーバーしました。

でも現状ではなかなか早い更新にできたかな？

うん、原動力って大事ですね。

第３１章　捩れた理想、往く船は軋み

荊州の州牧である劉表が居城とする城内の一角。薄暗く、石造りの壁が見る者に冷たい印象を与える。四角く物理的に区切られた空間が並ぶそこは、俗に言う牢獄の役目を果たす場所。

ただし、その牢獄へと収監される者は一般的な罪人ではないということが、厳密にそこを牢獄と呼称できるかカテゴリー分けに困るところですが。

城内の数ヶ所に分けられて点在する収容エリアでは一つの牢に数人の女性が捕えられているらしい。

彼らが“それら”をどういった用途のために収監しているのかはわからない。

が、しかしトップである彼の進まんとしている理想（みち）については確証が持てた。それは歪で、しかし幼く純粋な願いから生まれたモノ。

ま、賛意はまったく示すことができませんが。

そして、何より問題なのは彼の持つ不可思議な術。

その全容を把握するには至っていませんが、得た情報から考えるに、どうも非科学的で非現実的なものであるらしい。道士という説はあながち外れていないかもしれないですね。

一番近い言葉を探してみると……洗脳、というのが最も無理がないでしょうか。ただし、それは暗示や錯覚などのものでは説明できないほど巫山戯（ふざけ）ている。

私が言うことでもないですが、つまりはそういうこと。自身と同じく珍妙な術は突飛なだけに推理しにくい。

……はぁ、厄介なものです。

「や、元気にしてた？　上代君」

「……貴女ですか。施術、ではないみたいですね。また無駄話でも？」

無理な思考による疲れを息と共に抜くと、見ていたかのようなタイミングで現れる蔡瑁さん。涼しげで少女の可愛さも残るその声はとても毒を吐くに似つかわしくない。

そんな敵方の将官である彼女に警戒は緩めないようにしつつも、本心からの溜息は抑える気はおこりませんでした。

後ろに劉表さんの姿は見えない。

今まで数度の施術に毎回彼が来ていたことをかんがみるにあの術を使えるのは、この軍では彼のみということになるだろう。

では、彼女は何をしにきたのか？

尋問官を連れている様子もなければ、？越（かいえつ）さんもいない。尋問やら拷問という類でもない。

……結論として、これまでの経験上、彼女の個人的なお喋りであろうことは想像に難くないです。

「なんだい、こんな美少女とお話しができるんだからもっと喜ぶべきじゃないかな？　むしろ喜べ、喜びのあまり地面を転げまわった挙句、私の靴の裏を舐めるくらい喜べ」

「今、頭を激しく揺することは自殺行為なので嫌です、とあえて普

通の拒否を明示します」

もうこの暴言にも慣れましたから、ええ。

「ふーん、つれないね。そんなに酷いかい、頭痛？」

「わかっているならもう来ないでくれますか、常時この痛みがあるから満足に寝れもしないんですよ？　本当なら話すどころか考えることすら億劫なのに」

捕えられ、最初の施術が行われた時から続くのだから気が狂ってもおかしくない。

いや、実際まだ気が確かなのは奇跡的です。

「なら無視して寝ればいいんじゃないかな？　そして私の読み聞かせで好い夢でも見ればいい」

「チッ……それのおかげで無視できないことをわかって言ってますね？」

最初こそ、彼女の意図を訝しんだものだけれど、その意味の無さから無視を敢行しようとはした。

しかし、その際に彼女が私に読み聞かせようと読み始めたのが……その、いわゆる、官能的な物語だったのだ。人の三大欲求というだけあり、この世界でもしっかりと流通しているソレをポケットから取り出した彼女はさも幼い子供に読んであげるかのように読み始めた。

「で、どうだったんだい？　あの時は上代君が根負けして、って感じだったけれど……実際、少しは快い感情でも覚えたんじゃないの

かな？」

だが、それから徐々に描写は生々しく、台詞は真に迫ったものへとなっていき、最早その道のプロ顔負けと言っても過言でない様相を呈していた。

「くっ……仕方ないでしょう、私だって健全で一般的な男性なんです」

加えて、精神的に余裕がなかったことも言っておきたい。……い、言い訳ではないですよ？　決して。

「……は、笑いたければ笑えばいいでしょう」

「あーっはっはっはっ！」

ああ、ぶった斬りたい、コレ。

異常なほど静かな空間に融けていくわざとらしい笑い声。まるで音に飢えていたかのように声を吸収するこの空間の中では、私以外声に反応する者はない。

無論、私以外に誰も収監されていないなんてことはない。通路から見て左右対称に五つほど作られた檻という名の箱の中は、全て埋まっており、私の放り込まれたものを除く九つの箱の中には老若さまざまな女性が三人ずつ収監されている。

ただ、その瞳には光がなく、既にヒトという表現が当てはまらないモノしか在りはしないけれども。

「とまぁ、上代君の笑いを誘う健全さは置いておくとして」

落ち着け、自分。目の前のコレは相手の感情を逆撫でするという意味では誰よりも悪質な口を持つ女だ。

……ああ、でもやっぱ斬り刻みたい、コレ。

ともあれ、憮然とした表情の私へ向ける視線は相変わらず黒々とした感情しか見受けられない。いや、むしろ彼女から黒みのない感情が伝わったことがないかもしれないが、それはさておき。

「君が孫策軍の一員であることは捕えた他の細作から聞き出したけれど、最も重要な所がまだ聞けてないんだよ」

「へぇ、あの人たちが何かを洩らすとも思えませんけど。私、虚勢には慣れていますよ？　無駄話に付き合うのも楽じゃないんですが」

「みんながみんな、君みたいな人間じゃないよ？　虚勢だって大多数には有効だし。それに――なんなら、それの成れの果てでも見るかい？」

依然表情を崩さない私と、笑みと呼ぶには禍々しい歪みを口元につくった蔡瑁さんの目線がぶつかり、静かに重なる。

静寂。

だが、二人の内心は対照的に穏やかではない、のかもしれない。

少なくとも自分は無駄に行使せざるをえない思考による頭痛が痛い。いや、そろそろ限界かもしれない……主に言語機能とか統合性とかいう意味で。

「――ま、いっか。やっぱり私にはこーゆーの無理かな？　こんなのは？越に任せるのが適材適所だよね」

笑って、といっても表情は全く変わっていませんが、ともかく笑顔で自分の適所を弁えた――もとい面倒事を押し付けた蔡瑁さんはあっさりと踵を返した。

次は？越と一緒に来るよ、と言い残して去っていく彼女へ向けていた意識を放り投げると、頭痛に顔を顰めつつも思考を停止し、頭を休める。

少し整理がついた、と思える頃。

（う～ん、よし。ちょうど誰もいない）

何もない空間から現れたのは鳳凰ことすーちゃん。ここで得た情報の多くは彼女によるものばかりで、時折空腹で私の自室まで帰る時以外は偵察にあたってもらっている。

それでも、彼女の気分によるところは大きく、加えて道士であるかもしれない劉表さんを警戒してのものなので制限はそれなりにありますが。念話もその延長。

（……いいタイミングですね、じゃあこれまで通りに）

ホントにいいタイミングです。さっきまでは蔡瑁さんに気取られないようにはしていましたが、断続的にくる激痛に意識を保ててたのが不思議なくらいでしたし。

（りょ～かい、って……アンタ大丈夫？）

問題ないです、と言ってはみるものの顔が苦しげに歪められているのは自覚しているので何とも説得力がない。
しかし、あまり機を逃すわけにもいかないのも確か。

ただの頭痛ではない、頭をかき混ぜるかのような感覚。それによって時たま記憶の奔流に意識をさらわれることすらある現状、確かな思考を保てている時間は少なくないとはいえ貴重なことに変わりない。

（まぁ、アンタがそう言うならいいけど。えっと――）

そして、行うのはこれまで数回に分けて行った報告。
私の指定した情報についてすーちゃんに調査してもらい、彼女の持ってきた書簡紙と筆で報告書をしたためる。腕が拘束されているため少々書きづらくもありますが、そこはなりふり構っている場合じゃありません。
そして、私と数人の部下、孫策さんや周瑜さんしか知らないサインを書き添えたその報告書を再び、すーちゃんに指定の場所へ運んでもらう。
後は待機中の別働隊がそれを定期的に回収して持ち帰る、という流れ。

面倒ではありますが、彼女の力を十全に活用した諜報活動となれば方法は限られます。
傍から見てかなり不審な方法の上、最終手段ではありましたが、想定外の事態に陥ってしまった以上次善ではあるでしょう。

（じゃあ、お願いします）

（それはいいけど、死なないでよ？）

（勿論です、一蓮托生ですからね）

小さく折りたたまれた書簡を抱える彼女に、できるだけさり気なさを強調して念話を送る。表情での証明はもう諦め、顔は伏せて。

そっか、と一言残して遠ざかる気配を見送りながら意識を手放すと、床へ倒れこみ目をつぶる。

既に日付の感覚を放棄した私は、頭に走る痛みはそのままに今日何度目かの浅い眠りへと意識を落としていった。

＊

Ｓｉｄｅ？越

「う～ん、ちょっと面倒そうね～」

静謐（せいひつ）な雰囲気が漂う広間。その中央に鎮座する円卓に座るのは劉表様を筆頭に、文官、武官の主要たる面々。

定例会議に際し戻った者もおり、そんな彼女達には優秀であることは勿論、一つの共通点があった。

劉表様の術、それは人の人格を封じ、人形へと性質を上書きするもの。

それは、あの方の考えにも似た、利点よりも欠点を封殺することに力を発揮する術。しかし、それには致命的な欠点がある。

人としての個性、特徴をはぎ取る弊害、突出した力の抹消だ。
だからこそ、あの方の理想を成すために必要な我らという力は失われていない。そう、領内の将兵や民衆、そのほとんどに強行された施術を私達は逃れている。

しかし、あの方の猜疑心（さいぎしん）はいずれ……いや、今これは必要な思考ではない。

そうして、集まった我らの間であがった議題は孫策軍の動きについて。
報告書に目を落とす我が姉、？良は普段通りの間延びした声で不審点を訴える。

「……やはり、妙ですね。何か裏があるのは確実でしょう」

それに追随する形で断定する私は、しかしこれもまた無駄な言葉であることを自覚する。
異変があるからこそ、こうして議論を交わしているのだ。問題は提起されている、残るはその解答へと迫る推理。

「――あれ、もう始まってるんだ」

他の者も私と同様に沈思黙考する中、遅れて現れたのは蔡瑁。
劉表様の旗下でも優秀な指揮能力に、高い思考能力、掴み所のない本性を持つ武将。実力はともかく、その思想は警戒すべき相手だ。

「あらあら、遅いじゃない～。来なくても良かったのよ～？」

「うえ～勘弁してくれないかな。まだ予定の時間より早いでしょ？

私はみんなと違ってまだ人生長いから、そんなに生にがっついてないのさ」

「咎めるつもりはない。が、咎めている暇もない。早く座れ、概要は把握しているだろう？」

水と油、普段通り口論を開始しかねない二人を遮った劉表様に促され、席につく蔡瑁。

「あ、今回は黄祖も来たんだね」

「ふん、まぁな。劉表様が召集をかけられたのだ」

そっけなく答えたのは勇将とも名高い戦術や指揮に決断力、と軍事において高い才覚を見せ、“絶壁”の異名をとる武将、黄祖。

普段は州境の防衛を務める彼女だが、召集にともない防衛は部下に任せて戻ってきている。

身なりを整えることも武人の嗜みという本人の言葉通り、綺麗に整えられた長い白髪は後ろで一つにまとめられていて、蔡瑁を振り返る動作の中でもサラリと流れるように宙を躍る。

「……それで、どうでしたか、彼の様子は？」

着席した蔡瑁へ問いかけるのは情報源として現段階で最も重要性の高い捕虜について。

「あ～、やっぱり難しいかもしれないね。術による苦痛は続いているみたいだけど、まだ意識ははっきりしてるし、尋問も拷問も効果は薄そうかな」

ほとんどわかりきっていたが、それでも落胆を感じざるをえない。
今まで数度尋問を行ったが、彼自身の精神力が強い上に頭も回るのだから厄介なことこの上ない。多分、これからも彼が口を割ることはないだろう。
しかし、必要な情報を持っていそうなのが彼のみだというのだから頭が痛い話だ。

それを話す蔡瑁の口調が楽しげなのを言及する気概も湧いてはこないし。

「……面倒な話だ」

――それより気になることもある。彼を必要以上に気にかける劉表様だ。
今も、最近では崩すことのなくなっていた表情を歪めて小さく呟いている。確かに、あの施術に耐えることのできている唯一の存在ではあるが、それだけではないように見える。

「え～と、それで何だったかな？　確か――昨日まで無かった雑草が急に、しかも大量に生え出したって話だっけ。どう思う、黄祖ちゃん？」

茶化して、悪ふざけのように問いかける蔡瑁の言葉は、しかして的を射ていた。
呼び方に眉根を寄せた黄祖は、少し考えるように黙り、お手上げとでもいうように息を吐いた。

「根元から、まとめて刈り取ればいいとしか思わん。私はな」

「ま、普通はね～。でも、ちょっとひねくれた奴なら、こう思うんじゃないかな？　『なぜ、いきなりこんなに生えてきたんだろう？　何か原因があるんじゃないか？』ってね」

原因がなければ、結果もない。つまり、目的がなければ、行動もない。

問題はその目的、ということだが。

孫策軍の現状から考える……劉表様には直接つながらない。

なら間接的、となれば袁術。彼女は……為政者としての力に欠け、危機管理能力も幼い。他には、同じ袁家である袁紹と不仲くらいか。

袁紹、我らともつながる彼女からなら……いや、まだ実現の確率含め決定打に欠ける。そんな方策を英傑たる孫策、周瑜が行うわけがない。ましてや、その駒が“蒼狗”だというのだから。

どれもしっくりこない。私以外の者も頭を捻ってはいるが、表情から期待はできそうにもない。

いや、一人だけ、頬杖をついて呆ける蔡瑁はそもそも考えているのかも怪しいが。

だが、改めさせる気が起こっても、すぐに無駄だと考え直した。

もともと、彼女は劉表様の目指す道に賛同してはいない。それは……彼女だけではないが。

劉表様の目指す道は王道とも覇道とも明言できるものではない。あえて言うなら、人道から外れ、鬼道で成される邪道か。

でも、私はそれを目指す“彼”が抱く想い、その優しさを知っている。

だからこそ、私はその道を共に進む。ここにいる彼女達が同じ思いを持っていると信じたいが、それは無理だろう。

だが、おのおの違う思いであろうと現実的に進む道は同じ。ならば、私のすることは決まっている。

そのためにも、彼女らの狙いを見抜く必要がある。

だが、もう一つ足りない。確信に迫るには、あと一つの要素が、

「失礼します。緊急の報告です」

そこへ、現れたのは一つの兵士（にんぎょう）。彼らは不測の事態がない限りこんな行動は起こさないよう命じられている。

そして、その度合いを表す緊急という言葉。淡々とした口調とは裏腹に重要な事柄であるのは明らかだ。

そして、もたらされた情報、

『袁術が伝国璽を笠に皇帝を僭称（せんしょう）した』

決定打が姿を現した。

第３１章　捩れた理想、往く船は軋み（後書き）

とりあえず……ゴメンナサイ！

なんのことだ？　と思われる方、どうぞそのままスルーの方向で……と、いうわけにもいかないので虚言の説明をば。

はい、原作キャラ登場しませんでした、見事に、綺麗さっぱり。だ、出すつもりだったのに無駄に字数がッ……！

次回こそは出します、ええ絶対に。

感想は随時歓迎でございます。が、今回が特に地味回であったことは仕様です。

なので『なにこれ地味ッ！？』というような感想は結構鋭く突き刺さる、かも？

第３２章　揺れる信義（前書き）

レイアウトの変更と章管理の追加を敢行しました。

見づらい、などの不具合があれば感想まで。

ちなみに、章に関しては後ろに～編とか追記するべきか思案中。

タイトルの変更などもありえますので、ご容赦を。

では、第３２章です。

第３２章　揺れる信義

Ｓｉｄｅ周瑜

袁術が声高々に皇帝へ即位してからは、驚くほどに早く状況が展開していった。

浅はかな自己顕示欲、どこまでも愚直な行動と言わざるをえないというのに、それを簡単に行ってしまう計画性のなさ、感情にのみ従う姿には軍を知で支える身として、どこまでも見下げ果てざるをえない。

彼女の下にいる将兵はもとより、立場を同じくする者への同情心が浮かび、すぐにそれは掻き消えた。そんな主を諫め、道を正すことが我らの役目。その力不足を蔑みこそすれ、情けをかける理由にはならない。

そして、それはもう一人の人物にも言い得ること。

袁術に呼応するかのように、呆れるほどに早い宣戦布告と出兵。想定通りの行動ではあったが、反応の速さは想定の範囲を逸脱していた。

むしろ、こちらの思惑を見越してのものであればその即断に感嘆の息をもらすところだが、あの袁紹だ、おそらく従姉妹同士、仲良く己が感情に忠実であっただけだろう。

無論、彼女自身この宣戦には群雄割拠の世、それを形作る勢力の中でも依然最大の国力を誇るという驕りもあるだろう。さらに彼女と同盟関係にあった劉表の参戦もそれを助長しているのは間違いない。

――ああ、そういえばあの蜂蜜娘、一つだけ認めても良いと思える点はあったな。

こと戦争へと発展した今に至ってその無策に気付き、我々へと敵の迎撃、そして援兵の返却を要請する際の迅速さには恐れ入る、というものだ。

しかし、そんな頑愚（がんぐ）に比べて、真に驚かされたのは――

「――つまり、我々に裏返れと？」

「うん、平たく言うならそーゆーこと。どうかな、悪い話じゃないだろう？」

今、目の前に使者として現れた少女。

落ち着いた琥珀色の瞳は、しかして軽快な喜色を宿し、口元に浮かぶ余裕ある笑みもなかなか気に障る。

「ふむ……」

劉表からの使者という可能性も想定はしていた、しかしそれにしても早すぎる。

それに彼女、蔡瑁の名は私も知っていた。劉表の荊州平定に貢献した有能な武将、そんな彼女を使いとしてよこした意図は？

「独立に際した助力に袁術から奪った領地の割譲を保障する……気は確かか？」

「へぇ、さすがに名高い周公瑾はアレらとは別格だね。で、君は信

頼と不信のどっちのつもりで聞いてるのかな？」

その比較対象は暗にこちらを嘲笑しているようにも思えるが、それはともかく、

「どちらでも、だ。正気の沙汰とは思えないな」

加えてこの条件。これほどの破格、どんな愚者であってもとびつくには至らない。

いや、それに喰いつくからこそ愚者なのかもしれないが、少なくとも私や雪蓮をそんな暗愚として見ているとも思えない。

そしてそれ以前に、ここまで思考を予測しづらい人間を私は見たことがなかった。

常に不穏な謀略を感じさせる邪悪さは、なんでもないことを言っているようで、その裏を意識せざるをえない。

彼女との交渉では確信など絶対に得られないのではないか？　そう思わせてしまうほどに。

が、それでも決断を迷う気にはなれなかった。

私は私によって見据えられた道を進み、雪蓮の覇道を支える。それになによりも――

「雪蓮、決定を――貴女の答えは、もう出ているでしょう？」

黙して座す、己が主へと視線を移す。

蔡瑁を底冷えするような怜悧な視線で見つめていた彼女が浮かべたのは静かな笑み。

「ええ、独立は我ら孫呉の力をもって果たす。そこに貴女達の謀略の影が差す余地はないわ」

断言。自然と口元に笑みが浮かぶのがわかる。

「残念だが、交渉は決裂だな」

だが、我々の回答にも蔡瑁の表情は曇ることなく、続けて紡がれる言葉、

「ん～やっぱそうなるかぁ。至極道理、わかりきってたことだね。じゃあ、私の身柄についてだけど――投降を懇願するよ」

「……なに？」

混迷は深まり、私は早くも目の前の少女への思考を放棄したい衝動を覚えた。

＊

「……劉表、いったいどういうつもりだ？」

苦々しげにでた言葉は先ほどまで目前にいた蔡瑁という少女についてのこと。

連れていた数人の部下ともども我らの軍門に降ることを願い出た奴は、自ら捕虜となることを望み、この戦いが終わり次第、正式に仕官するつもりだという。

想定外、ここにきて初めての不明瞭な事象に思考を巡らせるがまったく見当がつかない。いや、あるいは奴の言い分通り劉表を見限ったということなのだろうか？　しかし、その突飛さとなにより奴自身がその可能性へ異を唱える。

「どう思う？」

「うう～ん、ぜんぜん意図がつかめません～」

同席していた穏へ意見を求めるも、眉尻を下げて私と同様の困惑を表す。

「そういえば刃の報告書にもあったわよね、あの子」

「ああ、確か……」

どこか面白くなさそうに髪をいじる雪蓮の言葉に、上代の報告書について思い返した。

曰く、虚しか感じられない情報を口にする要注意人物。そして、劉表と二人、上代へ異様なほど興味を持っていると。

「そういえば、奴の後ろへ控えていた兵だが」

「あ、そういえば上代さんの報告にあった洗脳の形跡は見られませんでしたね～？」

上代の話では、主要な将以外は全員が劉表の妖術だか道術によって操り人形となっている、とのことだったが……蔡瑁の後ろに控えていた兵にはそんな様子がなかった。

「刃が虚偽の報告するとも思えないけど……例外？」

「それも考えられるな、奴らとしては知られたくない事柄ではあるし」

そもそも、具体的な方法を知らない身としては予測もたてづらい。まぁ、あの上代がそこを考えていないとも思えないし、最終手段だけに信頼は置けるだろう。奴の状態について加味しても、だ。

ともかく、今は遅々として進まない疑問へ意識を向けている場合ではないな。すでに賽は投げられた。

現実的に問題とすべきことへ意識を向けるべきだ。

「さて、どちらにせよ」

「私達のすることは変わらない。劉表を降し、一つ歩みを進めるだけ」

私の言葉をついだ主君の決定に頷きを返し、思考を切り替えた。

袁術の要請、これはもともとの想定内。答えも用意済みだが、

「……理解はできんが、精々使わせてもらおう」

想定外の使者、それによってもたらされる意外な効力に私は嘆息を一つ。

敵にした場合に限り、袁術の方が好感が持てるな、と苦笑をもらした。

＊

Ｓｉｄｅ程普

風をきり、落ち着きなく揺れる紬の袖。
地へと落とした視界の中で、自分の心中を克明に表現する様（さま）に深呼吸を一つ。でも、気が紛れるだけの効果もなく、不安は加速するばかりだった。

下を向き、急ぎ足で歩きまわるその様子を、もしこの場にいない義兄が見たなら躓かないよう気が気でないだろう。

でも、実際は雪蓮様から贈っていただいた紬は戦闘にも堪えるために軽く、それでいて編み込みは難く、硬く、さらには手足の動作性も考慮して大きな切れ込みも加えられているため、その心配はなく、だからこそ心配を紛らわすことができないでいた。

「兄さん……」

呟いた声は自分でも驚くほど不安に満ちていて、それを自覚してさらに落ち込むという負の螺旋。
捕えられた心配は勿論、予見で出た結果にも暗澹たる思いは拭えない。

それは洛陽、江都、そして今回、計三度の占いで兄さんに靄のように纏わりつく白い影。
直感的に危険なものであることを感じとった私は兄さんへ再三の

忠告を行った。それでも、兄さんは心配ない、と私を安心させるように微笑むだけ。

「情け、ないな……」

守りたい、そう思っていて、けれでも頼っているのは私の方。兄さんが近くにいないだけで、こんなに弱弱しく落ち込んでしまうのだから。

息を吐くと同時に目を閉じ、思考は視線と同様、限りなく下を向く。

まったく、私は、何のために――

「――っ、むぅ!?」

視界が暗転する。口と鼻、どちらからの呼吸も遮断され、思わず手足をバタつかせるが、さらに息苦しくなるだけで事態は好転しなかった。

むーむー、と唸る中、鼻孔をくすぐるのは覚えのある香り。そして、冷静になって感じるのは顔に触れる温かみ。安心感をともなったそれは、自分と同じ、人肌の温かさに違いなかった。

「っ、ぷはっ」

事態を理解した私は首を引き、大きく呼吸して救急措置を図る。

「だ、大丈夫？　灯理」

眼前で目を丸くするのは、驚愕から普段の口調に戻って問いかけ

る蓮華様。

慌てて謝るが、思わぬ失態に顔が熱く、思考は乱れに乱れていたため何を口走ったかもわからない。

「ふふっ、ホントに大丈夫？」

うぅ……微笑みながら問う蓮華様の様子ではちゃんとした受け答えはできてなかったみたい。後ろに控える思春様まで目を細めているんだから相当だ。

ホントに、何やってるんだろう、私……。

「上代のこと、かしら？」

「ふぇっ！？」

さらに続けて問われた言葉、それがあまりに的を射すぎていて、またしても変な声をあげてしまう。もう顔の熱さはのぼせてしまいそうなほど。

「……は、はい」

何を言えばいいのかわからず素直に頷く私。

その頭を撫でる蓮華様の目は真摯で、私を、いや私だけでなく、兄さんのことも気にかけるような色があった。

「大丈夫、心配しないで」

柔らかく、温かな感情。
透き通った綺麗な声は、私の中へ自然と染みわたり心を落ち着かせてくれる。

「……ぁ」

私だけじゃ、なかったんだ……。

私を包む声は、あまりに自然と受け入れられたからか、その真意も少なからず伝えてくれた。
蓮華様の言葉は私に向けるだけじゃなく、言い聞かせるかのような響きがある。

事態が現実的に好転したわけじゃない、でも兄さんの無事を信じる人が他にもいる。それだけで、私の気持ちは少し、いやだいぶ支えられた気がする。

「彼は、戻ってくるわ。なにより――約束、まだ果たしてもらっていないものね」

視線を落とした蓮華様は、見覚えのある腕輪を一瞥して、再び祈りのように呟いた。
赤い装飾の中に、深く青い光を放つ石がはめ込まれた腕輪の造りは、蓮華様自身を思わせると同時に、その石の静かな輝きが兄の姿をも連想させる。

約束。
蓮華様と仲良くなるには、と私に相談してきた兄さんが贈り物と同時に立てた誓いのことだろう。

この身が孫呉の将である限り、孫呉の剣、盾となり、支えていく。
誓いは信頼に、信頼は強い力に。

「そっか。うん、ちゃんと信頼、しなきゃ」

独り呟く声音は、たとえ私の思い違いであっても、力がこもっている。
情けなく縋るのではなく、信じて頼りにする。兄さんの妹である私が、できないわけがない。

思わず笑みを形作った私に、蓮華様の表情も和らぐ。
そして、流れる空気が穏やかになろうというところで、

「……そこでなにをしている、朱然」

怪訝な顔をした思春様が声をあげた。

「朱然……？」

首をかしげた蓮華様の声と同時に、並ぶ天幕の陰から兄さんの率いる隊の隊長補佐を務める朱然さんが現れた。
整った顔立ちには少しバツが悪そうに引き攣り、それでもなお人好きのする笑みを浮かべている。

「いや、これはッスね……その、なんか真面目～な雰囲気だったんで。気になったけど、出ていけないな～、みたいな」

短く切られた藍髪をかいて、言い訳を並べる朱然さんに蓮華様の視線が鋭く突き刺さっている。しかも、無言だからか彼の慌てぶり

は加速するばかり。

「で、でも！　その、気にすることないッスよ！　孫権様みたいな豊かな方は勿論、程普様みたいに慎ましやかな女性だって需要はある、っていうか、そっちのが好きな男も――」

そして、おそらく彼が知恵を絞って捻りだしたであろう私達の会話内容は、なんていうか……とりあえずダメな方向へ一直線だった。その際、私と蓮華様のある部位をチラッと見たことからも言い訳は無用。

「――ッ！　思春！」

「御意」

自身の胸部を一瞥して、慌てて隠すように腕で抱いた蓮華様の叫び。顔は真っ赤に染まっている。

腹心である思春様の行動の迅速さは言うまでもなく。

「え、ちょ、なんで臨戦態勢なんスか！？　じょ、冗談――って、ぎゃぁぁぁあっ！？　甘寧様、掠ってる！　首筋に掠ってますからッ！！」

思春様の剣を奇怪な動きでかわす朱然さんから視線を外し、自分の身体を見下ろす。

……抵抗なく地に落ちた視線。同じく少し落ち込む気持ち。

「……むぅ」

さっき顔に感じた蓮華様の感触を冷静に思い返しながら、ペタペタと自身の同一部位へ手を当てる。
擬音にすら悪意を感じるのは気のせいじゃないと思う。

「……う～」

兄さんの安否とはまたべつに悩み事が生まれた私は、兄さんが戻ったら相談してみよう、というあまり締まらない予定（ちかい）を心に決めた。

＊

Ｓｉｄｅ黄祖

劉表様の盟友である袁紹の出兵要請から数日。粛々と、そして整然と行われている出陣準備。
といっても、上手く事が運んでいれば急ぐ必要もなかったのだが。

袁術による皇帝僭称で孫策軍の狙いを見抜いた？越により、袁紹の要請よりも早く共同戦線のための使者を放つことはできた。それでも、正直孫策らが応じるとも思えなかったが、荊州内も完全に統治しきれていない現状では乗ってくれれば御の字。

「まぁ、当然ではある、か」

一時は荊州の多くを平定した我らは劉表様の理想へ向けて歩みを共にしていた。私も、領民を最優先としたその道のため力を揮った。

しかし、劉表様は変わってしまった。それも、あの妖しげな力が原因であるのは明白。

あんな力に頼った統治、それを服従していた者が良しとするわけがない。結果、拒まれるたびに弾圧、施術を繰り返した。

無論、正しいと誇れるわけがない。

だが、私はそれでも、あんな姿と成り果てた領民であっても、守り抜く義務がある。

力を持つ我ら将軍は、しかし弱き領民に支えられ生きている。そんな彼らが我らを支えるのは、そこに信頼があるからに他ならない。なれば、我らが、いや私が果たすべきは彼らの信頼を命を賭して守り抜くこと。少し歪んでしまったが、劉表様の道はそれに違わない。

「……ふ、変わったのは私も同じか」

少し、とはな。随分と歪み、捩れた道の中で私は何を成そうとしているのだろう。

「黄祖、準備は進んでいるかしら～？」

指示通りに画一的に準備を進める兵を見渡す私に、聞きなれた声がかかる。

今回の戦において、前線の軍師を務める？良。

蔡瑁ほどでないにしろ、考えの読めん女だ。一体何を考えて戦っているのか。

「問題ない。事前にこの状況を想定していた孫策軍に遅れはとるだ

ろうが、大きな差とはなりえん」

「徳珪は失敗したみたいだものね～。なんであの子、使者を買ってでたのかしら～？」

確かに、私達の誰かが行く方が都合がよかったけど、と繋げ、こちらへ寄こす？良の視線には鋭い光が宿っている。

「……さて、な。それより、少し遅かったようだが？」

視界から？良を外しつつ簡素に答え、追及を阻むように問いを返した。

「……実はあの男に会ってね、話をしていたのよ～」

「奴が……何の用だと？」

「劉表様に会いに来たらしいわ～、それと施術を行った者の経過を見るのも含めて、ね」

自分の顔がさらに歪んだのがわかる。

劉表様が変わる原因となった、白い男。

奴が何をしに来たのかは知らんが、悪い方向へしか思考が働かない。それにあの力、危険性は計り知れないだろう。

だが、私には、

「……私は、私のできることをするだけだ」

誰にも聞こえないよう呟いた声。

鈍く光りを照り返し輝く、重厚な鎧に身を固め、それでいて中は空虚さしか感じない私を支えるのは削られ、すり減った小さく硬い矜持（きょうじ）と信義。

歪んだ絡繰りによる戦いが、開幕する。

第３２章　揺れる信義（後書き）

まだ俺のメインフェイズは終了してないぜ！

――と、いうわけで引き続き準備回。

これでも他の恋姫達の描写を削ったりしたんですが……長いですね、はい。

次回からはバトルフェイズ、もとい戦闘に移行できるようにしたいと思います。

感想、指摘など随時歓迎です。

第３３章　序　～　猛虎の迫撃、後れ咲く赤い花（前書き）

戦闘です、やっと戦闘回です。
目茶苦茶難しい、そして改めて考えてみて、正規軍ｖｓ正規軍って初めてじゃん！　と愕然としたりしました。
そんな感じで拙いとは思いますが、コレガ私ノ限界デス、ハイ。

第３３章　序　～　猛虎の迫撃、後れ咲く赤い花

Ｓｉｄｅ朱然

袁術からの要請、それは子供特有の無自覚な悪に染まりきった無茶苦茶なものだった。

これまで、孫呉はその我が儘に頭を悩ませ、時にやりきれない損失を被ったことも少なくない。

無知で門外漢な俺でも苛立つんだ、孫策様に周瑜様、皆をすべからく見る方達からすれば腸が溶け出すほどの激情すら生温い。

ともあれ閑話休題、心機一転。

もう、そんな我が儘に付き合わなくていいとなった心は晴れ晴れとしたものだ。

実際、想定通りの要請が来た時、孫呉の兵は一人残らず口元を悪役然とした禍々しさで歪めたに違いない。当然、俺もどこぞの三下も教えを請うであろう下卑た笑みを浮かべ、それを見た女子はドン引き。その恐るべき情報網によって孫呉の女兵士大半から憐れみの視線を受けた。

……泣いてないやい、突き刺さる視線が生温かくて風邪気味なだけだもん。

大体、それもこれもあのクソ餓鬼のせいでッ……！

……閑話休題、今度こそ心機一転。

ともかく、あの蜂蜜依存症からの『援軍返した上で劉表軍迎え撃

て』という矛盾しまくりで、他力本願すぎる命令は半分だけ聞き入れられた。

とりあえず、取り込んだ兵を返すなんて論外。返答としては『劉表はなんとかしてやるから従姉妹くらい手前でなんとかしろ。あ、劉表と戦うために援軍は使わせてもらうから』みたいな感じ。

小娘が言い返してこよーが無視決め込むつもりだったみたいだけど、そこで劉表からの使者は役に立った。

同盟の件をさり気なく、袁術の使者が気付く程度流す。

まぁ、とどのつまりが『あんましつこいと劉表と結託してぶっ殺しちゃうぞ☆』と言外に伝えたみたいなもんだ。

勿論、俺は後で聞いただけ、即座に利用したのは周瑜様。わ～、容赦ねー、というかあの人怖えー。

とまぁ、そんなこんなで準備万端だった我らが孫策軍は早々に戦闘準備を整え、劉表軍の主要防衛拠点である江夏まで進み、布陣。

しかし、敵も然る者、堅く難い要害として眼前に広がっている。しかも荊州は高低差のある地、目指す先は高く、本当に壁、要害として申し分ない。

静かで、無機物を思わせる不気味な劉表軍と、長き悲願への足がかりであり久々の孫呉一体となった戦いに猛々しく震える闘志を満たす孫策軍。

いや、上代隊とその他の一部の兵士にはもう一つ、とある人物もその身を突き動かす力になっているのは間違いない。

思わず笑ってしまうほどの人望。
……勇者だとか言われていたけど、これなら姫の方が似合っているんじゃないッスかねぇ、隊長。この世界でなら違和感もないし、ホントにピッタリだと思ったり。

「……ハ」

そんな中、軍の先頭に立ち剣を抜いたのは江東の麒麟児こと、我らが主。

口元に笑みが浮かぶ。
愉悦。恐怖などとうになく、ただ輝かしい目的しか見えない。そして、その前にのさばる障害を殺し進むことの甘美さは体中の血を熱く沸かし、暴れまわる。

「――全軍、抜刀！！」

鉄が擦れあい、ジャラジャラという音が猛獣の愉悦の如く響く。
牙を鳴らし、吐き出される吐息は戦場を熱く、灼くように這いずりまわる。

「総員、」

再び、静寂。主の命を待つ。
いや、それでも聞こえる、自分のものだけでない、燃える鼓動。
うねり、昂り、脈動し、そして、

「突、撃、ッ！！」

弾ける。
波のように怒号が連なり、起こる爆轟（ばくごう）は地を揺らしていく。震え、広がり、戦場は気炎で満たされ、駆ける兵は焔そのもの。

戦端は、開かれた。

＊

Ｓｉｄｅ黄祖

眼下より迫るのは猛虎の咆哮を思わせる轟音を纏った孫策軍。

幕が切って落とされてより、その猛進は私をも圧倒しかねない荒々しさが伝わってくる。
まるで、一つの生物と化した軍はあまりにも自然に、それでいて馬鹿馬鹿しいまでに強靭な腕（かいな）を一振り、我が軍の兵達を爪牙の下、血の海に沈めた。
初撃の逆落としもあっけなく撥ね退けたその勢いは奴の躍進を体現しているのだろうか。

血の道を踏み越え、駆け上る敵軍の陣形は魚鱗。傾斜のある山岳地帯では定石、だがそんな常識を事もなげに一蹴するのはその先頭。

将兵の誰よりもその身を血に染め、而してその血に己のものは一

滴もありはしない。
　ここまで届きかねない気迫は江東の虎の血をまざまざと見せつける。いや、それ以上の化け物か、歓喜の笑いは咆哮、これほど遠くにいて尚、奴の愉悦が伝わってくる。
……疼く、アレは間違いなく英雄たる者、意気は世を覆い、天賦の才をほしいままにする。
　熱く、酔うほどの甘い香り。欲望の丈がせり上がってくる。
「黄祖様、前線の部隊が一部壊滅。戦線が押し込まれつつあります」
　部下の声に意識が呼び戻される。その声に焦りはなく、平坦な、ただ事実を述べるだけの報告。
　――醒めた。
　己に燻っていたものは再び沈んでしまったようだ。いつものことながら嫌になる、それでも一応利点があるだけに忌々しい。
「文聘に伝令、中軍を押し上げて衡軛の陣で対応しろ。所定の位置から先へは一兵たりとも進ませるな」
「御意」
　事務的な命令に簡潔な了解。
　つまらない、だが私が取るべきは充足より誇り。
「……待て、もう一つ伝えろ」

少し、口元が吊り上った。魔というものはなかなか差す所を弁えている。

「暴れまわる麒麟児に灸をすえるのはいいが、武の化身は譲らん、と」

鮮血舞う戦場の上、いけ好かない軍師へ目を向け、そのまま視線は敵の中軍。ただ、標的の存在を示す真紅の旗へ。

まだ大して動いてはいないが、感じる。圧倒的な闘志、どんな事情があるかは知る由もなく、知る気もないが、その士気を跳ね上げてくれるならなんだって構うものか。

手に持つのは自身の誇りを貫く、一本の槍。一際目を引く造りは己が信念を体現した特異なものだ。

「私も武人、ということか」

去っていく伝令を目の端に捉えつつも、もう一度、私の心に火を灯す。

静かに、それでいて熱く。

＊

Ｓｉｄｅ孫策

「――ッ、チ。邪魔、ッ！」

振り抜く南海覇王に巻き上げられた赤い旋風が身体を熱くする。

昔から戦場に在ったが故の発作、いや衝動という方が正しいか。
高揚感が自分を満たしていくのがわかる。

だが、その快楽とは別に感じる気色悪さ。
刃の報告は正しかった。向かってくる兵士には恐怖もなければ、高揚もない。戦場においてあらゆる激情を捨てた人形のような姿は、ただただ嫌悪感しか湧かない。

結果、二つの相反する感情がぶつかり合い、先ほどからおびただしい血を浴びつつも平静を保っていられる。すごく気持ち悪いから歓迎はできないけど。

「――様！　雪蓮様ッ！」

私を必死に呼ぶ声。
我に返って、それでも数人の命を散らすと、私に寄り添うように追従していた我が軍自慢の将へと目を移す。

「ッ、と！　なに、灯理？」

「なに、じゃないですよ！　突出しすぎですッ！」

ふむ、確かに他の部隊からちょっと離れてるかも。

「ちょっと！？　誰が見ても孤立してるじゃないですか――っく、どいてくださいッ！」

あっさり私の表情を読んで、再び怒鳴った灯理は、自分に向かってくる兵士達を鉄脊蛇矛の一振りで吹き飛ばす。
怒気のこもった良い一撃だけど……ちょっと鍛えすぎたかもしれ

ない。

「大体、雪蓮様はいつも直感に従いすぎなんです。今回だって――」

加えてこの性格、絶対冥琳辺りが教育の時に何か吹き込んだわね。

む～、最初の頃は素直で可愛かったのにな～。今も可愛いことは可愛いけど、こんなとこでまで小言は勘弁してほしい。

仕方ないから灯理の気持ちに連動してぴょこぴょこ動くアホ毛を眺めて和んでみたりする。

勿論、その間に寄ってくる兵士はもれなく首を刈られていってたりするんだけど。

それにしても、孤立、ね。一応それも目的の一つではあるんだけど。

「後ろで見てるのは性に合わないのよ、ッ！　それに、これくらいやったら策の成功率も上がるんじゃない？」

襲いくる剣をいなすと、流れるようにその腕を裂く。続く波状攻撃は両腕を斬り飛ばし、胸を貫き、蹴り飛ばす。

さらなる凶刃は首を飛ばされ、視界を蹴り潰され、伸びる前に阻まれるか、伸びたとしても貫くのは仲間の身体のみ。

「それは、そうですけどッ！　雪蓮様は大将としての自覚がなさすぎます！」

「ハッ、そう言わないの。これが私なんだから！」

思わず歪な笑みがもれる。

それこそ、私の性から逸脱する。後生大事に丸まっていられるなら、それはもう死んでいるも同義。

不貞腐れたような顔の灯理からは『もう、仕方ないなぁ』という声が聞こえるようだ。どことなく刃に似てきたかな？

並んで突き進む私達の周りに積まれるのは、糸すら切れた屍の山。まるで進む私達の足跡のように積みあがっていく。

再び、笑みを深めた私は、しかし灯理の目配せに不満げな顔へと移行することになった。

「このあたりです。雪蓮様、警戒と後退の準備を」

何を受信しているのか、アホ毛が上を向いて止まっている。

むう、そのアホ毛、引っこ抜いてやろうかしら。

「……もうちょっと進んでも」

「駄目ですッ！　もう、ただでさえ予定よりだいぶ孤立してるのに」

続きそうになるお小言を遮って、わかってるってば、と返すと一層激しくなった敵の攻勢へ対応する。

あくまで、拮抗しているかのように。ま、こんな綱渡りも悪くない。

と、冥琳や灯理が聞いたら苦言を呈すること確実な思考に切り替えると南海覇王を握り直し、敵兵の命を赤く、鮮やかに散らす。

そんな戯れを見つめる一人の男がいるとは知らずに。

＊

Ｓｉｄｅ?良

一般的に高いと低いでは、高い位置に陣取る方が優位に戦局を進められるという。

それもそうだ、敵の行動を把握できるということは大きな力を持つ。他にも先ほど行った逆落としなどの利点も含めその利は言うに及ばず。

そして、今眼下には常軌を逸した吶喊（とっかん）により孤立する敵大将の姿がある。

「……実際見ても信じられないわ～」

話には聞いたことがあった。

孫伯符。

個の武はもちろん、類稀なる機転に超常的感覚を持ち、天才という言葉もかすむ程の戦上手。黄巾党との戦いでも抜きんでた頭角を現し、江東の麒麟児と呼ばれる英雄。

人を食った性格に情と非情を同居させ、戦い方まで型破り。

前線に出て戦い、その武勇で士気を高めるという者は少なくない、がしかし最前線を誰より速く駆け抜け、そして誰よりも敵を屠る総大将などを見ることになるとは思わなかった。

あんなのが大将じゃ、苦労するでしょうね……などと柄にもなく

同情する私は、その実、孫策の姿に大きな衝撃を受けていた。

言うだけなら簡単だが、その型破りを実現する彼女の勢いは一体どれほどのものか。想像もつかない。

「おい、何を呆けている」

怜悧な声がかかり、物思いから戻った私の前には白装束に身をつつんだ少年。

薄い茶髪からのぞく緋色の瞳は妖しく、人ならざる者であることをまざまざと見せつけている。

「……なんでもないわよ～？　時間もないし、さっさと終わらせましょうか」

この男といい、劉表様の所へ向かったという眼鏡の男といい、癇(かん)に障る。その力や軍の現状なども勿論だけれど、存在自体に生理的嫌悪を覚えるんだからどうしようもない。

「フン、当然だ。折角、鴨が葱背負って来てんだから、しっかりしろ」

それにこの、まるで会話どころか意志を伝えることすら心底嫌がるような口ぶり。

ただ神経を逆撫でするのではなく、どこまでも下へ相手を見下すのだから仲良く協力、なんて反吐が出るほど阿呆らしい。

……落ち着け、下らない激情で取り乱す方が癪だ。

一つ、深く息を吐いて吸う、そうして身体に冷たい空気を循環させると思考を切り替えた。

孫策の攻勢は中軍まで動員した守りによって押し止められている。
それは徐々に包囲へと動けるほど。
対して、孫策軍の後詰めは未だ追いつかず、今をおいて好機はない。

「そろそろかしら～？」

落石の用意に弓兵部隊の準備はとうに済んでいる。
いかに孫策といえど、受ければただでは済まない、いや、あの数では生き延びることすら不可能だと言ってもいい。

「……残念、その躍進もここまでよ」

一言、呟いた久々の本音はどこか破滅的で、

「落石投下ッ！　続けて弓兵部隊の一斉掃――」

続く指示は、

「ッ、なんだ！　この銅鑼は！？」

大きく、私達を圧し潰すかのような轟音によって遮られた。

頭上からのしかかる音、そして急ぎ戻した目に映るのは銅鑼の音を合図に迅速な後退を開始した孫策たち。

それが示す答えは、ただ一つ。

「……嵌め、られた」

睨んだ先には多くの部隊を従えた女性。眼鏡からのぞく目はどこまでも平和的な安穏さで、だからこそ、次の行動に躊躇いなど一分もありはしなかった。

「弓兵部隊の皆さん、一人残らず射殺しちゃってくださ～い！」

一列に、凄まじい数の弓兵が鏃と殺気を私達に照射している。既に限界まで引き絞られた弦の音がギリッ、と軋みのように聞こえた。

そして、放たれるのは視界を埋める豪雨の如き凶刃。

風をきる音は五体の前に聴覚を蹂躙せんとしているのでは、と思うほど。

「チッ、仕方ないか。貸せッ！」

突然、声をあげた白い少年が弓兵の一人から弓と矢をひったくり、つがえると弾けんばかりに引き絞った。

「な、なにを……？」

私の声には答えず、狙う先は赤き血に染まって尚、鮮烈な輝きで目を引く英雄、孫伯符。

馬鹿な、彼女は既に弓の射程から大きく外れている、普通なら視認すら困難なほどの距離だ。当たるわけがない、そんなのはただの事実で、常識。

だが、私は失念していた。

この男は、それらをいとも簡単に踏みにじる存在であることを。

「――ぐ、“届け”ッ！」

言葉に感じる違和感、彼の手を離れた矢は、この世の条理を簡単に捻じ曲げ飛んでいく。

届く、かもしれない。いや、届く。

彼の矢は人の力を超えたものだ、それを妨げるものは同等の力でなくてはならない。

その行方を目で追って――しかし、私は結末を見ることは叶わないらしい。

ドスッ、と身体を焼く痛み。

続けて、もう一度。そして、弾けたかのように次々と。

視線を下げる。体のいたる所から突き出るのは赤く濡れた多くの矢。

「く、はッ……」

視線はそのままに、次に映ったのは赤々とした地表。

死、その単語に反応してか様々な事柄が勢いよく頭を駆け巡る。

そんな何もかもを捨て、残ったのは哀れな妹だけ。

もう、目には映らない、でも脳裏にはしっかりと映る。愚かで、でも愛してやまないあの子の姿。昔と今、その差異に浮かぶのは苦笑い。

あの子は、いや、あの子も、変わってしまった。
でも、

結末が地獄であれ現世であれあの二人は共に在るのだろう……うん、なら、いいかな。

ハ、最後の最期で他人の恋路とは。徳珪の言うことも尤もかもしれないわね～。

喧噪は遠く、祈る声は近く、その瞳は、ゆっくりと閉じられた。

＊

Ｓｉｄｅ周瑜

事前に伏せ、穏に任せた部隊が弓兵の掃射、そして逆落としも成功させているのを確認して、一つ段階を進める。

今回の策、“逆逆落とし”とでも言えばいいのか、なかなか語呂が悪いな。

ともあれ、それはあの兄妹の力がなければ実行にまで移すような策ではなかった。まったく、上代と灯理の能力は味方ながら怖ろしく、それ以上に頼もしい。

これで我らの不利はほぼ覆されたと言ってもいい。

まぁ、それはともかく――

「雪蓮ッ！！」

「ひゃい！？」

目の前、灯理の背に隠れようとして、まったく隠れられていない大馬鹿へと声を張り上げる。

「ちょ、ちょっと怒り過ぎじゃない？　ほら、私のおかげで策も大成功――」

「ほう、それは本気で言っているのか……！？」

まさか本当に血管が切れそう、という感覚を体験できるとは思わなかった。

一歩間違えば策も何もない、蛮勇とも言えるほどの大胆な吶喊。だからこそ、敵も己の策を疑わなかったのだろうが、そんなもので割り切れるほど軽いものではない。

さらに、帰り際雪蓮へ向けて真っ直ぐ飛んできた流れ矢。運良く突風に煽られ逸れたが、肝を冷やすどころか潰すところだ。

「……うぅ、ごめんなさい」

「……はぁ、いいわ、とりあえず無事だったのだから」

うな垂れる雪蓮に言いたいことはまだまだあるが、今は戦いに集中しなければ。

「冥琳様、次はやっぱり」

「ああ、黄祖、だな」

広げられた地図へ視線を落とすと、そこには我らの進軍を阻むようにそびえ立つ石。黄祖率いる部隊が鎮座していた。

いくら地の利での劣勢を覆したところで、賢将であり剛将とも言われる黄祖が守る以上、こちらが優勢であると断ずることはできない。

なにより、彼の将が本領を発揮するのは防衛。一分の隙もない機敏な用兵術。“絶壁”、一兵も通さない最高の盾という呼び名からも経験から裏打ちされた実力に疑う余地はない。

「ふ～ん、黄祖かぁ」

「雪蓮、お前は後詰めだぞ」

「むぅ、わかってるわよ」

まったく反省の色がない雪蓮に再び深い溜息がもれ、後の説教に時間を上乗せしておく。

まぁ、それで直してくれれば苦労はないのだが。

気を取り直して、自軍の、とある部隊をあらわした石へ手を伸ばした。

灯理も納得したように頷く。いや、実際確認した時点で考えは同じだろう。

おそらく、現在この軍で最も士気、突破力ともに圧倒的な部隊。指揮する将軍は勿論、率いる隊の者全てが勝利、ひいては彼の救出を目指している。追従する軍師も、あれで心配している、のだろうか？　そのあたりはよくわからないが。

ともあれ、私は戦における矛盾などは認めない人間だ。
相手が最高の盾を称する者であるなら、我らが投じるのは最強の矛。

地図上を一直線に突っ切らせた石。それは、切り札であり、飛将軍の名を冠する武の化身。

呂奉先、矛盾を突き崩すただ一人の武人を示していた。

第３３章　序　～　猛虎の迫撃、後れ咲く赤い花（後書き）

描写がッ……！

半端なくもっさりしてます、この辺が限界でした。

そして、初めての大きな合戦なのに……主人公が不在だよッ！？

今回に限っては朱然が主役でも十分通るレベル。……おお、勇者よ、捕まってしまうとは情けない。

次回はまた時間が空くかもしれません。恋無双……になるかな？

ご感想やご指摘、大歓迎です。

第３４章　破　～　飛将軍ｖｓ絶壁の武人（前書き）

やっとこさ更新。

というわけで、更新速度のガタ落ち具合に自分で辟易し始めた赤猫でございます。

シリアス回、だと思いますので読む時は一応注意を。

では、”破”というわけで第二部となる戦闘編、第３４章です。

第３４章　破　～　飛将軍ｖｓ絶壁の武人

世界が歪む。

回り、駆け巡る映像を映し出すのは壊れてもなお、自分の役目をまっとうしようとする脳内映写機。

乱雑で統一性が皆無な映像は、ただただ私へ激しい頭痛と吐き気を催す違和感しか与えることはない。

「ぐ、ッ……！」

うめき声をあげた、のだろう。既に五感は麻痺した、いや麻痺というのは正しくない。まるで、溶け出したかのように。触れる冷たいはずの石材、色彩の狂った世界に漂う空気、それらと同化する。自己という枠組みが融解し、かき混ぜられる異物感、それでいて脳に響く激しい痛みは前進しようとする思考をことごとく殺し尽くしている。

それなのに忘却の彼方から舞い戻った記憶は、無作為に、容赦なく頭の中を暴れ回り、さまざまな激情で私を蹂躙していた。

……諦観、安堵、歓喜、決意、そして、絶望。

詳細な情報ではなく、感情のみを訴えてくる記憶。もがき、這いずる中、がむしゃらに伸ばした手、それは一つの場景を掴み、手繰り寄せる。

――――結城。

私を変えた友達との記憶。楽しい、満ち足りた日々、守り抜くと決めた、何も考えず縋るかのように。

痛みが和らいだ、そう思えた。思うだけでも変わるものだ――――でも、違う。

「ガ……ァ、ッ」

再び、襲う激痛、そして湧き上がるのはとてつもなく大きな恐怖。

欲しいのは、この記憶じゃない。

でも、求めるその記憶は凄惨な、私の自我を崩壊させるほどの激情を抱き込んだパンドラの箱だ。

手を伸ばし、すぐに引っ込める。

知の化け物を飼う私達（ニンゲン）の欲望すらも怯ませる断頭台。

でも、欲しい。その記憶は、それでも狂おしいほどに。私という愚者の結末（こたえ）。

ゆっくり、手をかけた。

弱弱しく、怯えながら手繰り寄せ、

突き刺さる。

「ッ――――――！」

「それが、お前の未来か？」

理解の度合いを超えた痛みは、危惧したとおりに自身の綻びを強く、鋭く、貫き、抉っていく。

赤く、燃えるような瞳がこちらを見据えている。

眼前には守り抜くと決めた、その世界の中核をなす青年、あらゆる一を包括した友。

――なぜ、どうして、共に行くはずの彼の行く手に私は立ちはだかっているんだ。

まるで……まるで、彼の敵であるかのように。

「……私が望むことは、ただ一つです」

嫌だ、という言葉は紡がれず、代わりに私の口から吐き出されたのは幼い希望を含んだ小さい我が儘。

後悔はすでに遅く、開かれた箱からは容赦なく呪詛めいた現実が垂れ流される。

そして、望まぬ記憶は断片的に拾われ、私がどう足掻こうとも無情に組み立てられ始めた。

理解していく、無意味に無為に。

すでに、身体を苛む痛みは消え失せていた。いや、ただ身体が限界を感じて麻酔を大量投与しただけか。

「……あ」

ほどなくして、理解する。どうしようもない、現実。

私と、彼の道が分かたれたことを。

力が抜け、崩れ落ちた視界に、白い影が揺らめきつつも近づいてくる。

「――――あ、あああアアァァァァ！！」

慟哭は、己の殻を突き破り、黒い“ナニカ”を吐き出すかのように低く、禍々しく。

歪んだ歯車は、まだ噛み合わない。

＊

Ｓｉｄｅ朱然

周瑜様の策略が成功し、伏兵部隊による斉射、そして逆落としによる横撃。

それと同時に突撃を敢行した上代隊含む中軍により、戦場は力のせめぎ合いから一方的な蹂躙の場へと姿を変えた。

横と縦、文字通り縦横無尽に蹴散らされ、踏み潰された敵前線は壊滅間近。

いや、すでに壊滅していると言ってもいい。普通なら、だが。

「く、なんなんだ、こいつらはッ！」

口をついて出た悪態は過分な嫌悪と恐怖を含み、それを振り払うかのように刃を走らせた。
元来、白銀の輝きを放つ両の手に持った一対の剣は、どちらも刈り取った生命で赤黒く染め上げられ、奪った生の多さを雄弁に物語る。

狂ってる。
人を狂わす戦場においてなお、散るはずのない命まで舞う、この戦いは明らかに異常だった。

戦争は机上の論議によって成り立つものではない。
なぜなら、戦うのは他でもない人間だからだ。統率する将、従う兵の一人として己が感情を持たぬ者はいない。

だがただ無感情に、そして迷いなく立ち向かってくる劉表軍はどうだ。
まるで本当に人形のように、ただの駒のように戦意はなく、だからこそ腕を失おうと、足を貫かれようとも戦闘行動を止めない。やっぱり、隊長の報告通り、目の前の彼らは……。

「……だから、どうした。何を、馬鹿なこと」

ここは、戦場。俺は、孫策軍の兵士なんだ――

「ちょ、なに呆けてんだ馬鹿ッ！」

「は、っ！？」

突如聞こえた怒声に、辺りを見回す。

取り囲まれた、と思わず身を固くした俺に迫る凶刃。

が、それは届く前に持つ手ごと吹き飛ばされた。見れば、一本の槍が数人の腕を串のように刺し貫き、地に突き立っている。

そして、続けて振るわれた槍により残る兵士はまとめて叩き伏せられた。

「ったく……おい、阿呆。死ぬ気？　いや、むしろ一回死んでこい。だいたいこんな奴が隊長補佐だなんて……」

悪態をつきながら槍を引き抜き、刺さっていた腕を一振りで地へ叩きつけたのは見覚えのある女兵士。

というか、上代隊もう一人の隊長補佐を務める女だった。凛々しい顔立ちに、二つに結われた吸い込まれるような暗く、青い髪、なにより漆黒の鋭い眼光は、女傑という言葉を体現したかのようだ。

こちらを一瞥するにとどめ、未だ残る敵へ向き直り、腰を落として二槍を構える姿は猛禽（もうきん）のように鋭い。

「……助かったッス」

「指揮官に死なれると面倒だから助けた、そんだけ。……落ち着いた？」

背中越しの問いに剣を構えることで答え、同じように敵兵へと視線を固定する。

……そうだ、俺は今、多くの命を預かる身。不必要な情は切り捨てる、自分が守るべきものを守ればそれが最良。

一兵も欠かさず。
改めて心身へ活を入れ、亡者のごとく迫る殺意へ一歩を踏み出し、

「――規則的すぎる、なんとつまらん的じゃ」

その脳天を撃ち抜くのは正確無比、必殺の鏃。
一矢一殺、それすらも覆し二人、三人と撃ち抜く腕前は孫策軍に二人と居ない。

「黄蓋様!?　なぜ、ここに――」

と、言い終わらぬうちに涼しげな音色が耳朶をかすめた。

一つ、また一つ、鳴る度に鮮血が舞う。
死へ誘う鈴の音はいつの間にか鳴り終わり、周りに立つ敵の姿はただの一人もない。

「……戦場で呆けるな、朱然」

「か、甘寧様まで」

右翼と左翼に展開していた部隊を率いる二人がここにいる、それが意味するのは一つ。

「まさか、もう殲滅し終えたんスか？」

包囲殲滅のため鶴翼へと陣形を変形させてから、まだそんなに時間は経っていない。いくら敵が散り散りとなった後とはいえ、まだ後詰めは健在だったはず。孫呉の精兵を侮るわけではないが、早す

ぎる。

そんな俺の心理を読み取ったのか、苦笑いを浮かべた黄蓋様が口を開く。

「うむ、儂もここまで容易く崩せるとは思わなんだ。さすが、無双の矛と言うべきか」

言い終え、視線を移す黄蓋様。つられて目を向けた先、敵陣の主力部隊が展開する場所で目を疑うような光景が顕現していた。

「はは、なるほど……」

遠く、離れていてもその姿が確認できる。

それは偏に、彼女の周りに誰もいないからに他ならない。一振りごとに巻き上がる人柱、中心に鎮座する武の化身はさながら竜巻の目のように。

地が揺れ、木の葉のように舞い上がる人間と土塊。

一直線に、無慈悲に、敵陣を分断した呂布隊。前に立つことすら許されない進撃だ、崩れた軍勢の殲滅であるなら黄蓋様達がここまで早かったのも頷ける。

「続きましょう、駄目押しッス」

「当然じゃ、ここで止まっておる暇はない」

俺の言葉に頷いた二人は各々の部隊を手早く再編、進軍を開始した。

「にしても、なんだありゃ。人間とは思えない怪力だな」

「え、いい勝負じゃないッスか？」

この後、部隊を率いて遅れないよう続く中、失言の罪深さを身をもって味わったのは言うまでもない。

Ｓｉｄｅ黄祖

耳朶を叩く怒号、それとともに迫る三条の鈍い凶刃を腕の手甲で防ぎ、撥ね退ける。

「ぐ……ッ、はあああぁッ！」

続けて放った豪槍の一薙ぎ、鉄柱に似た質量は他の兵数人をもまとめて吹き飛ばした。腕に伝わる確かな感覚には彼らが再起不能となったことが明確に表れている。既にその砕いた感触ですら気に留めるに値しないほどの激戦。

そのまま引き絞った弓矢のように突き出された槍は敵兵を鎧ごと貫き、その光景に怯んだ別の敵兵をも刺し貫いた。

ただ、ひたすらに突き殺す。

飛び散る鮮血は私の身を濡らし、地へ滴り、まるで私の立つ場所を絶対の防衛線と線引きしているかのようだ。

いや、事実私の後ろへは未だにたったの一兵すら通してはいない。

それこそ我が使命、ただの勝利でなく、ひたすらに守り抜く。

振るうのは劉表様より賜った長槍。

刃が無く、円錐型の刺突部で突くことを主軸とした特殊なもので、扱いこそ難しいが今は不思議と体に馴染む。
馬上での使用が基本であるらしいが、刺突に関しては他の槍の追随を許さぬ重厚さと頑強さを誇り、その長大さはまさに鉄塊。

「は、っ。ちッ……！」

息をつく暇もない。
次々に攻めたてる孫策軍の気勢は衰えなど塵ほども感じられず、ただただ大きくなっていくばかり。

予想していなかったわけではない。？良の策が看破され、裏をかかれて中軍を挟撃されることを。

しかしそれでも、文聘の素早い後退によって被害を抑え、その上で戦闘を続行するのであれば、まだ勝機はあった。

名に偽りはない。
こと守りに関して私がこの地で敗れることはありえない。戦力で互角となったのであれば、残るはこちらの攻勢が敵を打ち破るかどうか――その、はずだった。

そんな条理を容易く、当然のように踏み越えたのは、たった一人の武人。

文聘の後退すら超える速さで、守る暇を与えないほど圧倒的な強さで、戦場を駆け抜けた。
途方もない力、だが私はそれ以上にその力を支える者にこそ驚かされた。

彼女に追従し、その突撃を最大限に活用せんと兵を操る軍師、陳宮。

天性の勘によって戦局の要を叩き潰す呂布の行動は効率的であるからこそ、流動的で読みづらい。それに常に対応する順応力と判断力は果たして呂布に付き従い続けた天才軍師である彼女にしかないだろう。

じっくり見れば粗が目立つ軍略も、戦場のただ中であれば正確さよりも速さと適応力こそ要。そもそもどこまでも型破りな呂布に緻密な策は向かない。

そして、そんな指揮を実行し、飛将軍に追いすがる兵士の練度は言うに及ばず。

……惜しい。この広い漢の地において、攻撃だけならば彼女らを超える部隊はあるまい。

だからこそ、このような形ではなく、生きた兵を率いて、その攻勢を叩き伏せてみたかった。今回の戦いも、もし兵士達が私と共に戦った頃の彼らであったなら。

「いや、詮無きことだな……戦いに、“もし”はない」

なんとも身勝手な考えだ。しかし、それこそ武人の性。

「で、あるなら――我が今成すべきことは」

地を揺らす暴風。

眼前に展開していた味方の兵士達が鮮血とともに吹き飛び、私の横を通過――することなく、私の槍により地へ叩き伏せられた。

ひらけた視界に立つのは赤き髪に朱い瞳、後ろにたなびくのは真紅の軍旗。

「……」

無言。ともすれば華奢な少女とも思える身なりは、而して本質から大きく外れる。その身から発せられる闘気はヒトのソレではない。武神、人の理を超えた存在である証。

――心が震える、どんな高尚な理念を掲げようと、今の私にこの瞬間を超える愉悦はない。

やはり、私はどこまでも武を追及する者であるらしい。紡ぐ、今の己が矜持、そのすべてを。

「呂奉先、ここより先は誰であろうと通さん」

「……推し、通る」

闘志の籠った返答、その目は私ではなく超えた先にある何かを見据えている。

気に入らない……が、それならば私を見ざるをえなくすればいいだけの話。この高揚を妨げることはない。

「舐められたものだ……貴様は、私がここで止める――――来いッ！！」

恫喝、同時に感じた殺気へ向けて穂先を突き出す。

ガリッ、と鈍い金属音が響く。視認する余裕はない、感覚と経験だけで判断して放った三連突き、その二つをかわされ、最後の一突きは音すら置き去りに振るわれた上への一閃で跳ね上げられた。

「ぐ、っ……！？　ふッ！」

あまりの剛撃に腕ごともっていかれそうになるのを、全力で踏みとどまる。心なしか地面が窪む感覚。

続けて迫る呂布へは槍を反転、石突きでの牽制を放った。

「っ！　……重い」

戟で受け止めた呂布の口から小さな呟きがもれた。それも当然、元来相当な重量を誇るこの槍に受け止めた一撃の勢いすら乗った打撃、重くないわけがない。

本当であるなら、その重さと速さから回避も防御も困難なはずだが、奴にそんな道理は無意味か。

すぐに体勢を立て直しにかかるが、それを許さぬ連撃。

一太刀でも浴びれば我が守りを叩き崩す巨大な腕（かいな）はその質量に反比例するどころか、さらに速度を増して襲いくる。その数は連なり続け、数十を優に超えるほど。

だが、それでも我が意地を成す槍は堅く、その悉（ことごと）くを弾き返していた。

一際大きな激突、互いに距離をとったが、全力で踏みとどまった私は奴のほんの僅かな隙を逃すつもりはない。

再び、腰を落とすと刺突の構えをとり、

「――シ、ッ！」

放つのはさらに速い、己が最高の一閃。

「……まだ、遅い」

が、それすらも軽くいなした呂布の戟が回る。そして、側面から迫るのは石突きの豪撃。

風が唸りをあげ、受ければ骨など軽々とへし折れるであろう一撃は、

「ぐ、ぁ……ッ！」

己が身を守る手甲で受け止める。鈍く、嫌悪を覚える音が脳内に響く、しかし戟はその動きを止めた。

そこへ、渾身の一薙ぎ、体勢を崩しながらも振り回す力で大きな勢いを得た槍は鉄球のように呂布の空いた脇腹へと吸い込まれていく。

「……！？」

咄嗟に後ろへと跳んだ呂布は、しかし戟を捨てることなく崩れた体勢のまま。手放すか、手放さないか、一瞬にも満たない逡巡（しゅんじゅん）、それが彼女の衣服に一筋の掻き傷を刻む。

好機、もう二度とくることのない。

使い物にならなくなった腕は無視、槍を振るう腕に無理矢理力を

込め、横への勢いを相殺する。
だが、殺しきれない。脇で槍を挟み、さらに力を込める、先ほどと同じ、嫌な音が聞こえたが意に介する気はない。

「――ッく！　おおおおおッ！」

「……っ！？」

無我夢中で止めた槍の穂先は、未だ崩れた体勢で跳ぶ呂布へ真っ直ぐ向けられている。

身体ごと倒しての突貫、勢いよく突き出された穂先は彼女の華奢な身体を貫いて余りある。
死力を尽くした一閃、それは呂布の胸を貫く――

「が、ッ……！？」

ことは叶わなかった。

完全に意識の外、上方から放たれた戟の一撃。
それは槍を持つ腕を根元から斬り落とし、目標の逸れた槍は呂布の脇腹に一筋の朱を刻むだけ。

勢いのまま、前へ倒れそうになるが、片足を踏み出し、とどまる。

「……負けた、か」

呟きはとてもではないが清々しいとは言えない、悔しさに満ちた

もの。
しかし、立つのもやっとである以上、敗北は認めざるをえない。
それに……これくらい悔恨が残る方が私にはちょうどいいだろう。

「……ふ、やはり大した奴だよ」

こちらを見据える呂布の手は戟の石突きに近い部分を握っている。
私には感知できなかったが、おそらく跳びながら咄嗟に長く握り
なおした戟で槍の射程外から私の腕を狙って振り下ろしたのだろう。

まったく、敵わない。

「……」

無言。だがその目は確かに私を見ている。
どんな言葉より雄弁に語る瞳は、明確な障害として、戦うべき存
在として私を。

……この程度で溜飲（りゅういん）が下がるとは、私もどうかしてる。

「……恋」

「……なに？」

「真名」

突如発せられた言葉に首をかしげる。
しばし、その意味を考えて思わず苦笑を浮かべた。

「――恋、か。確かに受け取った。私の真名は彗華だ、まぁもう使われなくなる名だが、預けよう」

「……（コクリ）」

「ふっ、変な奴だ」

認め合った証、だとでもいうのか。悪い気がしていないあたり私も死を前にして狂ったか。

心の中で嘲笑を浮かべる。ただ、私の愚かさに。もう、意識も朦朧としてきている。

「……彗華、忘れない」

が、次に発せられた言葉に頭が真っ白になった。

恋が、私から何を感じとったのかはわからない。たった一度、相見えただけの縁、彼女の瞳は真っ直ぐだが、だからこそ読み取ることができなかった。

思考は、意識ごと呑まれて叶わない。

「……本当に、おかしな奴だよ」

でも、

「私も忘れないさ、恋……」

こんなのも悪くない。

途切れる意識の中、最後に見えたのは気高くも温かい、鮮烈な紅だった。

第３４章　破　～　飛将軍ｖｓ絶壁の武人（後書き）

相変わらず記憶、過去要素が加わると読みづらくなる不思議。別視点からの駄目だしなどをいただけると嬉しいです。

黄祖に関しては端折りすぎたかもしれないと反省。
一応コンプレックス含めた設定はつめていたのですが、登場させる機会がなかった……。
ううむ、番外編として以前考えた劉表軍の過去話でも書いてみようかな。需要はないと思うので載せはしませんが。

拙作をお読みになって少しでも気になる点などあればご指摘、ご感想大歓迎ですのでよろしくです。

では、また次回。

第３５章　急　～　理想の終演（前書き）

かなり間を空けての更新になりました。

最近亀すら呆れる遅筆さに拍車がかかりはじめたような。

しかも、全然まとめるだけの構成力が足りない現状……三部構成の配分を間違えたかもしれないです。

とまぁ、そんなわけなので字数が過去最高。

冗長な文に耐性のない方は場面が変わるごとに休まれることを推奨します。

では、第３５章です。

第３５章　急　～　理想の終演

Ｓｉｄｅ孫策

燃えるように赤い戦場で鬨（ときの）声が上がる。
最早、勝ち鬨と言っても差し支えないほど力強い声の源は私達の軍勢によるもの。

「ま、そもそも彼らにそんな凱歌を奏でることができるとも思えないわね」

生気がない、通常ならありえないほど積み上がった骸は、死してなお、生々しさを欠いている。

黄祖の敗北、それは劉表軍主力の壊走に連鎖した。
主要な指揮官を喪失したからか、精彩を欠いた戦術が我らの気勢を受け止められるわけもない、最後の野戦でも？越率いる軍勢が大敗を喫し、勝敗は決した。今は劉表の居城へと攻め入り、戦いも大詰め。

勝利は目前、でも私の心は焦り、乱れている。
ううん、我ながら過保護というか、女々しいというか。

「はぁ……雪蓮、少し落ち着きなさい」

そんな私を溜息とともに窘めたのは疲れた様子で眼鏡を押さえた冥琳。それに不満を思い切り乗せた視線を向けて口を尖らせると更に溜息が深くなった。

それというのも、さっきから城内の捜索に私も加わると言っているのに頑として却下を繰り返されているからだったりする。

むう、私なら大丈夫だって言ってるのに。

「まったく、今回の勝利に貢献してもらっておいてなんだけれど、こんなに影響があるとは思わなかったわ……」

続く口からは呂布の独断専行ギリギリな行動や灯理の過剰な気負いへの愚痴が滔々（とうとう）とこぼれていくけど、いずれ説教へと移行するのは目に見えてる、早々に聞くのを放棄して辺りへ目線を巡らせた。

ふと、目に留まるのは数個の天幕が集まる陣営の一角。

保護された多くの領民、彼らも刃の報告通り妙な方術を施されていたが、さしたる抵抗もなくこちらの指示に従ってくれた。

それでもあの人形然とした不気味さはあったけれど、それは思わぬところで解決され、あとは制圧部隊によって終止符が打たれるだけ。

続けて目を向けたのは城門。

開け放たれ、配置された孫策軍の兵士が警戒している。制圧部隊の戦果も上々だというし、殲滅にも時間はかからない――

「――ん、あれは……？」

そんな中、視界に映る一つの光があった。

城門で明滅する小さな、手の平ほどの光球。普段であれば不気味

さを感じる光景であっても、今の私に去来する感想はまったく違ったものだ。

私は、あの光を知っている。

先の戦いで、私を撃ち抜かんと迫った凶刃、それを打ち払った突風にも感じた違和感。しかし、それは嫌悪ではなく、暖かで力強い安堵感にも似る。

いや、そんなことは今問題じゃない。

一歩踏み出す、さっきから私に訴えかけてくる明確に伝わる想い。

私を、呼んでる……？

さらに一歩踏み出す、確信を得る想いは徐々に冷静な思考すら削ぎ落としていた。

「まぁ、私とて心配がないと言えば嘘にな――――っ、雪蓮！？」

いつの間にか、駆け出していた。

後ろからかかる声も頭に入らない。うろたえる兵士の横を走り抜け、それでも目は城内へと飛んでいく光しか見ていなかった。

なぜ追っているのか、なぜ追わなければならないのか、自分でも確固とした理由なんてなかった。

ただ、それはなぜか彼につながるような、妙な確信がある。

迷いなく進む光、疑問や疑惑はなく、それを追う私もただひたすらに足を急がせていた。

Ｓｉｄｅ朱然

敵の主力部隊を撃破した孫策軍は領民、捕虜を保護。最後の一押し、居城への侵攻へと移っていた。

いや、そもそもここまで戦うことこそが異常だ。

俺達上代隊や、呂布隊も含む制圧部隊の奮戦、しかしそれでも立ち向かってくる兵士によって冗長に戦いが続いている。

「でも、それも終わりだ。これ以上無駄に長引かせてたまるか……！」

足元の屍を踏み越え、身体を捻り迫る刃をかわす。そのまま後ろ手に柄頭（つかがしら）で後頭部を強打すると、追従していた兵士達に拘束させる。

余計な真似であることは重々承知しているが、それでも抵抗はやめたくなかった。くだらない術に踊らされ、無闇に命を奪いたくない。

手加減、というわけでもなく、元々城内は寡兵であったこともあってか隊の被害はごく軽微と言っていい。それも、二つに分けて行動する余裕すらあるほどに。

もちろん、これには調練の成果も大きく関わっているとは思うが。

「……ここ、か」

――着いた。

一つ息を吐き、呼吸を整える。一瞥にとどめ、警戒を深めると追従する隊の兵士達へ視線を移し簡単な意思疎通を図った。

「ふ、ッ！」

真っ赤な剣を一振り、こびりついた血糊を飛ばすと眼前の扉を蹴破る。

歪み、乱雑な音を響かせて扉が開け放たれる、と同時に目に飛び込んでくるのは数条の煌めき。

「は、っ――手荒い歓迎ッス、ね！」

身体を横に倒し、獰猛に輝く鏃をやり過ごす。事前に想定していなければ全身から矢の突き出た気味の悪いオブジェが出来上がっていたであろうことを思わせる容赦のなさだ。

うわ、背筋に冷や汗が……。にしても予想以上に躊躇ないな、あいつら。

ともあれ、次の矢を番わせる気はない。同じく扉の脇で矢をかわした隊の兵士達が敵の弓兵部隊へ向けて襲いかかる。

やはり先んじて部屋の大まかな間取りを把握していたのは大きい、彼らの動きにはまったく淀みがなかった。

「……仕損じたか」

そして、残った俺が真向かいに対峙するのは眉目秀麗を体現したかのような男。浮世離れした輝く金の髪からのぞく瞳は氷のように

冷たい。

その良い身なりと堂々とした態度は、推測する必要すらなく、彼がこの城の主であることを理解させる。

ここが玉座をおく間であるというのは本当だったらしい。

……まったく、周瑜様の言葉を借りるわけではないが心底味方で良かった。

押し殺された苦笑。城の構造といい、どうやって調べ上げたのか。まだまだあの人は計り知れない、ということだけは確かだけれども。

弓兵の他にも伏せていた敵兵が現れるが、そちらは上代隊の兵士に任せ、俺の視線は目の前の男へと集中している。

何を思ってあんな術に手を染めたのかはわからないが、奴には聞くことがある。

「アンタが、劉表ッスね？」

「……」

口は開かれることなく固く引き結ばれたまま。

「聞きたいことがある、アンタに術を教えた奴は？」

「……」

「人数は？　風貌は？　術をどうやって手に入れた？」

「……」

「……白装束の道士、奴らはどこだ？」

「……話すことは、ない」

やっと開かれた口から吐き出されたのは拒絶。玉座にたて掛けられた槍を手に取り、構えた劉表から話し合う意思は微塵も感じられない。

「……は、まぁいい、後々じっくり聞かせてもらうッスよ。なんであんなくだらない術に頼ったのかも含めて」

「ぐ、っ……！」

ギリッ、と歯を軋ませるほど噛み締めた劉表の顔が忌々しげに歪む。

どうやら、自分は地雷を踏んだらしい。それでも、自分が間違ったことを言っているとは全く思わないが。

両の手に握った双剣を今一度強く握り直し、体勢を低く構える。この距離で槍を相手にするのは得策じゃない、間合いを詰めて手数で圧倒することが定石にして鉄則。

「知ったような口を、利くな……！」

対する奴は冷静にこちらの手を潰しながら追い詰めるべき、だが……どうやら余程気に障ったらしい、そんな考えは感じられない。

しかし、穂先を地へ向け、突進体勢をとる劉表は下策をとろうと

しているにもかかわらず俺を一突きで刺し殺すだけの気迫に満ちている。

結局のところ、気は抜けないらしい。

油断なく、構える二人の間にある静寂。周りの喧噪は遠く、静かな緊張感が音となり流れる。

『……』

プツン、と、

糸が切れるように音が途切れ、次の瞬間刃と穂先は鋭い火花を散らしていた。

Ｓｉｄｅ孫策

光を追って、どれだけ進んだだろうか。複雑な構造の城内、その中でもさらに入り組んだ場所を通る。

多分、今から戻ろうとしても自力では戻れない。それくらい奥まった所へ。

辺りは華やかな城内と対比されるような薄暗く、冷たい石造りの空間。

多分牢獄、ってところだろうとは思うけど……。記号的な嫌悪感が湧くのに反して、同時に淡い希望を抱くのもまた事実。

「……んっ、これは？」

ツン、と鼻を突く香りに眉を顰める。

異臭でありながら、私の道において切って離せない馴染み深さを伴うもの。そして、先の戦いで鼻に付くほど感じた生々しい香り。

「――っ！」

嫌な想像が頭をかすめ、足は知らずのうちに全力で駆けだしていた。

床に滴る血が視界に映り、さらに加速する。足にまとわりつく滑(ぬめ)りも無視して進んだ先、

「――――じ、ん……？」

見つけた。

左右に五つずつ牢の置かれた空間。その中心、通路の真ん中に座り込んでいるのは短い間であったはずなのに久々に見たような気すらする見慣れた姿。

だが、その様子は明らかに異様で、思わず呼びかけに疑問符を加えてしまうほど。

辺りを見れば、牢に収監されていた者は一人残らず惨殺されている。床に滴る血は彼女らのものであるらしい。

「……これ、って」

再び湧いた先ほどとは別の想像、しかしそれは間違いであることは冷静になればすぐわかった。彼女らは全員斬殺されている、しかし刃の手どころかその周囲にも刃物は存在しない。加えて刃の身体、

いやその周りには血の一滴も付着していなかった。

安堵に胸をなで下ろすとともに、矛盾した光景に覚える違和感。

刃の周囲だけが血の一滴もない空間、まるでそこだけ切り取られているような――

「ま、考えても仕方ないわね」

無駄な思考を振り払うと、刃の安否を最優先として歩み寄る。

茫然自失といった様子の刃はこちらに気付いていないみたいだし、目立った外傷こそないがまだ安心できるわけじゃない。

「……あれ？」

刃のもとへ向かう途中、パキリ、という音とともに足に感じる妙な質感。

見れば足元にはその大部分が赤く染まった白い布きれ、そしてその下には割れた眼鏡が転がっている。

少し首をかしげたが、すぐにその疑念を振り払い、そこで自分に向けられている視線を感じた。

この場所で私以外に“見る”ことができるのは一人だけ。

やっと気づいたか……、と呆れる風に目を向けた私は、再び困惑することになる。

「……ゆう、き？」

その目は、私を見ていなかった。そして口から出たのは身に覚え

のない名。

「……え？」

呆気にとられる私をよそに、刃が表出させた感情、それは……怯えだった。

私と向かい合うことを怖れるかのように縮こまる姿は今まで見たこともなければ、考えたこともない。

目が合った時、刃の瞳にあったのは孤独。どこにも居場所がなく、そしてそれを受け入れてしまう弱弱しさと、人を遠ざける拒絶。

ここにいる、というたった一つの繋がりもなくした刃は、もう誰と繋がることも望まない。勿論、私とだって。

それは、痛いほど伝わったし、どうしようもなく理解させられる。

でも、それがわかった上で、それでも、

「……む」

なんか、無性に腹が立った。

自分でも自覚できるくらい不機嫌さを露わに頬を膨らませ、無遠慮に歩を進める。

当然さらに怯えた刃は遠ざかろうとするけど、へたり込んだままで逃げられるわけがない。

すぐに追いつき、その肩を掴む。ビク、と跳ね上がる肩、同様に私の不機嫌度数も跳ね上がった。

「……ったく、なに自分勝手に悲劇気取ってんのよ」

小さくもれた呟きは自分が思っている以上に機嫌が悪い。

でもそれと裏腹に、そっと自然に動いた腕は緩慢で、未だに震える身体を優しく抱きしめた。

零になる距離、か細い途切れ途切れの言葉は、耳元で少しずつ形をなしていく。

「……嫌、だ。私は、ただ、っ……守りたくて」

少し、抱く力を強めた。しっかりとその存在を繋ぎ止めるように。

刃が何を怖れているのかはわからない。でも、

「……一人に、なりたくない。私はっ……」

「一人じゃないでしょ、馬鹿」

嗚咽も混じり始めた独白をぶっきらぼうに遮る。

驚きに目をあげた刃と視線がぶつかった。その瞳を見て、やっぱりなんか気に喰わない、というよりどこか拗ねるにも似た感情が沸き立つ。

なんでこんなに腹が立つのか。

物わかりのいい弱さ？　頑固な幼さ？　それともたった一人で孤独を決めつける視野の狭さ？

違う。いや、もちろんそれもあるけど。
それ以上に我慢ならないのは、

「私が、いるでしょ」

「……？」

ああもう、物分かりが悪い、じゃなくて、物忘れが酷いの方が合ってるか。

「……だからっ、私、雪蓮がいるって言ってるのよ」

「しぇ、れん……？」

だいたい誰だ、“ゆうき”って。
私が目の前にいるのに他の奴と勘違いして、もう自分は一人だ、とか失礼極まりない。
自分の主君様くらい覚えときなさい、って話だ。

……しかも、それを聞いた上で邪気の無い顔で呆然としてるんだから少しは本気で怒ってもいいんじゃないだろうか。

思わずその呆けた頬を力一杯つねりたくなる衝動にもかられたけど、なんとか自分をなだめてできるだけ柔らかく、静かにその瞳へ語りかける。

「貴方は、一人じゃない。私もいるし、なにより灯理っていう家族がいるじゃない。あの子を無視して一人が云々言ってると怒るわよ？」

「……か、ぞく……そう、か。私には、家族、が……」

少しの間、呆然と私を見上げていた刃の目は言葉を紡ぐごとに微かに和らいでいく。

まったく、やっと思い出したらしい。私としてはこのまま説教をする予定が俄然頭を占めていたりするところ……なんだけど、

「ま、滅多にない自分勝手さに免じて今は許してあげるわよ」

その目が閉じられると同時に感じた暖かな重み。

仕方なしに断念。って言っても、まだ全然許したわけじゃないし、起きたらこっ酷く叱るのは確定してる……んむ、私も意外と根に持つんだ、こういうの。我ながら意外かもしれない。

唸りつつ、放置されてごわついた髪を梳くように撫でた。

余程疲労していたのか、腕の中で眠る刃は穏やかな寝息を立てて起きる様子はまったくない。

それを優しく、しっかりと抱きながら私も一つ、大きな息を吐く。

「ううむ……なんか、悔しいわね。まぁ、これからってことか」

名も知らない人物、その彼だか彼女だかへ向けて一方的な挑戦状を叩き付けながら。

Ｓｉｄｅ劉表

鉄と鉄がぶつかり合い、奏でられる音。
それは一度も止むことなく、数十にも及ぶ剣劇を飾り、囃し立てる。常に前へと突き進む私の槍術には、こんな堕ちきった私にも確固とした意志と鍛錬の跡を感じさせる。その師であった彼女は、戦場で果てたと伝え聞いた。

心が、軋む。
私などと最後まで共に進んだ彼女達を、今更悔やむなど侮辱以外の何物でもない。

一際、大きな衝撃とともに距離がひらいた。
相対するのは、名こそ聞いたことがないが、一角の武人として力を磨いたであろう藍髪の男。
双剣を操る剣技には洗練された鮮やかさこそないが、荒削りで泥臭くとも地道に培われた研鑽が見える。どこまでも、這ってでも掴んだソレは間違いなく誇り足りえるものだ。

だが、そんな彼であろうと私の理想を穢すことは許せない。なにより、私の道へ積み上げられた犠牲の為にも。

「……ハッ、洗脳による統治？　呆れた征服欲ッスね」

冷静になれ、そうもう一人の自分が幾度となく告げる。
だが、それとは裏腹に私の心は牙をむき、身体中の血は燃えるように熱い。

「その口を閉じろッ！　貴様にわかるものか、私の想いが！」

熱気を吐き出すかのように叫ぶ、しかし身体を駆け巡る熱は収まってくれそうになかった。

そして、続く口からは自分でも知らず、想いの丈が流れ出していく。

「守る、ただ単純なその行為がどれほど難しいことか！　すべてを救うことなんてできない。わかっていた、そんなことは！　だから、少しでも、ほんの少しでも、と」

感情が爆発しながら夢中で、無意識に振るう槍は鋭くも、自覚できるほどに闘志より悲しみに満ちていた。

幾重にも突き、薙ぎ、その度に弾かれる槍。

全てを救う、それはただの絵空事に過ぎない。それは理解していた。

私は、ただ自分の大事な人々を真の意味で守り抜きたかっただけだ。

ただその身を守るだけでなく、その周りまで。本当にその人を守るために。

この世界というものは、因果の糸が縦横無尽に張り巡らされてできている。

だから、目指した。神の真似事にも近い不遜な理想。

全ての因果すらも支配し、統括し、管理することに。

「不要な死など認めない！　そのために絶対なる規律を守る、固定された意思を」

裂帛の気迫、鋭く突き出した穂先は彼の心臓を貫かんと迫り、確信すら覚えたその一閃は、

「ぐ……！」

苦々しい呻きと共に片方の剣で弾かれ、もう一方の剣が我が身に襲いかかる。
だが、まだ遅く浅い。

「シ、ッ！」

体勢を低くしてかわした私の薙ぎ払い、両の剣での防御も勢いのまま彼は吹き飛ばされ、再び距離が空いた。
肩で息をする彼。ゆっくりと、穂先を向けた。

次で、決める。

「徹底した、ゆき過ぎた管理。それが実現すれば、その犠牲は最小限になるッ！」

全霊をかけた一突き。
彼はその場にとどまったまま。当然、回避など許すわけもないほどの一閃だ、受けるなど愚行の極み。

諦め。無情な勝利を約束する穂先は、

「……ふざけんな」

確かな意志でそれを否定した彼の重ねた双剣に弾かれた。

「な、に……？」

槍を受け止めた力、その驚愕は無論ある、
が、それ以上に彼の言葉に気圧されたことにこそ私の目は見開かれていた。

「自分の理想を偽ってんじゃねぇ、って言ってるんスよ」

言って、双剣を下段に構えた彼はこれまでで最速の踏み込みとともに駆け出した。

否定、しようとした。だが、その一瞬私の言葉は、心は霧散した。

「……くっ、貴様が、私の理想を騙るなッ！」

迎撃せんと横薙ぎに振るった槍を片手の剣で力一杯撥ね上げられた。当然、その程度で完全に防ぎきることはできないが、軌道はわずかに逸らされる。

さらに、体勢を低くした彼の頭上を猛る風と共に槍が通り過ぎる。槍とぶつかり合った剣はすでに握られていない、いや腕の痺れに取り落としただけか。

それでも諦めず、迎撃せんと体を捻った私は、

「アンタが、本当に救いたかったのはそんなヒトだったんスか？」

「……！」

私の原点、

守れなかった、その顔が映り、その身を硬直させた。

吸い込まれるように半円の軌跡を描いた剣は私を斬り伏せ、揺れた身体はゆっくりと仰向けに倒れた。

意識が混濁する。頭の整理がついた時、赤い息を吐いた私は槍を取り落とし、胴から血を流しながら顔へ刃を突きつけられていた。

「アンタの理想に、生きた人間はいない」

心底、蔑みながらも、悩むような視線の彼が吐き捨てる。

それに対し、同じく吐き捨てるように言おうとして、喉からせり上がった血に顔を顰める。しかし、それも意図せずして吐かれた血塊で解消され、再び口を開いた。

「……そんなことは、わかっている。だが、私はそれでも無為に死んでいくのを見ていることはできなかった」

……いや、詭弁か。

彼らの生を愚弄しておきながら悼むほど、都合良く言葉を偽れない。

浮かぶのは私の罪であり、何より守るべきだった者の顔。

「……違う。私は、ただ……そう、ただあの子が救えなかったことを悔やみ続けているだけ、か」

わかりきっていたことを吐露して、つくづく堕ちたものだ、と呆れた。

「……なんの話――ん、これ、まさか……！？」

と、疑問符を浮かべていた眼前の彼が首を巡らせた。

そしてその一瞬、私から目を離したところで、二人の間に躍り出

る影。

「ッ！？　誰だ、アンタ？」

鋭い金属音、剣を構えながら退いた彼の目は私の前に立つ、よく見知った後ろ姿へ。

「……？、越？」

指揮官として戦場へ出ていた彼女が、なぜここへ？

討たれたという報告こそないものの、すでに生きてはいまいと思っていたが。

事実、全身から血を流し満身創痍といった様相の彼女は、動いているのが不思議なくらいだ。

しかし、その手に持つ剣は微動だにせず、信念の固さを表すかのように。

「いや、そんなことよりこの熱気に臭い……火を、放ったんスか？」

忌々しげに呟く彼の声、辛うじて辺りを見回せば私の視界の端にも猛々しい赤色が躍っている。生憎、鼻も肌も麻痺しているのか判断材料はそれだけだが。

「だったら、どうだというんですか？」

？越の声は、剣同様微塵の震えも感じさせない。

「道連れにでも、するつもりッスか？」

さらに険を深めた目は舌打ちでも聞こえてきそうなほどだ、が見るに?越以外の兵士が一人も見当たらない。

「逃げたければ、逃げればいいでしょう。私一人では侵入した隊全てを足止めすることは不可能です。が、もし貴様が我が主の首級を欲するのであれば――」

彼に切っ先を突きつけていた剣がゆっくりと、構えられた。深く、踏み込んだ足はその場を一歩も動かないと言外に宣言している。

「ここで、果ててもらいます」

目を見開き、息をのんだ彼の顔が広がり始めた熱気に揺れる。

「……っ、時間がない、か」

少しの間、眉間に皺を寄せた彼は小さく、聞こえないほどの悪態をつき、その身を翻した。

すでに、火の手は天井をも焼き落とさんとするほどに広間を蹂躙している。この部屋のある一画自体が他の一画と区切られていて、閉鎖的であることを鑑みるに火を放ったのはその周辺だけだろう。それなら、最悪彼女一人でもこの広間を完全に焼き落とすことは可能だ。構造を把握することが前提条件ではあるが。

伏兵の奇襲を受けて尚、ほとんど欠けることのなかった自軍の隊をまとめた彼は、最後に扉の前で立ち止まり、こちらへ視線を投げる。

が、それも焼け落ちた天井の材木で遮られ、視界から消えた。

そして、残るのは私とその傍らに跪き、私の身を抱き起した?越のみ。

「……なぜ、こんなことをした?」

「劉表様、あの時自ら首級を差し出そうとされましたね?」

疑問は無視され、代わりに問われた確認に驚き、呻きがもれる。さすがに、彼女を欺くことはできないらしい。だが、それが私という大将の当然な末路だろう。

「まさか、私の首を奪われないために、とでも言うつもりか?」

少々小馬鹿にする風に問う。

実際にはありえないだろうと確信しながら、しかし、

「はい」

「……なに?」

短くも断固とした肯定。

ありえない、実利的に、緻密な行動を主とする?越とは真逆。いや、むしろ私では思いもしない利があるからなのか?

「無論、利益のためではありません。いえ、個人的にはそう言えなくもないのですが」

しかし、それもあっさり断じられてしまった。

「では、なぜだ?」

さらに混乱する思考は諦めて投げた、身体が動かない以上、どうしようといずれは血を失うか、焼けた城に押し潰されて潰えるのだ。残る短い一生での恥なら楽な方を選ぶ。

「話が、したかったのです」

「……話? 損得などなく、ただ、話をするためだけにここへ来たというのか?」

頷く?越に、最早その意図の一片も掴むことはできないだろうと——簡潔に言えば、わけがわからない。

「死ぬ間際、愛する主君と会えないのでは寂しいでしょう?」

「……忠臣だな、正直予想以上だ」

臣下の中で私に最も忠義を尽くしてくれていることは感じていたが、まるで生涯の伴侶が言うような言葉をかけられるとは。

……だというのに、今の褒め言葉に溜息が返ってくるとは、またしても予想の斜め上をいく。

「なんとも……いえ、これでこそ劉表様ですか」

久々に表情の崩れた?越の顔、それがゆっくりと霞み始める。さすがに血を流し過ぎたらしい。

頭を巡るのはこれまで歩んできた道を彩る場景、自身が生きた以上に長く感じるソレは、理解することができないほど速く頭を駆け巡った。そして、懸念が幾つか引っ掛かる。

「そういえば、領民達や兵士達への施術は」

「……それならば、問題ないようです。彼女らが既に考慮していました」

「さすがに、優秀だな……私よりも。孫策も、予想以上の英傑のようだ」

「彼らを思い返して、荊州の心配ですか？」

「まぁ、な。問題、は……ないか」

思考が徐々に消えていく、視界はすでに閉じられ、全身の感覚が希薄だ。

「最後まで付き合わせて、すまない」

もう動いているか、声を発しているかもわからない状態で、最期に呟いた言葉。

――ありがとう。

一つの幕が、ゆっくりと閉じられた。

第３５章　急　～　理想の終演（後書き）

『劉表と理想』編（適当に命名）、とりあえず一区切りとなります。あとちょっとだけ続きますが。

正直、自分の限界ではあったけれども、まだまとめられていない気もひしひしと。

そんなわけなので、厳しい指摘とか鋭い批評とかがありましたら是非に。

勿論、普通に気になった点などでも大歓迎です。

第３６章　ひと時の休息と生き抜く意志（前書き）

詰め込み感が半端ない……。
ちなみに後書きにてアンケートっぽいものを実施しているのでよろしければ是非お願いします。

第３６章　ひと時の休息と生き抜く意志

劉表の居城が焼け落ち、戦いが終結してから数日後。

今は急ピッチで進められる戦後処理に一区切りをつけようというところ。話を聞いたかぎりでは袁術と袁紹の争いも無駄に長引く中、期待していた横槍、もといツインドリルが金ぴかロールの脇腹を貫いたらしい。

……それにしても早い。やっぱりあのロリ覇王様は格が違う、というわけですか。いずれ相見えることになると思うと末恐ろしい、いやすでに怖ろしい。

早々と西涼を片して取って返す、お猿な太閤も真っ青な所業です。むしろ魔王様にも近いかもしれない、新兵器とかどんどん利用しそうな感じとか。

一応こっちもなんとか間に合っているだけマシですが、孫策軍と同等かそれ以上にも思える精兵やそれを指揮する臣下達には驚かされるというものです。

さりとて、想定を外れに外れた劉表との戦いも恋や灯理、上代隊の面々の奮闘もあってか上手く事を運べた。その代わりに、恋や灯理がくっついて離れなかったり、周瑜さんが私を心配した者の手綱が跳ねまくったことを、なぜか本人に延々と愚痴ったりしましたが。

ここ数日で受けた陳宮キックの回数なんかも言うに及ばず。これが負傷者への仕打ちですかっ……！

とまぁ、そんなこんなで彼の道術だか妖術だかの痕跡も消え、病

み上がりを卒業した私は近い袁術との戦いへ臨む軍のお手伝い中。
而して今は休憩中です。

勝ったとはいえ、戦略シュミレーションみたくその地がそのまま領地となるわけではないですからね。領民を保護し、統制する体制作りや、捕虜の処遇、部隊の編成などなど、奔走する人々を眼下に一つ息を吐く。

城壁の上、吹く風は暖かくも乾いた寂しいもの――というのは私の主観か、下で意気揚々と働く彼らには躍進への息吹に感じる風かもしれない。

一部が焼けただけで無事残った城内からも慌ただしい足音が聞こえてくる。私もそうそう呆けている場合ではないんですよね。

さて、話を移そう。

私が目覚めてより数日、見かける領民や元劉表軍の兵士が徐々に増えている。監督官の一人として数で確認しているから間違いない。そして、その人たちには以前の道術による洗脳、それの人形然とした様子は見られない。いたって普段通りの様相だ。

もちろん、それにはちゃんと理由がある。劉表という術師を倒したから解ける、なんていうゲームみたいな冗談とは別に。

それというのも、つくづく空恐ろしいけれど――

「あれ、こんなとこで物思いに耽ってたんだ、変態君」

……タイミングが良いのか悪いのか。

「とりあえず、その偏見に満ちた称号を取り下げてもらいたいんで

すが。私はただ、部下達の仕事ぶりを――」

「女兵士を視姦した挙句、脳内で犯すなんて……刃、恐ろしい子！」

「今ならぶった斬ってもいいですよね、コレ……？」

腰の刀、黒鬼に手をかけたところで冗談だよ冗談、と相変わらずの笑みを浮かべるのはいつの間にやら孫策軍に降ったという蔡瑁さん。

どうせ斬れないでしょ？　と言わんばかりの顔に全く反論できないのが目茶苦茶悔しい。

いや、話を戻しましょう。簡単に言えば、目の前のこの世全ての悪がゲシュタルト崩壊っぽい少女によって術に侵された人々は救われた、という話です。くっ、語彙力が追いつかない、だと……ええい、質より量です、その三倍は持ってこい。

――閑話休題、このままじゃ話自体が崩壊しかねません。

で、もとよりあの術は術者の気を相手に送り込んで、刻み込んだ命令に従わせるという類のもの。劉表自体も気の扱いに通じた人物であったらしい、そして眼前の少女も同様。極めつけに、劉表と例の道士しか知らない術だったのをスパイ紛いの行動により極秘に解除法会得、その上で軍門に降った、というのだから驚き……というより呆れますよ。

そして後の分裂した荊州を再び平定するために、経験と人脈が残る劉表軍の将軍だった彼女が孫策軍へと加わる。

……いったい、いつからその展開を想定して動いていたのか。

こちらとしてはありがたい話、でも相手が蔡瑁さんっていうんだ

から邪推の一つでもしたくなるというものです。

「んん、今なんか失礼なこと考えなかったかい？　まったく、この変態大人め」

「貴女以上に失礼なことは考えられませんよっ！？」

わざわざ中国版で罵るとは、相変わらずその無駄な語彙力は侮れない。

というか、肘で脇腹をぐりぐりしないでほしい。貴女は思春期の男子か。

にしても、報告では未だに続く解除作業は完了していないという話なのだが、休憩でしょうか。効率を上げようにも、解除法が無駄に至難の業なため黄蓋さんを始めとした数人しか行うことができないとかいう話ですし。

ちなみに私は意識して行使したことがないので、精密な運用なんて門外漢です。

「お察しの通り。それで、面白い刃君で遊ぼうと思ったのさ」

うむうむ、と自然に読心術を発動した蔡瑁さんは無邪気に邪な笑顔を浮かべる。できることならそこは刃君“と”であって欲しかった……無理なのは重々承知で。

「まぁ、相手を楽しませられる人物という評価は嬉しいですが」

「うん、ほどよく滑稽だぜ、刃君」

負け惜しみすら華麗に撃沈。防弾ガラス級の心に対戦車ライフル

ぶっ放すとか、躊躇なく鬼畜ですか？　いくら硬くても砕けたら再生不可なのですよ？

と、そんな戯言を口走っているうちに新たな人影が。二人して振り向いた先にいたのは良く見知った今回の功労者。

「ん、朱然ですか、どうしました？」

表情を見て、どうやら仕事などの話でないことは理解できた。普段とは違う思い悩むような真剣な目は今まで見たことのないものだ。

その雰囲気を察して席を外す、なんてことを隣の彼女が言いだすわけもなく、相変わらず面白そうに朱然を見定めるだけ。仕方なしに、私から退席を促そうと口を開きかけて、

「二人に、聞きたいことがあるんスけど……」

予想外の言葉に閉口させられる。私ならともかく、彼女に用があるというのは意外というか、完全に関知の範囲外。いや、一応一つだけ心当たりもあるけれど。

「……その、劉表にあの術を教えた道士って、どんな奴らだったんスか？」

まぁほぼ予想通りの質問……いい機会かもしれない。

「確かに、それは私も気になりますね、蔡瑁さん？」

私を含め軍の主要メンバーは彼女より直に、朱然たちも間接的にではあるけれど概要は聞いた。

突如現れた道士二人の献言に乗った劉表が道術主体の統治を開始した、と。

抵抗こそあれ、黄祖達名将の率いる軍によって鎮圧し、？越などの計略に暗躍もあり、荊州の再統治、もとい完全管理体制も近かったこと。とはいえ、術の特性を聞くあたりプログラミングのような精密で――あえて言うなら馬鹿馬鹿しいほど枠に収まりきった方法での無茶な治め方では破綻も近かったようにも思えますが……っとこれは蛇足ですか。

ともかく白装束の青年が二人、ということでしたが詳しい話は知らないの一点張り、確かめようもなく、彼女が吐きそうにも見えない。

でも、気になっていたのも事実。卑弥呼の一件といい、個人的に必要な情報でもある。

「おいおい、こんなか弱い女の子を虐めるつもり？」

「とりあえず、その愉快げな笑顔に儚さは微塵もないことくらい自覚しましょうよ」

「うわ、酷い言われようだなぁ。前言った通り彼らはふらっと現れて道術を売り込んだ後、時たま様子見に来ただけ。情報なんて知りようがないだろ？」

ううむ、相変わらず掴み所がない。本当に知らない、のかも。朱然もそう判断したのか追及する様子はない。

「そう、ッスか……」

諦め、呟く朱然の口調にはどことなく憎悪すら感じられる。

「何か、あったんですか？」

口をついて出た私の質問に、朱然の顔色が変わった。まるで、隠したかった感情の露見を怖れるかのように。

「い、いや、ただあの術が気に入らなかっただけッス、それを伝えた道士も含めて」

ごまかしつつも、険を深める。気に入らないのは本当らしい。さすがに今、詮索するのは野暮ですね。

「――あ、やっと見つけました～」

そんな中、聞きなれた声がかかる。擬音で言うならふわふわ、とかそんな感じの雰囲気を放つ人物を私は一人しか知らない。

振り向けば、そこには大きなメロ――ゲフンゲフン、もとい犯罪レベルで目に毒な母性を揺らす稀代の軍師様の姿が。

どうやら蔡瑁さんに用があるようで、私や朱然に気付いて挨拶をするも腕を前にしてお辞儀されると更に凶悪であることを自覚しているのでしょうか？

「んむ、私に何か用かな？　歩く艶本」

……否定できないな、これは。

「くっ、相変わらずの眼福っぷりッスね……！」

戦慄する馬鹿はスルーの方向で。

話を聞けば、解除のための施術作業が再開する、ということらしい。というか、なんとなく蔡瑁さんが不機嫌っぽいんですが。

「じゃあ、行きましょう～」

「う～ん、やっぱりその口調ムカつくなぁ。誰かさんを思い出すよ」

……ああ、うっすら記憶にある彼女ですか。同じ間延びした口調にしても辛辣度合いが違うと思いますが、坊主憎けりゃ袈裟まで憎い……とは少し違いますね。

「えぇっ、な、なんでですかぁ～。って、待ってくださいよぉ～」

じゃあね、と私達に手を上げて去っていく蔡瑁さんと追う陸遜さん。ううむ、噛み合っていないようで、実は全く噛み合わない二人、早くも行く末に一抹の陰が。

前途多難は乱世の常、いや人生の常。

――さしあたっては、隣で珍しく思い悩む同僚の話でも聞いてみますかね。

彼女達が去り、少しの静寂。言いだそうとする雰囲気を察し、黙って待つ。

「隊長、その……相談したいことがあるんスけど」

頷き、続いて耳に届くのは劉表に関する話。

概ね私の予想と同様の目的を持っていたらしい彼と、直に会い剣を交えたことで思うところがあるのだろう。

実際、朱然の話は蔡瑁から聞いたという劉表の理想に至る経緯が交じったものだった。

彼が、本当に守りたくて守れなかった人物。統治者になる前、失った家族は彼を失意の底に突き落とした。人は脆いものだ、他者の介在する因果の糸に絡め取られると嘘みたいにあっさりと世界からこぼれ落ちる。彼が経験したのもそんなありふれた顛末。

でも、彼はそんな経験を糧にする強さがあった。遺言で荊州の人々を託されたこともあって、領主となってからの治政は彼自身の才覚と優秀な臣下によって確かな成果をあげた。荊州のほとんどを併呑するほどに。

善政を布く中、彼は気づかなかった。自身が糧としたモノが根強く残っていることを。

そしてそれは、あの道術によって心を蝕む毒になる。それが、完全なる管理への執着。失った者との誓いと自分を誤魔化して過去の喪失へ固執した。歪みすら無視して、憑りつかれたように。

……まぁ、ことさら珍しいと悼むつもりもありませんが、多くの人々へ向けた慈愛ではなく、対個人的な優しさを本質としていたのは初耳ですね。生々しい感情だけに、より納得できる。

「――それで、話を聞くまではただあの力に手を染めたことへの侮蔑しかなかったんスけど……その苦悩は少し理解できて」

自分の気持ちをまだ整理できない、というところですか。

少しの沈黙。唸って言いよどむ朱然になるだけ柔らかい声音で問いかける。

「貴方は、なぜ戦っているんですか？」

戦う理由。それは乱世であるからこそ自分を支える意志になる。

「なぜ、戦っている……？」

そういえば、以前とある御遣いにした問いとも似ている。

まぁあの時の彼に比べれば、考え込む朱然に危惧すべき危うさはないようですが。

「……今の俺は、孫呉の為ッス。家がなくて、行く当てのない俺を家族として迎えてくれた皆を守るために」

長考することもなく断言する。おそらくは守るために必要な犠牲も認めた上で、なのだろう、それくらいには固い意志が感じられる。多少なり溜飲は下りたようだし、少しは手助けになれば……って私もほぼ同い年なのになぁ。

自分の老成っぷりに少し落ち込む。とはいえ、あんな甘えを二度も経験する気もないけれども。

「隊長は、何のために戦ってるんスか？」

「む、私、ですか」

一息つく間もなく予想外の質問、朱然は自分の悩みには納得がついたのだろう、返す問いには純粋な興味も混じっている。

……んー、無難に“生きるため”でもいいんですが、嘘ではありませんし。とはいえ、わざわざ誤魔化す必要もない。

「……私はただ自分のために、ですよ」

私の理由なんて単純なものだ。ただ、私がしたいように動いているだけ。誰かを守りたいなら代わりに誰かを殺す。無駄であっても足掻いて、他者を押し退けて我を通す。

ずっと前から、以前の世界から続く自分の生き方。

私は、誰かの為に、なんて動けない。

奪った罪は全て私にある、それを他人になすりつけられるはずもない。全部自分で背負い込む、そうしなければ私は崩れ去ってしまう。本当に、笑えるほど臆病な自己擁護。

……まったく、我ながら相変わらずだ。詭弁で塗り固め過ぎて、どこまでも弱く、甘い。

「――そんなの、いつか隊長が潰れちゃうじゃないッスか」

何気ない様子を装った私の話を聞いて、納得がいかないような顔で反論する朱然。小さく笑みがこぼれた、ああ本当に惰弱極まりない。私も劉表のことは言えません。

「ふふっ、確かに長生きはできませんね。ですから私の考えをお薦めはしませんよ。反面教師にでもしておいてください。じゃ、私は戻りますから」

休憩時間もそろそろ終わり、適当に一言残してその場を後にする。ああ見えて実は頭の良い朱然のことだ、利口に割り切るだろう。

――私に垂訓なんて期待するもんじゃないですよ、ホントに。

＊

Ｓｉｄｅ孫策

戦いの終結から数日が経った劉表の居城、その下に広がる城下には高く上った日が強く照りつけ、人々へ活気を与える。

着々と進められる袁術との戦闘準備を横目に、私は歩を急がせていた。

劉表との戦いが終わっても、まだ私達の目的は続きがある。独立、そのための最終戦。私も大将として多くの仕事に忙殺されるっていう地獄の日々を送っていた。今までとは違って、最低限の休みしか許されないほど仕事が詰まってるから抜け出せもしない……というか、冥琳が抜け出させてくれない。

そんな私がやっと少なからずとれるようになった休憩時間。

探し人は……見つけた。最近休憩の度に姿が見られるっていう城

壁の上。

壁に身を預け、虚空をボーっと眺めている。距離が近づくにつれて、声も聞こえてきた。独り言、かな？

「――にしても、助かりましたよ。今回は大きな借りができてしまいましたね」

うーん、虚空へ言葉を投げる様子から独り言とも思えない。不思議に思って、身を潜めようとしたところで目が合った。相変わらず、随分勘がいい。

「休憩ですか、孫策様？」

「……むむ」

軽く会釈した刃に、これ見よがしな不機嫌顔を張り付けた。そのまま、じーっと見つめあうこと少し、

「……休憩ですか、雪蓮様？」

「うん、まぁね～。やっと解放されたのよ」

深い溜息と共に言い直した刃へ改めて笑顔で応じる。それを見て困ったように眉尻を下げて肩をすくめた刃に思わず笑い声がこぼれた。

「……？　どこかおかしかったですか？」

「ん、そういうんじゃなくてね。そういう仕草する時の刃って、実

は満更でもないって思ってるでしょ？」

驚いたように目を見開いた刃とふふん、と胸を張る私。これでも洞察力には自信がある、刃のことくらい全部お見通し、ってね。

「はぁ、敵いませんね、貴女には。これでも駆け引きには自信があったんですが」

「これでも刃の主様よ？　私の前で隠し事なんて長く続かないんだから」

「確かに、道理すら引っ込む貴女の直感は世の悪人やら男には最終兵器ですよ」

諦観に満ちたような言いぶりに口を尖らせつつも、内心ほっと安堵の息を吐いた。いつも通り、道術の影響だったらしいあの錯乱の後を引き摺っているようにも見えない。

心なしか表情の明るくなった刃はそういえば、と話を転換した。

「私が囚われている間にも随分無茶しまくったみたいですね？」

周瑜さんも今までにないくらい、烈火の如く怒ってましたし、とか続ける刃の言葉で私の思考も刃の救出時にまで波及した。

「うぅ～、私だって考えなしにやったわけじゃないってば。だいたい、それを言ったら刃も無関係じゃないでしょ！」

そう、私がほとんど仕事から解放されないのには、今回の独断行動が大きく影響してる。

刃を探しに城内へ潜入したはいいけど、そこは劉表が玉座を置く一画の地下だったらしくて、逃げるのが遅れていたら危なかったんだとか。そんなことがあったからか、黄祖達の軍勢と戦った時のことも熱がぶり返して、

とどのつまりが、冥琳の怒りが大噴火、ってこと。

無茶はしたかもしれないけど、刃に言われるとなんか釈然としない。それに、未だにあの光とか突風がなんだったのかわからないし、刃は何か知ってる気がするんだけど。

「それはまぁ、そうですが……ううむ、難しいですね」

「難しい、って何が？」

「いえ、助けてもらったことは素直に嬉しいんですが、だからこそ心配というか」

「……え？」

今度は、私が目を見開くことになった。言われた意味はわかる、でもそれを刃が言っているというのが、どうも理解を遅らせてくる。

「……へぇ～、随分素直じゃない？」

「私の考えは全部まるっとお見通しみたいですからね、繕うだけ無駄でしょう？」

言って、笑う刃からはそんな殊勝さは全然感じられない。まったく、どこまで天邪鬼なのか。

それに、自分の口元が本心から緩んでいるのも誤魔化せてるかち

ょっと不安だ。

「ふふっ、まぁ心配はいりませんよ。私は一人じゃない、自分の過去、彼にもちゃんと向き合えそうですから」

「……むう、敵わないのはどっちよ」

重ねられた言葉に、もうふてくされるしかない。私が言いたかったことは既に察していたらしい。

どうにも簡単じゃない、まぁその方が面白くていいけど。

刃の過去、その支柱であったと言ってもいい人物、結城。

その彼との決別は、刃を一度狂わせ、今はどうなっているか私にはわからない。でも、少なくとも今の刃は私の知る刃のままだ。なら、聞くだけ無粋ってもんじゃない。

「もう、私は……」

小さく、声にならないほどの呟きはすぐに掻き消えて、私には届かない。でも、その表情は思わず息をのむくらいに穏やかだった。

さすがに気にしすぎなのかな？　いやいや、でも今回のこともあるし、刃には私がついていることをしっかり――

「こんなところにいたか、二人とも」

「ひゃあ！？　め、冥琳！？」

「……なんと淀みのない行動。人を盾にしないでください、雪蓮様」

思わず奇声を上げてしまったみたいだけど、そんなことを気にしてる場合じゃない。

突如現れた鬼――じゃなくて、冥琳から少しでも距離と壁を置くために刃の背中へ隠れる。……あれ、ちょっと前にも似たことがあったような。

「兄妹揃って盾にされるとはな……ともかく、安心しろ雪蓮、仕事に引き摺るため来たわけではない」

「……へ？　そうなの？」

「とある軍から使者が来ていてな、その件で上代も交えて話がしたい」

「私も、ですか？」

首をかしげる刃に眼鏡を直しながら肯定する冥琳、なんか呆れ半分、疲れ半分みたいな顔――あれ、結局いつも通りの顔か。

「ああ、お前の懸念していた事柄でもあるからな」

肩越しに刃が小さく息をのんだ様子が伝わってくる。

「……臥していた龍が、動き始めたらしい」

言葉と一緒に感じたのは、群雄割拠の世に落とされた新しい波紋。

そして、うねりの前の震え。

――ホントに、この乱世は退屈しない。

第３６章　ひと時の休息と生き抜く意志（後書き）

残っていた不明瞭なとこを消化して、新たな種を撒き撒き。主人公の歪みっぷりは仕様です（ぇ。王道な主人公とか書ける気がしない……ｏｒｚ

ううん、読者の方に展開とかトリックを全部エブリシングお見通しだ！　されていそうで怖い。個人的にはスリットよりまるっとの方が響き的に好きです。

とまぁ戯言はさておき、

アンケートっぽいもの、というのは最近増えに増えている字数についてです。案としては二つ。

?今の流れのまま、八千～一万字くらい。

?区切り方を変えて、四千～五千字くらい。

多分字数が減ると更新速度自体はちょっと向上するかもしれませんので、短くても頻度が増えた方がいい、とか、ちょっと今のままは長いよ、という方は?、

遅くても長々とした文の方が読みごたえがあっていいンだ、とか、むしろその三倍はもってこい！　という方は?という感じで感想などで教えていただけると嬉しいです。

ご意見のない場合は気分次第なので、どっちでもいいや、という方はスルーの方向で。

勿論、それ以外のご感想、ご指摘なども随時歓迎です。

第37章　宿敵≠好敵手

穏やかな静寂から戦場へと移り変わる前の静かな脈動。
それが確かに息づく荒野を挟んだ先、微動だにせず沈黙を守る城がそびえ立っている。

「……妙に、静かですね」

呟いた言葉は神妙な色を含んでいるようで、実はかなり呆れたものだ。隣の二人も同様なのだろう、片や不満げに息を吐き、もう一人にいたっては目を瞑り、頭痛を堪えるように額を押さえている。

眼前にある城、寿春城は袁術の居城に相違ない……と思いたい、いや若干以上に本気で。
多大な物量同士で単調に削り合うという愚かな戦いも、本拠を攻められ急ぎ戻った袁紹により中断されたはず。その上で先の宣戦布告は届いているはずだ、いくら袁紹軍との戦いで疲弊しているとはいえ、城までこうもあっさり進軍できるというのは少々以上に拍子抜け、というもの。拍子抜けついでに城門も開けっ放しにしてくれると嬉しいなぁ、雪蓮さんが暴れそうだけど。

まぁ、あっちからすれば皇帝を名乗った途端に袁紹と正面からぶつかることになり、それが去った後に反旗を翻されるのだからたまったものではないと思いますが。
とはいえ同情する気はないですね。引っ掛かった方が悪い、戦争は始まる前にチェックかけるのが基本なんだぜ、ってどっかの腹黒い人達が言ってた。

「逃げた、とかいうオチじゃないでしょうね？」

呟く我らが大将の声音には不機嫌さがしっかりとにじみ出ている。彼女達からすれば悲願成就の大一番、このまま不戦勝、というのはかなり不完全燃焼って感じなんでしょう。私としても停戦、ともすれば降伏の使者くらい来てもいいと思っていたんですが、それもないっていうのはさすがに相手する気力がコンマ0を切りそうな勢いだったり。

それに、今回の戦いで初めて指揮を揮おうという者もいるというのに。孫権さんもさすがにこれは想定外なんじゃないでしょうか。

まぁ、あたふたと落ち着きのなかった彼女には逆に良い効果を与えたかもしれない。かなり情けない話ではありますが、絵的には片眼鏡の端を持ち上げながら三白眼のジト目で見下す感じ。

あれ、案外似合うなぁ、と苦笑をもらしやや逃避気味に思い返すのは出陣前の一幕。

荊州での戦後処理が一段落したとはいえ、袁術との戦いに赴くにあたって全軍出撃、というわけにはいかない。結果、軍を分けることになり、同時に統率する者も選別する必要がある。

こと治政においては周瑜さんも文句なしだという孫権さんとその補佐に陸遜、軍の統括に甘寧さん、蔡瑁さんも政務のお手伝い、という具合に荊州や江都などに必要なだけの軍を残して出陣した、のはいいのですが。孫権さんから一つ提案、というよりお願いがあった。

それが、今まで彼女の親衛隊にいたという呂蒙について。その才能を見出した孫権さんが将として今回の戦いに随行させてほしい、

と願い出て雪蓮さんも快諾。

顔合わせ、と相成ったわけなのですが。

「亞莎、自己紹介を」

「は、はひっ！？　……わ、私、姓を呂、名を蒙、字は子明と申しましゅ！　……ぅあ、えと、その……」

元気の良い挨拶……というより動揺しまくってますね、噛んだし。しかも、眼光が鋭いこともあって、片眼鏡越しにもなかなか迫力が。これが射殺す目つき、というやつですか。

落ち着け、ここは大人の対応です……そこ、あんまり歳変わらないとか言わないでください。若い時の数年は大きいンですよ？

「これはどうもご丁寧に。私は――」

「か、上代刃様ですよねっ！」

「え、ええ……よく御存知――」

「はいっ！　よく見知って――あ、ご、ごめんなさい。き、緊張してしまって……」

……ものの見事に圧倒されました。茶の髪は後ろで二つ、団子のようにまとめられ、それが体の動きと共に跳ねる。あたふたしたと思ったら次は赤くなって縮こまる、なんとも忙しい子のようです。

「すまない、彼女は極度の恥ずかしがり屋でな」

孫権さんが苦笑しながら続ける。なんでも灯理や明命などの歳が近い子とは普通に話せるが、初対面だったり、雪蓮さんや周瑜さんとか相手だと過剰に緊張してしまうのだとか。

「あうぅ……す、すみません」

「なに、おいおい慣れていけばいいでしょう。頼りにしていますよ、呂蒙？」

言って、差し出した手をしばらく見つめていた呂蒙も、おずおずとその手をとった。

「よ、よろしくお願いします、上代様」

「刃、で結構ですよ。義理でも灯理の兄です、気軽に接してくれると私も嬉しいんですが」

「あ……はい。じゃ、じゃあ、刃……さん、宜しくお願いします」

うむ、と大仰に頷く私を見て多少は緊張が和らいだのか呂蒙の口から笑みがこぼれる。

「……さすがね、随分扱いが上手いじゃない？」

「その言い方は語弊を招きませんか、孫権様？」

「冗談だ、それではよろしく頼むぞ」

釈然としない様子で口調を切り替えた孫権さんが去っていく中、

「……呂蒙？　どうしました？」

「あ、え、そのっ……」

口籠る呂蒙の目はつながれた手に向けられている。そして、心なしか顔が赤い？

「あ、すみません。時期を逸してしまって」

「い、いえ！　大丈夫ですっ！」

謝る私に、再びあたふたしだす呂蒙。

……打ち解けるのにはもっと時間が必要らしい。

灯理が補佐について指揮を手助けするらしいですが……ううん、心配だ。

と、そんなことを考えている間に、やっと寿春城が不気味な沈黙を破って動きを見せ始めた。

驚きだ。多分に居留守を決めこむ腹積もりだと信じていたのですが。……いや、考えてみればそれを信じるってのも無理があるか。

「城門、開きましたね」

「……まさかとは思うが、戦うつもりなのか？」

旗が掲げられ、武装した軍勢が広がるのを見て、驚天動地すら超えた諦観の境地気味に呟く苦労性の大軍師。

ええまぁ、気持ちはよくわかりますよ。斥候による索敵を怠り、眼前に敵が現れてやっと動き始める鈍重さ、さらにはこの状況で籠城戦をあっさり捨てた速断……袁術軍の綻びもここに極まれりというところですか。

「……わかってたこととはいえ、こんな相手の下で雌伏の時を過ごしてたっていうのは結構ムカつくわね」

「……ああ、沸々と湧き上がる怒りというものを久々に感じた気がするな」

おおう、二人の怒りがちょっと違うベクトルで燃え上がりつつありますね。

そうでもしないとやってられない、ってのが正直大きいようにも思えますけども。しかもそれが孫策軍全体に飛び火していっているような気配が。

「隊長、ちょっと抑えがきかないかもしんない。隊の総指揮はあの馬鹿に放り投げていいかな？」

二槍を携えた隊長補佐の言葉に苦笑いがもれる。ちょっと、で済めば御の字ですね、これは。

「存分に、力を揮ってもらって構いませんよ。これでも一応隊の長です。指揮は私が受け持ちますから」

「え、隊長には別の役目があるんじゃない？」

え、初耳なんですが？

驚き、首をかしげる私に向かって目線で訴えかける彼女。その先

には、

「よっし、行くわよ、刃！」

「……ああ、なるほど」

我が主様の顔には、当然のように背中を任せる気がありありと浮かんでいた。いや、それよりまた最前線で暴れる気満々なんですが？

「上代、言葉にする必要はないな？」

って、止めるどころか重大な役目を放り投げてよこしましたよ、この大軍師っ！？

しかも誰も異を唱えることなく、号令待ちに入ってるってどういう――

「――――剣を抜け、孫呉の勇士、我が同胞よ！　我らが舐めた艱難辛苦、全てを糧として今こそその誇りを取り戻す！　意志を刃に、怨嗟を穂先に、矜持を鏃にッ！　身を焦がし、命を賭けろ！　ただひたすらに敵の喉元を噛み砕け！　――――全軍、突撃せよ！！」

私の異論を完全に封殺した英雄の大号令。

獲物を指し示すかのように突きつけられた彼女の剣は怒りを伴った猛獣達を迷いなく進ませる絶対の指針だ。

巻き上がる気勢、地を震わし、血を燃やす怒号。そんな中、筆頭軍師が私へ放ったのはたった一言の作戦とも呼べない指令。

「“蒼狗”――食い破れ」

「……御意」

息を吐き、小さく肩をすくめた私は、自分の仕草を顧みて一つ笑った。

なるほど、確かに悪い気はしていないかもしれませんね。

腰の黒鬼に手をかけた。鉄の擦れる音が響く、抜き放つ頃にはその甘美な音色に酔いしれ、日常から非日常へと意識を乖離させる。

それはただ、自分の守るモノのために敵を食い千切る猟犬のように。

熱気ににじみ始めた戦場を背にこちらを振り返る英雄の笑みはどこまでも獰猛に、そして放たれた問いは抑えのきかない灼ける愉悦を込めて。

「刃、振り向くつもりはないわよ？」

「上等、私も貴女の背に敵を立たせるつもりはありません」

虎と狗、二つの咆哮によって、戦端は破られた。

＊

Ｓｉｄｅ程普

解き放たれた孫呉の烈士に女傑達。

願いへと突き進む皆の士気は対する軍を丸ごと呑みこんでいた。
そんな状況での戦いが対等な戦いであるわけもなく、戦いという言葉が瓦解しないようにと敵軍兵士の奮戦で持ちこたえているような様相になっている。

予想を遥かに超える袁術軍の愚鈍さは、袁紹軍との戦いを経たという点を考慮してもあり得るものではなかった。勿論それがなくても私達、孫策軍の勝利は揺るがないと信じているけど。

戦術を思案するよりも先に、戦略を組み立てろ、というのは私に多くを教授してくれた冥琳様の言葉。それは兵法の基本、常道にも通じる。
前提というのは重要だ、どんな名将であろうと勝てない戦は存在する。だからこそ見据えるのは戦いの先の先、大局の流れ。

とか、持論を口にしてみても、

「――は、ッ！」

気迫を込めた蛇矛の一撃は眼前に迫る兵士を薙ぎ倒す。

結局、事ここに至っては己の武勇によって敵を倒し、戦術によって殲滅することにこそ意識を集中しなきゃ駄目なんだけど。

「あ、灯理さん！　敵の勢いが増してきました、迎撃地点まで退きましょう！」

隣にいるのは今回私達の部隊の主な指揮を執ることになった亞莎ちゃん。私はその補佐という立場なのだけれど、蓮華様や冥琳様が言っていた以上に指揮が的確でちょっとビックリした。状況の把握、

先を読む洞察力に応用力も高い……私もまだまだ精進しないと。

「うーん、もう少しだけ前進してからにしよう。大丈夫だとは思うけど、今退くと敵に勘付かれる可能性もあるから」

「わ、わかりました！」

でも、まだ冷静な視野がぼやけ気味で、判断に焦りがあるかも。経験で補えることだから時間が解決してくれると思うけど。

続く敵を薙ぎ倒しながら、迎撃地点を一瞥する。もう祭様の部隊は準備完了みたい――あ、一緒に戦場に出たシャオ様も隣にいる。……うん、それだけでも自分の中に変化を感じる。姿を見るだけで活力を与えてくれるシャオ様はこの軍、ううん、この孫呉という家族になくてはならない人だろう。それに以前見た弓の腕前、いずれは雪蓮様のような大将になることだって――

「――ッ、と！」

迫る凶刃。身を反らしてかわし、蛇矛で叩き落とす。少し掠ったのか、鎖骨の辺りに薄い朱が走った。

いけない、意識を集中しなくちゃ。亞莎ちゃんの方を見ると危なげなく手甲、人解（れんげ）で刃をいなし、袖から取り出した暗器で敵を刺し貫いている。さすがに思春様の調練を受けただけはある、かな。

……にしても、困った。

敵の勢いがどんどん増してきてる。こちらの考えを読んだ上でのものではないだろうけど、時期が悪い。さっき退かなかったのも、このまま退けば、こちらの被害が大きくなってしまうから。被害も

覚悟で退くのは簡単だけど……。

「――――ぇ、っ……！？」

そこへ、猛然と現れたのは周囲の敵すべてをひれ伏させる青藍の閃光。

円の軌道を走った光は吹き荒ぶ風と共に敵を地へ叩き付け、その中心へ立つのは吸い込まれるような藍色を纏った女の人。

「お、っと怪我とかない？　かわいい将軍様」

よく見知った、兄さんの隊で隊長補佐をしている人だった。

軽く手を上げて微笑んでいたのも束の間、腰を落とし、次の瞬間には戦場を飛ぶように翔け、剛槍を敵兵へ無慈悲に突き立てる猛禽と化していた。

「灯理さん！」

「――あ、うん！　今のうちに退こう！」

さらに、続く上代隊の面々によって戦線は押し戻され、退くだけの猶予が作り出されている。

我に返った私は呼びかける亞莎ちゃんに頷きを一つ返すと、隊へ退却の号令をかけた。

「助かりました。ありがとうございます」

「いいよ、兄馬鹿で有名な隊長の妹様だしね。何かあったら殺され

る」

並走しながらの礼に茶化すような答えが返ってくる。嬉しいは嬉しいんだけれど、改めて人に言われると恥ずかしい……と、それより、

「あの、右翼の方はいいんですか？　それに兄さんの姿が――」

上代隊は右からの横撃へ加わる予定のはずだ、なにより統括する兄の姿がない。

問いを聞いた副長さんは頬をかき困ったような顔になるけど、すぐに諦めたのか疲れた口調で話し始めた。

「ああ、横撃の方はあの飛将軍が無茶苦茶やってるってことで隊の半分をこっちにまわすよう周瑜様が指示したんだ。あと隊長なら、あれだよ」

言い終わって指された先は、最前線で一際大きな怒号があがる激戦の真っただ中。

少し不安が鎌首をもたげたけど、なぜか、そこに雪蓮様もいるような気がして、それは霧散した。不思議な感じだ、普通なら心配する要素が増えたように思えるのにそんな気配はまったくない。

「変な、感覚。……うん、私も頑張らないと」

雪蓮様の凄さを再確認させられつつ、気合いを入れなおすように胸の前で両手をぐっと握る。

「あっ……」

そんな私の動きで飛んだのか、袖に赤い紋様が散った。さっきの傷かな、と胸元に視線を落とすと戦いの高揚感も手伝ってか目につくくらいには血が広がっている。最近過保護な一面が目立つ兄が見落とすとも思えない。

出陣前にも私と亞莎ちゃんのこと心配してたしなぁ……。

応急措置くらいはしておくつもりだけど、誤魔化しきれる自信はない、というところまで考えて自分の失敗に苦笑する。

「私がちょっと楽天的すぎなのかな」

心配性な兄妹を持つと大変だなぁ、とそれでもどこか嬉しく思う私は、無自覚に二人とも無事戦いを生き抜くことを前提としていることに、もう一つ苦笑をもらさざるをえなかった。

第３７章　宿敵≠好敵手（後書き）

とりあえず試験的に５千字前後で投稿。
長さについては随時気になった時にでも感想などで教えていただければ嬉しいです。

孔明の罠（？）は水面下で進行中、のはず（ぇ
簡単に見抜かれそうで内心戦々恐々としてます、はい。

感想などはいつでも大歓迎なのでよろしければ是非お願いします。

第３８章　蒼眼主従、双騎駆け（前書き）

区切りを変えて少し更新速度上昇、です。

第３８章　蒼眼主従、双騎駆け

Ｓｉｄｅ孫策

戦場を駆ける熱、そして私の悪癖ともいうべき高揚感。普段であれば過剰になってしまうそれも今はほどよく、我を見失うことなんて考えられないほど安定していた。

理由なんて考えるまでもない、後ろを振り向くことなく、でも強く感じる。私を後ろから包み込むような気配、自分でもなぜこんなに信頼を置いているのかはわからない。それこそ私が得意とする“勘”か、それに近いものからくる絶対の根拠。

「――くくっ、あはははっ！　こんなに愉しい気分はホント久しぶり、ッ！」

南海覇王が躍る、血の付着すら許さず突き抜ける煌めきはどこまでも私を高みへ跳ね上げていく。腕も、脚も、疲れなど知らず自ら躍動しているんじゃないかと思うほど。

喰らいつき、押し通す。

狂ったように声がこみ上げてくる。高い哄笑と深い三日月のように裂けた口元、自分が自分で抑えきれない感覚。

「貴ッ、様、孫策ッ！？」

前線を駆ける私たちに向けられる目は非常識な存在への驚愕。しかし、それはすぐに恐怖に変わる。

声を上げた指揮官らしき男も、次々に斬り伏せられていく部下に

物怖じして足を下げた。しかし、腐っても、疲弊しようと名家を支える精兵の一人、すぐに剣を持ち直して迎撃の構えをとる。

「く、そ、舐めるなッ！」

「くッ、ふふっ、そう焦らなくても今の私は最高に気分が良いの、ちゃんと殺してあげるから……！」

振りぬかれた敵兵の剣は身を宙に躍らせ、距離を空けることで空を斬った。着地と同時に愛刀を一振り、べとついた紅い油を地へと散らして言葉を紡ぐ私の口は破裂しそうな哄笑を必死で抑えている。

「き、さま――なッ！？」

凶暴な笑み、そして敵を屠らんと動こうとした私の体は、寸でのところで止まることになった。

その身が胴を境に分かれ、倒れ伏す敵士官。視認を許さない速さ、問答無用で断ち切る鋭さ、興を殺がれかねない現象もその正体を知ればこそ笑い声を一つ漏らし、再び駆け始めた。

「やるじゃない、刃」

「は、っ。本当に、これ以上ないくらい大変な役を買ってしまった気がするんですが！？」

感じる息遣い、視界をかすめる数重の軌跡。敵の鏃を叩き落とし、刃を斬り落とし、人の壁すらも一閃で斬り開かれる。

互いの顔は見ずに、それでも私には刃の獰猛な笑みが、呼吸が感じられた。その証拠に、

「数人しかついてきてないみたいだけど、ッ！　どうする、退く？」

「ッチ、そんな気はないでしょうに！　私、一人では不満だとでも！？」

ンなわけないでしょ、とさらに笑みを深める。

刃の部隊から選りすぐった精兵達がいることすら邪魔だと思う私自身を笑う、さすがに自分勝手が過ぎるか。

しかし、自分で自分の勘に驚かされることがあるとは思わなかった。

初めて会った時から妙に気になった男だ、ただの優男ではないことは確信していたが、なるほど内には私と一緒に駆けるだけの気概が隠れていたわけだ。

「馬ッ鹿、そこは私の背を守る栄誉を一人占めしたい、くらい言えないの！？」

「はぁっ！？　……ああもう、それでいいですよッ！」

くつくつ、と押し殺すような私の笑みに刃の太刀筋がさらに速く、鋭くなったように感じる。無我夢中、改めて戦場って怖くて、それ以上に愉しい。

そろそろ私達の部隊と横から突き崩す呂布達の部隊が結ばれる。疲弊した袁術軍にこの猛進はどう見えるのだろうか。

競うように駆けながらも、刃の指示で左翼へ向かう部隊は後退する敵軍を挟撃する位置にいる。祭とシャオの迎撃部隊の攻撃を受け

たんだろう、すでに崩れる寸前といった風で退く彼らに待ち構える我が軍を抜けるとは思えない。

「私の護衛、か」

さすが冥琳、ってとこね。珍しく私の判断をそのまま受け入れたのにも、その役目をまっとうできる適任者がいたからだろうし。

その身を盾にして付き従う護衛なんていても私の動きを妨げるだけ、十全な力を発揮するなら今以上をおいて無い。

すでに護り、護られるという感覚自体ない。いや、事実そんなぬるい動きなんてしていないのだ、二人の剣はただ前に立つモノを斬り殺し、その数を競うかのように積み上げていく。

もちろん不満なんてあるわけないし、どうせ言ったところで、

「貴女が護られるような戦い方をしてますかっ！　それに、どうせそんな腑抜けたこと望まないんでしょう!?」

うん、やっぱりよくわかってる。だからこそ、私も久々に好き勝手暴れられるってものだ。

「ふふっ、心を読まないでよ――っと？　……あそこ、もうすぐ崩れるわね」

肌で感じた戦況の微妙な変化、この感じは……指揮官でも討たれたか。視線を巡らせて、最短で突き進む道筋を導き出す。

冥琳の作戦ではもう少し広く包囲するはずだけど……。

「ねぇ、より良い戦術をとるのは将として当然よね？」

「……正気ですか？　そろそろ周瑜さんの血管千切れますよ、ホントに」

なんで妥協できないんですか、とこぼしつつも刃の目は決して止めようという色は見えてこなかった。

「最短で突破するわよ、ついてこれる？」

「心にもないことを、並び駆ければいいんでしょう？」

「さっすが、じゃあ冥琳のとこまで一蓮托生ね」

「……早くも意志が折れそうです」

揃って一歩踏み出し、舞った二筋の光の帯。

鮮やかな赤を散らし、それを合図に再び二人の英傑は己が誇りと信念を以て、戦場を駆ける。

その圧倒的な蹂躙に逃げ惑う兵士達。

その多くが刃の刀の意匠に目を留め、化け物だの鬼だのと騒ぎ始めたのはまた別の話。ちなみにその後刃の太刀筋に容赦がなくなったのもまた別の話。

う～ん、私は格好いいと思うけどなぁ……って、何も泣きそうにならなくてもいいのに。

＊

先の戦いで疲弊していた上に、独立への気勢燃え上がる孫策軍を相手にした袁術軍はなす術もなく完全敗北を喫した。

雪蓮さんと恋、二人の英雄が切り裂いた主力部隊は怒涛の勢いで迫る中軍によって包囲殲滅。残る軍勢も呂蒙の指揮や黄蓋さんの部隊による一斉掃射によって敗走を余儀なくされ、さらに続く挟撃で散り散りに壊走した。

そして、門を突破して城下を制圧した私達が残すのはあと城内の制圧と袁術と張勲の捕縛又は首級のみだ。

というか、総大将はともかく大将軍くらい戦場で捕えられそうなもんなんですが……逃げ足が速かったのか、そもそも途中で匙(さじ)を投げたか。

先行した隠密部隊とは別に部隊を分けて城内を制圧、捜索する私は、而して少し特殊な手法を取ってその姿を探していた。

「刃～」

「ん、見つかりましたか？」

「もっちろん、金髪の子供と蒼髪の女でしょ？」

歩みは止めないままで飛んできた小さな少女、鳳凰の報告を聞く。

さすが物理的障壁を無視できるだけのことはある、結果は大当たり、といったところですね。どんなセキュリティにも縛られない、そこに痺れる、憧れ……たら人として最低な気がするので、それはないですけど。

ともあれ逃走する彼女達の道を塞ぐように案内を辿る、もちろん方法的な意味合いから単騎。しかし……なんて理に適った逃走経路と素早い行動だろう、その能力がもう少し軍略とか政務に活かされれば……割を食うのは私達でしたね、僥倖でした。

そして、徐々に聞こえてくるのは覚えのある声。

「美羽様！　急いでください、追いつかれちゃいますよ！」

「はっ、はぁ……七乃～、妾はもう走れないのじゃ～！」

「う～ん、でもここにいたら孫策さんとか上代さんに食べられちゃいますよ～？」

待ってください、それはどういう意味ですか？　いや、概ね悪い方向のものであることはわかりますが。

「うう……あ、蜂蜜水があれば頑張れそうな気がするのじゃ！」

「こんな状況でも欲望に忠実な美羽様、素敵です！　――とか言ってる場合じゃないんですよ！　美羽様が可愛いのは事実ですけど」

ううん、袁術は幼く、張勲に関しては溺愛が間違った方向へ突き抜けているのが問題ですねぇ。それがなければなかなかに優秀でしょうに、まぁ大将軍の器ではありませんが。

「事実、こんなに近づくまで私に気付いていませんしね」

「へ？　……あ」

「おお、上代久しぶりなのじゃ！」

「ええ、お久しぶりです」

沈黙。

うーん、やっぱり軍を統べる者として武が突き抜けて必要でないとはいえ、至近距離まで近づいてやっと、というのはちょっと――

「……きゃーーーっ！！　上代さん！？　お、美味しく頂かれるっ！？」

「いきなり人聞きが悪すぎませんかっ！？」

「なっ、わ、妾は食べても美味しくないのじゃ！　見逃してたも！」

「こっちはすでに人に言う言葉じゃないっ！？」

二人の中の私っていったい……。

「くっ、美羽様は私がお守りします！　たぁーっ！」

ストン、と抜き放たれた張勲の剣は半ばから折れ、その切っ先を床に落とした。いくら腰の入っていない斬撃だろうと斬られてはたまりませんし。

「え、あれ？」

少しの間呆けていた張勲も私の一太刀で斬り落とされたことに気付き、その顔を蒼白へ変えた。袁術に至っては何がどうなったのか

も理解できていない。

床に膝をつき、袁術を抱える張勲の目を見て、一つ息を吐いた。

あまり、気分のいいものではないですね。

それでも、私がすることは一つ、腰に携えていた縄を取り出して――

「そ、その縄で何をするつもりですか!?　美羽様から離れてください、この変態！　幼女趣味！」

「なっ!?　いろいろ誤解ですっ！　私はただ孫策様達のために――」

「うわぁ、孫策さんに責任転嫁して正当化するなんて……すみません美羽様、こんな下衆に美羽様の純潔が……」

えっ、なんで私の心証が急降下しているんですか!?

「刃、なに騒いで……って袁術と張勲じゃない」

「ひぃ！　そ、孫策!?」

「うわーん、虎女まで来ちゃいましたぁ！」

と、そこへ脈絡なく登場したのは雪蓮さん。そしてさらに怯える袁術と張勲。

「むう、失礼な反応ね。人を人間じゃないみたいに」

どうやら彼女達の中では頭からガブリ、といくイメージみたいですよ、とは言えませんでした、わざわざ自分で火種を撒く気はないです。

「わ、妾達をどうするつもりなのじゃ！？」

「どうする、ってそんなの決まってるじゃない」

言って、腰の鞘から抜き放たれた南海覇王。その冷艶な輝きは、それが命を刈り取るものであることを如実に物語っていた。

「ひぅ！　な、七乃、助けるのじゃ！」

「鬼！　悪魔！　人でなし！」

「あ、ちょっと本気で殺したくなったかも」

「七乃ぉ！！」

「ええっ！？」

なんだろう、この妙な雰囲気。というか、

「あの……まさか」

「ん～、なんか馬鹿馬鹿しくなってきちゃったし、逃げていいわよ」

「ちょっ、孫策さん！？」

案の定、またしても突飛なことを言いだした主様に思わず声を上

げる。そして頭部を襲う衝撃、うう……今の失言は不可抗力なのに。

「はぇ？　じゃ、じゃあ……妾たちを、助けてくれるのかえ？」

「ただし、二度と私の前に姿を現さないようにしなさい。もう一度会ったら、多分殺しちゃうから」

「は、はいっ！　むしろ顔を合わせるとかこっちから願い下げですっ！」

「そう、じゃあ早く逃げたら？　私はともかく、他の誰かに見つかったら……」

「な、七乃！　逃げるのじゃ！」

風をきる音が聞こえるほどの勢いで逃げていく二人。脱兎ってあいうことを言うんでしょうね、そりゃ一兎をも得られないわけですよ、っとそんなことより。

視線を移して一つ、溜息を吐く。

「よかったんですか？」

「うーん、権力とか財力を失った二人が何かできるとも思えないし、いいんじゃない？」

また適当な……。

「刃は、殺すつもりだったんでしょ？」

「当たり前でしょう、それが当然の義務です」

「やっぱり……」

むう、この状況で私が呆れられるとは……何か理由でもあるんでしょうか？

「――さて、ともかく呉の地は取り戻せたわけだし、悲願成就ね」

「なんというか、締まりませんね。まぁやることも山積みですし、大変なのはこれからですが。さしあたっては……周泰、全員捕縛できましたか？」

「はうわっ！？　ばれてましたっ！」

出づらい空気だったのは認めますよ、うん。

彼女を筆頭に隠密部隊には袁術や張勲の下で膨らんだ膿を捕縛する任が与えられている。末端はともかく元となる者は高官だ、素性は割れてます。

「えっと、大丈夫です。全員捕まえました」

「それらは適当に処理して、ともかく荒れた街の復興ですね」

「刃は迎えの準備ね」

「御意です」

短く答えた口が少し綻んでいるのを自覚する。

なんだかんだで彼らのことは気になっていた、ということか。掲げた理想、それが今も貫かれているのか、未完の器が今どれほどのものか、興味は尽きない。道が分かたれた以上その成長が脅威足りえるものだとわかっていても、愉しみであるのだから我ながら性質の悪い話だ。

それに、私が最も警戒し、それでいて最も信頼する彼女は――

「あ、あの」

思考の中へ埋没しようとする私を、周泰の声が引き戻す。

はて、どことなく言いづらそうな雰囲気ですが……。

「お二人には、その前にやることが残ってるんじゃ……」

『え？』

「そういうことだ。わざわざ言葉にするまでもないだろう？」

どこかで聞いた台詞と、肩に感じる鷲の如き握力。

「あ、私急いで準備に移らないといけないので失礼します！」

「酷っ！　私との約束は！？」

あはは、何を言っているんでしょうこの御方は。

この悪魔の如き怒りを前に私の意志が折れないわけがないじゃないですか。

「って、あれ、なんで離してくれないんですか周瑜さんっ！？　え、ちょ、待――」

無言で引き摺る彼女は言葉通り応対するつもりがないらしい。隣の雪蓮さんもうんうん頷いていますが、貴女も同じ末路を辿ることに気が付いているのでしょうか？

こうして孫呉の地は取り戻され、長い雌伏の時は終わりを迎えた。最後にお説教という、なんとも締まらない形で。

第３８章　蒼眼主従、双騎駆け（後書き）

更新が少し早めにできて嬉しい、のですが。次回のメドは立ってなかったりします（オイ

ううん、週一更新くらいできればなぁ……。まぁ生活の方が忙しいこともありますが、仕方ないね、師走ですしね（ぇ

余談、最近戦闘描写に改めて苦戦中です。

第３９章　如魚得水　～　錯綜する想い（前書き）

久方ぶりの更新となり申し訳ありません。少々立て込んでおりまして。

では新年最初の投稿、第３９章です。

第３９章　如魚得水　～　錯綜する想い

Ｓｉｄｅ曹操

私がこの乱世を統一するために布いた覇道。そして、その理想へ大きく躍進させる戦い。

得てして自分に大きな利益を与える事象は望外、というだけあって突飛で偶然であることが多い。棚上げしておいた問題からぼた餅が落ちてきた、というやつだろうか。

いくら天運が唐突で制御できなくとも、もとより運の趨勢すらねじ伏せるための研鑽と才能を結集している、私の心が揺らぐはずもない。

しかし、それでも袁本初が有する軍勢はそれを覆すだけの単純で圧倒的な力を持つ。現当主がいかに大器たりえないとはいえ、名高い袁家の力はいまだに有象無象の群雄とは一線を画す大勢力だ。

連綿と続いてきた袁家の底はちょっとやそっとでは見えようもない、実力に裏打ちされた深さを誇る。兵力に財力、単純な国力なら富国強兵策により力を蓄えた我ら曹操軍すら圧倒するほどに。

間違いなく、私の覇道を妨げる大きな障害。そして彼の地、冀州は天下に覇を唱えるにあたって、手に入れておきたい要衝でもある。

先だって警戒すべき難敵、馬騰との戦いに勝利した私は涼州の併呑を進める中で飛び込んだ報告に耳を疑った。

『袁紹が袁術へ宣戦した』

袁術の客将である孫策、袁紹と友好関係にある劉表、さらには徐州の劉備をも巻き込んで起こったのは乱世の二大勢力による激突。

麗羽などは公孫?の治める幽州へと侵攻したばかりだというのに、これじゃせっかくの情報収集もほとんど用をなさない。

無駄に力を持っている上に短慮……相変わらず厄介な奴ね、と呆れこそしたものの、これはそんな単純なことでもなければ、見過ごせるような好機でもない。反董卓連合以来の大きな転機。

急遽私の覇道を支える腹心と、この戦いに渦巻く真意を見極めるための情報を集めさせた。

集めた情報の中、私の目を引いたのは戦いとはまったく関係のないはずのもの。

――上代刃。

行方の知れなかったあの男が孫策軍に籍を置いている。

袁術の皇帝僭称に、孫策軍の行動が迅速に過ぎること……奴のいる孫策軍を中心にすれば奇妙な点も目につく。

それに孫策が袁術の下で腐る気など微塵もないことは以前会った際に充分見て取れた。

そして我が軍師程?の、自身が上代刃と同じ立場であった場合を問いかけた時に放たれた一言、

「んん～、風なら迷家は迷家同士潰し合ってもらおうとしますね～、ちょうどどちらが勝っても互いに被害は甚大になるでしょうし～」

「なるほど、ね……でもどうやってそんな真似をしたのかしら?」

「……ぐぅ～」

『寝るなっ！』

「おおっ！　……そうですね～、あの二人は共通して名誉欲が強いですし、世迷言を言わせる根拠、それに足る“物”などを渡せばいいのではないでしょうか～」

「……桂花、そういう類の情報は？」

「はっ、袁術が皇帝を僭称するにあたって伝国璽を盾に取った、と。袁術自身が声を大にして流布している節もあり信憑性は保証できるかと思います」

「そう……」

利用された物は予想の範囲内ではあったが、それでも驚愕がないと言えば嘘になる。紛失したはずの伝国璽、それを利用し、この私すらも利用できる可能性として考慮する。

面白い。なら……今は乗ってやりましょう、でもただ思いのままに動くのでは癪だ。

「とるべき道は定まったわ。これより我が軍は袁紹軍の本拠へと進軍する、各自出陣の準備を始めなさい」

『はっ！』

一際元気よく声を発したのは春蘭。

隣に控えながらも会話の内容を終始理解できていなかった彼女も

倒すべき敵が定まりその目を輝かせている。ふふっ、可愛いわね。

「姉者は可愛いなぁ……」

それを慈愛の目で見るのは奇しくも同じ思いを抱いた秋蘭。自身の右腕達を微笑ましく思いながらも、最後に付け加える一言は彼らの不遜な策へ。

「我が軍が掴むのはただの勝利に非ず。我が覇道、見せつけてやりましょう」

その言葉を期待の表れととったのか、返るのはさらに力強い腹心達の声。

「私を、ね……高くつくわよ、上代」

＊

Ｓｉｄｅ諸葛亮

「……ふぅ」

大きな広間、その円卓で思案する私は一つ息を漏らすと巡っていた思考を切り上げた。

手元の書簡に目を落とし、改めて準備の手抜かりがないことを確認。積まれた書簡を整理しようとして

――紙の擦れる小さな音と共に感じた微風――鼓動が跳ね、身体

が硬直する。

遠い過去のようで、実際はそう遠くない既視感。時折、暇を見て私と雛里ちゃんの政務を手伝ってくれた、

「お疲れ、朱里」

「っ、あ……はい、お疲れ様です」

「？」

ちょっと物思いに耽り過ぎたかもしれない、ありえるわけもないのに。

緊張して固くなった体をほぐすように深呼吸、現れた人物へ応対する。少し疑問を浮かべるだけで追及されなかったのは良かったけど、見ればその後ろには雛里ちゃんと詠さんもいる、二人とも鋭いし特に雛里ちゃんには見透かされていそうだ。

「ごしゅじ――か、一刀様はどうしてここに？」

気が抜けているからか、以前の呼び方が口をついて出そうになる。返ってくるのは三人の苦笑。

うぅ……恥ずかしい、こんなことだから“はわわ軍師”なんて呼ばれるのかな……？

「ああ、今回のことの最終チェックを朱里がやってる、って雛里に聞いてさ」

「ちぇっく？」

一刀様は時折故郷の――天の国の言葉を使うけれど、なかなか慣れることができない。

私の呆けた様子に気付いた一刀様はすぐ苦笑いを浮かべながら確認のことだよ、と言葉を付け足した。

「で……えっと、朱里ここは」

最終確認、書簡へ目を通す一刀様の質疑へ応答しながら心は少しずつ落ち着きを取り戻していく。もともとほとんどの事柄に関わる案件の認可に携わる立場なだけあって、質疑はその細部、細々とした確認とさらには私や雛里ちゃん達の観点をまじえた見通しに集中している。

それも簡潔な受け答えで済むのは偏に一刀様が学問書を読みこみ、私達を先達として教わり身につけたからに他ならない。桃香様の成長にも驚かされたけれど、一刀様も見違えるような変化を遂げた、根底は変わらないまでもその意志の強さは以前と比べものにならない。

そして、そのきっかけは多分、

「やることはやったし、あとは天命次第、だな」

「なに言ってんのよ馬鹿、どう転んでもいいよう次善を周到に用意するのが軍師でしょ」

「ま、まぁそうだけど、ほら俺はまだ見習いだしさ」

「それは甘えって言うのよ。自分の立場わかってんの？」

「ぐ、むう、詠は手厳しいなぁ。ん、どうかした朱里？」

はわわ、視線に気づかれてしまった。相変わらず一刀様は変な時に鋭い。しかもちょっと口元が笑っていたのも自覚して少し顔が熱くなってきたような、

「……いえ、その、一刀様も頼もしくなって嬉しいな、と思ったんです」

「えっ、ホントか？　はは、そう言ってもらえると俺も嬉しいな」

「喜ぶのはいいけど、アンタ私がなんでここにいるかわかってる？」

「うぐっ……」

どういうことだろう？

詠さんの言葉に首をかしげていると、いつの間にか隣で書簡をせっせとまとめていた雛里ちゃんが補足してくれた。

「一刀様、自分の仕事がまだ残ってて、詠さんが探しにきたんだよ。えと、最終確認だけしてから戻る、って説得してたんだけど」

突き刺さる三つの視線、もう一つ唸った一刀様は渋々踵を返すと、うな垂れながら執務室へ向かっていった。

う～ん、指導者としての成長は嬉しいんだけど、二人とも魔が差し易いのはちょっと問題かもしれない。愛紗さんが怒って城内を探し回るのも恒例になっている節があるし。

……でも、その時間街に出ていたことを咎めるのは難しいかな。それはあの二人の生来的な問題でもある。それに、

「にしても、よくあんな真似が通ったものよね」

「あはは……それも人望、ということなのかもしれないですね」

書簡をめくって言う詠さんに苦笑いで対応する、桃香様の行動はさすがに私も予想できなかった。しかもそれで道理を通してしまうんだから桃香様らしい。

追従する民草の多さ、そして領民ほとんどに無茶な行動を受け入れてもらえる圧倒的人心掌握。曹操さんのような積み上げられた実力と実績による泰然とした自信、孫策さんが持つ限りない慈愛と苛烈な強さが生み出す誇り、系統は違うけれどそれらに匹敵する力、人を惹きつける魅力を花咲かせる可能性が垣間見える。

でも確かに、あんな必死な桃香様を見ればこそ私も不自然に思わないのだろう。それは桃香様が未だ成熟しきっていないまでも天賦の才を持っていることの何よりの証左なんだと私は思う。

「通らなかったらどうしよう、ってちょっと不安だったけど……」

良かった、と胸をなで下ろす雛里ちゃんの表情は心底安堵に満ちていた。

今回の選択で、桃香様は己の手で叶える理想を持ったことが嬉しいというのもあるのだろう。でも、そうなれば本当に問題なのはここから。

「詠さん、今回の謀(はかりごと)ってやっぱり……」

「……多分、ね。アイツらしいやり口だし、国璽を手に入れるのも可能、疑うまでもないくらいだと思うけど」

呟く詠さんの口調はどこか苦々しい。それはまるで、自分の守るべき人と自分と共にその人を守る者が対峙してしまうことを怖れるような。

いや、それは自分とて同じか。だからこそ、そんな微細な機微を把握できてしまうのだから。

「とりあえず、朱里ちゃんの提示した条件で対等に交渉できると思う。でも、」

「気は抜けないわね。まぁどっちにしろ、アイツの前で隙なんて見せられないのは変わんないでしょ？」

『む……』

「……あ、いや、今のは、えと」

雛里ちゃんの言葉を継いだ詠さんのぶっきらぼうな言い方に雛里ちゃんの眉尻が下がる。ちょっと便乗して視線を送ってみると、どうやら効果覿面だったらしい、その顔が困惑に彩られていく。

やがて、悪かったわよ、とバツが悪そうに謝罪する詠さんはしかし、やられっぱなしで終わる人じゃなかった。

「それにしても、アンタ達も不運よね。この軍の色情魔も大概鈍感だけど、アイツにいたっては人誑しな上に何考えてるかわかんないんだからなおさら性質が悪い、でしょ？」

「はわわっ!?　にゃ、にゃに言ってるんですか、詠さん！」

「あわわっ!?　わ、私は別にそんにゃこと思ってないでしゅ！」

急いで否定するも、うまく舌が回らず動揺を如実に表現してしまうのだから自分の舌足らずを恨みたくなる。
うぅ、下手に手を出していい相手じゃないのを忘れてました……。
詠さんとか慧さんはどこかあの人に近しい言い返しをしてくるからズルいと思う。

『ううっ……』

私達の撃沈をふん、と満足げに見やる詠さんは円卓へ目を落とすと、

「……不運、ね……つくづく、神様っていうのは意地が悪いわ」

私達にも聞こえないほど小声で何か、呟いた。

その横顔から感情は読み取れず、だからこそ憂い、哀しみが伝わるようで、

「それこそ、私の思い込みかな」

まるで、鏡に映った私のようだった。

＊

Ｓｉｄｅ曹操

私の歩みの中で最大の戦い、それは――結果から言えば、大勝と

呼べるものだった。

袁術軍との戦いで大きな被害を受けた袁紹軍は、その練度こそ低くはないものの、質で劣る以上その量すら減らしていては我らの軍勢に及ぶわけもない。

……というのは少々強がりが過ぎるだろうか。いくら兵力を減らし、将兵の質に絶対の自信を持つ我が軍を以てあたったとはいえ、被害は決して軽微ではなかった。

それでも、最小限に抑えた損害は冀州の地と袁家の資財、併呑した兵士などの利益で塗りつぶされるほどのものだったけれど。

「何を、考えているんだか」

無理に無意識を貫こうとする無意識。そんな自分の愚かさに毒づく、空虚な無を積み上げるほどそれは加速しているようにも思えた。

……悲哀も、後悔も、感じる心は既に過去で捨て去った。

慣れるつもりはない、人を損益で見るのも私の責務だ。ただ、そう……死を悼み、己が志の礎とするだけ。

劉表も孫策に敗北し、劉備軍はそもそも巻き込まれたようなもの。袁術軍も疲弊の度合が強く、追撃する余力は残っていない。

想定外といえば、劉備軍が早々に見切りをつけて居城へ引き返したことくらいか。

いや、もう一つあったか。

袁紹軍大将である麗羽とその側近、文醜と顔良が敗北後逃亡したこと、報告によれば徐州へと逃れたらしい。

厄介……でもないわね、考えてみれば。面倒ではあるかもしれないけれど。

「結局、私のとる道は変わらない」

実際、今私は徐州へと軍を進めている。

目指すのは劉備の居城、大きな戦いが終わった後とはいえ気を抜くつもりはない。

劉備軍には関羽を始め、張飛や趙雲といった猛者、そして名高いはわわ軍師とあわわ軍師――もとい、伏龍に鳳雛と称される策士の存在もある。

いくら軍勢で圧倒していようとも侮れる相手ではない。無論、勝利を確信してはいるが。

それでも、気になるのは彼女達を率いる劉備によるものか、それともあの天の御遣いとかいう男が……いえ、それはないわね。

そも、私が彼女に気を割くのはその特異な理想にある。

人を統率する者にとって最低限必要なもの、それは純粋な原始的な欲望。私欲は悪であっても、その悪を持たざる人間に人を統べることなどできるわけもない。

己が道を進むために他者の願い（いのち）をふるい落とし、誰よりも鮮烈に、誰よりも悪辣に、己の理想を人々へ見せつける。それが私の覇道。

彼女の、全てを救う王道はどこまでも歪んでいる。そして、それは悪だ、私よりもよほど性質の悪い。

――とはいえ、他者を殺し、時に己が同胞すら殺す、その覚悟を感じることができなかったことを考えると、これもやはり余分な思考なのかもしれない。

前に会ったのは、連合の時か。

彼の軍に集まる人材はそれこそ逸材揃いだが、統率者というのは重要だ。いずれ乱世の中で消えるかとも思ったが、ここでぶつかるならそれもいい。

ここまで統治領を広げたことは意外ではあるけれど、臥龍の鬼謀が想定を超えていたか、仁君の資質を私が読み違えたか……ふふっ、どちらでも楽しめそうね。むしろ両方であったなら、というのは悪癖か。

それでも、その二人が共に立つと――なぜだろう、どうしようもなく心躍る。

それは、私の歩みを彩る最大の英雄であるかのように。

第３９章　如魚得水　～　錯綜する想い（後書き）

他陣営視点、というより覇王様とはわわ軍師視点。
今更ながらこの二人によく焦点を当てているような気が。いえ、違うんですよ？　ひいきとかじゃなく、必要上仕方なくなんデスヨ？　まぁ好きか嫌いで言えば二人とも大好きですけども（ぇ

そして、そろそろ稚拙な知識のメッキがはがれそうです。えっ、もうとっくにアルミ缶？　くっ、もう少し隠し通せるかと思っていたのに……！

とまぁ冗談は置いといて、そんな作者ですので読者様から見てこの展開は無理あるだろう、という指摘などあれば是非お願いします。厳しめならより喜びます。べ、べつに変態的な意味じゃないんだからね！

といったところで、引き続き私用が立て込んでいるため、次回はまた少し遅れることになると思います。それでは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3297t/

野良狗の乱世放浪記

2012年1月11日02時55分発行